

日本

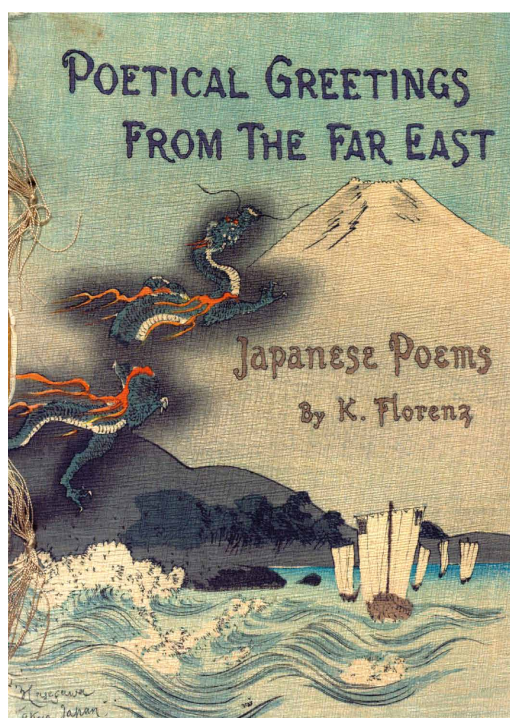
第64集

研究

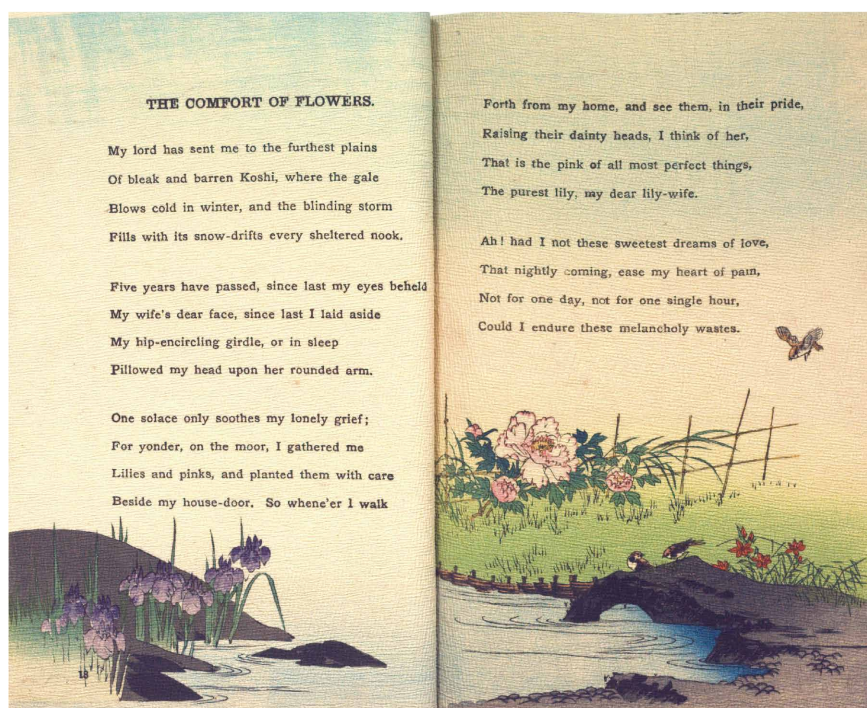
国際日本文化研究センター







図版1 Karl Adolf Florenz, *Poetical Greetings from the Far East: Japanese Poems*. 表紙



図版2 The Comfort of Flowers. (同書、pp.18-19)

カール・アドルフ・フローレンツ

『極東からの詩の挨拶：日本の詩(英文和歌集)』1896(明治29)年刊

Karl Adolf Florenz (Translator: Arthur Lloyd)

Poetical Greetings from the Far East: Japanese Poems. Tokyo: Hasegawa. 1896.

日文研「ちりめん本データベース」(<https://shinku.nichibun.ac.jp/chirimen/>) より

本書は、カール・アドルフ・フローレンツ(1865–1939)が和歌を紹介した独訳本 *Dichtergrüße aus dem Osten: japanische Dichtungen* をアーサー・ロイド(1852–1911)が英語に訳しおろした一作である。フローレンツは、御雇外国人として1889年から1914年まで東京帝国大学でドイツ文学・ドイツ語を講じ、帰国後はドイツにおける日本学を創始した人物として知られる。『日本文学史』を纏め上げるなど、日本の詩歌に対しても造詣が深かった。

本書は、愛情・自然・人生・宮廷詩・諸々の詩・叙事詩といった六つの章からなり、山上憶良や大伴家持などの長歌や反歌、詠み人知らずのものも含め、『万葉集』の歌が多くを占めている。また、『古今和歌集』からも壬生忠岑や紀貫之らの歌が選ばれ、「桶狭間の夜戦」など新体詩も掲載された。三島蕉窓、新井芳宗、鈴木華邨らによる画は、「ちりめん本」としては大著の97ページにも及ぶ本書の価値を一層高めている。

「ちりめん本」とは和紙に印刷したのち、絞って加工し和本に仕立てたものである。柔らかい手触りと、絹の縮緬布に似た風合いからその名が付けられた。明治期に来日した外国人のお土産用として作られ始め、海外での日本文化紹介に役かっていた。日文研には、明治中期から昭和初期にかけて日本国内で出版された「ちりめん本」のうち、絵本を中心とした200点ほどのコレクションが所蔵されている。

(解説：光平有希)

日本研究 第64集

装丁
岡村元夫

口絵解説

〈研究論文〉

散らし書きの構図論

平田光彦
9

明治初中期の女子教育といけ花、茶の湯、礼儀作法

——遊芸との関わりを通して

小林善帆
51

戯画化されるニーチェ

——「滑稽」と「諷刺」の模倣

清松大
91

高島北海『写山要訣』の中国受容

——傳抱石の翻訳・紹介を中心に

陳藝婕
107

石濱シュレに集う人々

——四半世紀後に

長田俊樹
123

〈研究ノート〉

新出の英国史料からみた十八世紀末の西欧における
大黒屋光太夫日本図の評価

滝川 祐子 159

柳田國男の戦時言説としての氏神合同論

由 谷 裕 哉 199

〈書評〉

メアリー・アームストロング・ハフ

『生物医療化と文化の実践——アメリカと日本におけるグローバル化と2型糖尿病』

(Mari Armstrong-Hough, *Biomedicalization and the Practice of Culture: Globalization and Type 2 Diabetes in the United States and Japan*)

エイミー・ボロヴォイ 223

ディーン・アンソニー・ブリンク

『日本の詩と公衆——植民地台湾から3・11まで』

(Dean Anthony Brink, *Japanese Poetry and Its Publics: From Colonial Taiwan to Fukushima*)

ローレンス・E・M・マン 228

オーエン・マシユーズ

『非の打ち所のないスパイ——リハルト・ゾルゲ、スターリンの熟練工作員』

(Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent*)

瀧澤 一郎 232

ジョシユア・S・モストウ

『みやびの幻想——伊勢物語と文化盗用の政治学』

(Joshua S. Mostow, *Courty Visions: The Ise Stories and the Politics of Cultural Appropriation*)

ロベルタ・ストリップリ

236

ジョン・パーソン

『愛国心の裁定者——帝国日本の右翼学者たち』

(John Person, *Arbiters of Patriotism: Right-Wing Scholars in Imperial Japan*)

植村和秀

239

アイク・P・ロッツ

『現代日本における神道、自然とイデオロギー——鎮守の森をつくる』

(Aike P. Rois, *Shinto, Nature and Ideology in Contemporary Japan: Making Sacred Forests*)

全 成 坤

243

笹沼俊暁

『流転するアジアのささやき——現代日本列島作家は如何に台湾、中国大陸を書いたか』

(笹沼俊暁『流轉的亞洲細語：當代日本列島作家如何書寫台灣、中國大陸』)

丸 川 哲 史

249

ロバート・T・シンガー、河合正朝編

『日本美術に見る動物の姿』

(Robert T. Singer and Kawai Masaromo, eds. *The Life of Animals in Japanese Art*)

白 石 恵 理

253

ピア・ヴリース

『大分岐の回避——日本の国家と経済、一八六八〜一九三七年』

(Peer Vries, *Averting a Great Divergence: State and Economy in Japan, 1868–1937*)

フ レ デ リ ッ ク ・ デ イ キ ン ソ ン

256

楊儒賓	
『1949 礼賛』	
(楊儒賓『1949 禮讚』)	
伊東貴之	259
ジェレミー・A・イエレン	
『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』	
(Jeremy A. Yellen, <i>The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere: When Total Empire Met Total War</i>)	
ジェイソン・モーガン	264
論文要旨・SUMMARIES	VI
英文目次	V
『日本研究』投稿要項	IV
執筆者一覧	III
『日本研究』編集委員会	II

散らし書きの構図論

平田光彦

はじめに

本研究は、仮名の「散らし書き」の二次元的構成を構図によって把握し、分析する方法を提示するものである。散らし書きは平安時代に生じた表現であり、各行の文字の書き出し（行頭）と書き終わり（行脚）の位置、行の長さ、行と行との間隔（行間）等に変化がつけられた書き振りのことである。

仮名の空間は、線や字形、線や文字の連続による流れ、墨量の変化、散らし書きなどの目に見える造形に加えて、流れの切断や行と行との関係などから生じる「間」や響きといった感覚的な所など

が、時間の推移を伴いながら相互に関連して構成されている。従って仮名の美という時、仮名文字自体の美しさを示す場合に限らず、仮名が書かれた空間全体の美しさを表すことも多い。本研究の対象とする散らし書きは、美を構成するこれら諸要素のうち、空間の意匠性にもつとも関与するものである。

散らし書きによる変化に富んだ空間が、仮名の美を構成する重点の一つとして認識されてきたことは、種々の文献でなされてきた散らし書きへの言及から確認できる。特にその二次元的構成については鎌倉以降の書論や今日の解説書などに論じられてきた。それらの視点は、自然の景観を型によって教示したものや、散らしによって形成される行頭行脚のアウトラインによる分類、あるいは書写空間

を図形によって提示する等の方法で実践の工夫へと結びつけようとするものであった。

本研究で提示する構図法は、補助線を用いることで二次元的構成に潜在する行と行との関係や視線の流れを客観的に分析するものである。客観化された構図は、空間の変化と統一を形成する具体的要因や、書き手が散らし書きにあたつて感覚的に見定めていたものなどを分析的に推察するための情報となる。従来の構図論とは異なる視点から散らし書きの構成を読み解くこの構図法は、仮名表現の研究や創作、およびその教育や指導場面において有効に活用できるものであり、仮名の構図論に新たな地平をもたらすことが期待される。

本研究の構成は次の通りである。一章では、散らし書きの歴史的な経緯について概観することで、散らし書きが本来的に有する性質を確認する。なお第一章第一段落は、拙稿（平田、二〇一六）^①の要約である。二章では、まず南北朝期の書論である『麒麟抄』から散らし書きに関する理論を抽出して検討することで、その後、現代に入るまで引き継がれてきた散らし書き理論の実態を把握するとともに、散らし書き表現と自然との関係について確認する。次に、現代の書論や解説書・技法書にみられる散らし書き理論について検討し、中世書論からの変化を把握するとともに、今後に向けての基本理論となる部分を各論から帰納する。三章では、新しい構図法を提示し、それを用いた古筆の分析研究をおこなう。この三章が本研究の核と

なる部分であり、一章と二章で得た知見と未開拓の課題を踏まえつつ分析と考察を進める。四章は、総合考察として、本研究をまとめる。

一 散らし書きの芽生え——行書きと散らし書きの狭間

一般に散らし書きとは、一定の書式に従つて表記される「行書き」に對置される概念であるが、一方で「散らし書き」と「行書き」の境目は峻別されない連続関係にあると言える。行書き書式の履行にあたつては、手書きによるゆらぎ（分散）や墨継ぎの位置の自然な散布が生じる。また設定した書式がやがて解けて散らし書きの様相を示す場面、更には冊子や卷子の途中、あるいは末尾において、明確な意図のもとに行書きから散らし書きへと移行することもある。つまり行書きの行為やその視覚性のうちにも、散らし書きへの契機が潜在しているのである。^②

実際に散らし書きの萌芽を示す筆跡を見つめると、行書きから散らし書きへと移行する様を窺うことができる。その最も古い資料として、石山寺伝来「虚空藏菩薩念誦次第」の紙背に見える仮名消息があり、伊東卓治による実見調査の報告と考察が提供されている。^③

虚空藏菩薩念誦次第の草稿がしたためられたこの一卷は、紙背に仮名消息八片を含む断簡十八片を継ぎ合わせたもので、このうちの

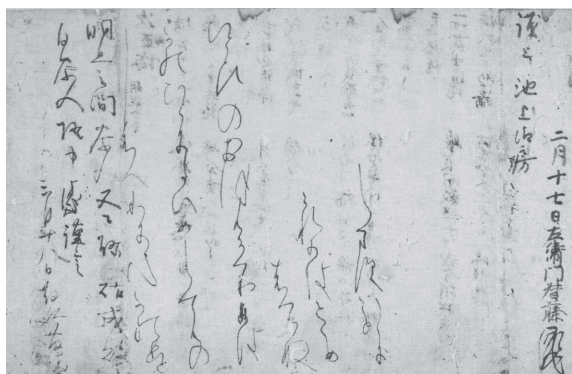


図1 虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息：第三種
石山寺蔵 重文（部分）

解文二片に小野道風の没年にあたる康保三年（九六六）の年紀が記されている。

伊東はこの仮名消息八片を書風によつて三種に分類し、女手としての字体の完成度、連綿の具合、消息の書式を観点に考察を加えた。その書式に関する言及の中で、第二種とした消息を天地が揃い、行が真直ぐであることから「最も平坦」と評しつつ、第三種^④の消息端書きに見られる散らし書き（図1）について、「散らし書きを美しく入れようとする心組み」があるとした。そしてこの第三種^④の消息

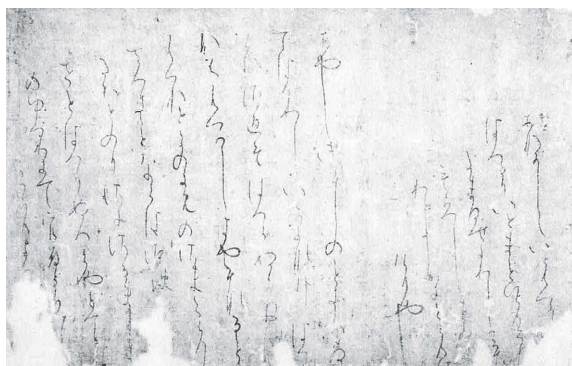


図2 稿本北山抄紙背仮名消息 京都国立博物館蔵
国宝（部分）

が、文字のあり方も含めて、第一種、第二種の筆跡を貫いて更に進展する新しい美的、瀟洒への志向があると述べて、約三十年後に続く「北山抄紙背仮名消息」の散らし書き（図2）へと連なるものであると指摘した。文字のあり方および散らし書きをめぐる伊東の考察は、のちに小松茂美も同様の見解を重ねるなど、時宜紹介される説となつていく。^⑤

一方、第一種消息の書式に関する言及は殆ど見られず、「前二者（第一種、第二種）を貫いて」と触れられたのみである。そこで改

めて行書きと散らし書きとの連続関係に注目してこれを見ると、実際には断片番号18、10の行や連綿のあり方に、散らし書きへの契機となる書き振りが既に表れていることに気が付く(図3、4)。

端的にそれが見えるのは、書き進めるごとに順次下がっていく行頭である。第三種および「北山抄紙背仮名消息」の追而書きに見え

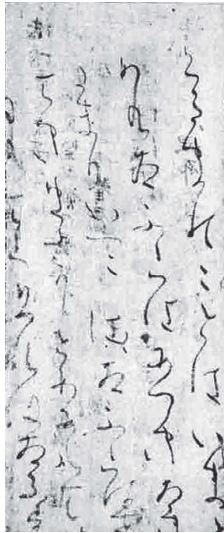


図4 虚空蔵菩薩念誦
次第紙背仮名消息：
第一種10

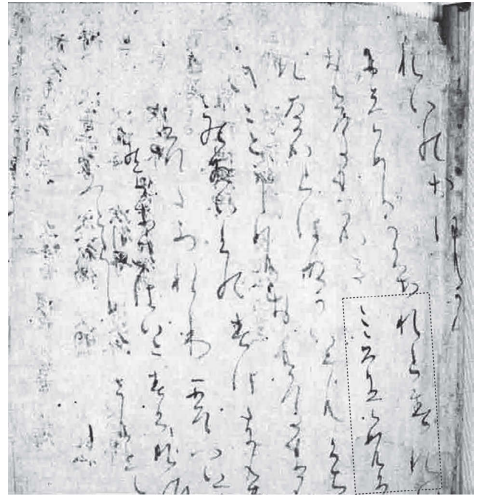


図3 虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息：
第一種18
図中補助線内を「図3A」とする(補助線は筆者)

る散らし書きも、同じく行頭を順次下げていく書き振りで共通していることから、この行頭のなだらかな逐次下降が、行書きから散らし書きへと移行していく過程にあることが確認できる。村上翠亭は、行頭が順次左下がりになってまとまっていく書き振りについて、「散らし書き本来の、ごく自然な美しいスタイルではないか」と述べた^⑦。この自然という言葉は、行頭の変化の素朴さを表現すると同時に、行書きから散らし書きが生じてくる段階に表れた書き振りとという意味でも捉えることができる。

第一種ではこの行頭の変化にともなって、行の左傾も表れており、とりわけ断片番号18にそれが顕著である。この左傾も第三種、および「北山抄紙背仮名消息」と共通する書き振りである。行の左傾には、文字自体の左傾を伴うものと、連綿のあり方から導出されるものの二要因があるが、第一種、第三種、「北山抄紙背仮名消息」のいずれも、この二要因が絡み合った左傾である。

連綿のあり方について、一字一字の文字を書く意識と文字群を書く意識との二側面から捉えると、いずれに比重がおかれた書き振りであるかによって、その表現に違いが表れる。前者では、先行する文字の終筆部分や後続する文字の始筆部分の造形が、連綿線の関与によって崩されることが比較的少ない。表意文字の表記による中国の筆跡もおよそそうであるように、ある種規則的な動きによるこの連綿のあり方は、行の左傾を抑える意図がある場合にもそれを実現

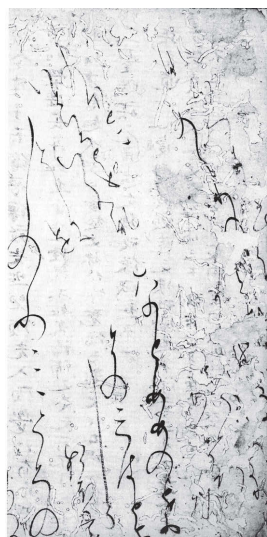


図5 三寶感應要録紙背仮名消息：第一通 個人蔵 国宝（部分）

しやすい。他方、後者のあり方では、前者ほど文字と連綿との意識が截然と区別されず、先行する文字の終筆部分や後続する文字の始筆部分の意識と造形が連綿と溶け合う形で、文字群としての結びつきが表現されやすい（図3A）。この後者の連綿のあり方は、行の左傾を導出しやすく、また表音文字の纏まりとして言葉を表記する日本語仮名表現との親和性も高い。「虚空藏菩薩念誦次第」紙背仮名消息の筆跡で言えば、どちらかというと第二種は前者に寄った書き振りで、字形の習熟のみならず、一字ずつを整える意識と行を直立する意識が窺えるのに対して、第一種では、散見される忽卒な書き振りの箇所で連綿による左傾の気配も現れて、後者の意識に近い筆記感覚が僅かに見受けられる。

なお、第三種および「北山抄紙背仮名消息」の紙面右側に見える散らし書きは、所謂「返し書き」によつて本文書き出しより右側に配置される追而書き、袖書きと目されている。紙面全体が散らし書

きとなり、また追而書きの書き込み位置が更に複雑化した消息には、先に読むべき行と、後から読む追而書きとの区別を明示的にする意図をもつて、極端に強い左傾や小粒の文字による追而書きも現れた（図5）。

ところで、漢文消息では最澄と空海のやりとりが伝えられ、そのうち最澄の「久隔帖」と空海の「風信帖」が伝存する。厳密には、最澄からの消息は空海の弟子である泰範あてに書かれたものであるが、空海に示されたであろう。この「久隔帖」と「風信帖」第二通「忽披帖」のうちに、ごく僅かながら行頭の漸次下降や行の左傾を垣間見ることができる（図6、図7）。これらは手書きによつて生じたゆらぎと考えられるが、自然に表出されたであろう様々な書き振りが、その後の仮名消息で次第に生じてきた散らし書きへの潜在的な契機となっていたかも知れない。

漢文消息から散らし書きへと繋がるより具体的な先行例として、端書き、追而書きを、本文書き出しより右に配置した「袖書き」も見える。草書の流麗な連綿のうちに漢字から女手への繋がりを感じさせる藤原佐理の「恩命帖」は、本文書き出しより右に袖書きがある（図8）。天元五年（九八二）の筆跡で、袖書きを有する最古の漢文消息とされる。一方、平安三蹟の嚆矢である小野道風晩年の筆跡（模刻）とされる『集古浪華帖』所収の書状第七通に見える端書きでは、草仮名から女手への移行を示す書き振りが本文末尾（左側）

に書き込まれている。道風晩年から二十年ほどの間に「返し書き」が追而書きの新しい書き様として芽生えた。また、行の意図的な左傾や小書きを交えた散らし書きなどが後の王朝仮名古筆にも見られるなど、ゆらぎも含めた様々な書き振りが先行して、散らし書きの

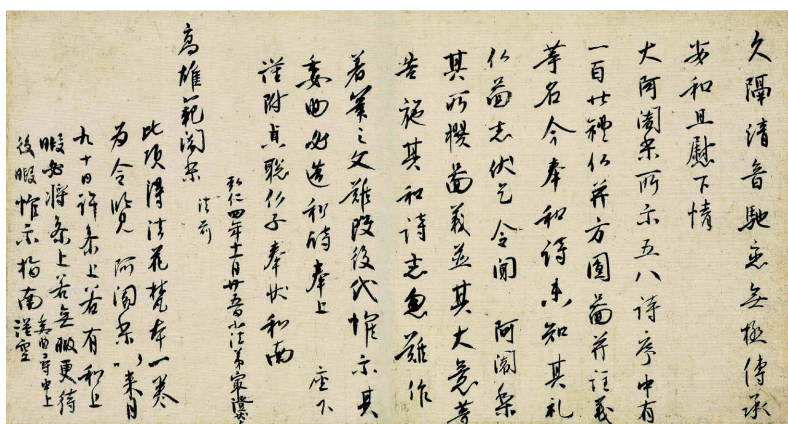


図6 久隔帖 奈良国立博物館蔵 国宝

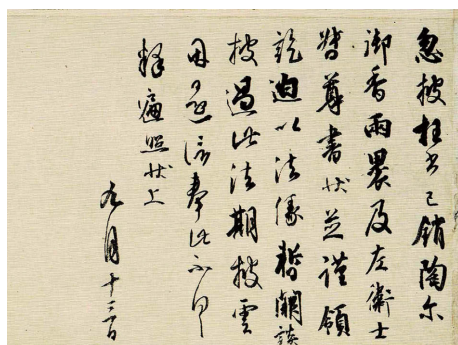


図7 忽披帖 東寺蔵 国宝

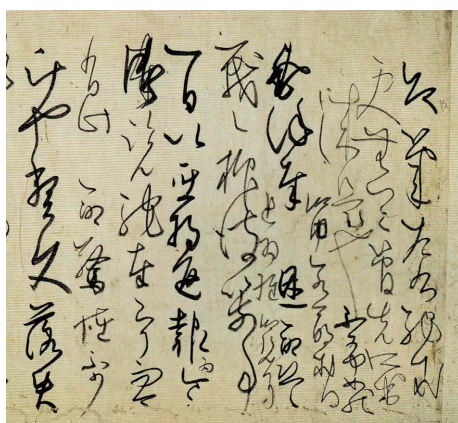


図8 恩命帖 御物（部分）

着想に参与していったことと考えられる。

二 中世から現代までの散らし書き理論

(一) 中世書論にみる散らし書き

広く書について論じた著作を書論という。また、「一定の審美の哲学基礎を有して」⁽⁹⁾いるのが、歴代の中国書論の性質といえる。中田勇次郎はその体系について、近代の中国書論における分類をふまえて、文字学、書体、書法、書品、書評があり、さらに総括的な書学、そして伝記、鑑識、收藏、購求、閲玩があるとまとめた。⁽¹⁰⁾

中国の書論は日本にも舶載され、寛平年間（八八九―八九八）当時に伝存した漢籍の目録とされる『日本国見在書目録』の小学家には、文字学、書法、書論に関する文献が記録される。¹¹ また中国書論の受容がもたらしたものとして、『源氏物語』に描かれる書話に、梁の庾肩吾が『書品』において示した「天然と工夫」の概念の影響が指摘されることもある。¹²

日本の書論では、空海の漢詩文集『遍照發揮性靈集』に書に関する論述の見えるのが古く、蔡邕の『筆論』等、中国の書論をふまえた書法観や詩作に通じる書表現の個性についても述べられている。¹³ しかしながらその後の中世における書論は、世尊寺家第六代の藤原伊行が息女に与えた『夜鶴庭訓抄』を嚆矢として、家学・家芸の相伝、継承を目的としたものが執筆されるようになり、中国由来のそれとは性質を異にする傾向となった。¹⁴

これら秘伝書としての書論には、教条的なテキストとしての性格が、その具体的な記述の上に表れる。例えば書式についての記述を見ると、『夜鶴庭訓抄』では「哥書様」に「二行ならば五七五。一行。七々。一行。三行ならば五七。一行。五七。一行。七。一行。まで三くだりにあるべし。」と、和歌一首を二行ないし三行に書くこと、そしてそれぞれの場合における各行の字数までが規範的に教示されている。¹⁵ これは行書きを示す書式であるが、こうした伝承のあり方は、間接的であれ後続する書論への下敷きになった面も見受

けられる。南北朝時代までの書法・書論・伝記の集成と目される『麒麟抄』（一三四一年成立か）¹⁶ 巻第八には、散らし書きの構成が、同じく各行の字数を示しながら具体的に教示されている。

『麒麟抄』の「又書歌事」では、冒頭に「立石。藤花。木立。三様。」として、歌を書くにあたり三つの書き様のあることがまず示される。ここから順次示された書き様が、散らし書きの構成を具体的に教示する内容である。以下、「立石」から順を追って引用し、確認する。¹⁷

立石ハ五七等ノ句ヲ九一行。七一行。一字一行。下ヲ同ク頭不
同也。一字一行者鴨居ル形也。墨軋墨續ヲ不可書。字姿ハ風情
可書出。如何者。岩ノ體ヲ表歟。以之立石ト名付。喩バ是ヲ四
行木立トモ云。

ほのくとかあしの 九
うらのあさきり 七
に 一
しまかくれゆく 七
ふねをしそおも 六
ふ 一

〔後略〕

立石について、本邦最古の庭園書とされる『作庭記』（十一世紀後半に成立か）五条目の枯山水について述べた箇所の終わりに、「すべて石ハ、立る事ハすくなく、臥ることはおほし。しかれども石ぶせとはいはざるか。」¹⁸とあり、立石といえども総じて臥せて使う場面が多いことが示されるが、水中の石立てについて述べられた四条目には「池の石は、そこよりつよくもたえたるつめいしをきて、たてあげつれば」という記述がある。同箇所にはまた、「凡瀆口左右、嶋のさき、山のほとりのほかは、たかき石をたつる事、まれなるべし」「はなれいしハ、あらゐそのおき、山のさき、島のさきに、たつべきとか」¹⁹との記述があり、水辺にあつてはこれを聳えて立てる様も記されている。『麒麟抄』に見える「立石」の構図は、聳えた行の近傍足下に添えた一字を鴨居る形に擬えていることから、まさにこの水辺に石を立てた様子が彷彿とされ、かなり具体的な景観を想起した教示であることが分かる。これを四行木立と呼ぶ際には、聳えた立石の四行を木立に見立てている。この場合、鴨に見立てられた一字も相対的に鴨よりも大きなものに捉え直されているだろう。次に「藤花」である。

藤花者五七五句一行。七七句一行。頭同ク下不同也。朗詠之山紙筆等如此可書。是ヲ二本木立トモ伝。

ほのくゝとあかしの浦のあさきりに

しまくれゆくふねをしを思ふ

五行ニカク。藤花ノ様アリ。是ハ杳冠等ノ歌ヲカク時ノ風情也。是ヲ五行木立ノ藤花ト云。

からころも 五

きつゝなれにし 七

つましあれは 五

はるくきぬる 七

たひをしそおもふ 七

藤花は、行頭の高さを揃えた二つの長い行を、行脚で長さの変化をつけることで、藤の花が垂れ下がったような景観に擬えた表現である。また五行にして、一行目から順次行頭行脚を下げて、行を斜めに配列した書き様も示されており、これを五行木立ノ藤花としている。この五行木立の藤花に見える構成は、後に書や建築など日本の空間芸術において「雁行」と呼ばれる構成と同じである。²⁰ここに例示される「からころも…」の歌は、『古今和歌集』巻第九の羈旅歌に見える。その詞書に「あづまの方へ…」「中略」…みかはのくにかしらすといふ所に…「中略」…かきつばたといういつもじをくのかしらにすへて、たびの心をよまんとてよめる」²¹とある通り、各句の始めに「かきつばた」が読み込まれた折句の歌として知られる。杳冠の歌とは、更に各句の始め（冠）と終わり（杳）に言葉を読み

込んだ歌であることから、この歌を杳冠とすれば、各句の終わりの(杳)は「ふるはしも」として古橋と藻を読みとつているだろうか。いずれにしろ行頭行脚に凹凸をつけずに、行を斜めに下げながら展開する構成が、杳冠の可読性を高めつつ、読み込まれた機知を瀟洒な風情で表現する。

次に「木立」である。

木立者體立石ノ様ニ可書散。雖然字數各別也。其數ハ初句七一行。七一行。三一行。後句七一行。五一行。二一行。三字一行。二字一行ノ字ヲハ。ソヒエテ風情ヲ可書。

やをかゆくはま 七

のまさことわか 七

こひは 三

いつれまされり 七

をきつしま 五

もり 二

「木立者體立石ノ様ニ」とあるが、各行の字数が立石と異なるといふ。先頭の二行の字数を揃えている点にも相違はあるが、特に立石で「二字一行者鴨居ル形」とされていた足下の行が、木立では三字一行と二字一行に聳えて風情を書くとする点に違いを表している。

三字や二字の短い行に「ソヒエテ」という語感をあてていることから察して、これらの行には木立の元に添えられた立石が想起されているかも知れない。尤も立石の項の「是ヲ四行木立トモ云」という記述でも分かるように、木立と立石の両者は同じような考え方の散らしであり、いずれの景観に見立てるかの違いとも言えるが、詳細な字数の違いを立てて分類がなされている。

ここまでに冒頭の、立石、藤花、木立の三様が表示されたが、続けて「立藤花(立花)」「分秀石」が次の通り示される。

或又立藤花ノ様ト分秀石ノ様ト二様アリ。立花ノ様トハ上句九字一行上テ書。八字一行下テ書。下句七字一行上テ書。七字一行下テ書。四行ノ行首ハ不同。下ヲ齊ク書也。次分秀石ノ様トハ。十二字一行。八字一行。七字一行。二字二行。

立花ノ様

かすかのゝわかむら 九

さきのすりころも 八

しのふのみたれ 七

かきりしられす 七

分秀ノ様

かすかのにわかなつみつゝ 十二

きみか代をいはふ 八

ころはかみそ 七

しる 二

らん 二

以上雖事廣。六様ノ書様迄ト云々。

立石、木立では、いずれも高い行が「主」となり、足元の短い行が「従」となる主従関係が行立ての中に潜在しつつ、主となる高い行の書き出しが左下がりになり降りていく構成であった。一方、立花は七く九字の長い行のみで構成され、その行頭が、上・下・上・下の順に往来しながら下降する書き様である。これは、鎌倉中期の『右筆条々』（二七五年）に「低昂テ可被散書」と表現されている散らし書きに該当する。⁽²³⁾

分秀石について、『山水并野形図』（一四四八年）⁽²⁴⁾には「秀石」「水分石」という言葉が見える。秀石は、「万石、余石、秀石ハ一石ト云事アリ。」とされ、余るほど多くの石にあつても一石しかないほど稀有であると述べられる。また、「水分石、此石ハナ、メ石也」と述べられる通り、横・斜・径の三種ある石のうち、水分石は斜石であることが分かる。

斜石は、連石や風雨石とも言われ、「風雨石、此石ハ庭中ノヨキ所ニ立石也。此石ノ形ハ上キリメ斜石也。」や「一庭ニ一處、斜石ト云所一處立ヘシ。」とされるように、庭中で一際重要な石である

と言う。また斜石は、連石という別称も示す様に、一石の形状を指すばかりでなく、四、五石を徐々に低くなるよう横長に連ねた配置も表している。実際に、斜石を構成する各石の大きさや並べ方が「ナカ石ヲナ、メ石トイヘリ。四五モタテ流シタルヲ云也。先ツ始ニ大ナル石ヲ立始ヘシ。立始ノ石ノ高サハ一尺五寸也。其後ハ次第二一尺或八寸六寸四寸二寸ニ立トイヘリ。」と具体的に教示されている。この様子は、分秀石（分秀）として示される行の長さの構成に重なるものである。つまり分秀石は、庭中に立てられた秀れた斜石の景観に擬えた表現である。

以上、見てきた通り『麒麟抄』に示された散らし書きは、いずれも自然の景観・景物に擬えた書き様である。それはおそらく散らし書きが生じてくる中で、書字行為の結果として想起された自然の景観と、また一方で、自然の景観から着想されて描かれた構成との両面があり、その往還のうちに展開されてきたものであろう。例えば『作庭記』にも「品文字ノ石ハフス」とあり、「品」の字形に見立てた石の配置には石を臥せるよう伝承される。⁽²⁵⁾こうした見立てが「平家納経」序品見返し絵で庭中の山水に潜んで描きこまれた葦手の文字を彷彿とさせるように、景観と筆跡のいずれもがもう一方を想起させる契機となりうる。屢々日本芸術は、自然と芸術との「さかいをまぎらかす」ことで、自然と芸術とが融合していることに特徴があると言われる。⁽²⁶⁾ また、「立石」「藤花」「五行木立ノ藤花」「木立」

「立花」「分秀石」の六様の書き様には文字数まで具体的に教示された、所謂「型」としての概念や分類が明確に現れている点にも注目される。⁽²⁷⁾

このように中世書論における「散らし書きの構成」に関する理論は、自然の景観に仮託し、それを「型」として分類するに至った。以降近世まで、書式をめぐる記述の傾向となり、理論的な根拠となつた。小松も指摘するように、本来「型」は精神的な要素を含むものであり、その鍛錬が人間を形成し、最高の美を発揮すると考えられた。しかしやがて単なる形式、形骸的な「型」として受け止められる面も生じて、流派における没個性的な書にも結びついていった。

(二) 散らし書き理論の現在

現代の書家である桑田笹舟（一九〇〇—一九八九）もまた「型」について、エッセンスを煮詰めた型も存在し、日本芸能の中に尊ばれるものが存在すると認めた上で、散らし書きの型については、自由に個性的に新しい空間を発見しようとすることを阻んできたこと、そしてその状況が昭和初期に至るまで前進しなかったことを指摘した。⁽²⁸⁾

桑田は、散らし書きの本質を「多様の変化とそれをまとめる統一」にあると説いた。今日、この「変化と統一」という観点は、散

らし書きの要諦を説明する言葉として広く共有されているが、桑田によると、これは師である安東聖空（二八九三—一九八三）からの啓蒙であり、安東以前には「誰一人それまでに言わなかったこと」だったと述懐する。⁽²⁹⁾ 実際この捉え方は、自然の景観・景物に擬えた把握や字数の規矩により分類した「型」による散らし書きの理論、およびその形骸化した相伝のあり方に対して全く一線を画すものであった。また安東は、この変化がもつとも現れるのは「行」であるとして、その長短と納める位置、まずはこの二つの変化によつて散らし書きの変化が表れるとした。⁽³⁰⁾ 書表現について、それを構成する要素へと分解し、その効果的な組み合わせや配置を考えるとこの視点が、現代において生じてきたことが分かる。

桑田は、こうした現代的な視点をもつて散らし書きの理論をさらに押し広げた。『笹舟かな教室』にまとめられた散らし書きの理論は七十二頁にも及び、構成に関する記述は十六に分節されて、実践的、実験的、理論的な検討や考察が述べられている。⁽³¹⁾ 十六の節は、まず構成一〜四のそれぞれにイとロが立てられて四節八項目、続いて構成五〜十二に「三角法構成」一〜八、構成十三と十四に線の構成、十五に線の塊的構成、十六に塊的構成となつている。そして散らし書き理論の最後は「まとめる」という節で結ばれる。

構成一では、変化と統一についてまず問題提起があり、変化には行と墨色（墨つぎの濃淡）という観点が、統一には最下部、行の正

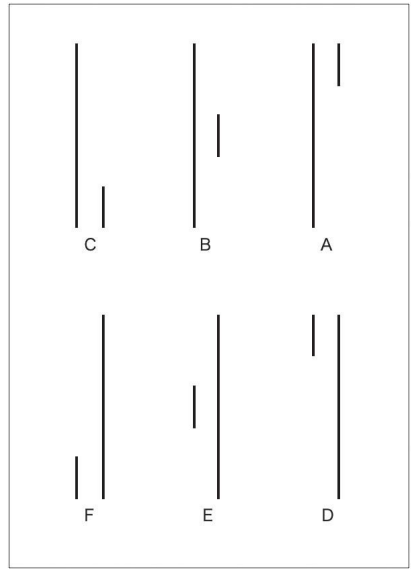


図9 桑田笹舟による「長短二行」の関係図
桑田（1973）を元に筆者が作図・再現した

斜、最後の造形と最後の字の最後の形線という観点があげられる。行の変化は、長短、広狭、高低、正斜、強弱（細太）であり、このうち長短、広狭、高低は、安東が行の長短と行を納める位置に要約したものである。そして、書き手が自ら実践的な試行を通してこれらを掴むために、例えば和歌一首を五七五七七の五句五行でその長短をつけるとして、全ての行頭を揃える、いずれか一行のみ行頭が下がる、いずれか二行の行頭が下がる……といったケーススタディによる基礎研究の方法を提案する。このようにして書き手が事例の揮毫や鑑賞を通して、その視覚的な印象を自ら感受しながら、散らし書きの理論を其々が開拓し発見するというプロセスを志した。

構成二は長短二行の関係について述べられ、行を線に抽象化して

表現し、長い行に添えられた短い行の位置の変化による関係性の違いが述べられる（図9）。行の長さや位置、強弱を線で抽象化して表現する方法もまた今日では一般的であるが、こうした事例は早くからあり、例えば近世の『本朝字府秘伝』（二七〇九年）にも見える³³。桑田は、幾何学的な線分を用いることで、各文字の働きを一旦捨象して構成のみを抽出・検討できるようにし、行と行の関係を示す最小単位となる二行間の関係から基礎付ける。そして図9 A、C、D、Fでは、二行間の関係は失われな一方、図9 BとEでは、添えられた行が短くなる程に二行間の関係は絶縁すると考察した。桑田の指摘は、視覚心理学という群化であり、図9 A、C、D、Fでは二行間の行頭ないし行脚の近接性を要因とする群化が作用していると言える³⁴。

構成三はこれをふまえて、和歌一首を三行と二行の「集団」に分けた展開を例示しつつ、各集団が一体となるための配慮、そして右上から左下へ、あるいは右下から左上がりに昇ってまた降るなどの配置、すなわち行の移行について検討されている。

構成四もまた群化の作用が基礎にあると言える。墨の配列として、（イ）濃淡濃淡、（ロ）淡濃淡濃、（ハ）濃淡淡濃、（ニ）淡濃濃淡、（ホ）濃濃濃淡、（ヘ）淡淡濃濃が例示され、このうち（ハ）と（ニ）のように濃ないし淡を集中して配列する効果について検討される。これは類同の要因と呼ばれる群化を活用した視点であり、さ

らに濃から淡へと移行する視覚の特性もここに加えて、(ハ)と(二)に関する考察が実例とともに展開されている。

桑田は、散らしには「数学のように定理公理に当たするような基本的な法則」があると述べるが、例えばこの構成二く四で基礎付けられた内容もそれにあたり、実際に構成十三く十六は、これらの流れにある応用でもある。

一方で、構成五く十二で提案される「三角法構成」は、ここまでの理論を基礎にふまつつも、全く別の観点から構成を捉えることに主眼がおかれている。この三角法構成はあまりにも有名であるが、その考えを丁寧に読み取らなければ、三角形という「型」の提示がなされているように誤解される向きがあるかも知れず、真意をふまえておく必要がある。

桑田は、三角法構成を提案するねらいについて、散らし書きに定型がなく、総ての人にとって自由である書面空間が「個性的独自のまとまり」に至るまでの拠所に、杓子定規なものでなくそれぞれが考え工夫発展させる可能性をもつものとして、三角形という空間を利用すると述べている。そして主体となるべき空間として大体三角形の外形を設定したのであり、中世の型のように総てが定められたものでなく、そこへの配置は自由で各人独自の世界があると説明している⁽³⁶⁾。つまり型ではなく、まとまりの拠所として提示するものであり、実際に設定された外形の違いによって生じる性質や傾向とし

ての表現効果について考察が付されているものである。図10に示した三角法の各構成が有する性質ないし表現効果について、以下に順次概観する⁽³⁷⁾。

三角法一は、変化に富み、安定感の強い構成ができるとされ、中央部に主体を作り、左右に副部を大小や位置を変えて変化を生むことができる⁽³⁸⁾と述べられる。

三角法二は、従来最も多く使われる空間とされる。また右上から書き始めて次第に漸減する、この狭くなるという感じが広くなるという時よりまとまるということに繋がると指摘される。これが書写の習慣、安定感、まとめ易さに結び、散らしの空間として圧倒的に多いと述べられている。

三角法三は、三角法二の変形とされ、巻物等の横長作品で起伏集団における移行にあつて出てくる形であり、三角法二に比べてややアンバランスな動的空間が現代人に興味を感じさせるのではないかと述べられる。

三角法四は、重心が高く、空間における広がり暗示するとされる。またその際たるものが三角法八であり、共に倒立三角形で不安定の空間であるが動的であると述べられる。

三角法五は、重心が低く堅固であるが、次第に拡がるためにまとまりが難しく、とりとめなく感じるとされる。したがって、雅印の働き、ないし左にくる長行の更に左に数字を書くなどが空間処理の

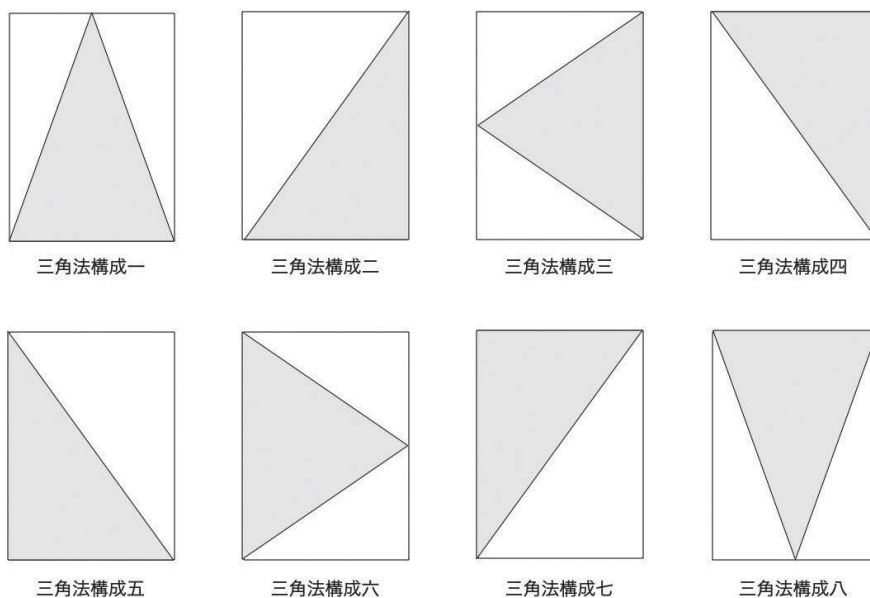


図10 桑田笹舟による「三角法構成」の概念図
桑田（1973）を元に筆者が作図・再現した

方法として述べられる。

三角法六は、三角法三と同様にやや安定感を欠く。また三角法五と同様に左に進むに従って拡がるためにまとめる事に困難があることから、三角法五と同様のまとめ方が必要とされる。横披作品で小字数で終わった集団を受ける際、あるいは紋様のある料紙とともに生ることを考える際の構成になると述べられる。

三角法七は、一種の倒立三角形の動的な空間であること、左に移行するにつれて拡がっていく形式にある最後の長い行の処理について既述したことが確認される。さらに高い位置にある行脚の文字の選定や墨の配分、終筆の表情の付け方などに注意すべきと述べられる。

三角法八は、空間における広がり暗示し、無限の展開に対する驚きがこの一見単純な空間の中にあるとされる。また中心部に主体を置いてその左右に副部的小集団を置いてバランスを取りつつ、副集団の小さ軽重、配字、墨の配分等にデリケートさが必要であると述べられる。

これら三角法の各考察をまとめると、ここにも散らし書きの構成に関する「基本的な法則」が顕在化されてくるのが分かる。各論から帰納されるのは次の四点である。

一、行頭が順次下がっていく、あるいは短くなっていくとまとま

りにつながる

二、行が順次長く拡がっていくととりとめなく感じられ、まとまりが難しくなるため、工夫・配慮が必要となる

三、底辺の広さや重心の低さは安定につながる

四、底辺が狭く重心が高くなる程に不安定になるが、動的で空間の広がり暗示する

右の三と四は視覚的な重心感覚とその均衡がもたらす安定感の問題である。そして一と二は「まとまりと拡がり」に関する内容である。このまとまりと拡がりとは、収束と展開、あるいは終末と継続等に換言できるであろう。いずれにしろ時間性と空間性を伴う性質であり、縦書きによつて右から左へと書き進める日本語の表記と関連するものである。

構成十三〜十六では、「線」と「塊」がキーワードとなっている。まず線の構成とは、行の長短や行間に激しい変化をつけないことによつて、行が線のように明瞭さを示すものであり、「寸松庵色紙」がその範と示されている。また線の塊的構成で述べられる塊とは、行の集まりである集団がより強固に、時に重なりあう程に接近し、且つその外形が円や方形に近いものと説明される。線の塊的構成は塊と線（長い行）との関係であり、塊的構成は塊同士の大小・距離を含めた関係である。

「まとめる」とされた節では、文字や行の関連の必要と、関連にとつて類似が最も大切であるとされる。また行脚のいずれかを最下部に位置して統一の拠点とすること、さらに主体となる長い行に対して他の行が傾斜して、行脚ないしその延長が一点に集まるようにすることが説かれる。

桑田が述べた散らし書きに関する理論は、中世からの形式化した型とその相伝のあり方への疑問を出発点とし、現代において書き手が夫々の実践により自らの空間構成を開拓していくこと、実作へと展開していくことが念願されていた。^⑧

この桑田の理論を、古筆の散らし書きなど、書かれたものの分析という視点で捉え返してみると、三角法二が、「従来最も多い」「圧倒的に多い」空間と自ら述べる通り、散らし書きの性質を語る上でまず重要となる。本稿第一章で散らし書きの萌芽について確認したように、右上から順次左下がりに行が短くなる書き振りは、行書きから散らし書きが発生してきた最初期の姿でもあり、また第二章前節で確認した分秀石も三角法二に収まる構成であることが分かる。

この他、「継色紙」や俵屋宗達下絵による本阿弥光悦の和歌巻における散らし書きにも三角法構成（三角法二）として指摘される箇所がある。^⑨ 次に構成十三とされた線の構成は、例示された「寸松庵色紙」の他に、『麒麟抄』に見える「立花ノ様」が該当する。桑田の言う「基本的な法則」に当たると考えられるうち、長短二行の関係

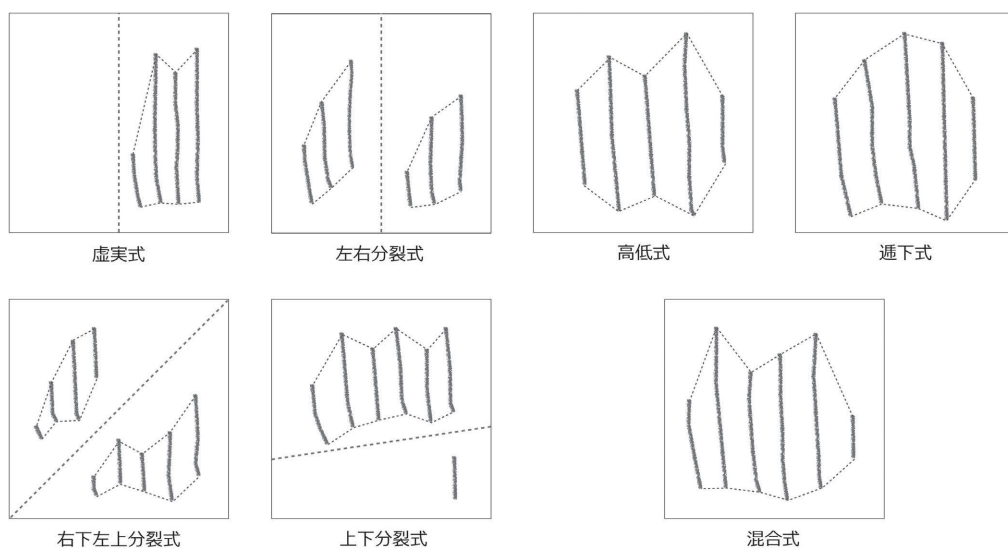


図11 杉岡華邨による「寸松庵色紙の分類図」より抄出
杉岡（1976）を元に筆者が作図・再現した

も古筆のデティールの中に見つけていくことができるだろう。

古筆の散らし書きを分析するという観点では、同じく現代の書家である杉岡華邨（一九一三—二〇一一）が「寸松庵色紙」の散らし書きを取り上げて検討している。杉岡は、書き出された散らし書きを元に、その構成のあり方を七つの形式に分類整理した（図11^④）。これらの形式は、高低式、通下式、混合式、左右分裂式、右下左上分裂式、上下分裂式、虚実式と名付けられ、混合式までの三つが基本形、左右分裂式からの四つは応用形とされた。また同時に、散らし書きの行を線で表して、その行頭や行脚を更に線で結んだ図解が示された。

形式の名称と提示された図は分析の観点を表している。つまり杉岡は散らし書きのアウトラインから外形を把握する方法を採り、基本形では特に行頭のアウトライン^④に、応用形ではアウトラインで囲まれた集団の配置に着目して、その要点を抽出して言語化した。七つの形式への分類は、中世以来継承された字数の規矩による規範的な型とは異なり、表現の傾向を把握するための視点の一つとして汎用されるものである。

現代に至り、散らし書きの理論は中世以来のそれと手法や視点を変えていくことで、新しい展開を見せた。今後も諸課題に対して有効な分析を立てて、散らし書きの研究を進めていく必要がある。本研究の主体となる次章では、従来にない視点と方法による散らし書

きの理論を提示する。

三 散らし書きの構図論——構成を読み解く新しい視点

(一) 構図論の概要——目的と方法

桑田は変化と統一について、「まとめる」ということの重要性を説き、文字や行の関連と統一の拠点が必要であると述べた。また杉岡は散らし書きのアウトラインに着目して、そのあり方を「高低式」などの名称で言語化した。

「まとめ」には統一の他に調和や秩序がある。ハーバード大学教授で解析学を専門としたG・D・バーコフは、美しさは、複雑さにおける秩序の関係であるとした。⁽⁴²⁾ 本研究では、複雑な行と行の関連において、桑田の挙げた類似の手法以外の秩序や相互関係に着目し、それがもたらす視覚的な印象（表現の効果）も含めて検討をおこなう。その方法は、アウトラインの観照ではなく、その奥で同時に感受している行の関連、言わば潜在的な視覚性を客観化するものである。

このように本研究の視点と方法は、散らし書きの二次元的構成を分析するための新しい手立てとなる。本研究の具体的方法は、絵画空間の構図分析で用いられる手法を散らし書きの研究に援用するものである。

日本の空間表現を構図によって研究した実例に、龍安寺石庭の分析がある。龍安寺石庭は、日本の枯山水を代表する庭園の一つであり、大小十五の石が配された空間の意匠性が高く評価されている。鋭敏な美的感覚によって、変化と調和が高度に止揚された石庭の空間に構図を引くことで、複雑で変化に富んだ石の配置の中から、石群同士が二本の直線のおよそ延長上に関係を結び、一つの秩序を形成していることが浮かび上がってくる（図12⁽⁴³⁾）。「間」の響き渡る空間を形成している石の配置は、散らし書きの空間構成に通じるものである。近接する芸術領域から書にも通底する理論や表現を援用することは、研究の有効な手立てとなり得る。構図によって空間を捉えることは、複雑な表象のうちに潜在している視覚性から、研究視点のもとで、ある事象を顕在化することを可能にする。

一方で、書は空間性の他に、一回性のもとに時間性や身体運動を伴う表現である。下絵に推敲や構図を描くことが可能であり、一回性に縛られない絵画やデザインとは特質を異にする。従って本研究の方法も、絵画やデザインにみられる構図法をそのまま全て適用するものではない。例えば紙面にグリッドを重ねて図学的な計測をおこなうことで黄金比等を見出す分析は、本研究の目的とは異なる。本研究は、あくまで行と行との関係を客観化する手立てとして、直線や弧による構図の線を活用するものである。

本研究の目的は、古筆の空間を構図によって客観的に分析し、顕

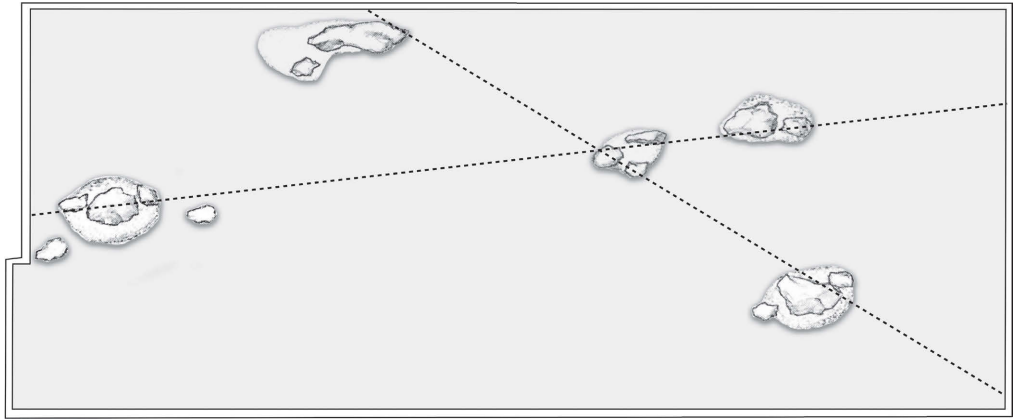


図12 龍安寺の石庭空間の構図

ジョージ・ドーチ（2014）を元に筆者が作図した

在化された行と行との関係から、書き手が無意識のうちに感受し、見定めていたものを推察すること、またその関係がもたらす視覚的印象（表現効果）を考察し、調和や秩序の在り処と合わせて、散らし書きの構成における新しい知見を獲得することである。得られた成果は、実作や教育の場面で、我々の書写空間に活かされるものである。

（二）分析の視点と方法——潜在する視覚性と効果

古筆の分析をおこなうにあたり、まずは分析の観点や考え方について簡単に説明する。ここでは分かりやすさを考慮して、行が線で表された前掲杉岡の概念図（図11）より二つの図を抽出して活用する（図13、図14）。また、構図として引く補助線は、アルファベットが同じ場合は平行関係にあることを示し、そこに付した数字は、関係が生じた順序を表している（以下、全ての構図分析について同様とする）。

図13は、「混合式」と名付けられた散らし書きの図である。これは行頭が上がってから下がる「逓下式」と、行頭の上下が一行おきに表れる「高低式」との混合という意味で、行頭が二行以上連続して下がる箇所をどこかに挟んでから一旦上がり、その後再び下がるという動きになる。

図13を見る時、視線はまず行頭の推移を素直にたどり、図13

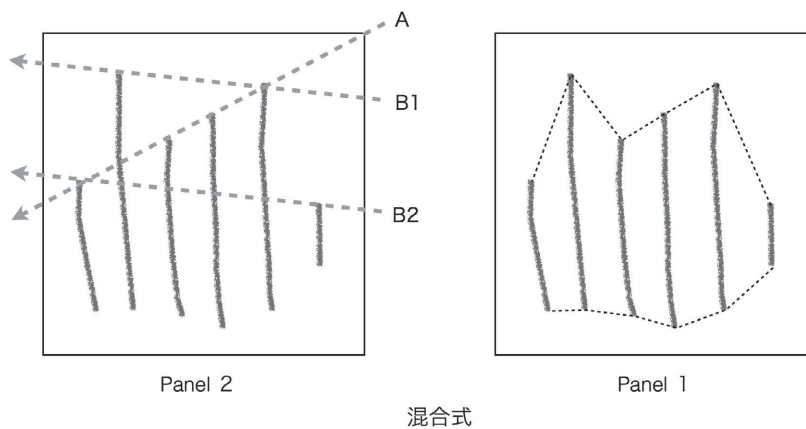


図13 Panel 1：アウトラインによる分類、Panel 2：補助線を用いた構図分析
杉岡（1976）の分類図を元に筆者が作図・再現し、Panel 2に補助線を加筆した

Panel 1に描かれたアウトラインの通りに把握する。「混合式」という名称もこれを如実に表している。しかし一方で、これと同時に二〜四行目の行頭から誘導される視線は、おおよそ左下へ向かうとい

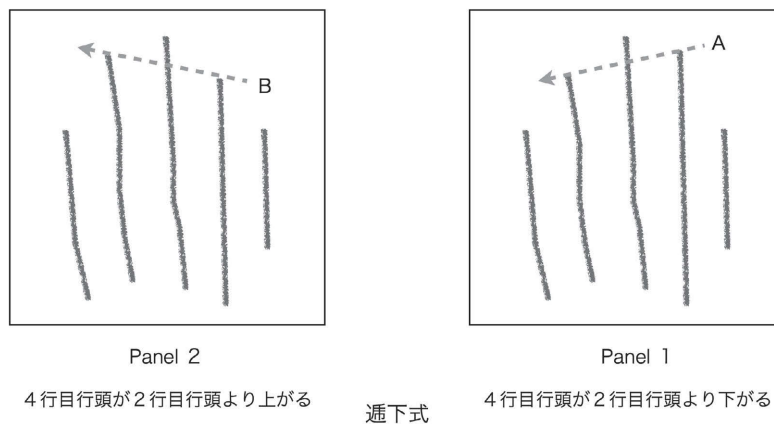


図14 行頭の位置関係による視覚的印象（効果）の違い
杉岡（1976）の「通下式」を元に筆者が作図・再現して補助線を加筆した。
Panel 2は、2行目と4行目行頭の高さの関係をPanel 1と逆転させた

う行頭の推移の指向性も感受すること、そのまま五行目を通り越して六行目の行頭へと向かう動きも併せ持つ。ここで感受している行の指向性を描いたのが、Panel 2の補助線Aである。この補助線Aは、二〜四行目行頭と六行目行頭との関連を示すものとなり、五

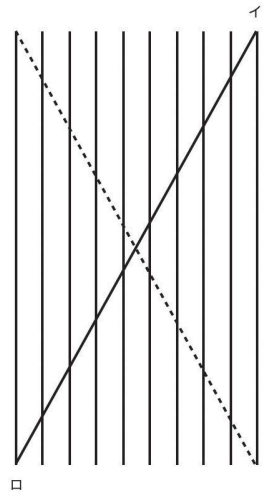


図15 桑田笹舟による「漸増漸減」の図
桑田（1973）を元に筆者が作図・再現した

行目をまたぐ形で、これらの行の書き出し位置が結び付けられていることが分かる。つまりこの図では、六行目の行頭の位置は、補助線Aに示される二、四行目行頭の位置から指向されて決定されているのではないかと推察される。

またここで五行目の高さは、補助線Aの左下へと向かう動きに対する表現上のアクセントとして働くものと捉えることができる。これについては、前掲桑田が、漸増・漸減の法則として述べる中で、直線で描いた幾何学的な図形（図15）を用いながら、図中イーロの斜線について、「画一的な機械的な増減がなく、その行頭に多少の高低をつける、或いは時に漸減の中にある所で僅かに行頭を高くするが全体感をこの法則に準拠する場合があつて、より一層その美しさを強調する」と述べている。^④

次に、補助線B1とB2は右から左へ六・一度の角度で上がる平

行線である。二、五行目を書いた書き手が六行目を書き始める際に、補助線Aの動きから更に潜在する形で、補助線B1に示される左上への動きも無意識のうちに感受している可能性がある。一方で、これに気付き、敢えてこの調和や秩序を外して更なる変化を指向することもあるだろう。

この構成がもたらす視覚的な印象は、まず補助線Aが示す左下への動きから、終わりへと向かつて段々とまとまり収束する、静かに落ち着いていく印象を感じさせる。他方、補助線B1とB2の動きは、二行目行頭に対する五行目行頭、そして一行目行頭に対する六行目行頭が高く位置することで、視線を左上にも誘導する。特にこの五行目の動きは、紙面上で最も高い頂点に位置しており、補助線Aの左下への動きに対して、左上へと空間を持ち上げていく張力も有している。左上への動きは、更に展開し広がるような印象を感じさせるもので、複雑で緊張感のある構成となっている。

同様の考え方で、図14も確認する。図14 Panel 1は、図11の「通下式」からアウトラインを削除して、二行目と四行目を結ぶ補助線Aを加筆したものである。図14 Panel 2は、図14 Panel 1を元にして、二行目と四行目の高さのみに変化を加えて補助線Bを加筆したものである。この場合、三行目は表現上のアクセントとして捉えられ、潜在する視点として重要な働きを示すのは、二行目と四行目の高さの相対関係である。つまり図14 Panel 1では、補助線Aの通り左下

への動きを誘出し、まとまりへと向かう落ち着いた印象を与える。

一方で図14 Panel 2では、三・五行目行頭、及び二行目行頭と五行目行頭との位置関係による左下への動きの背後に、補助線Bが示す左上への動きが潜在して、展開や広がりも醸し出している。一行目と五行目の行頭が水平であるため、補助線AとBとで示される違いがより感じやすくなるだろう。

(三) 分析一 「寸松庵色紙」——リズム、直線と弧線

分析一として「寸松庵色紙」の散らし書きについて検討を行う。

「寸松庵色紙」は、散らし書きの代表的な古筆「三色紙」に数えられる名品の一つで、およそ一三センチ四方の紙面に和歌一首が散らし書きされたものである。元は古今和歌集が書かれた粘葉装の冊子本であつたが、現在は断簡となり、模写も含めた四十三首が確認されている。

図16は、『古今和歌集』より歌番号二一五番の和歌一首が書かれた紙面に構図を引いたものである。補助線A1とA2は左下に二〇・二度の角度で下がる平行線である。⁽⁴⁷⁾ 一、二行目を書き終えた後、その行頭の位置が形成する左下がりの動きが視覚性や身体感覚のうちに反復される形で、三行目を書いた後の四行目行頭が決定されているように思われる。この繰り返しのリズムは平面芸術に屢々見られるものであり、また歌が書かれている和歌の散らし書きにお

いては、まさにリフレインとして体感を伴うような心地よいリズムを表出している。

行頭の動きにはこの反復のリズムの背景で、補助線CとDによる視線の誘導も潜在する。Cの動きはA1とA2による左下への動きを補足するように左下に五・一度下がり、その一方でDは左上に二・四度上がる関係となつている。四行目行頭は、一行目と三行目の行頭より低く、全体としては左に下がっていく動きを示すが、補助線の角度の通り、その動きは小さい。これに対して、同じく角度は小さいながらも四行目行頭は二行目行頭より高く位置して左上に

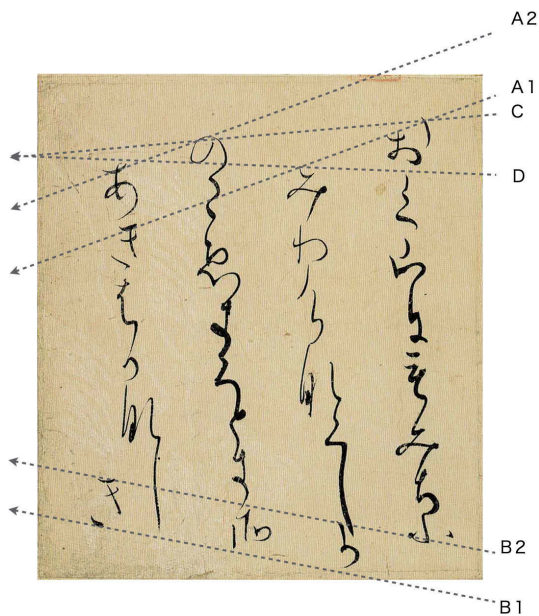
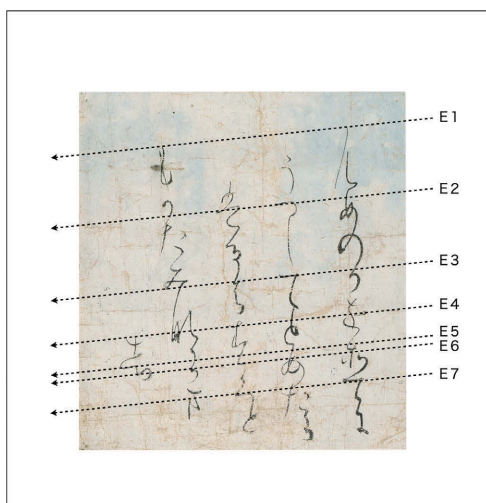
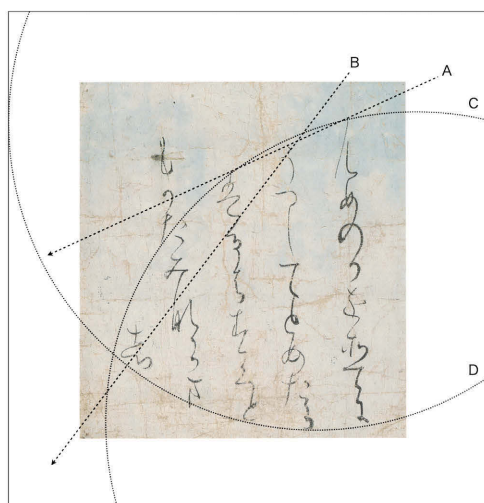


図16 「寸松庵色紙」の構図分析（補助線は筆者）
三井文庫蔵



Panel 2



Panel 1

図17 「寸松庵色紙」の構図分析（補助線は筆者）
遠山記念館蔵 重文

視線を誘導している。また、その行も長いことから、広がりや展開も同時に醸し出している。これは本稿第二章（二）で桑田の三角法から帰納した基本的な法則と重なる視覚性である。

補助線B1とB2は、左に一〇・七度の角度で上がる水平線である。この脚部の空間において、書き手はまず二・四行目行脚のB1の動きをそれとなく感受して、五行目に添えられた「き」の一字の位置を見定めているであろう。もちろん四行目最後の「那し」の左下に生じた間隙に「き」を嵌める動きでもある。また、B1と平行に上がるB2の視覚性も「き」の書き出しの高さを無意識のうちに導き出したのかも知れない。ここでは更に、平行関係にあるB1とB2の線分間の距離が、二行目一番下「可」、三行目一番下「所」という文字の高さと同じでもあることから、脚部の文字の大きさの感覚がそのまま「き」の書字へと推移したとも考えられる。紙面最終の一字は、様々な感覚が輻輳して、ここしかないという一点が決定されているだろう。書き手がどこまでを感受し、そのうちのどこまでが意識下にあり、どこまでが無意識のうちにあるのかまでを知ることができないが、いずれにしろ鋭敏な感覚の所与であることが垣間見える。

次に図17について、Panel1-2の順に分析する。図17は『古今和歌集』四六番⁴⁸の和歌が書かれた紙面である。視線は、変化が大きく表れる箇所や空間の上部にまず注視しやすい。一・三行目行頭を結

ぶ補助線Aは、視線の推移と行の指向を示している。しかしながら五行目として予期される位置に最終の一字「志」は配置されておらず、四行目脚部の近傍に書かれている。これには最終行が一字であることが大きく関与している。

最終の一字を仮に補助線Aで示された位置に書いた場合、四行目の長い行に対して中央よりの高さとなり、桑田が指摘したように長短二行の関係において孤立しそうである。実際に四行目行頭から補助線Aの位置に「志」を書いた場合の距離と、四行目行脚から現在の「志」の距離（それぞれ高さの差）とを対比すると一二・五七となり、延長線上においた場合の方が約一・九六倍遠くなる。まずは近接の要因による群化の観点からも補助線Aの位置より現在の位置が望ましいと確認される。

では「志」は何に導かれてここに書かれたのであろうか。まず古筆の散らし書きに多く見られるように、そして補助線Aの比較的強い角度からも看取されるように、紙面全体の指向として左下へとまとめていく動きがあり、最終の一字も自然と下方に導かれる。一行目から四行目にかけて次第に左傾していった行によって、紙面左下には左上よりも広い空間が残されている。紙面左下では更に、四行目の脚部「那」から「ら万」への連綿で、「那」の「ㇿ」の下に「ら万」が置かれたことによる空間が生じ、「志」を書くためのより具体的な契機が表れている。この「那ら万」によって生じた空間は、

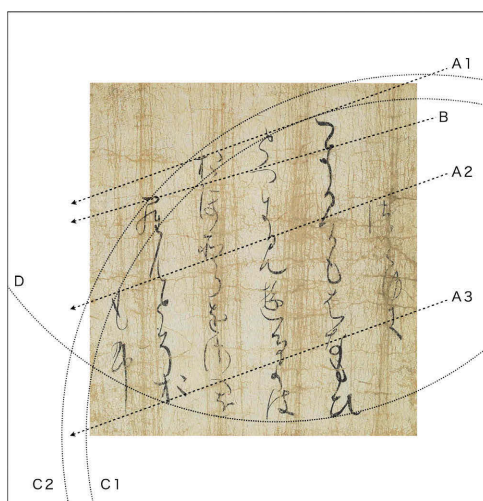
或いは書き手が最後の「志」を書くために、連綿の位置取りと幅の狭い文字の選択（用字）によって準備したと推察される。これは和歌を書く前に心積もりしたのではなく、書き進める中での即応的な行為であつただろう。

ただし、以上の観点からすると「志」がやや高く位置することが気になる。そこで各行の脚部の関係をみると、三行目行脚「と」から四行目行脚「万」へと上昇してきた視線の流れが「志」の位置取りを持ち上げたことが窺える。この行脚のアウトラインに、紙面右上方に中心点をおく弧線Dを補助線として引いた。舟底と形容される膨らみを持った行脚の処理であるが、「寸松庵色紙」では行頭にも円弧を描くように布置された構成が見受けられる。補助線Cは、円弧を想起させる構成を視覚化するために、紙面右下方に中心点をおいて引いた弧線である。

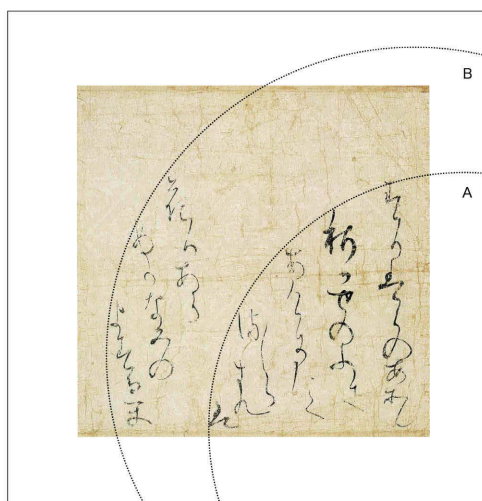
円の上部に一〇三行目の行頭が、円の左側に五行目の左端がおよそ位置取られており、書き手が弧を描くような膨らみをもった紙面をそれとなくイメージして書いていた可能性も考えられる。それは恰も紙面右下方から開いた扇面のようなでもある。

また行頭ではないが、三行目「盤る」の連綿線は、割合強く左下へと働きかけて、「志」の位置と関連しているようにも見える。この斜面の延長を表現したのが補助線Bである。

図17 Panel 2は、アクセントとなつている四行目の高さについて



Panel 2



Panel 1

図18 「寸松庵色紙」の構図分析（補助線は筆者）
Panel 1：野村美術館蔵 重文、Panel 2：個人蔵

分析したものである。一、四行目の行頭を結んだ補助線E1は左下に五・九度下がる線分であり、E2とE7はE1の平行線である。これらの線の角度は、例えばE2が二行目二字目「つ」、および三行目一字目「盤」の横画と、E3が二行目四字目「て」の横画と重なるなど、この紙面の多くの横画の右上がりの角度と重なるのが分かる。横画に表れる角度を書写教育研究の領域では書写角と呼んでいるが、この紙面を書いている際の書き手の右上がりの感覚が、四行目を書き出す際の位置取りにも無意識のうちに関与していた可能性がある。

図18は、これまでの分析や考察を他頁で検討した図例である。

「寸松庵色紙」の筆者が、直線の延長を感じとるだけでなく、時には自ら弧を描くような膨らみのある世界を書き出そうとイメージしたこともあつたように思える。それが分かりやすく客観化されるように、図18 Panel1には、円弧のみを補助線で示した⁽⁹⁾。図18 Panel2は、すでに書いた行と行との関係が、後に続く書字行為に関連を及ぼした可能性を直線の延長や弧線の水平線で示した。補助線A1とA3は平行関係の線分である。弧線C1とC2は同心円の関係である。補助線Bは三行目の一、二文字目「と」から「つ」への連綿や「つ」の横画から生じる左方向への働きかけを表した。弧線Dは二・六行目の行脚をおよそ結んだ補助線で、舟底の構成となっている。

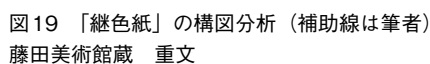
(四) 分析二 「継色紙」——散布される行、架橋される関係

分析二では、同じく三色紙に数えられる「継色紙」について検討を行う。元は粘葉装の冊子本であつたが、後に分割された。縦一三・四センチメートル、横二六・八センチメートルの紙面を半分に谷折りして、折り目の背面を貼り合わせた冊子で、紙面内側のみが書写面となる内面書写の古筆である。糊付け面は書写をしない空白となるため、書写面と空白とが見開き交互に表れる。左右見開きに和歌一首で、右頁に上の句、左頁に下の句の配置を基調とするが、中には右頁ないし左頁のみに和歌一首を集めて、残る片側には部立てのみ、あるいは空白とした見開きもある。また左頁から書き始めて右頁に戻る返し書きや、右頁を空けて左頁に上の句を書いた後、次の外面（糊付け面）を飛ばし、更に次の内面右頁に下の句を書いて左頁を空白とした渡り書きも見られる。冊子から分割された後の姿は様々で、二紙に渡り書きされた紙面から上の句が書かれた左頁と下の句が書かれた右頁とを隣り合わせや上下に貼り合わせたものも伝わる。その際に、真横ないし真上真下ではなく、敢えてずらして配置されたものもある。この二紙を貼り合わせた場合には、左右ないし上下で料紙の色彩が異なる組み合わせとなっていることもある。また元々、見開き一紙に和歌一首が書かれていた書面では、元の書面空間を保持する形で糊をはがしたままの一紙を仕立てたものもあれば、右頁と左頁とに一度切断された後に左右それぞれの紙面

空間を小さく裁断してから貼り合わされたものもあり、伝承の形式が多様である。

継色紙の構図分析にあたっては、まずこれらの点をふまえる必要がある。つまり、右頁と左頁との裁断がない一丁として現存する紙面では、書き手が散らし書きの紙面を形成するにあたって感受していたものを推察する手がかりとしても本稿の構図分析が活用される。一方で、一丁の紙面が右頁と左頁とを一旦分け離す形で裁断されて、右頁と左頁との行間に改変が生じている場合、あるいは紙面をずらした貼り合わせ、上下への貼り合わせなどが後世の手によつて加えられている場合には、本稿の構図分析は、この仕立て直しを行つた人物がどのような感覚をもつて右頁と左頁とを貼り合わせる位置を決定したのかを推察する手法の一つとなり得る。これは書かれたものの鑑賞を経た空間の再構築にあつての視点である。本稿「継色紙」の分析では、まず書き手の感覚の推察を試みるため、元の姿が見開き一紙に和歌が書されていた散らし書きから分析を始める¹¹⁾。

図19と図20は、それぞれ『古今和歌集』一〇九五番の和歌が書かれた紙面である。図19は、左下へと指向する関係に補助線を引き、加えて紙面中央の折り目（ないし切れ目）が表出する垂線に対して垂直となる水平線を引いたもの、図20は左上へと指向する関係に補助線を引いたものである。色紙二面分の横長の空間に和歌一首が書かれているため、行数が多く、また文字の書かれていない空間が広



このように、まとまりを難しくする要因が様々揃っているように考えられるが、図 19、図 20 に引いた補助線を見ると、書き手が行と行との関係を緊密に構築して、多彩な変化の中にあつて緻密な秩序を潜ませていることが確認できる。また、桑田の述べる統一の拠点を巧みに形成されている。図 19 右頁では補助線 A 1 と A 2、および B 1 と B 2 とで表される動きが視線を集約して五行目「あれど」が統一の拠点となり、図 19 左頁では A 3 と A 4、および C 1 と C 2 とが集約される最終行（左頁の四行目）「者なし」が同じく拠点となっている。

この左方向への展開において特に注目されるのは、右頁と左頁との関係の結び方である。右頁の最終五行目へと向かう動きは、図

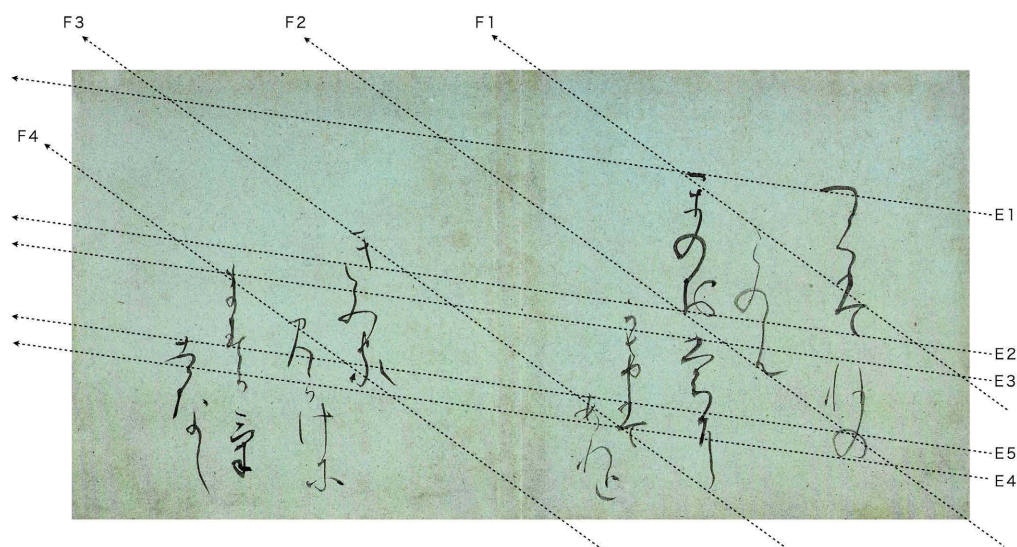


図20 「継色紙」の構図分析（補助線は筆者）

19 B 1の急峻な左下への指向性によって落とし込むように「あれど」へと一旦集約される。ここでは行脚を結ぶA 2とB 2の動きも相俟って、収束感を強く表出しており、続く左頁への展開は一般的には難しいところである。しかし書き手はB 1の急峻な角度を左頁一、二行目の行脚の関係で再現することで呼応して受け止めている。その様子は、図19 B 1とB 2と平行に引かれた補助線B 3に可視化されている。

また左頁の行頭は、図19 D 1で確認されるように右頁二行目「この无」とおよそ同じ高さとなるよう配意されつつ、図20 F 3に示される左上への視線の延長から潜在的に導出されているようである。

このD 1とF 3の結びつく位置から左頁が書き出されることで、右頁と左頁との結び目がまず生じて、そこから前述の補助線B に表される呼応など、様々な関係が結ばれている。また左頁は単に右頁を受け止めるだけでなく、図19 C 1、C 2に可視化される行頭の動きをB 1、B 2の角度よりも緩やかにしつつ、右頁最終行「あれど」よりも左頁最終行「者なし」の位置どりが高くなるように視線を誘導し、尚且つ「あれど」より「者なし」の行を長くすることで、終末感を表出しながらもまだ紙面の左外へと暫く続いていくようにも感じさせる。この視覚性は、本稿の補助線には表現していないが、左頁一、三行目の行頭を結ぶ視線よりも左頁二、四行目の行頭を結ぶ視線の角度を緩めていることも潜在的な効果として同時に働いて

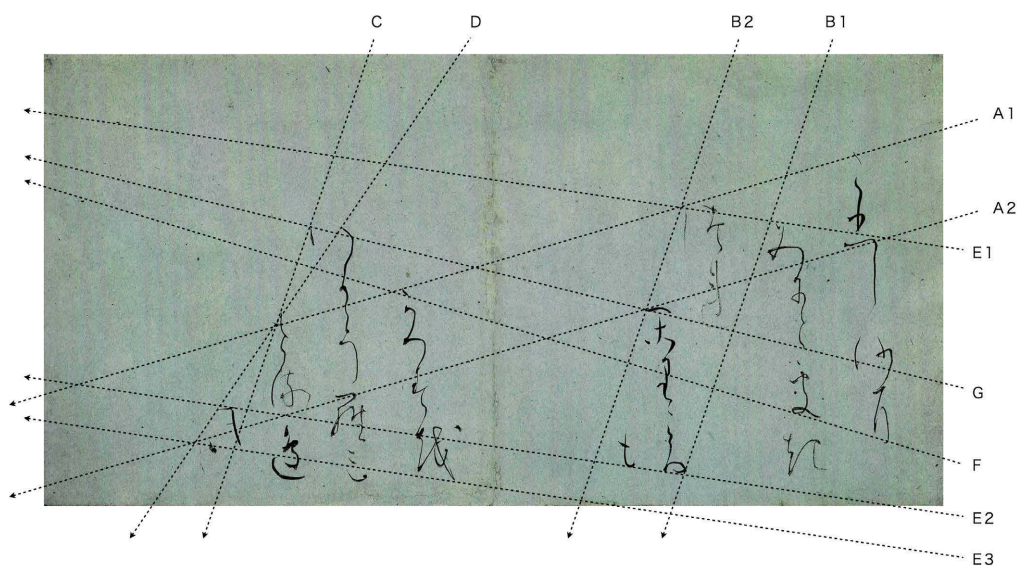


図21 「継色紙」の構図分析（補助線は筆者）
東京国立博物館蔵

いると考えられる。

図21、22は、これまでの分析や考察を他頁で検討した図例である。「継色紙」に構図として表された補助線の多さに加えて、それらが二行、三行を超えて、或いは右頁から左頁へと集団を架橋して行と行との関係が形成されているところに、書き手の感覚の鋭さや隙のない緊張感が表されている。

ここまで「継色紙」の紙面を構図によって分析し、散らし書きにあたつての書き手の感覚を推察しつつ、散らし書きがもたらす視覚的効果を考察したが、すでに述べたとおり、仮にこの紙面が右頁と左頁とで一旦切り離されて、両者の中央にある行間に改変がなされている場合、ないし左右の紙面の高さの相対関係が、化粧裁ちによって例えば右頁では上部を、左頁では下部を広めに裁断するなどして改変されている場合には、左右を美的に統一すべく仕立て直した人物の感覚を推察する手立てとなり得る。

なお、右頁と左頁とを切り離してその間の行間に改変が加えられた場合では、右頁から延長される動きの感受によって左頁の行頭行脚の位置を見定めていく様子を推察することはできないが、右頁と左頁それぞれの空間に収まる散らし書きの分析については、書き手の感覚を推察する手がかりとなる。また、右頁と左頁の上部下部が同じだけ化粧裁ちされている場合においても行間に改変がなければ、高さの相対関係に変化は生じておらず補助線が表現する左右の頁の

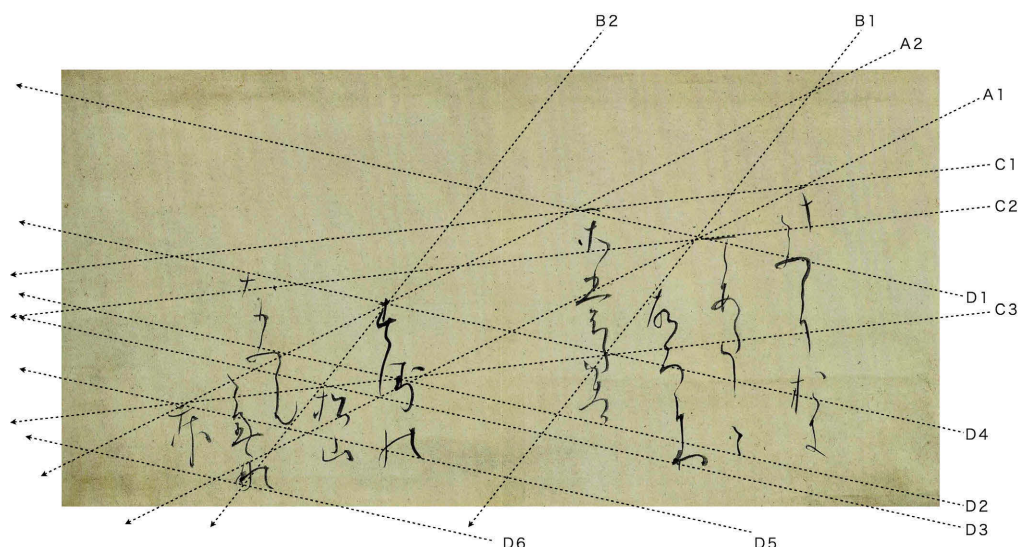


図22 「継色紙」の構図分析（補助線は筆者）
 畠山記念館蔵 重文

関係は書き手の感覚を推察する手立てとして有効である。

そこで次に、ここまでの分析対象に比べて元の冊子からの改変の可能性を考慮すべき紙面を取り上げて検討する。『古今和歌集』三三五番の和歌が書された図23、図24で、図23は左下へと指向する関係に補助線を引いたもの、図24は左上へと指向する関係に補助線を引いたものである

この紙面は縦一一・四センチメートル、横は右頁一一・一センチメートル、左頁九・七センチメートルであり、右頁と左頁ともに、上または下、および左または右の空間の切断がなされていることが紙面の大きさから明らかである。ただし右頁と左頁との間の行間に改変があつたかは定かでなく、その検討には糊代の跡や切れ目を確認するなどの方策を要する。なお、桑田笹舟『粘葉本染紙私歌集（継色紙）』では、この紙面の右頁と左頁の行間は現状と同じに復元されている⁵⁴。同本は、紙面の一部が切り取られている場合に「その余白を加えた料紙にその空間をあるとして」作成されたものである。

分析にあたり、まずはこの紙面における墨量の変化のあり方について注視しておきたい。⁵⁵ 墨があり潤った箇所を潤筆、墨が少なくかすれた箇所を渴筆という。通常は墨をつけて一行目を書き始め、次第に墨量が漸減して渴筆となり、また墨継ぎをおこなうという時間的推移が墨量の変化の上に表れる。しかしこの頁では一行目「者那の」が墨の少ない渴筆で書き始められ、下に続く「いろ」で墨を継

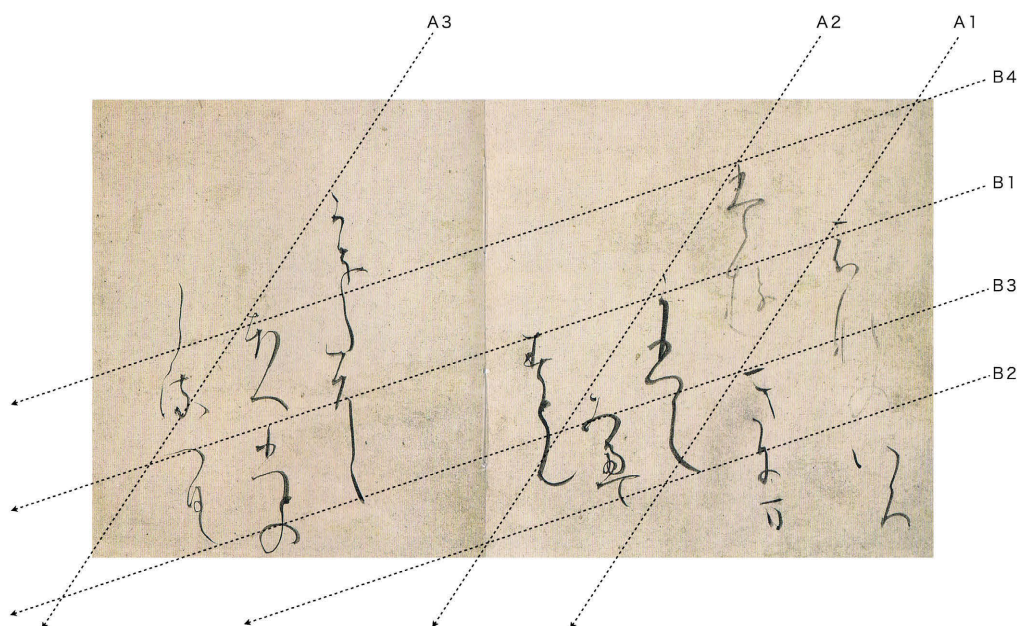


図23 「継色紙」の構図分析（補助線は筆者） 個人蔵

いで潤筆になった後、二行目冒頭「盤遊」で再び渴筆となり、その下「き尔万」で墨を継いで潤筆、三行目は更に墨を継ぎ足して太く「可悲氏」と書かれている。一行目冒頭から渴筆であること、一行目脚部で墨を継ぎ墨量に余裕がある筈の二行目行頭が再び渴筆であること、同じく墨量にまだ余裕があるところに三行目で更に墨を継ぎ足している点が、通常の書字行為からすると不自然である。この墨色の変化について、桑田は「後人の入手と見られる」と指摘している⁽⁵⁶⁾。桑田の指摘する通りに後世の補筆入墨がなされたとしても、書き手は一行目から渴筆で紙面を書き出しており、そこにある種の作為的な美的表現が投影されている可能性が推察される。また後世の補筆入墨がなく書き手の書字のままである場合には、一行目行頭の渴筆による書き出し、そして一行目行脚で墨を継いだばかりであるにもかかわらず二行目の行頭ですぐに渴筆となっている点に墨量に関する主體的な意図が窺えるようである。いずれにしろ渴筆で書き出したことよって生じている潤渴の差がもたらす視覚性は、紙面の奥行きや遠近の知覚に作用するもので、絵画の領域で空気遠近法と呼ばれるものに該当する⁽⁵⁷⁾。

絵画の構図論では、「最も明るい部分と最も暗い部分の接するところが、アート作品のメインの焦点である⁽⁵⁸⁾」と言われる。図24の補助線C1は、潤渴によって一く三行目に明暗が接している箇所を繋いだ線分である。仮に用墨が書き手の書字のままである場合、この

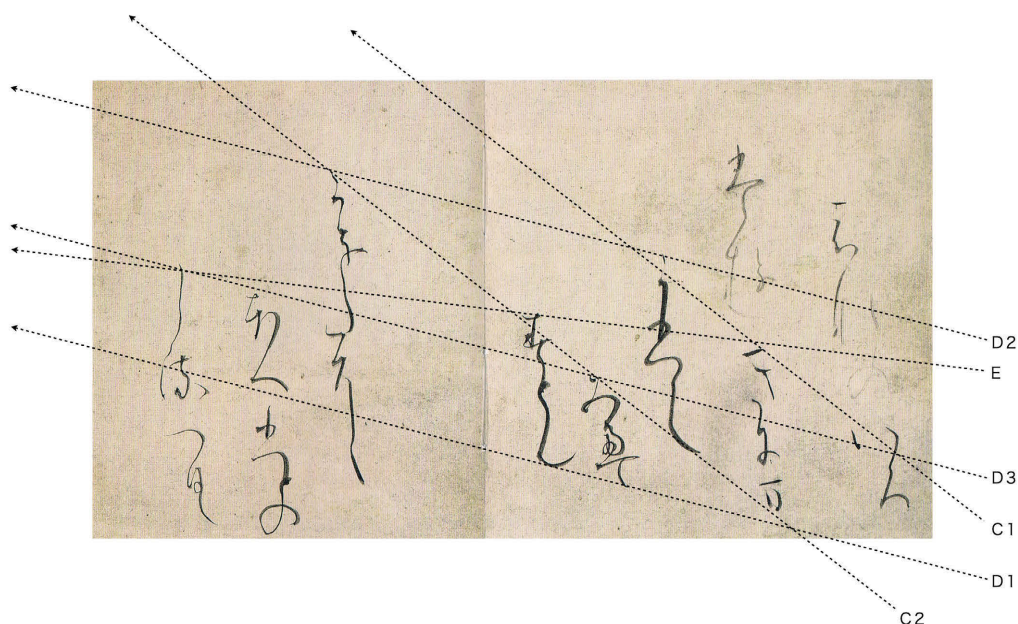


図24 「継色紙」の構図分析（補助線は筆者）

左上に視線を持ち上げる働きと角度が、二、三行目行脚の位置と、四、五行目行頭の位置を定めたことが推察される。また右頁と左頁の間の行間に改変がなかった場合、空間を遠く隔てた左頁書き出しの位置を導く要因となったことも考えられる。一方で、後人による補筆入墨があつた場合、逆に二、三行目行脚と四、五行目行頭の位置から導かれる図24 C 2の動きが先行して、一行目行脚や二行目行脚、あるいは三行目行頭などの補墨の位置、つまり図24 C 1の動きを見定めることに繋がった可能性も考えられる。また右頁と左頁の間の行間に改変があつた場合、左右を貼り合わせた人物が図24 C 2から左頁書き出しの位置を見定めつつ、他の補助線に示された動きを感受しながら左右の散らし書きを統一する感覚をもつて仕立てた可能性も示唆される。行間改変の有無のいずれにしろ、右頁と左頁における書き手の感覚として、右頁では図23 A 2に示された動きが四行目行頭の位置を導いていること、そして図24 C 2に示される動きからも書き手が四行目の位置を見定めつつ、五行目行頭の位置が導かれていることが推察される。また右頁で図23 A 2に示された感覚が左頁で図23 A 3の動きとしてリフレインされて、左頁二行目の位置を導く要因となったことは推察される点として挙げられる。

以上見てきたように、「継色紙」の構図分析では、右頁と左頁の間の裁断が無い場合には、書き手の感覚を推察する手がかかりとなり、右頁と左頁の間の裁断を含む行間等の改変がある場合には、書き手

の感覚の推察は右頁や左頁における散らし書きのみに限定される代わり、右頁と左頁を結びつけた人物が何を見定めて仕立て直したのかを推察する手がかりとなることが示された。

第二章で確認したように、中世書論における散らし書きの理論は、自然の景観にその構成を擬えるものであった。そこでは形式的な型の記述となっていたが、そのきつかけとなつた姿は「継色紙」が描き出しているような、まさに自然と重なりあい一体となつた散らし書きの世界であるだろう。実際、中世の型の中にも部分において、特に行頭の変化で「継色紙」と重なるような景観の描写が見え隠れするが、「継色紙」の散らし書きは見開き毎に自由で多彩な変化を見せており、また部分においても短い行の散布的な配置に、中世の型とは異なる自然な動きが巧みに表現されている。

『麒麟抄』をはじめ、南北朝期以降の書論が理想としたような自然と一体化した表現を見せる「継色紙」であるが、一方で図23、図24で確認した潤渴表現、更には返し書きや渡り書きといった冊子全体の構成における変化など、表現効果への明確な意識も窺えて、主体的で意図的な表現であることも同時に示している。

(五) 分析三 「元永本古今集」——行書きと散らし書き、意匠性分析三として「元永本古今集」の散らし書きについて検討を行う。

「元永本古今集」は、『古今和歌集』の完本として伝わる最古の写本

で、筆者は藤原定実と考証されている⁽³⁹⁾。絢爛たる装飾料紙が使用されており、和製唐紙の表面と金銀で装飾された染紙を主とする裏面とが、見開き交互に表れる。上下巻からなる冊子本で糸で綴じられている⁽⁴⁰⁾。各巻とも始めは行書きであるが、後半になると次第に散らし書きの頁が表れて、やがて多彩で意匠的な散らし書きが展開される冊子構成となっている。

図25は、『古今和歌集』三八〇番の和歌⁽⁴¹⁾が右頁に、三八一番の詞書と和歌が左頁に書かれた紙面に構図を引いたものである。一見して驚くような構成の散らし書きであるが、この矩形に収めた構成が冊子の各所に見られる。前述した通り、上下巻とも行書きで書き始められており、行書きの部分では、和歌や詞書の特に行頭が揃えて書かれていることから、矩形に収める書き振りは、観念的には行書きに近いものと言える。ただし紙面からも明らかのように、この矩形に収められた集団を配置するという意匠空間であり、この矩形も散らし書きである。補助線からも分かるように、矩形は水平垂直を指向したもので、理知的な印象を与えるが、中央部に大胆に、一方で控えめに配された僅か二行の叙情的な散らし書きが、右頁の矩形を受け取るように構成されている。これは桑田の言う統一の拠点として補助線B1とB2で表した視線の推移によつて、右頁と中央部を繋いだ状態と言える。

これに対して左頁の矩形とは繋がる関係がないことから、具体的

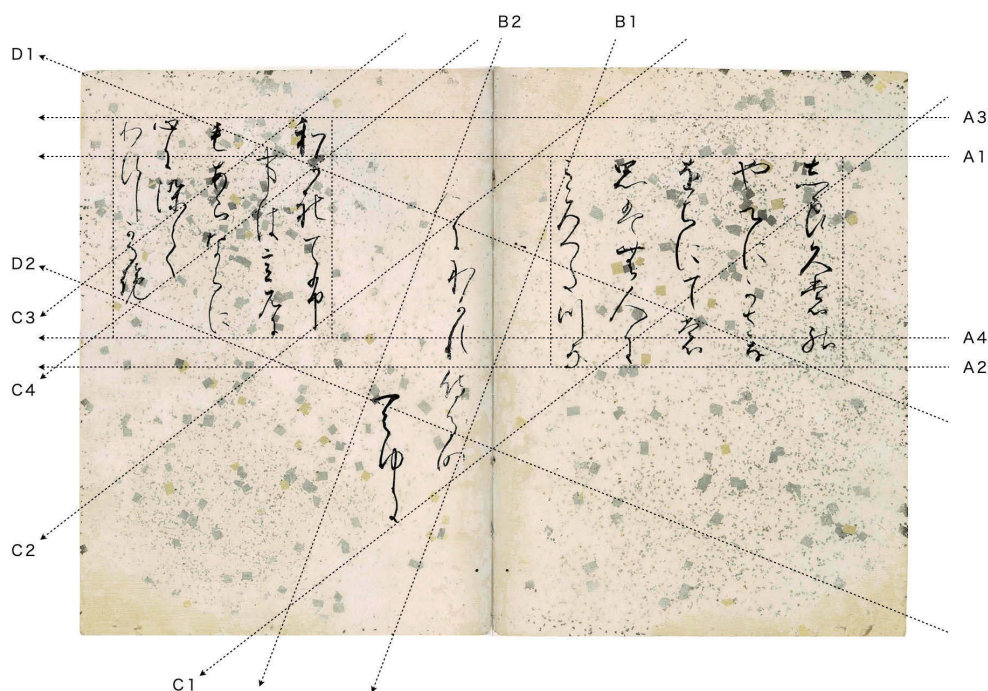


図25 「元永本古今集」の構図分析（補助線は筆者）
東京国立博物館蔵 国宝（部分）

には右、中、左の三集団であるが、大きく見ると実際には右と中で一つの集団と見ることもできそうである。左頁の集団は矩形の面積や行間も狭く、文字もやや小さい。また水平な補助線A1とA3からも確認できる通り、右頁の矩形に対して行頭、行脚の位置も明確にずらしつつ、少し高い位置に浮くように配置されている。このようにして左頁集団は少し遠景に見えるよう巧妙に遠近感が表出されたと考えられる。

図26は、『古今和歌集』三八五番の和歌が左頁に、その詞書が右頁に書かれた紙面に構図を引いたものである。右頁の詞書は、行書きと言つてよい形式であるが、意図的に矩形に収めた現代的な散らし書きの意匠の一部と捉えるべきであろう。実際に大小長短様々な矩形が他頁に表れて、自然の景観を描くようであった「三色紙」の散らし書きとは異なつて、人為的な印象を与える。こうした矩形集団の配置による散らしと従来からの行頭行脚に変化をつけた叙情的な散らしとが一つの紙面でも共存し、また冊子の中も自由に行き来している。

実際に上巻では、同三三六番歌で初めて散らし書き（従来の散らし）が表れるが、その隣の左頁ではすぐに行書きに戻り、その後、同三六二番から三六四番歌までの四頁で再び散らし書きを見せつつ、またすぐに行書きに戻っている。こうして行書きから交互に、そして徐々に入れ替わるようにして散らし書きへと移行し、またその構

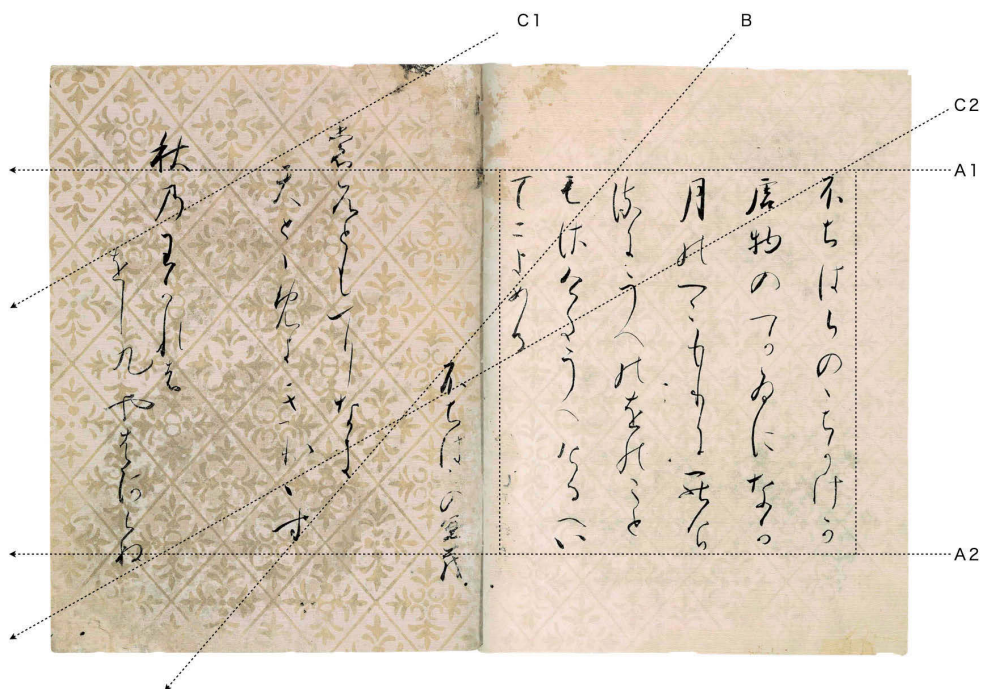


図26 「元永本古今集」の構図分析（補助線は筆者）
東京国立博物館蔵 国宝（部分）

成も行書きとの判別がつきにくいような矩形のものが混在されている。行書きと散らし書きとの境目を時に紛らわすように、従来の叙情的な散らし書きと、前衛的な散らしとが大胆に融合した極めて意匠性の強い、仕掛けに富んだ表現が展開されている。図26に戻ると、右頁の矩形と左頁の叙情的な散らしとが並んでいるが、通常の行書きにおける詞書と和歌とのバランスとはやや異なっており、詞書の文字もやや大きく、また矩形が少し浮いたような位置に配置されて、詞書の矩形が強調されるようになっている。通例、和歌がよく視線にとまるように、詞書は低く抑えられて、脚部の空間にも工夫はないが、このように直線で区画して脚部に整然と明るい空間が生じると、自然と右頁に目がとまる。左頁が仕掛けの少ないシンプルな散らし書きとなっているのも意図的であろうか。行と行との関連に、特に注視するものは少ないように見えるが、左頁一行目の「不ちはらの兼茂」は、右頁最終行の「てよめる」と入れ替わるように配置されつつ、足下を矩形の下線より下げてアクセントを付け、さり気なく瀟洒な感覚を見せている。

図27は、『古今和歌集』三九七番の和歌が右頁に、その返歌である三九八番の和歌が左頁に書かれた紙面に構図を引いたものである。図25と同じように、紙面の重心が高い位置にあることが分かる。間隔も広く角度も八・七度と弱いため微かな動きではあるが、補助線Bに表された左上への指向性を持った紙面空間で、それを左頁に描

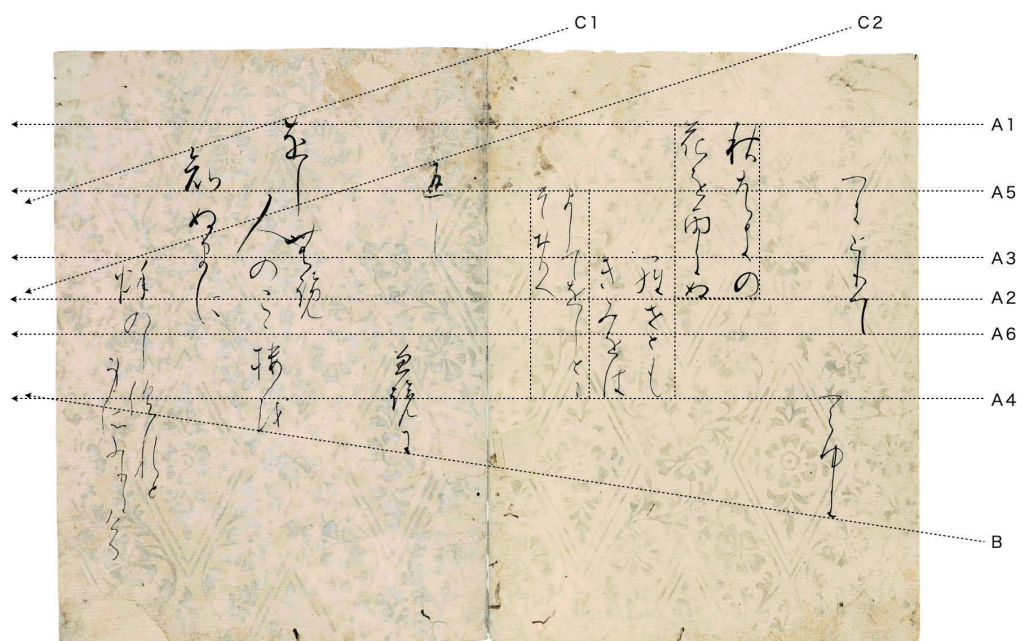


図27 「元永本古今集」の構図分析（補助線は筆者）
東京国立博物館蔵 国宝（部分）

かれた叙情的な散らし書きで受け止めて下方へと落とし込むような展開である。また一、二行目が少し離れて、少しずらして散布された後、矩形に囲まれた三つの集団が集まっている。この矩形の集団は、一つ目と二つ目の集団が、補助線A3とA2との幅で重なりを持つている。また二つ目と三つ目の集団は補助線A4で揃えた一まとまりでもあり、一方で、二つ目の集団の高さA3と三つ目の集団の高さA5の高さの差、および三つ目の集団二行目が二つ目の集団と重なる部分を僅かししか持たないことで、別の集団であることも明示している。また三つ目の集団二行目の脚部が補助線A2で揃えられていることも、意匠的な配慮の高さを感じさせる。

図25や図27のような重心の高い空間構成が表出する奥行き感について、グラフィックデザイナーの矢萩喜徳郎が実証的な研究をおこなっている。矢萩は、国内外の様々なポスターを実験材料として、それらの重心を数値化した。そして平面作品から受ける奥行き感を、平面的世界、空間的世界、宇宙的世界とに分類した上で、重心の高さと視覚的な印象との関連を分析した。検討の結果、図25や図27のように重心がかなり高い構成では、有限の奥行きを感じさせる空間的世界、または無限の奥行きを感じさせる宇宙的世界になると報告されている⁶⁴。重心は黒みの量から算出されており、一見したところでは、図25より図27の方が全体に細い線を多用しつつ太い線が上部に集まって、やや重心が高いかも知れない。重心の感覚とは別にな

るが、中心に空間があることや、図25とは異なり、文字や行が中空に漂うように散布されていることから、図27の方がより奥行きを感じさせる空間に見受けられる。

以上、「元永本古今集」から三つの見開きを抽出して、分析を試みた。「寸松庵色紙」や「継色紙」と明らかに違って、水平線や矩形の補助線が多く、理知的な構成であることが窺えた。また補助線同士の関連も「寸松庵色紙」や「継色紙」のように神経を張り巡らせたように行と行との関係を感じているというよりは、構想や意図の働きが強く、知的な操作によって配置や配列が決定されているように推察された。「継色紙」も同じく、冊子全体を通しての構想や表現効果への意識という意味も含めて主体的な表現であることが窺えたが、「元永本古今集」では、矩形を活用した幾何学的な構成や、行書きと散らし書きとの間を敢えて往来しながら展開させる企画力など、より明確な意匠性が示されていると考えられる。前掲村上は、「元永本古今集」の散らしだけは、突出して作画的⁽⁶⁵⁾であると述べて、その筆者をバランス感覚の優れた、現代感覚をもった書き手と評している。

構図による分析と考察を通してみた結果、「寸松庵色紙」「継色紙」「元永本古今集」のいずれもが、イメージや構想を持って書き始めつつも、前二者が自然と一体となるような無意識の感覚を研ぎ澄ませて書いたように見えるのに対して、「元永本古今集」では、

意識下の働き、頭の中で考えた世界を知的な操作を働かせながら書いていたように見受けられる。その意味で「元永本古今集」の書き手は、より耽美的な態度で独自の世界観を創出しているように思える。

四 まとめ

現代を代表するタイポグラファーであるエミール・ルーダーは、タイポグラフィにおけるリズム感（ヴァリュ）への取り組み方の可能性として、次の三つのフェーズを提示した。⁽⁶⁶⁾

- 一、意識されないリズム感
- 二、ある程度意識されたリズム感
- 三、意識的にデザインされたリズム感

これは、一つの表現において、常に意識と無意識の働きが存在することを示している。つまり、ある表現の全てが意識によって統べられていることは考えにくく、推敲や検討を重ね、周到な用意の元に意匠を凝らし、自らの意図を具現化した表現であつても、どこかに自らが意識しなかった部分は残されているのだらう。前掲安東もまた、この無意識について次のように述べている。

心の働きの中には、目に見えるもの、いわゆる現在すぐわかるものと、奥の方に隠れた何かとがある。潜在意識というものがある。この潜在意識がどう働くかということが、非常に美を左右する。⁽⁶⁷⁾

書き出された表現は、この意識と無意識の所与であり、残された表現は、書き手が何を意図して、また何を感じながら書いていたのか、書かれたものが与える印象や効果がどのようなものであるかを知る手がかりでもある。本研究は散らし書きの空間構成について、これらを研究することを目的とするものであった。優れた表現から学び、自らの表現や共有される知見として生かしていくことが重要である。

本研究は、散らし書きの二次元的構成を分析する方法として、補助線を用いた構図分析の方法を提示し、実際の古筆を対象として解析と考察を加えた。補助線によって顕在化された行と行との関係から見えてきたのは、時々必然性の元に次の書字行為が導かれ、配置された行と行とが秩序や緊張感を持つて繋がりにあつてゐることであつた。

抽象絵画の創造や発展に寄与したカンディンスキーは、「外的には、すべての線描あるいは彩画の形態のひとつひとつが要素である。内的には、この形態それ自体でなく、そこに生きている内的な緊張

が要素である」として、「絵画作品の内容を具体化するのとは外的な形態ではなく、この形態の内に生きている力⁽⁶⁸⁾緊張である」と述べた。書き出しの字数から規矩された中世の型のような「形のための形」ではなく、内的に必然的に生じてきた結果としての形であることが、表現における最も大切な要素の一つとなるであろう。書画の領域では古来より、「意先筆後」「心手無間」など様々に論じられてきた。心や意図、構想と書くこととの関係についての問題は、今後に稿を改めて論じたいと思う。

本研究の分析方法から、書き手が何を感じ判断し、そして意図しながら書き及んでいたのかを客観的に推察する手がかりが示されたと考えられる。また散らし書きの構成がもたらす視覚的な効果についても客観的な考察が可能となつた。散らし書きに関する教育の場面において、鑑賞や分析の手立てとなる理論の不足、および模倣や定型化に頼りがちであつた従来の実践に対して汎用性や客観性の高い理論が得られたことは、書教育や書道文化の様々な場面で有効に活用されることが期待される。

これと併せて、散らし書きの発生から、現代の散らし書き理論までを通覧し要点を抽出したことで、散らし書き本来の性質、および表現がもたらす印象や効果に関する知見が整理された。本研究の構図論は、こうした先人からの知見を考察と重ね合わせることが可能であり重要でもあつた。その意味で、これまでに積み重ねられてき

た散らし書きの理論もまた、今後の研究発展に対して有効であり続けることが確認された。中世の書論が、その形骸化した型の教示ではなく、自然と重なりあおうとする日本人の感性や表現という意味において、いかに現代の理論へとこれを捉え直していくことができるのか、その学書のあり方も含めて今後の課題となるであろう。

注

- (1) 平田光彦「散らし書きについて——大字仮名・中字仮名」『書之美』第一七二号、二〇一六年、〇一頁。
- (2) 同前。なお、増田孝『日本近世書跡成立史の研究』文献出版、一九九六年、一一五—一一六頁においても、「延べ書き」と「散らし書き」の中間のような例が少なくないことから、「散らし書き」という言葉が示す実態の不明確さについて言及されている。増田の言う「延べ書き」とは、行の上下を揃えた書き振りを差し、行書きの範疇に含まれる。以上をふまえて前掲平田では、「散らし書き」と「行書き」の語の運用に際しては、畢竟、その表現がどちらの性格によつて基礎づけられるのかを掴み、要に応じて部分的な付言がなされれば良いとまとめた。
- (3) 伊東卓治「石山寺藏虚空藏菩薩念誦次第とその紙背文書」『美術研究』第一七六号、一九五四年、一一二八頁。
- (4) 同前。伊東は、第一種「一」とされた断片番号15、18、および同「二」とされた断片番号10、12、14、17の筆跡を、「さう」より脱化して続け書きへと移っている過渡期であり、貫之風の古い時代の書風とした。また第二種とされた断片番号5の筆跡を、「大分假名らしく整えられ」た文字で「つけ書きの體が出来て」おり、「落着いて」いる等と分析した。

- (5) 小松茂美『かな』岩波書店、一九六八年、一六四—一七二頁。
- (6) たとえば萱のり子「散らし書き」考」『日本の芸術論』ミネルヴァ書房、二〇〇〇年、一五八—一五九頁、平田光彦「王朝仮名古筆にあらわれた美の諸相」『岩手大学教育学部研究年報』第七五巻、二〇一六年、三—四頁など。
- (7) 村上翠亭「散らし書きの魅力」『墨』二二九号、芸術新聞社、一九九七年、一四—一五頁。専門誌巻頭特集のインタビューによる言及。
- (8) 中田勇次郎「中国書論史(一)」『中国書論大系』第一巻、二玄社、一九七〇年、八頁。
- (9) 熊秉明著、河内利治訳『中国書論の体系』白帝社、二〇〇六年、iv頁。
- (10) 中田勇次郎「中国書論史(二)」、八—九頁。
- (11) 長澤規矩ほか編「日本国見在書目録」『日本書目大成』第一巻、汲古書院、一一—一四頁。なお小学は文字学のこと。神田喜一郎「奈良朝時代に傳來した漢籍に就いて」『神田喜一郎全集』第八巻、一九八七年、二二—二三頁には、奈良朝末期に傳來していた文字学の文献について考察がある。他に春名好重『日本書道新史』淡交社、七六—七七頁も参照。
- (12) 橋本貴朗『源氏物語』絵合巻に見る中国書論の受容(上)『若木書法』一〇号、國學院大学、二〇一一年、三七—四五頁、および『源氏物語』絵合巻に見る中国書論の受容(下)『若木書法』一一号、二〇一二年、三九—四七頁。
- (13) 『三教指歸性靈集』日本古典文学大系七一、岩波書店、一九六五年、二一〇—二二二頁。
- (14) ただし中国にも、唐代の一部の書論に、書法を秘訣として子孫に伝えるための通俗な伝授書が存在する。春名好重ほか編、『書道基本用語詞典』中教出版、一九九一年、四七三頁(杉村邦彦執筆項)。
- (15) 『夜鶴庭訓抄』『群書類従』第二八輯、訂正三版、続群書類従完成会、一九八六年、一四三頁。

- (16) 小松茂美『日本書流全史』上、講談社、一九七〇年、四四頁。
- (17) 「麒麟抄」『続群書類従』第三二輯下、訂正三版、続群書類従完成会、一九八九年、一九七一—一九九頁。
- (18) 「作庭記」林屋辰三郎校注『古代中世芸術論』日本思想大系二三、岩波書店、一九七三年、二二六頁。
- (19) 同前、二二五—二二六頁。
- (20) 磯崎新『建築における「日本的なもの」』新潮社、二〇〇三年、一五〇—一五四頁では、二条城が建築空間における雁行配置の先行例という。
- (21) 『古今和歌集』佐伯梅友校注、日本古典文学大系八、岩波書店、一九五八年、一八五頁。
- (22) 「俊頼髓脳」橋本不美男校注・訳『歌論集』日本古典文学全集五〇、小学館、一九七五年、四七頁。
- (23) 「右筆条々」『続群書類従』第三二輯下、訂正三版、続群書類従完成会、一九八九年、二六二—二六三頁。
- (24) 『山水并野形圖』尊經閣叢刊庚午歳配本、育徳財團、一九三〇年。
- (25) 「作庭記」二三八頁。
- (26) 林屋辰三郎『古代中世の芸術思想』『古代中世芸術論』、七一三頁。
- (27) 小松茂美『日本書流全史』、八七頁。
- (28) 同前、三七九頁。
- (29) 桑田笹舟『笹舟かな教室』基礎上、内山松魁堂、一九七三年、一一一頁。
- (30) 安東聖空『かな古筆美の研究』第七卷、同朋舎、一九八六年、一六二頁。生前の安東について語られた座談会での述べ。桑田は、安東が「散らす」ということは、本当はまとめるということ」だと門弟に教えていたことを明かしつつ、これが安東の心の一番の源であり、桑田自身を貫いてきたものでもあると述べている。
- (31) 同前、七二—七三頁。
- (32) 桑田笹舟『笹舟かな教室』、一一〇—一一一頁。
- (33) 「本朝字府秘伝」附録、人文学オープンデータ共同利用センター、二〇一七年、<http://codh.rois.ac.jp/pnjp/book/200022017/>（参照二〇二一年五月一日）。宝永六年（一七〇九）、前田圖南によって記された。巻一〇五と附録からなる。用例は、祝言状の墨継ぎや書式について述べられた、文章墨ツギ大略、猶々書之事の項に見える。
- (34) 仲谷洋平・藤本浩一編著『美と造形の心理学』北大路書房、一九九三年、一四—一五頁、および日本図学会編『図の美学』森北出版、一九九八年、四三—四四頁。
- (35) 同前二書。
- (36) 桑田笹舟『笹舟かな教室』、一五一頁。
- (37) 同前、一四七—一六三頁。
- (38) 同前、一二二頁。
- (39) 継色紙について、例えば文部科学省検定教科書『新編書道Ⅰ』教育出版、二〇一七年、一〇二—一〇三頁など。本阿弥光悦筆和歌巻について、森岡隆「鶴下絵・鹿下絵等と歌巻三巻に見る光悦スタイル」書学書道史学会編『書学書道史論叢／二〇一』萱原書房、二〇一一年、四九五—五二二頁。
- (40) 杉岡華邨『書道技法講座（かな）寸松庵色紙』二玄社、一九七六年、七二—九六頁。
- (41) 同前。各形式の解説では行脚についても言及があり、「行脚の点を結ぶ線が示すように」という表現も見える。
- (42) Burkhardt, G. D. *Aesthetic Measure*. Cambridge: Harvard University Press, 1933, pp. 3-4.
- (43) 次の文献を参照した。
ジョージ・ドーチ著、多木浩二訳『デザインの自然学——自然・芸術・建築におけるプロポーション』青土社、二〇一四年、一二四—一二五頁。
関西剛康「枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察」『ランドスケープ研究・日本造園学会誌』六九巻五号、二〇〇六年、六八七—

六九〇頁。

細野透『謎深き庭龍安寺石庭——十五の石をめぐる五十五の推理』淡交社、二〇一五年、一七一―一七二頁。

- (44) ジュリエット・アリスティデス著、平谷早苗編『ペインティングレッスン——古典に学ぶリアリズム絵画の構図と色』ポーンデジタル、二〇一四年、二六―四一頁。長方形の構図線やルート長方形など、様々なパターンがある。

- (45) 桑田笹舟『笹舟かな教室』、一七八頁。

- (46) 本稿の歌番号は全て『新編国歌大観』による。『古今和歌集』二二五番は『新編国歌大観』第一巻、「新編国歌大観」編集委員会、角川書店、一九八三年、一四頁。

- (47) 参考値となる角度はAdobe Photoshop 2021を用いて計測した。

- (48) 『新編国歌大観』、一一頁。ただし寸松庵色紙では「梅がゝを」が「梅の香を」と書写され、「とゝめては」が「とめたらば」と書写されている。前者は関戸本、高野切などに、後者は元永本、筋切などに同例がある。校異については、片桐洋一『古今和歌集全評釈』上、講談社、一九九八年、四八六頁を参照した。なお、筋切と元永本は同筆と考えられており、本文もほぼ同じである（片桐同書、四三頁）。

- (49) 図18 Panel1の紙面（野村美術館蔵品）における散らし書きについては、笠島忠幸「散らし書き表現の展開」『日本美術における書の造形史』笠間書院、二〇一三年、一六五―一六六頁にも論考がある。笠島は本紙に雲母刷りされた花菱調（花櫛）の下絵文様が形成する斜め格子に調子を合わせつつ、本紙の散らし書きが階段状に各行頭を下げていくと指摘している。この論で特に注視されるのは、一行目の「すがはらのあそん」という歌の詠み手の名と和歌本文とを書く際とで書写意識の切り替わりがないという指摘である。詠み手の名を本文と同じ意識で書くということは、散らし書きにあたっても書式として切り替える意識の無いことを意味する。これに

よって詠み手の名が書かれた一行目が本文よりも高く位置取りすることを大胆にも可能にしていると考えられる。下絵や文様と書き手の書字行為との関係には、直接ないし緩やかに関与する場合と、下絵や文様を感受しながらも全く関与しない場合とがある。例えば同じ花櫛文様である近傍の二七四番歌紙面は、文様の影響を全く受けずに書写されている。また「寸松庵色紙」では、杉岡による「左右分裂式」における左右の各集団は、行頭を素直に下げていく構成が多い。なお下絵と書写行為との関係については他にも屢々言及が見られる。例えば、前掲森岡、五〇三―五一〇頁の論考、仮名の散らし書きをテーマに執筆された技法書である、横山煌平『プロに学ぶ書のテクニク4 散らし』、可成屋、二〇〇一年、八〇―八二頁など。

- (50) 一九〇六年まで石川県前田家に十六首半の零本が原装のまま伝存し、現在には田中親美の複製本によつて原形が伝えられる。『継色紙』日本名跡叢刊平安六十選一二、島谷弘幸解説、二玄社、二〇〇一年、七五頁参照。また後には桑田笹舟による復元本『粘葉本染紙私歌集（継色紙）』笹波出版、一九八八年、も刊行されている。なお桑田による同復元本の解説に、寸法は伝存資料の最大のもを原寸として復元した由、補記されている。

- (51) 前述の前田家蔵零本において見開き一紙となつていた紙面から選定した。選定には、桑田笹舟『粘葉本染紙私歌集（継色紙）解説』笹波出版、一九八八年、三四―三八頁の復元表を参照した。復元表には、同零本の十六首半を含めた紙面情報が一覧として記載されている。

- (52) 『新編国歌大観』、三二頁。ただし継色紙では「かのも」が「かのおも」と書写されている。

- (53) 同前、一七頁。ただし継色紙では「雪にまじりて」が「雪にまがひて」と書写されている。なお同例は元永本、筋切などにも確認される。校異については、前掲片桐、一〇七九頁を参照した。

- (54) 桑田笹舟『粘葉本染紙私歌集（継色紙）』。

- (55) 平田光彦「王朝仮名古筆にあらわれた美の諸相」、一一―一二頁も参照。
- (56) 桑田笹舟『粘葉本染紙私歌集（継色紙）解説』、二四頁。
- (57) 『図の美学』、四六―四七頁。
- (58) ジュリエット・アリスティデス『ペインティング・レッスン』、六四頁。
- (59) 小松茂美「元永本・公任本古今和歌集の研究」、『小松茂美著作集』第六巻、旺文社、一九九八年、一四五―二七五頁。
- (60) 糸で綴じられた和本装訂の名称は諸説混乱しており用語が一定しない。ここでは糸で綴じられているとのみ記すこととした。用語については書道や書誌学における諸賢の論考を参照した。例えば、小松茂美「古筆学聚稿一」、『小松茂美著作集』第二巻、旺文社、一九九八年、五一―五二四頁、山中康行「20世紀における和装本装訂名称研究の展開——和本の装訂呼称に関する一考察」、『京都女子大学図書館情報学研究紀要』第三号、二〇一六年、一一七―一頁、ほか。
- (61) 『新編国歌大観』、一八頁。ただし元永本では「人を」が「人に」、「わかれける時」が「わかれ侍る時」と書写されている。なお同例は筋切にも確認される。校異については、前掲片桐、中、八六頁を参照した。
- (62) 同前、一八頁。ただし元永本では「つかひ」が「つかゐ」と書写されている。また「つごもりがたに」が「つごもりに」と書写されており、同例が筋切などに確認される。ほか「さけたうびける」が「さけたうべける」と書写されており、同例が筋切、建久二年俊成本などに確認される。校異については、前掲片桐、中、九三頁を参照した。
- (63) 同前、一八頁。ただし元永本では「とよめりけるかへし」が「かへし」と書写されている。なお同例は筋切にも確認される。校異については、前掲片桐、中、一一六頁を参照した。
- (64) 矢萩喜從郎『平面空間身体』、誠文堂新光社、二〇〇〇年、四五―七二頁。
- (65) 村上翠亭「散らし書きの魅力」、一四頁。
- (66) エミール・ルーダー著、兩宮郁江・室賀清徳訳『本質的なもの』、誠文堂

- 新光社、二〇一三年、六六頁。
- (67) 安東聖空『かな古筆美の研究』、六五頁。
- (68) W・カンディンスキー著、宮島久雄訳『点と線から面へ』、中央公論美術出版、一九九五年、二七頁。
- 図版出典一覧
- 1、小松茂美監修『仮名消息』、日本名跡叢刊平安六十選八、二玄社、二〇〇一年、一二頁
- 2、同前、一五頁
- 3、同前、一一頁
- 4、同前、一三頁
- 5、同前、三五頁
- 6、『光明皇后 空海 最澄集』、日本名筆選三六、二玄社、一九九五年、八四―八五頁
- 7、同前、一五頁
- 8、横山煌平編『和様の書美』、二玄社、二〇一三年、二八頁
- 9、桑田笹舟『笹舟かな教室』、基礎上（内山松魁堂、一九七三年、一三五―一三七頁）を元に、筆者が作図・再現した
- 10、同前（一四七―一六三頁）を元に、筆者が作図・再現した
- 11、杉岡華邨『書道技法講座（かな）寸松庵色紙』（二玄社、一九七六年、七五頁）を元に、筆者が作図・再現した
- 12、ジョージ・ドーチ著、多木浩二訳『デザインの自然学——自然・芸術・建築におけるプロポーション』（青土社、二〇一四年、一二五頁）を元に、筆者が作図した
- 13、杉岡華邨『書道技法講座（かな）寸松庵色紙』（七五頁）を元に、筆者が作図・再現し補助線を加筆した
- 14、同前を元に、筆者が作図・再現し補助線を加筆した

- 15、桑田笹舟『笹舟かな教室』（一七七頁）を元に、筆者が作図・再現した
- 16、『寸松庵色紙』日本名筆選一二（二玄社、一九九三年、一三頁）に筆者が補助線を加筆した
- 17、同前（三頁）に筆者が補助線を加筆した
- 18、同前（五、一八頁）に筆者が補助線を加筆した
- 19・20、『継色紙』日本名跡叢刊 平安六十選一二（二玄社、二〇〇一年、三〇頁）に筆者が補助線を加筆した
- 21、同前（一九頁）に筆者が補助線を加筆した
- 22、同前（二九頁）に筆者が補助線を加筆した
- 23・24、『継色紙』日本名筆選二三（二玄社、一九九三年、一二―一三頁）に筆者が補助線を加筆した
- 25、『元永本古今集 上』日本名筆選三一（二玄社、一九九四年、一〇二―一〇三頁）に筆者が補助線を加筆した
- 26、同前（二〇八―一〇九頁）に筆者が補助線を加筆した
- 27、同前（一二八―一二九頁）に筆者が補助線を加筆した

明治初中期の女子教育といけ花、茶の湯、礼儀作法 ——遊芸との関わりを通して

小林善帆

はじめに

いけ花^①、茶の湯は明治中期以降、女子の礼法（礼儀作法）書の中で取りあげられるようになり、また、当時流行した「女礼式教育双六」^②の上がりには「奥方様」（夫、子とともに描かれる女性）で、そこにいたるまでにいけ花、茶の湯、礼儀作法の修得の場面が設けられていた。いけ花、茶の湯、礼儀作法は各々に歴史を持つが、明治期以降、江戸後期の『世事見聞録』^③にあつたような遊芸というありようのいつぼうで、新たに設置された学校教育との関係において行われる一面を持つようになった。

近代女子教育におけるいけ花、茶の湯、礼儀作法の受容について、筆者は『花』の成立と展開^④において検討を加えてきた。そこからは一八九九（明治三二）年に高等女学校令が公布され、帝国日本（大日本帝国）における女子の学校教育規範が定められるなかで、礼儀作法は高等女学校の学科目「修身」の細目「作法」として取り入れられ、いけ花、茶の湯（以下、両者と記す）は、作法や家事など学科目の一部のなかで取り入れられることがあつたが、本来両者は高等女学校令以前も後も、放課後や課外活動として行われるものであり、高等女学校令において定められた学科目ではなかった。^⑤両者の教員養成自体、文部省（現、文部科学省）は行つておらず、この意味からしても、学校の学科目としてあるべきものではない。むしろ

ろ女学校卒業後、嫁入り前の稽古事としてあつたが、女学校もまた嫁入り前の女子を対象とする場であつたため、いけ花、茶の湯が置かれることがあつたと考える⁽⁸⁾。また近代女子教育の一端を担ったキリスト教主義女学校において、日本人としての作法が重視されるときともに、両者は同じく放課後や課外活動に取り入れられることがあつたが、それは日本人女性としての教育を行っていることの主張であり、証であつたことなどを明らかにしてきた⁽⁹⁾。

しかし、明治初期の女子教育における両者の受容については近年新資料の刊行があつたことから、残されていた疑問点に対し史資料再検討の余地がある。また当該期、欧米との教育・文化交流の影響はいけ花や茶の湯⁽¹⁰⁾にとって、少なからぬものがあつたと考えられるが、考察に加えられてこなかった。

以上のことから本稿では、まず教育法令の変遷を遊芸との関係から確認し、次に跡見学校、私塾に関する教育・学校史資料の再考、続いて欧米人による記録類や欧米で開催された万国博覧会におけるいけ花、茶の湯、礼儀作法の紹介内容について考える。そしてこれらを通して明治初中期、いけ花、茶の湯が遊芸として捉えられながらも、礼儀作法とともに女子教育として女学校・高等女学校に取り入れられた過程を考える。

本稿において、引用文は支障のない範囲で新字体に改め、適宜句読点、傍線を施した。

一 教育法令と遊芸

最初に教育法令と遊芸の関係について見ていく。

(1) 学制の頒布

一八七一年七月一八日、文部省が新設され、一年後の一八七二年八月三日（新暦九月五日）、日本初の近代学校教育制度に関する基本法令である「学制」が頒布された。それは国民皆学を目ざし、立身出世の財本としての学問の普及を理念としたものであり、全国を八大区にわけ、学校は大学、中学、小学と区別したが男女の別はなく、身分性別に区別なく、国民皆学を目指すものであつた。

「男女の別はなく」というものの、男子には男子高等普通教育（中学教育）があつたが、女子には小学の一種として「女児小学」があるのみで中学教育はなかった。しかし文部省は一八七一年一二月、東京に官立女学校設立を決定し、翌一八七二年二月開校した。当時の学科目は図書、英学、手芸、雑工などであつた⁽¹¹⁾。

この「学制 第二十七章」では、小学で教えるべき教科が次のように示された。

下等小学教科として一綴字、二習字、三単語、四会話、五読本、

六修身、七書牘、八文法、九算術、十養生法、十一地学大意、十二理学大意、十三体術、十四唱歌上等小学の教科は、下等小学教科の上に一史学大意、二幾何学算画大意、三博物学大意、四化学大意、

其の地の形情によつては一外国語学ノ一二、二記簿法、三画学、四天球学

年齢については、「下等小学は六歳から九歳まで、上等小学は十歳から十三歳までに卒業させるのが法則であるが、斟酌することは妨げない」とある。¹² 国民教育の目標は、多くの学校を設けて知識を授け、実学を振興し、各人の立身を願ひ、富国強兵の実をあげることにあつた。¹³ この時点では「修身」が筆頭科目ではなかつた。

(2)就学告諭と遊芸

次にこの学制の頒布に対する「就学告諭」¹⁴ から、遊芸との関係を見ていく。本稿における「就学告諭」とは、教育令公布以前の就学行動喚起を目的とした、府県から出された文書をさす。

一八七三年六月、山梨県の「学制解釈」は、次のように記している。¹⁵

(前略) 今や朝廷天下に学制を布き給ひ、邑に不学の戸なく、

家に無識の人なからしめんとす、是他なし。海内の人民をして智恵を開達せしめ、身を修め、家を齊へ人の人たる道を行ひ、おのゝ其処を得て、安穩に生を営ましめんと図らせ給ふ。無量の仁慈、豈感戴せざるべけんや。然るに世間の人、此意を解せず、幼児あれば、活花煎茶歌舞糸竹の技芸を教へて、真の教育を誤り、或は眼前の愛に溺れ、幼児をして膝下を離れしめず。又は学資を厭ひて子弟の成立を思はざるものあり。(後略)

ここからは明治初頭、世間の人々が「学制」の意味を解さず、引き続き子らに「いけ花煎茶」、歌や舞、箏曲、三味線、笛等の技芸を教えており、そのことに對し真の教育ではないと説いている。また子を甘やかし、あるいは学費の支払いを嫌がつて就学させない親がいたということがわかる。留意したいのはいけ花・茶の湯が、学制の意図する教育とは考えられていないことである。また「幼児」と記され男女の別は述べていない。

しかし同年一〇月、同県の「学問のもとする」¹⁶の一節の場合は、

世間を広く見たすに、女兒を育て、六七歳にも及べば、唄、浄瑠璃、三味線、生花、茶の湯など、今日の用にも立ざる遊芸を学ばせ、又は身分に過たる衣裳髪飾を装はするなど、徒らに成人して後の遊惰淫風の媒となさしむ。されどそれを悔ともせざ

るは甚だ親たる者の、子を育つる道に背けり。彼の遊芸は知らずとも差支なし。女たるの道を弁へざるは、大なる恥なり。

とある。ここではいけ花や茶の湯などを女兒の「遊芸」と位置付け、知らなくとも差し支えないとし、『女大学』¹⁷⁾にみられる「女たるの道」¹⁸⁾の必要性を強調している。また一八七四年刊『女費必読 女訓』(一名「新女大学」)にも、「女は縫針・紡ぎ織りの道を稽古して、遊芸などは習わざるをよしとす。」とある。¹⁹⁾

一八七二年五月、大阪府における「学制解釈」²⁰⁾には、

然ルニ府下從來ノ風俗、女ヲ生メハ必ス糸竹歌舞ノ業ヲ教ヘ、男ヲ生メハ必ス活花煎茶ノ技ヲ習ハシメ、遊治風流ニ歳月ヲ費シ、一小枝中ニ一生ヲ終ル

とあるように、「活花煎茶」は男児が習うものとしてあることも窺える。²¹⁾それは先の山梨県の「学制解釈」で、「幼児あれば、活花煎茶歌舞糸竹の技芸を教へて」と、男児も対象となっていたことからいえる。²²⁾元来、『男重宝記』²³⁾に見るように、いけ花、茶の湯は男児への躰としてあった。さらに、一八七三年五月、佐賀県の「就学告諭」は、ただ「面々御趣意の程を篤く相考へ、舞踊弦歌等無用の費を省きて人の上たらん」とあつて対象を指定していないが社会一

般の様相に対するものと捉えられ、それは他県からも見いだせる。²⁵⁾

ほかに遊芸に関する記述がある「就学告諭」は一八七二年一〇月、山口県「女子に三味線などを習ハすは(中略)物の道理や身の職分に賢くなる儀ハ有之ましく」、一八七三年一月、名東県(徳島県)「女子ハ琴三味線ヲ役儀ト心得(中略)其費莫大にして世にも身にも少しも益なし」、同年二月、滋賀県「就中女の子へハ専ら遊芸のみを教へ動すれば淫哇の風儀に陥らしむる等の」、同年三月、静岡県「女子教育趣意書」の「三味線歌舞の稽古させるなどハ親の罪なり」、一八七五年二月、三潁県(福岡県)「管内之女兒就学年齡之者ハ、舞・三味線等無用之遊芸ヲ断然相止メ」、同年一月、茨城県「市街人煙稠密商売繁盛ノ地ハ早く浮華遊惰ノ弊ヲ醸シ良家女兒ヲシテ歌舞三弦ニ従事セシメ妙年貴重ノ歳月ヲ徒ラニ遊消スル」などが見いだせる。すべて女子に関するものである。『浮世風呂』²⁶⁾にも見られるように女兒はまず踊りや琴、三味線を覚え、屋敷に奉公に上がり、いけ花や茶の湯はもう少し年齢が行つてからや、奉公に上がった先で習つたことが窺える。²⁷⁾明治という時代に変つても、江戸時代からの慣習が続いていたことがわかる。

ここからは明治初期、「学制」における学校教育(小学)にとつて遊芸である踊り、琴、三味線、いけ花、茶の湯などは有害であり、不要という考えであつたことがわかる。その理由として、遊芸を知らなくとも差し支えはなく、賢くなることはなく、益が無いにもか

かわらず費用がかさみ、用にも立たないということが述べられている。

しかしつばうで、一六九二（元禄五）年刊『女重宝記』⁽³⁴⁾一之巻に見られるようにいけ花、茶の湯は琴、香、連歌俳諧などとともに上流階級⁽³⁵⁾にある女性にとって嗜んでよい芸事としてあつた。⁽³⁶⁾留意したいのは、同記の挿絵に立花が女性とともに描かれているのは、「女中たしなみてよき芸」のなかの「髪⁽³⁷⁾の結い方を知る事」のためのもので、「女化粧の巻」の女性の装いの説明として、髷の結い方について「高からずひくからず花をいけたるてい」と詞書が付けられているのであり、『男重宝記』の立花の挿絵のように、立花の習得について具体的に描いたものではないことである。そこからは『女重宝記』の意図が、立花のありようを知っているということに重きを置くもので、女性自らが立花作りを習得することに重きを置いているわけではないことがわかる。

さらに、この元禄五年版とともに最もよく受容され板行を重ねたという、一八四七（弘化四）年刊行『絵入日用女重宝記』を読んでも、記述が「立花する事」から「立花いけ花する事」に変えられ、挿絵のいけ花も「立花」から「生花（いけばな）」に変っているが、元禄五年版同様に、髷の結い方について「高からずひくからず花をいけたるてい」と詞書が付けられ、挿絵が「女化粧の巻」のためのものであることに変わりはない。ここでは、いけ花に、「生花（せ

いか）様式」が加わったことは見いだせるものの、女性にとってのいけ花のありように変化は見られない。⁽³⁷⁾

以上のことから、学制頒布時、「女大学」には、女子のすべきこととしていけ花、茶の湯に関する言及は見られず、いけ花、茶の湯は教育ではなく遊芸と捉えられ、学校教育と相反するものとしてあつた。しかし他方で、一六九二（元禄五）年版『女重宝記』や同記一八四七（弘化四）年版に見いだせるように、これらの芸事の嗜みを持つことは、上流階級の女性がしてよいこととしてあつたことがいえる。

(3)遊女という存在

女性がいけ花や茶の湯を嗜む場合、上流階級の女性のほかに、遊女という存在があつたことが鈴木春信（一七二五～一七七〇）、喜多川歌麿（一七五三～一八〇六）、葛飾北斎（一七六〇～一八四九）らの浮世絵から知ることができる。⁽³⁸⁾

遊女といけ花、茶の湯に関して、西山松之助は次のように述べている。⁽³⁹⁾

明和五年（一七六八）版の『籠の色』の著者は、京の吉野、大坂の夕霧、江戸の高尾のような世に鳴りし名娼は、容貌が美麗なだけでなく、心操、挙止から物いうこなしが風流で、書・

画・花道・歌・香・琴・三味線・鼓・太鼓・茶の湯・俳諧・囲碁・双六のたぐいまで、客の好みに応じて興を催した、という言葉を書きとめているが、このようなたしなみが、ただ知っているというのではなくて、それがかなり高度の教養として身についたものでなければならなかった。(中略) 事実、廊の太夫たちはそれほど高い教養のあるものばかりであつたかどうか、それは疑問である。しかし、世の中ではそうだと思ひこんでいたらしく、(後略)

名娼は一面において男性によつて作り上げられた女性の理想像であつたといひ、そこにいけ花や茶の湯をたしなむ姿もあつた。しかしそれは廊という学校教育とは相容れない世界の女性の姿でもあつた。

(4) 教育令、改正教育令の公布

しかし「学制」は、一八七六年の農村不況をきっかけに小学校は維持難となり、教育内容は実地に役立たないという不満を人民に与え、早くも大きな壁に突き当たつた。その結果、一八七九年九月二九日、廃止された。そしてその方策の模索、実験として、同年同月日(太政官布告第四〇号)「教育令」が公布された。これは学制を、干渉脅迫にすぎず民度・民力に合わない⁽¹⁰⁾と批判したもので、民度・民

力に合つた小学校の普及をめざしたものであつた。⁽¹¹⁾

教育令により、小学校の学科は次のように変更された。

第三条 小学校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ、其学科ヲ読書、習字、算術、地理、歴史、修身等ノ初歩トス。土地ノ情况ニ随ヒテ罫画、唱歌、体操等ヲ加ヘ、又物理、生理、博物等ノ大意ヲ加フ。殊ニ女子ノ為ニハ、裁縫等ノ科ヲ設クヘシ。

この教育令では、「学制」に定むるが如き煩雑なる教科目を廃止して簡単なるもの⁽¹²⁾とした。「学制」で読み書きの次に位置した「修身」が最後に来ている。そして初めて「女子の為の学科」という言葉が使用され、それは「裁縫」であつた。

また一八七三年六月に來日した御雇外国人ダビット・モルレー(David Murray, 一八三〇—一九〇五、日本滞在は一八七九年一月まで)を抜きにして、明治初期の女子教育を考えることはできない。

一八七三年「ダウキットモルレー新報」(『文部省第二年報』)に、「修身が完全になることなどは、みな教育によつてなるのである」⁽¹³⁾をはじめとして、文部省の学監として(一八七四年一〇月)女子教育の重要性を説き、一八七五年、官立東京女子師範学校の設立に尽力するなどした。ともすれば日本の為政者が急進的な改革に走ろうとしていた当時において、モルレーはつねに日本の美点を認め、日本

の伝統を尊重しつつ、実情に即する改革を提案したという。⁽⁴⁵⁾しかし学制改革意見（教育令原案）については、モルレーの意見と田中不二麻呂を中心とする文部省側の意見との間にはかなりのくい違いがあり、モルレーの意見は必ずしも採用されなかった。⁽⁴⁶⁾

その後、一八八〇年二月二十八日、（太政官布告第五九号）「改正教育令」が公布され、

第三条 小学校ハ普通ノ教育ヲ児童ニ授クル所ニシテ、其学科ヲ修身、読書、習字、算術、地理、歴史等ノ初歩トス。土地ノ情況ニ随ヒテ罫画、唱歌、体操等ヲ加ヘ、又物理、生理、博物等ノ大意ヲ加フ。殊ニ女子ノ為ニハ、裁縫等ノ科ヲ設クヘシ。

但已ムヲ得サル場合ニ於テハ、修身、読書、習字、算術、地理、歴史ノ中、地理、歴史ヲ減スルコトヲ得。

と変更された。この改正教育令の趣旨は、一八七九年の教育令の「余りに自由放任的な所を引締める」ということにあり、「修身」は首位に置かれた。⁽⁴⁷⁾

さらに翌一八八一年五月四日「府県に対する文部省達」第一二号（輪郭付）、「小学校教則綱領」⁽⁴⁸⁾の制定によつて、法令内容は初めて国民教育としての体を備えるに至つた。以下、条文を見ておく。

第一条 小学校ヲ分テ初等中等高等ノ三等トス

第二条 小学初等科ハ修身、読書、習字、算術ノ初歩及唱歌、体操トス

但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ

第三条 小学中等科ハ小学初等科ノ修身、読書、習字、算術ノ初歩及唱歌、体操ノ続ニ地理、歴史、図画、博物、物理ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノ為ニハ裁縫等ヲ設クルモノトス

第四条 小学高等科ハ小学中等科ノ修身、読書、習字、算術、地理、図画、博物ノ初歩及唱歌、体操、裁縫等ノ続ニ化学、生理、幾何、経済ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノ為ニハ経済等ニ換ヘ家事経済ノ大意ヲ加フルモノトス

第五条 小学科ノ区分ハ前三条ノ如ク定ムト雖モ土地ノ情況、男女ノ区別等ニ因テハ某学科ヲ増減スルコトヲ得

但修身、読書、習字及算術ハ之ヲ欠クコトヲ得ス

（中略）

第十条 修身 初等科ニ於テハ主トシテ簡易ノ格言、事実等ニ就キ中等科及高等科ニ於テハ主トシテ稍高尚ノ格言、事実等ニ就テ児童ノ徳性ヲ涵養スヘシ又兼テ作法ヲ授ケンコトヲ要ス

（中略）

第二十三条 裁縫及家事経済 裁縫ハ中等科ヨリ高等科ニ通シ

テ之ヲ課シ運針法ヨリ始メ漸次通常ノ衣服ノ裁方、縫方ヲ授クヘク家事経済ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ衣服、洗濯、住居、什器、食物、割烹、理髪、出納等、一家ノ経済ニ関スル事項ヲ授クヘシ凡裁縫、家事経済ヲ授クルニハ民間日用ニ応センコトヲ要ス

小学校は「修身」が筆頭の学科となり、そこに「作法」が加えられ、女子にのみ「裁縫」「家事経済」という学科を設けることが決められた。富国強兵政策に女性役割が設けられたといえる。

また「作法」について学校教員養成の面から考えると、一八八六年五月二六日文部省令第九号⁽⁴⁹⁾「尋常師範学校ノ学科及其程度」から、尋常師範学校の「修身」は、女子生徒には一年〜四年まで全学年に「作法ヲ授ク」とある。しかし男子生徒に「作法」はなく、四年で「帝国憲法ノ要領ヲ授ク」とあるのみである。ここから小学校「修身」のなかで男女に「作法」が教えられるなかで、さらに女子のみが習う「作法」が考え出されたことがわかる。

それとともに注目したいのは、「改正教育令」と同じ一八八〇年に出された『新撰増補女大学⁽⁵⁰⁾』に、

而して遊芸を嗜むべき余力あらば、学ぶべきは歌・俳諧・香・茶の湯・煎茶・插花・画く技。

と、それまでの「女大学」には取り上げられてこなかったいけ花、茶の湯が、余力があれば学ぶべき「遊芸」として取り上げられたことである。⁽⁵¹⁾

(5)女子中等教育のはじまりといけ花、茶の湯

女子中等教育の規定は、一八九九年二月高等女学校令（勅令第三一号）に始まるが、それ以前にまず一八八二年七月、東京女子師範学校に附属高等女学校が置かれた。これが高等女学校という名称を用いた初めである。

同校は、小学校六年の課程を卒業した者を対象とし、下等科三箇年、上等科二箇年の五箇年の設定であつた。女子に対応する「裁縫、礼節、家政、育児」の学科目が加えられ、「英語」はなくされた。注目したいのは、ここで上等科「礼節」（礼儀作法）のなかにいけ花、茶の湯の習得が設定されたことである。⁽⁵²⁾『文部省第十年報』（一八八二年）は同校を取り上げ、男子中等教育（「男子高等普通教育」と同等の教育を否定し「修身ノ道」「座作進退ノ節」「家事経済ノ要」「子女養育ノ法」を行う学校としての期待を述べている。⁽⁵³⁾そして先の女大学の変化とともに、ここにわずかながらいけ花、茶の湯が取り入れられた。当時の女子の結婚適齢期はおよそ一五歳から一九歳で、高等女学校はまさにその年齢の女子が就学する学校教育であり、取り入れられたことが考えられる。

このように小学校を卒業した者の受け入れ先が必要となり、引き続き進学先にも女子の為の教育内容が設けられた。注目したいのは、そこにいけ花、茶の湯、礼儀作法が入れられ、これらが富国強兵政策の女性役割の一端を担うものとなったことである⁽⁵⁵⁾。

いつぼう高等女学校の教員養成を目的とした東京女子師範学校が一八八三年八月から実施した学科目に、礼節（座礼・立礼）はあるものの、そこにいけ花、茶の湯の取り入れは見いだせない。ここから、いけ花、茶の湯は生徒が習うものではあっても、原則として学校教員として教えるものではなかったことがいえる。学校教育とは別の教育体系を持ついけ花・茶の湯については、外部から囑託として講師を招く、または作法や家事担当教員が学校の学課外において、家庭における習い事として修得したものを教えた。作法の授業のなかで取り扱う場合、多くて数回、ほんの一通りを教えたにすぎない。しかし全く知らないのとは大きな違いがあった。

他方、いけ花、茶の湯の学校教育における取り入れの最初は、一八七六年京都女学校「婦女諸礼課業」のなかの第二級「插花」、第四級「湯茶飲様」としての取り入れである⁽⁵⁷⁾。同校は一八七二年四月、新英学校及び女紅場として開校、後に一九二三年京都府立京都第一高等女学校（現在、京都府立鴨沂高等学校）と改称した公立女学校で、一八八二年の東京女子師範学校附属高等女学校の取り入れよりも早いものであった。

(6) 女子中等教育と遊芸

一八九九年「高等女学校令」公布に伴い、以後、高等女学校における教授内容が規定された。学科目「修身」の細目として「作法」は取り入れられたが、いけ花、茶の湯は学科目及びその細目にも入れられなかった。

しかしいつぼうで、先に述べた一八八〇年『新撰増補女大学』に続き、福沢諭吉は一八九九年発刊の『新女大学』⁽⁵⁸⁾において、次のように述べている。

一 女性は最も優美を貴ぶが故に、学問を勉強すればとて、男書生の如く朴訥なる可らず、不行儀なる可らず、差出がましく生意気なる可らず。（中略）

一 既に優美を貴ぶと云えば、遊芸は自ずから女子社会の専有にして、音楽は勿論、茶の湯・插花・歌・俳諧・書画等の稽古は、家計の許す限り等閑にすべ可らず。

このことは、女性に学問をしても優美さが必要で、そのためにいけ花、茶の湯は必要であり、遊芸ではあっても女子の教育に取り入れられるべきものであるとの考えを、公言したものであるといえる。

そして一九〇三年二月二四日、近代女子中等教育におけるいけ花、茶の湯の受容に関する通牒（卯普甲三四八七号）が出された。

そこには、

高等女学校ニ於テ、土地ノ情況ニ依リ、必要ナル場合ニ限り、
正科時間外ニ、便宜、茶儀、生花、箏曲等ヲ教授スルハ、差支
無之

とある。通牒とは書面による通知（意思表示）である。学校教育とは異なる教育体系を持つ存在、また「遊芸」とされる存在を、「正科時間外に教授することは差し支えない」と書面通達したことは、当時の社会においていけ花、茶の湯は、遊芸としてあるものの、女子教育に取り入れても差し支えないものと捉えられたといえる。

さらに学校における教育というよりも、むしろ家庭における稽古事であつたものが学校で行われる理由として、嫁入り前の女子が通う女学校・高等女学校は賸の場でもあり、花嫁修業としていけ花、茶の湯を知ることは一理あることであつた。しかし町の師匠に習いに行けば、その稽古先の大人に風紀上良くない遊びに誘われる（巻き込まれる）心配があつた。いつばう教授者側の都合として、いけ花や茶の湯の師匠の仕事は、まず自ら弟子を集めることから始まる。習う者がいなければ教えるということ自体成り立たず、職業にはならない。しかし学校で行う場合は生徒が学校側で集められている場合も多く、また学校という社会的な信用のある場所で教えること

ができることは、師匠自らの信用へも繋がり、女学校・高等女学校で教えることは望まれることであつた。

右の通牒は近代の学校教育現場においていけ花、茶の湯を教えることについて言及した唯一のものである。それは「必要ナル場合ニ限り、正科時間外ニ」教授することは差し支えないというもので、積極的に教えるというものではなかった。

二 明治初期の跡見学校⁽⁵⁰⁾

まずなぜこれほどいけ花、茶の湯の研究として学科目というものに拘泥しなくてはならないのか。それはいけ花、茶の湯は女学校の学科目として取り入れられたから盛んに行われるようになった、という俗説が強く残るためである。

たとえば水尾比呂志は、一九六六年発行の著書『いけばな——花の伝統と文化』⁽⁶¹⁾において、次のように記している。

一八八七年、女子の教育方針として良妻賢母を養成することを目標とした政府は、女学校において裁縫、編物、茶、花を正科にとりあげた。

同様の内容は、水尾が執筆を担当した一九七二年初版発行

(一九八八年発行の改訂版も同内容)、『ブリタニカ国際大百科事典』2 (TBSブリタニカ)「生け花」五四頁、さらに一九七九年発行、水尾の単著『茶と花』(芸艸堂)、二九七、三一七頁にも掲載している。しかしいずれにも注釈は付けられておらず、典拠は不明である。管見の限り一八八七年に「明治政府がいけばなを女学校の正科(正課)に採用」という事実はない。⁶²⁾さらに田中秀隆は茶の湯研究の立場から、「近代に茶道の女性人口が優位を占めてくる説明に關し、学校教育にのみ原因を帰して良いのか」と述べている。⁶³⁾

また一八七五年(「明治八年」)とされる跡見花蹊「日記抄」におけるいけ花、茶の湯に対する「学科目」という表現が、熊倉功夫によつて取り上げられた。⁶⁴⁾しかしこの「学科目」という表現が教育法令における学科目とは異なるものであることは言うまでもない。学校教員は、教員免許状を所持する者であり、その資格を持った者が教えるのが本来学科目である。それに対し一般的にいけ花、茶の湯の場合、家元からのお許し(許状)をいただいて教えるものである。それ以前に、当該期は「学制」の「就学告諭」に見るようにいけ花、茶の湯は遊芸と認識され、学校教育とは相反する存在であった。にもかかわらず『跡見花蹊日記』⁶⁵⁾の発刊後もなお、熊倉をはじめ茶の湯研究では「明治八年」、「跡見女学校」(跡見学校とされることもある)で茶の湯を「学科目」として採用したとしている。

ここでは新たな資料として『跡見花蹊日記』を使用し、開校年、

開校時のいけ花、茶の湯、礼儀作法のありようの確認、さらに跡見花蹊がどのように茶の湯、いけ花と向き合ったのかを明らかにする。

(1)明治八(一八七五)年「私学開業願」と『跡見花蹊日記』

ここでもまず問題とするのは、

一、跡見学校の開校は「明治八年(一八七五)」⁶⁷⁾、「明治九年(一八七六)」のいずれであるのか。

二、開校当初のいけ花、茶の湯の取り入れはどのような場での、どのような受容であったのか。

の二点である。

これまで跡見学校の開校年は「明治八年」とされてきたが、「日記抄」における書き写しの際に生じた錯誤によるもので、実際は「明治九年」ではないかと思われた。なぜなら一八七五(明治八年)一月、跡見花蹊から東京府へ提出された「私学開業願」について、『東京の女子教育』⁶⁸⁾は次のように記しているからである。

(明治)八年十一月に跡見花蹊から提出された私学開業願には、校名は跡見学校となつている。中猿樂町十三番地(のち十五番地)に開かれた。学科は読書、習字、算術で上等、下等に分けられていた。

下等生徒教科は、綴字、習字、単語、会話、読本、修身、

書読^(マ)、文法、算術、養生法、地学、窮理学、上等生徒教科は、

史学、幾何学、罫画、博物学、化学、生理学などで、すべて小
学規則にしたがつて定められた。

「明治八年十一月」に開業願を出したということは、開校はその後ということになり、「明治九年」ということになる。また跡見学校は「学制」に則り男女共学、「小学⁽⁹⁾」として開業願を提出している。教科の設定からみても「女児小学⁽¹⁾」ではなく、「尋常小学」としての申請であった。

さらに教員申請は、跡見家からは花蹊の弟愛治郎（重敬二男）のみであった。愛治郎は一八六一（文久元）年から一八七四（明治七）年までの間に支那学、英学を個人から修学し、一八七五（明治八年）から東京府師範学校において「小学教則」を講習中であつた。教員は原則として師範学校を修了したものとされたが、当時、師範学校自体開校もない状況から、在学中の者も可とされた。

いっぽう「跡見花蹊略歴」「跡見花蹊日記」一八七六（明治九年）一月八日には、

昨暮より学校建築、落製^(マ)二付、八日吉辰を以て開校式執行す。
華族之方々姫方等も来賓之多き実に驚入たり。これより跡見女
学校と称して、女子教育に従事する。国語、漢籍、算術、習字、

絵画、裁縫、琴、插花、点茶之九科目とす。

とある。留意しておきたいのは、この部分は日記原本のほかに翻刻された「跡見花蹊略歴」の部分で、後日に記された内容と思われることである。それゆえに「跡見女学校」となっており、教育内容も「私学開業願」とかけ離れていると思われる。しかし当初、実際にこのような内容が教えられたと考えられることもあり確認していく。

まず日記の「算術、習字」は規定教科名称としてある。日記の「国語、漢籍」「絵画」も教科そのものの名称ではないが「綴字、習字、単語、会話、読本、書読^(マ)、文法」「罫画^(けいが)」といった教科として教えることができる。しかし日記の「裁縫、琴、插花、点茶」は、明らかに「小学規則」にはないものであり、一八七五（明治八年）一月提出の「私学開業願」の内容と異なる。また跡見学校は共学で「女児小学」ではないが、「跡見花蹊略歴」は女学校と記している。

この「私学開業願」と「跡見花蹊略歴」の内容から、跡見花蹊は「学制」に則り、小学校を男女共学で開業するとともに、「裁縫、琴、いけ花、茶の湯」を教える形をとつたと考える。また当初、同校の授業形態は毎日一斉に先生の授業を聞くのではなく、多くは姉弟子から妹弟子へと教え導くものであり、一斉授業を旨とした近代としての学校ではなく、江戸時代から続く寺子屋、私塾というあり

かたであつたという。「学制」頒布に伴い多くが廃業したとはいえ、なお私塾⁽¹⁶⁾、家塾⁽¹⁷⁾が存在したことが『日本教育史資料』⁽¹⁸⁾からわかるが、そこでは江戸期から引き続き読み書き算盤のほか礼節、全体からすればわずかではあるが女子にいけ花や茶の湯を教えた私塾もあつた⁽¹⁹⁾。近代に入っても教育は江戸期のありようを続けていた。

このことから跡見花蹊が「学制」に従い学校を興し、男女共学として児童を集めながらも、華族の子女に江戸時代からの教育形態も続けていた。「学制」は「就学告諭」にみるように、いけ花や茶の湯を学校教育としていけば否定している。そのようななかで小学を教える学校の学科目としていけ花、茶の湯を教えることはできない。しかし課外に、上流階級（華族）の女子の嗜みとしていけ花、茶の湯を教えることはできたと考える。

また『跡見花蹊日記』は跡見学校開業以前について、

一八七四（明治七）年十一月二五日

朝より試業式ニ付生徒一同参集、講義及書画を揮毫す。今日迄に入門する華族の姫たち八十余名に達す。日々入門を乞ふ者織か如し。

一八七五（明治八）年六月一九日

此頃、生徒之数もふえて、とても姉小路の家屋拝借いたしても

居られずとて、神田猿樂町十三番地ニ所買得す。山口県天野御民氏之所有地也。

と記している。跡見花蹊は神田三崎町の姉小路家の家屋に同居させてもらい私塾を開き、主に漢学、書画、習字を教えていたが、日記にあるように一八七四（明治七）年十一月の時点で「華族の姫たち八十余名」が在籍し、日々入門者があつて手狭になつてきたので一八七五（明治八）年六月、土地を購入し、同年暮れに新築校舎が落成、一八七六（明治九）年一月、開校式を行つたと考えられる。

しかし跡見家にとつて何よりも大変かつ重要なことは学校経営であつた。例えば中村正直（後出）が一八七三年同人社（男子教育）を創立後、一八七九年同人社女学校を開校したが、翌年八月には経営難から女学校を廃校にしなければならなかつたことをはじめとして、明治初中期設立の女子を対象とした学校が経営の行き詰まりから姿を消すことは多かつた。男女共学として男児も入学対象とし、「華族の姫たち八十余名」の存在は、学校経営を行う上で大きな支えとなつたことは想像に難くない。また先の「九教科」のうち茶の湯、いけ花を父重敬が教え、裁縫は姉、漢籍、算術は弟、国語、習字、絵画は花蹊が教えるなど、家族が教師となつて経営を行つたことは跡見学校の収益であり、かつ大きな出費となる人件費の節減となつた。それでも経営は厳しかつたといふ⁽²⁰⁾。いけ花、茶の湯、裁縫

を設けたのは、家族労働による収益を見込んでのことでもあった。
以上のことから当初掲げた二つの問題点について次のようにいえる。

一、跡見学校の開校は、一連の『跡見花蹊日記』の記事と一八七五（明治八）年十一月、跡見花蹊から東京府へ提出された「私学開業願」から、「明治九（一八七六）年」一月といえる。
二、跡見学校開校時において、「学制」の「就学告諭」に見られるように、いけ花や茶の湯などの遊芸は、学校教育と相反する存在であった。それ故に「学校」における「学科目」としての受容は考え難い事に対し、実際においても同校では学科目として取り入れられていない。しかし課外に教えることがあったと思われる。

(2) 跡見花蹊にとつてのいけ花、茶の湯

引き続き同校のいけ花、茶の湯の取り入れについて見ていく。

① 一八七七年「私学明細簿」⁽⁸²⁾から作成された記録によれば、

校名…跡見女学校（後の、編集時による）。所在地…中猿樂町十三。校主…跡見花蹊。開業願済年月…明治八年十一月。
学科…国学、習字、洋算、画学、裁縫。教員…一名、助教四名。
生徒…八〇名うち寄宿四〇名。授業料…三課五十錢、画学五十錢、裁縫二十五錢。

とある。「所在地」以下は、開校翌年の明細簿によるものである。
読み書き算盤は主に弟、裁縫は姉、画学は花蹊が担当したと思われる。いけ花、茶の湯は学科になく、課外として授業料の設定もない。

② 一八八三年、東京府へ提出した「開申書」⁽⁸³⁾には、

本校ハ女子ニ漢文読書及習字ヲ教授シ傍ラ習画（南画）及裁縫ヲ（生徒ノ需ニ応ジテ）教授ス

とある。ここで同校が女子のための学校になったことがわかる。しかし跡見女学校と称されるようになったのは、一八八八年神田から小石川柳町に新築移転した頃からとされる。

③ 「東京府下私立専門各種学校一覧」⁽⁸⁴⁾一八八六年四月三〇日現在によれば、

名称…跡見学校。位置…神田区中猿樂町十五。学科…漢文読書習字画学裁縫。入学生徒学力…小学初等科卒業者。修業年月…三年。

とある。小学ではなく「私立専門各種学校」としての申請になっており、女子の中等教育を念頭にいたことがわかる。

留意したいのは、右のように開学翌年から一八八六年にいたる資料をみても、跡見学校の学科目に、いけ花、茶の湯、琴は入れられていない。先に述べたように、すでに一八八二年、東京女子師範学

校附属高等女学校や私立学習院女子上等学科⁽⁸⁵⁾（後、女子学習院）では、学科目「礼節」「礼法」のなかにいけ花や茶の湯を取り入れていたことから、なんらかのかたちで取り上げることができたと思われるが、していない。次に一八九四年の授業時間表があるがいけ花、茶の湯、琴は学科目ではなく欄外に記され、放課後随意に教えるもの（課外活動）としてあった⁽⁸⁶⁾。これらのことから開学以後一貫して学科目にしていないことがわかる。

すでに『花』の成立と展開』において、花蹊の大正初期頃（一九二二年）の言説から、彼女が茶の湯の心得の有益さを説きつつも学科目とはせず、小笠原流「作法」を学科目として取り入れたことを確認したが⁽⁸⁷⁾、本来、茶の湯をどのように捉えていたのかが、『跡見花蹊日記』から見いだせる。同日記には一八六一年から一八六三年までの三年間、花蹊（二二〜二三歳）が二人の弟とともに武者小路千家の茶の湯の稽古に励み、また茶事を楽しむ姿も記されている。この若き花蹊の三年間の茶の湯について木津宗詮は、「女性の行儀作法のために茶の湯を学ぶというのではなく、女性の娯楽が制限されていた時代の楽しみの一つが茶の湯であったことがわかる⁽⁸⁸⁾」と述べている。

花蹊にとつて茶の湯やいけ花が娯楽であったことは、同校において一九〇三年一月から、「点茶・琴曲・插花」を「競技」として奨励する「娯楽会」というものを毎月一回、催していたことから

わかる⁽⁸⁹⁾。同校では、茶の湯を「茶儀」（茶の儀礼）ではなく、「点茶」（茶を点てる）と表記しているのもその現れであると思われる。

跡見女学校は一九四四年まで高等女学校に改組しなかったため、学科目も高等女学校令に必ずしも従わなければならないものでもなく、いけ花、茶の湯を学科目とすることはできたはずであるが、花蹊の逝去後もそうすることはなかった。何よりも花蹊の本業は茶の湯やいけ花ではなく書画であった⁽⁹⁰⁾。

花蹊がいけ花、茶の湯を学科目としなかったのは、良いとか悪いとかそのような判断ではなく、学校の授業とは別に教えられるべき存在である、という考えを持ったためであった⁽⁹¹⁾。

(3) いけ花、茶の湯を正課にした女学校

いけ花、茶の湯を近代女子中等教育に正課の形で取り入れた女学校があった。一八八七年に東京神田駿河台に設置された成立学舎女子部⁽⁹²⁾である。すでに一八八三年に男子を対象とする成立学舎が創設されていた。もちろん明治中期、高等女学校令施行以前のことであり、教育法令上の学科目とは異なる。しかし礼法等の一部としてでなく、また学課外、放課後の設置でもなかった。

創立と同時に女子部本科に編入学し、高等科に進級した嘉悦孝子（教育者、嘉悦学園創立者）は思ひ出話として、同校は「官吏、陸海軍人、商工業者など中流家庭の子女が集まり、日本流の日本婦人と

いうモットーを掲げて生徒は百四、五十人であった。普通の住宅を借りうけた寺子屋式であった」ということや、一八八八年、東京府の府立女学校（東京府高等女学校、後に東京府立第一高等女学校。現、都立白鷗高校）創立のときには、東京府からも時々参観にきたことを述べている。一八九〇年『女学雑誌』二〇二号の記事によると、生徒数は四六一人で府下の女学校のなかで最高を占めていたという。⁽⁹³⁾ 幼年科や、高等師範科も設けられた。⁽⁹⁴⁾ 一八八九年の「東京府統計書」には、教授者二九名、生徒七一〇名となっている。⁽⁹⁵⁾ これは驚異的な数字であった。教育者として知られた棚橋絢子も教員となり、校長を務めていた。

一八八七年九月の同校創立時について、『東京の女子教育』等から抜粋・整理すると次のようになる。⁽⁹⁷⁾

入学資格…十二歳以上、尋常小学校を卒業したものもしくはこれと同等の学力を有する者。

設置目的…女子に須要ナル學術技芸ヲ授クルヲ以テ目的トス（原

文ママ）

修業年限…本科三年、高等科、普通科、各二年。⁽⁹⁸⁾

科目…修身、和漢文学（地誌歴史詠歌をふくむ）、英文学（歴史、

歴史小説をふくむ）、理学（算術、代数、幾何、物理、化学、

地文学、天文学、動物、金石をふくむ）、心理学（三年口授）、

衛生（生理学、健全法、育児法、看護法をふくむ）、家政経済、

裁縫、編物、刺繍、押絵、組糸等、唱歌、音楽、図画、插花、茶湯（三年）、割烹（三年）。

学科を全科と撰科に分け、全科は全課程を修めるもの、撰科はそのうちの一部を撰んで修めるもの、としていた。

校長…中原貞七。一八五七（安政四）年生まれ、岩手県平民、

一八八三年東京大学文学部卒業、同年より私立成立学舎（男子）長。

教員六名…跡見玉枝（画学）、鳥居名美野（琴）、檐村英吉（英学）、鈴木弘恭（和漢学）、水野八重（裁縫）、山崎隆（和漢学）

しかし一八九五年、同校は廃校となった。わずか八年間の設置であった。校舎も新築されることなく、教育内容の問題というよりは、経費的な問題であった。「日本流の日本婦人というモットー」において、多くの生徒が集まり、授業としていけ花、茶の湯も教えられ、東京府高等女学校設立の参考にされることがあったというが、一八八八年開校の東京府高等女学校において、開校以後、明治二〇年代（一八八八〜一八九六）にいけ花、茶の湯が教えられた記録は見当たらない。⁽⁹⁹⁾

三 欧米人のいけ花、茶の湯、礼儀作法への関心

ここではいけ花、茶の湯、礼儀作法について、明治初期に記されたクララ・ホイットニーの日記とイザベラ・バードの紀行を中心に、同時期に来日した御雇外国人ジョサイア・コンドルや万国博覧会における動向も交えて、その関係様相を考える。

(1) クララ・ホイットニーの日記⁽¹⁰⁾

クララ・ホイットニー（一八六一―一九三六）は、父ウイリアム・ホイットニーが森有礼に御雇外国人として招かれたため、一八七五年八月、一家五人でアメリカから来日した。一五歳になる直前のことであった。⁽¹⁰⁾

現在、このクララの日記が残され、翻訳、研究書等も出されている。⁽¹⁰⁴⁾ 一八七五年八月三日、横浜到着に始まる日本滞在時の日記を読むと、開国間もない東京、横浜の様子とともに女学校についても記され、登場人物も外国人はグラント將軍（第一八代アメリカ大統領）、ビングラム（アメリカ公使）、パークス（イギリス公使）、ヘボン博士夫妻、ディクソン（工部大学校教師）、シヨール（慶應義塾、宣教師）をはじめとして教育関係者も多い。女子教育関係の外国人ではウイリアムズ（立教女学院）、メアリー・キダー（フェリス女学院）、カロー

ザーズ夫人（A六番学校・女子学院）、スクーンメーカー（青山女学院）、トルー夫人（女子学院）、プライン（横浜共立学園）など、錚々たる顔ぶれである。⁽¹⁰⁵⁾ 日本人に関しても近代女子教育に関わりの深い美子皇后、森有礼、福沢諭吉、津田仙・梅子、中村正直、さらに勝海舟、大鳥圭介（工部省）、富田鉄之助（外交官）、明治天皇、旧將軍家、旧大名家をはじめ華族、留学経験者が数多く登場する。ここに挙げた人々はほんの一部にすぎず、まさに明治の偉人満載の日記である。

近代日本の女子教育の黎明期に、このような人的相互関係があったことを思うと感慨深い。話題は豊富でコレラや地震についても話題にのぼっている。ホイットニー家は勝家とともに外国人、日本人の来客がひっきりなしだったという。⁽¹⁰⁶⁾ クララの交際範囲は広く、兄とともに鹿鳴館の舞踏会にも出席している。⁽¹¹⁾

一家は来日したものの、父ウイリアムは日本側の計画頓挫により予定された職に就くことはなかった。しかし勝海舟の多大なる援助により日本での生活は続けられた。クララの日記からは、勝海舟がいかにホイットニー一家を物心両面で助けたかが見て取れる。一八七八年末から一家は、赤坂氷川町の勝家屋敷内に建てられた別棟で暮らした。援助とともに一家五人はそれぞれに英語をはじめとして日本人の教育に携わり、生活費を得た。母は聖書、洋縫、西洋料理を教え、クララは英語、オルガン・ピアノなどを教えた。それ

はささやかな私塾という感すらある。クララは日本語会話が得意で常に向上心を持ち、時折日本に関するエッセイをアメリカに送っていた。⁽¹³⁾

一八八〇年一月、一家は家財道具を処分してアメリカに帰国したもの、一八八二年一月、再来日した。しかし来日途中に父親がロンドンで客死、来日後に母親も他界した。クララの日本での肉親は医師になった兄ウィリスと、妹アデレイドの二人になった。一八八六年、クララは二六歳で勝海舟の三男で敬虔なクリスチャンである梅太郎と結婚した。日記にはかねてより梅太郎について好意的な言葉が記されていた。勝海舟の庇護のもとで夫婦は一男五女を育てたが一八九九年、勝海舟の逝去による経済的な理由から離婚し、クララと六人の子はアメリカに帰国した。

特記しておきたいのは、この日記が聡明かつ多感なアメリカ人女性の、明治一〇（一八七七）年前後の日本についての、備忘を兼ねたエッセイであるということである。それは毎日規則正しく付けられたものではなく、むしろアメリカで生まれ育ったクララにとって書き留めておきたいこと、興味を持ったことについて、折に触れて記したものであった。⁽¹⁴⁾

日本人女性といけ花

クララの日記には「お逸」として、勝海舟三女の勝逸子が、日を

追うごとに頻繁に登場するようになる。クララとは同い年で二人はとても親しく、日記には自らの行動とともにお逸の生活も記されることがあり、そこからお逸や周囲の日本人がいけ花に執心していたことがわかる。クララはお逸を「少女でもあり淑女でもあり、勝氏の令嬢にふさわしい」と記している。

お逸、延いては日本人女性のいけ花に関する記事は、一八七九年一月〜六月の間にのみ、次の六カ所のように見いだせる。お逸もクララも一九歳であった。翌年一月、クララは帰国の途につくが、その途中立ち寄ったイギリスで、お逸が男爵目賀田種太郎と結婚することを聞いた。⁽¹⁵⁾ この時期はお逸にとつてまさに花嫁修業のまつただ中であった。⁽¹⁶⁾

一月一八日

クララは勝家（勝海舟の自宅）に行き、お逸の部屋に案内された。ベルギーの絨毯が敷いてあり、筆筒や机に、柳や梅の枝を活けた花瓶があつた。そこで勝家の家族写真や、鼈甲の美しい櫛を見せてもらった。

ここからはお逸の富裕で家族に囲まれた、幸せな暮らしぶりが窺える。その中にいけ花もあつた。このときはまだ日記内容はいけ花に絞られていない。

四月三日

「大名の池田氏」がいけ花の会を催されるので、お逸は虎ノ門へ行った。これを知ったクララは次のように記している。

軽い楽しみぐらいにしかないこのいけ花を、お逸はとても好きなので、上達に余念がない。なんでも生半可に習うくらいなら、しないほうがまだと前に言っていたから、古典や書道のほかに、いけ花、茶の湯、音楽¹⁷にも精通するつもりなのだ。

ここからは、裕福な家庭の結婚適齢期の娘たちが毎日のように、お稽古事に励んでいるのがわかる。ほかにお逸はホイットニー家で英会話も習っていた。留意したいのは、クララがこのお稽古事というものを「軽い楽しみ」と捉えていることに対し、お逸は「精通するもの」、いわゆる修業と捉えていることである。

四月二三日

お逸はまたお花の友達に会いに行った。加賀の殿様や池田公、上杉公のお嬢様方だが、令息と知り合いになるようなことは起こらないでほしい。お逸が行ってしまったら耐えられない。

このクララの言葉からこういつた場が、結婚適齢期の娘達がいかにすべき家の男性から見初められる、また見合いのような場でもあったことがわかる。実際に同年六月七日の日記は、お逸がクララに、立花家と上杉氏から嫁に欲しいと言われていると話したと記している。

四月二六日

お逸の家の門の前を通りかかったので入ったところ、「お逸は家の女の人に囲まれて先生に教えられながら花を活けていた」、年寄りのお師匠様はとても陽気だった、とある。この時期すでに勝家の屋敷内の別棟に暮らし、勝家の生活は身近なものであった。いけ花をお師匠宅へ習いに行くのではなく、家に来てもらい、家の女性たち皆で習ったことがわかる。またこの場合、いけ花の修得は堅苦しいものではなく、和気藹々とした雰囲気の中で行われている。

五月二〇日

クララが母親と、新築した勝家の勝氏と長男小鹿^{こぞ}の部屋を見せてもらいに行ったとき、「風呂場ではお逸、鈴木夫人、お師匠さんが花を活けていた。大きな百合の茎に何かの液体を吹きこんでいた。こうすると花の持ちが何日も長くなるのだ。とても興味深かった。」と記している。花の養い方は花の伝書、独習書に常に記され¹⁸、

いけ花にとって重要な事項であつたが、アメリカでは見られなかったことなのであろう。この時、お逸の茶の湯の話も出たが、それは後の「茶の湯」のところで取り上げる。

六月二一日

内田夫人が勝家⁽¹⁹⁾で、お逸とその先生も会員であるお花の会の人たちを招待して花会を催した。クラウは招待されていなかったが、恒例の素晴らしい催しと知って見に出かけ、その様子を次のように記した。

厳選された婦人ばかりで月一回、腕の上達ぶりを見せるのである。銘々がブロンズの好きな花器と花を持ちより、自由に活け、「イッシ」(一級)などを決めるのだ。それから美しい小さな台に花瓶をのせ、活けた人の級と先生の名を書いた札を台にたてかける。今日の花は、菖蒲や杉もあつたが、菊が多かつた。台と花瓶は見事なものばかりで、お膳のように長くて四本足がつき、水、蟹、亀の作り物が乗せてあるのもあれば、三本足のお椀形のものもあり、一本足の壺形のもあつた。私が特に気に入つたのは三日月形の銀の器で、銀鎖で天井からつるしてあつた。ピカピカに磨いてあつて、暗い部屋の隅にぶらさがつていと、暖かい春の宵に低くかかっている本物の月のようにだつた。

菊の花が懸崖に(垂れ下がるように)活けてあつた。

そして、お花の会の人達は食事をすませると早く帰つた。それから別当、植木屋、大工、女中、その他大勢、屋敷中の全員が見物した、とある。

ここからは、勝家の長女内田夫人が月一回、実家の勝家で上級者ばかりのお花の会を開き、それが終わると家中の奉公人がいけ花を見物していたことがわかる。まさに絢爛豪華かつ趣味の域を超えた会の様子が目に浮かぶ。上流階級(旧幕臣、華族)の女性が各自持参する花台、花器、さらに花留め、花材はそれ自体見事なもので、その上にいける技術も加わっている。またこの描写から、いけられた花は生花(せいか)様式⁽²⁰⁾であつたことがわかる。このお花の会は、江戸後期一八世紀初頭に見られる上流階級の女性たちの挿花会を思わせるもので、栄松斎長喜によつて描かれた間判錦絵「風流挿花会」を彷彿させる⁽²¹⁾。同様の営みが明治に入つても途切れることなく続いていたことがわかる。

いけ花についての具体的な記事が一八七九年四月に始まり六月で終わるのは、次に記している四月二日の勝夫人のお稽古事の話が引き金になつて翌三日から始められ、六月二一日以後は、新しく書き留めるべきことがなかつたと思われる。

アメリカ人女性といけ花

お逸のいけ花に関する一連の記事と同じ一八七九年四月二日の記事から、クララも花をいけたことがわかる。しかしそれは「日本風」ではなかった。この日、クララの家に五名の外国人「老婦人」が午餐会に訪れるため、クララは家の中をきれいにしてお逸が庭から切ってくれた白とピンクの桃の花をいけた。クララの家で使用人との仲介役として働く日本人男性田中も、「日本風に一枝活けた」。午餐会にはお逸も来て、この外国人女性達とお近づきになったというが、クララの家の飾り付けには加わっていない。ホイットニー家の飾り付けはその家の主人・家族と使用人で行うもので、お逸はお客様であつた。

またその晩に勝夫人も、クララ一家の支払いに関する相談に乗るために、クララの家を訪れた。お逸がいけ花で賞にもらったメダルを見せたことからお花の話になり、夫人はクララにいけ花か琴を習つて、帰国のお土産にしたらと勧めた。その話の内容は次のようである。

役に立たないお稽古事はすすめませんが、こういうものは、年をとつてから静かに落ち着いて楽しめるものですから、無用のものとは言えますまい。お国で特別にきれいな花を見たりした時、「ああ、東京の勝さんのところでお花の活け方をおそわつ

たつけ。この枝をあの頃の思い出に活けましょう」と思えますものね。だから役に立たないことはありませんまい。

クララはこれに対し、お作法の先生の文章を一生懸命勉強して覚えた言葉として、「おつしやるとおりなので、してみたいと思ひます」と答えたと言記している。このことから、クララの返答は本心ではなかったといえる。また日記には、クララがいけ花を習つたという話は出てこない。少なくともこの日、クララが午餐会のために自宅の花をいけたのは、勝夫人も知っている。そうであるのにお稽古事としてのいけ花、琴を勧めたことからは、日本人女性のお稽古事としてのいけ花と、アメリカ人女性が花をいけるという行為とは、別次元のものと認識されていたといえる。

このほかにもクララは日記に、自らが花をいけたことを記している。一八七六（明治九）年八月一九日は、横浜のヘップバーン先生（ヘボン博士）のお宅で、夫人のお手伝いとして花瓶に花をいけた。また同年十一月八日には、自宅で富田鉄之助、津田仙、大島圭介、勝海舟、福沢諭吉を招いた晩餐会が催された時に、買ってきた花を家中の花瓶にいけている。菊と椿と、幅広い長い葉のついた何か珍しい植物だったという。

また一八七七年十一月二三日には、

今日は日本の台所用品を買った。母はフライを作ったり、野菜をゆでたりするための小さい銅鍋がとても気に入って、客間で花を活けるのに使うと言っている。

と記し、一八七八年六月一四日にも自宅で開いたパーティで、食事のテーブルに庭の花が美しくいけられていたことを記している。クララもクララの母親も、アメリカ人女性としての花を楽しんでいたことがわかる。それは生活に潤いを与えるものであり、形式にこだわるものではなかった。

いっぽう一八七九年六月二四日、クララはその日の夕食を招待するために、芝にある杉田玄瑞宅⁽²³⁾へ行った。向かいにある息子杉田武の家にも立ち寄り、その「客間は清潔な畳敷きの部屋で、床の間には花がいけてあり、そのうしろに掛け物が一つだけ掛けてあった」と記している。このような素朴な日本の床の間の設えを、興味深く思ったのである。例えばなじみの深い勝家の場合、欧米の調度が飾られて、純粹な日本の設えでは無くなっていた。

茶の湯

次に茶の湯に関して見ていく。一八七九年五月二〇日、クララは母と勝家を訪れた際に、お逸から兄の小鹿の部屋の装飾品を見せてもらうとともに、勝氏がお逸の茶の湯の習得を喜んで、とても古い

屏風を彼女に与えたことや、茶の湯の道具をすでに持っていることを聞いた。ここからは嫁入り前の娘が茶の湯を習うことは、推奨されるべきことと考えられていたことがわかる。この場合、女中奉公をするための手立てとしてではなく、良家の子女の稽古事、花嫁修業としてであった。

修(習)得内容がどのようなであったかは、帰国を直前に控えた一八八〇年一月一七日に、お逸から教えてもらった「茶会の説明」として記されている。聞いた話をその日のうちに記したという内容は、待合から茶室にいたる露地での作法、娘と未亡人の着物の違い、茶室に入った後はその設え、また正客・次客・詰め・亭主それぞれの役割、炭点前、道具の拝見についてなどであり、また七事式⁽²⁴⁾の花月之式と思われる内容も記している。最後に、

茶の湯にはまもらなくてはならない作法が大変多いので、辛抱強くその形式ややり方を習った人でないと参加するのが不可能である。茶の湯にはいくつも形式があるが、一番一般的なのは五人で、大きなお茶碗一つから抹茶を飲む形式である。

と結んでいる。多くの事柄を正確に記していることから、お逸の茶の湯の修得度の高さと、クララの茶の湯への強い興味の、両方があったことがわかる。

ほかにも一八七七年二月一七日、徳川氏（「將軍邸」）に招待され、母や兄と一緒に訪れた。邸内を散歩するように誘われて茶室にも案内された時のことを、

きれいな茶室に案内してくださった。それは家人が最上の日本茶を飲む時に行くところで、火鉢が床に埋められていたが、すべて清潔なものだった。そこに通じる小道の両側には、いろいろな種類の花と石灯籠が並んでいた。ここの美しさはとても気に入った。

と記している。「火鉢が床に埋められていた」とは炬のことであろう。また一八七八年三月一日⁽¹⁵⁾、松平定敬邸で毎月一五日のたそがれ時に始まる、「日本式お茶の会」に招待され、兄と出かけた。このお茶の会は煎茶の会であったことが、記された内容からわかる。

留意したいのは、徳川邸や松平邸のお茶の会は、基本的に上流階級の男性の集まりであり、もし女性が出席するとしても、夫や兄の同伴者としてであった。この日記からは茶の湯が女性の嗜みとしてあるいつぼうで、なお男性のもので、社交の一アイテムでもあったことがわかる。

礼儀作法

一八七五年一〇月一五日、クララが富田（鉄之助）夫人とともに小野氏（政府役人、後出）宅へ病氣見舞いにいったとき、お茶や果物がだされ、もてなしとして三人の少女が上手な歌を披露した。舁られていたのであろう。英語が話せる政府役人で新聞の論説委員でもある同氏は、クララの母の日本語の家庭教師でもあった。それからしばらく漆器や玩具を見せていただき帰宅したという。このときクララは、

日本人は天性洗練されていて、「礼儀作法の手引き」みたいな人々である。人のもてなし方をよく知っていて、人をとてもしな気分になさしてくる。だが、あの低いお辞儀には閉口だ。さよならを言う時、富田夫人は床に膝をつき、畳に額をすりつけていた。

と指摘し、さらにそのような卑屈な習慣はアメリカの自由な娘が学べるはずがない、と書いている。

また同年一月二六日、小野氏はクララに日本人女性について次のように語っている。

女の人たちには精神がない、本が読めない、子供達を教えるこ

とができない。母親は子供の最初の教育者であるのに、その母親が無知で学問を軽蔑し、顔に化粧して口紅を塗ることにしか関心がないのだつたら、子供はどうやって正しい考えをその若い心に植えつけられるだろうか。

小野氏はこの考えは秘密にしてほしいと言い、さらに紅白粉には毒性があることも言及した。これに対しクララは共感したことを伝えている。

一八七八年一月一〇日、クララは新年の挨拶に杉田玄瑞宅に出向いた。話が新年の行事のことに及ぶと、杉田夫人は礼儀作法の本を出して来られた。使い古された本だが、礼儀作法に関することは全て書いてある。うどんを上品に食べる方法を説明した挿絵、贈り物の包み方、お返しに使う白い紙の説明、いけ花の鑑賞の仕方、手水鉢で手を洗う洗い方、鼻のかみ方、髪の毛の洗い方、冠婚葬祭の作法の説明などもあった、と記している。さらに、クララは結婚式における花嫁の心得を書いた本と、「百人の有名な歌人の歌集」^⑤をいただいて大変嬉しかった、と書いている。

日本人が日本の伝統的な礼儀作法を大切にしていること、クララがそのような日本の礼儀作法に、興味をいだいたことがわかる。しかし、日本人の座敷での畳に額をすりつける挨拶の仕方や化粧等には、当惑していた。

琴・三味線

「学制」の「就学告諭」に、いけ花や茶の湯とともに三味線の習得についての言及があったように、クララの日記においても女性のいけ花、茶の湯とともに琴、三味線の習得が見いだされる。

一八七五年一〇月一日月曜日の日記は、九日土曜日に芝の杉田玄瑞先生宅を訪問した折りに、杉田夫人はクララのために琴を弾き、お祖母様は三味線を聞かせてくださった、とある。

同年一月一六日の日記は、土曜日（一月一三日）に芝の福沢諭吉宅にうかがうと、二階の江戸湾の素晴らしい眺めを見せてくださったあと、七歳のお嬢さんが琴をお弾きになり、その後夕食をいただいてから帰った、と記している。客に琴を弾いて見せることは、嗜みであり、もてなしであった。また一八七七年八月二四日、クララが勝家を訪ねたときお逸は留守で、勝夫人がもてなしとして屋敷内を案内してくれた。そのとき一人の小さな少女が、お琴の稽古をしているのを見学した。先生は盲目の老人だったというが、稽古に部屋を貸していたのであろう。

琴はいけ花や茶の湯にくらべて年少者が習っている。また琴や三味線、歌の嗜みは、お迎えしたお客様の気持ちを和ませるものとしてあった。注目したいのは、福沢諭吉が娘に琴を習わせていたことである。先に、勝海舟がお逸の茶の湯の修得を喜んでいたように、これらのお稽古事が、知識人の娘が修得するものとしてあったとい

うことがいえる。⁽¹²⁸⁾ 福沢諭吉は一八九九年発刊『新女大学』⁽¹²⁹⁾において、「既に優美を費ふと云えば、遊芸は自ずから女子社会の専有にして、音楽は勿論、茶の湯・插花・歌・俳諧・書画等の稽古は、家計の許す限り等閑にす可らず」と述べているが、それが裏付けられる。

(2) イザベラ・バードの日本紀行⁽¹³⁰⁾

次に、イザベラ・バードの日本紀行について見ていく。イザベラ・バード（一八三二～一九〇四）はイギリス人女性、紀行作家。旅行家、探検家でもあった。一八七八年日本を訪れ、五月から一〇月にかけて東京を出発、日光、新潟、北海道、一度東京に戻り、伊勢、琵琶湖畔（大津）、京都、神戸を周り東京に戻った折りの紀行が残る。四七歳のときであった。

クララ・ホイットニーとイザベラ・バードは、まさに同時期に日本に滞在し、日本について書き残している。クララの日記は、イザベラの存在についても記している。一八七八年六月三日、横浜へ行った母が「日本を馬で旅行している奇妙な婦人」と会ったと記し、同年一〇月三日にはイザベラを、「実にいやな老嬢」「彼女は本を書くつもりで、誰にでもしつこくいろいろき出そうとするので、誰もそばへ行きたがらない人物」と記している。このことから紀行の内容が踏み込んだものであることが思われる。しかしクララが実際にイザベラと出会ったという記述は見当たらない。⁽¹³¹⁾

イザベラはすでにこの頃旅行家として有名であり、駐日英国公使ハリー・パークスならびに同家の人々は、彼女の旅への全面的な協力を惜しまなかった。⁽¹³²⁾ いっぽう紀行の「まえがき」でイザベラは、この紀行が「日本の現状に関する知識を広げるためのなんらかの足しになろうとする試みである」「本書は現地で妹や私的な友人たちに宛てて書いた手紙を中心に構成することにした」と述べている。⁽¹³³⁾ 興味を持ったこと、書き残すべきことという内容の方向性は、クララの場合と同じといえる。

それでは同時期の日本のいけ花、茶の湯、礼儀作法等を、クララよりも三〇歳年上のイギリス人紀行作家の女性は、どのように記したのであろうか。

イザベラが見たいいけ花、三味線

イザベラは東京を出発して日光東照宮を訪れると、しばらく日光の農村に滞在した。宿屋は村の長、金谷善一郎の二階建て邸宅の離れで、それは収入の助けにと、紹介状を携えた外国人に自宅の部屋を開放するものであった。彼は非常に頭が良く、見るからに高い教育を受けているとわかる人物であった。

①日光、金谷邸（宿屋）の設えといけ花（第一〇信、六月一五日）

床の間には、ひとつの掛物がかかり、磨き込まれた柱の一本に掛かった、純白の一輪挿しに、ローズ色のつつじが一枝、そしてもう一本の柱にあやめが一輪

イザベラはこの部屋を美しい、またこの光景を素晴らしいと記し、「日本の中流家庭の生活をせめてその外側だけでも見られるのは、さわめて興味深い」と記している。

②日光、金谷邸の娘と妻のいけ花、三味線（第三信、六月二三日）

イザベラは、金谷邸のいけ花について、さらに次のように記している。

いけ花は入門書を使って学び、女の子の教育のひとつに数えられています。私の部屋に花が活け替えられない日は、滅多にないほどです。これはわたしにとつても教育で、ただひとつのもののだけを飾る、その極端な美しさを評価しはじめています。（中略）磨き込んだ柱にとつても優美に掛かっている一輪挿しにはそれぞれ牡丹、あやめ、つつじが一輪または一枝ずつ挿して

あり、茎も葉も花卉もすべてがその美しさをあますところなく見せています。イギリスの「花屋」のつくる「花束」ほどグロテスクで野蛮なものはないでしょう。異なつた色の花を幾重にも同心円状にたばね、羊歯と堅い紙のレースでそれを巻くのですから、茎の葉も、いや、花びらさえ無残につぶれ、それぞれの花の優美さと個性は当然台無しになってしまします。

イザベラは、一輪挿し（抛入）に日本の美しさを見いだしている。いつぼう「いけ花は入門書を使って学」ぶについて、先生がこの地域にいなかったのか、先生に直接習う必要がないと考えているのか、母親が上手で教えているのか、もう少し歳が行ってから習おうとしているのか判然としない。留意したいのはイザベラが、いけ花を「女の子の教育のひとつ」と書いていることである。ほかに読み書き、裁縫、三味線⁽¹³⁾を挙げている。

この三味線については、全国的に女性の楽器と見なされているもので、ハルの母親のユキは三味線を弾き、一二歳のハルは毎日先生のところへこの楽器を習いに行っている、と記している。江戸時代、琴は三味線とは対照的に上品な芸事とされ、憧れの稽古事だった。稽古に励んだのはもつぱら家柄の良い女性たちだったという。⁽¹⁵⁾

なお、茶の湯については管見の限りではあるが、彼女の紀行には記されていない。

イザベラが見た礼儀作法

①日光、金谷邸の子供のパーティに集まった小学生（第一三信、

六月二三日）

実のところ日本の礼儀作法に必要なすべてのことは、子どもたち
がことばをしやべれるようになる手ほどきが行われ、
一〇歳にもなれば、どんなときにはどうすべきか、なにをして
はいけないかを正確に心得ているのです。

と記している。中流家庭（裕福な農家、地主、町人）の子らのよそ行
きの顔であろうが、幼少時よりしつけをうけていることがわかる。

②新潟の書店店主の話（第二一信、七月九日）

新潟は開港場だったが海外交易はなく、外国人居住者もほとんど
いなかったといい、話し好きの書店の店主から、イザベラは以下の
ような話を聞いた。最も無学な家を除いては、ほとどの家にもあ
る文庫と呼ばれる女性用の本がある。『女大学』『女小学』『女重宝
記』『婦人の書簡文例集』『二四孝童子』などで、こういった本は、
幼少のころから教わったり学んだりする。さらに、

ほかにも繰り返し読まれて日本のどの家でも、女性たちが中身

を覚えてしまっている本がもう一冊ある。それは一〇〇人の詩
人が詠んだ一〇〇篇の詩を集めたもので、模範的な女の人生、
夫と妻の契りを完璧なものにするための決まり、そのような契
りの例、その他娘、妻、母にふさわしい有益な知識や飾りだけ
の知識がその内容になっている。

という。この「一〇〇人の詩人が詠んだ一〇〇篇の詩を集めたも
の」は、先の「礼儀作法」で記した、クララが杉田夫人にいただ
いた「百人の有名な歌人の歌集」と同じもので、『百人一首』であ
ろう。『百人一首』は寺子屋以前に母親が教え、一〇歳前後で一通り
マスターしたようである。¹³⁶

ここからは女子向きの礼儀作法書が、日本の地方都市でも行き
渡っていたことがわかる。中身をくり返し読んで、それらは覚えら
れていた。

③久保田（秋田）にて 婚礼の作法（第二九信、七月二五日）

宿の主人がイザベラを、姪の結婚式に招待してくれた。そこで見
た婚礼は、裕福な商人の子女ではあるが平民のもので、サムライ階
級のものではなかった。花婿は二三歳、花嫁は一七歳であった。日
本の女の子にとって結婚はわかりきった定めで、幼少のころから嫁
としての義務を果たすようにしつけられる。しとやかで気立てがよ

く、たしなみのある女性であること。また礼儀作法と家事を修得していることが肝心である、と記している。

④アーネスト・サトウ邸でのパーティ（第五〇信、一〇月二日）

イザベラは、芝離宮で外交団を対象に催された森有礼主催の午後のパーティに出席したが、イギリス式レセプションの真似にすぎず、これといって日本的なところはなく、午後を無駄にすごしたと後悔するほどだった。しかし数日後に催されたアーネスト・サトウ（イギリス公使館通訳）邸のパーティは、日本人の楽人たちの、名門の日本人としての完璧な振るまいについて、

それは完全に自然なもので、あくまで彼らの流儀においては完璧ながら、わたしたちの規範の上に成り立ったものではみじんもない礼儀作法、態度、格式を見られたのはとても興味深いことでした

と記している。

イザベラの場合、中流階級（裕福な農民、地主、商工業者など）、上流階級（旧幕臣、華族）のいずれにしろ、西洋の模倣をすることのない、日本人独自の礼儀作法に美しさを感じ、その完璧なる姿を好んだ。それはクララも同様であった。

クララの日記とイザベラの紀行の相互参照

まずクララの日記からは、日本の上流階級（旧幕臣、華族、官僚）の女性たちのいけ花、茶の湯、礼儀作法、琴や三味線に対する様子がわかる。いけ花や茶の湯は一七歳から二〇歳くらいの結婚前の娘、また既婚女性が熱心に修得している姿が見いだせる。琴は幼少より習い、客人の前で演奏できるようにしている。また結婚後も客人をもてなすために琴や三味線を弾くことがあった。社会的な地位を持つ父親、夫は、いけ花や茶の湯の修得を肯定的に捉え、むしろ推奨しているといえる。女性はいけ花や茶の湯、琴などを稽古事ととらえ、また花嫁修業とも捉えていた。

次にイザベラの紀行からは、中流階級の女性の様子がわかる。いけ花は読み書き、裁縫、三味線とともに女子の教育の一つであったと書いている。いけ花では伝書・独習書が使用されている。¹³⁷楽器（音楽）の習得は琴ではなく、三味線であった。しかし茶の湯については記しておらず、地方都市や農村ではあまり行われることがなかったことが思われる。いっぽう東京での上流階級のパーティは、イギリス式を真似たものを行うことがあり、イザベラはそれを良しとしていない。

クララもイザベラも、日本では礼儀作法が幼少のころからしつけられていたと認識し、また日本独自の礼儀作法やいけ花、床の間空間に対し興味をいだいている。また両者の話から、江戸時代から続

く礼法書が、明治に入っても引き続き上流階級でも中流階級でも、大切に使用されていたことがわかる。両者の記録からはいけ花、茶の湯、礼儀作法と遊芸の関係は見いだされない。いけ花、茶の湯、礼儀作法は女子教育であり、延いては日本の素晴らしい文化として捉えられている。

(3) ジョサイア・コンドルの見知

一八七七年、御雇外国人として工部大学校建築学教授として来日したジョサイア・コンドル (Josiah Conder, 一八五二〜一九二〇) は、イギリス人建築家であった。クララ・ホイットニーの来日が一八七五〜一八八〇・一八八二〜一八九九年、イザベラ・バードの来日が一八七八年であることから、同時期に日本に滞在していたことがわかる。しかしクララの日記から工部大学校教師の名前は幾人も見いだせるものの、コンドルについては記されていない。またイザベラの場合、短期滞在であったこともあろうが、同じくイギリス人であるが接点は見いだせない。

コンドルは建築家として活躍するいつぼうで、いけ花にも興味を持ち、⁽¹³⁾ 一八九一年、*Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement* (日本の花といけ花芸術) を出版した。この書は一八九九年に出された改訂版 *The Floral Art of Japan: Being a second and revised edition the Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement* (日本のいけ花芸術) ⁽¹⁴⁾ である。

非常に優れた内容の英語のいけ花書として、今なお知られている。いけ花に関してコンドルが評価されることの一つに、欧米のフラワーアレンジメントにはない、日本のいけ花の「線の調和と美」を指摘したことがある。また内容の完成度を高めた改訂版からは、女性といけ花について述べられているわけではないが、挿絵のいけ花や花見を行っている人物はすべて女性であり、男性よりも女性のなすべきものになっていたことが窺える。⁽¹⁵⁾

注目したいのは、両書に先駆けてコンドルは、一八八九年に *Theory of Japanese Flower Arrangements* (日本のいけ花の理論) ⁽¹⁶⁾ において、以下のように記していることである。

The Art of arranging flowers has always been regarded in Japan as an elegant accomplishment, though by no means an effeminate one.

It is true that the education of ladies of rank was not considered complete without the acquisition of some skill in composing with flowers, and the names of several noted artists are found in the list of adepts.

Far from being, however, exclusively a female accomplishment, the art has been principally practised by men of culture whose occupations have spared them leisure for aesthetic pursuits. Priests, philosophers, and men of rank who on account of declining years, or from political causes, had

retired from a more active life have been its most enthusiastic patrons and devotees.

As a close examination of the principles of Japanese floral design will shew, there is a bold and masculine vigour displayed in the best compositions which comes far more within the compass of the stronger than of the weaker sex.

コンドルはまず、いけ花を日本における上品な嗜みとして位置付け、しかし決して女性に限られた嗜みではないと述べた。その上で、いけ花が上流階級の女性の不可欠な嗜みであり、他の幾つかの稽古事とともに修得すべきものであることを述べた。

さらに重要な点として、いけ花が、もっぱら女性の嗜みとしてあるそのいっぽうで、男性の美的探求者、僧侶、哲学者、また政治の第一線で活躍し、退いた男性（隠居）により、稽古が行なわれていることを指摘したことがある。

またコンドルによるいけ花についての精密な分析によれば、いけ花の基本原理には、力強い男性的な力強さがあると述べている。

The Floral Art of Japan: Being a second and revised edition the Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement ⁽¹³⁾においても、コンドルは同様の考えを示し、性別の観点からいけ花を説明している。

以上のことから、コンドルが当初より一貫していけ花に関し、

ジェンダーの見知を極めて明確にもつていたことが分かる。

(4)万国博覧会におけるいけ花、茶の湯、礼儀作法

それでは明治初中期、日本は外国においてどのようにいけ花、茶の湯を紹介したのであろうか。当時、日本が外国に日本文化を紹介する機会として万国博覧会への参加があった。吉川順子は「欧米諸国におけるいけ花受容の史的研究」⁽¹⁴⁾において、日本が初参加した一八六七年のバリ万博では「生花の事を記せる書」（花伝書）が四部出品された記録が残り、茶が振る舞われたが、いけ花はなかったこと、また「日本が欧米諸国に向けていけ花をアピールし始めたのは、ジャポニズムが最高潮に達した一八七八年のバリ万博であり、事務官長であった前田正名⁽¹⁵⁾の存在がその鍵となつた」ことを指摘し、彼が「いけ花を単なる装飾ではなく感情を表現する真の芸術と主張した」ことや、一八六九年から一八七六年にかけてのフランス留学で、植物の種苗を収集して三田育種場開設に尽力した人物であったことを述べている。

さらにマウゴジャータ・ドウトカは、一八七八年、前田のバリ万博広報活動としてのフランスの雑誌への寄稿のなかで、この「真の芸術」としてのいけ花の紹介とともに、彼が「上流階級においては、全ての女性はその配偶者と同じように、輝かしい教養と確固たる教育を得ていた」と主張したことをはじめとして、女性教育の要素と

してブーケの創作（ブーケはいけ花をさす）などを取り上げて解説したことを指摘している。いけ花が女性教育との関連で紹介された背景には、文明開化の成果を示すために、万博を場にして日本の工芸品のみではなく教育関連の資料も展示されたこと、また当時女性教育への模索が続いている中で、前田はフランスでの留学経験を踏まえ、日本の伝統的な女性教育を描き、日本には西洋のものに勝るとも劣らない文化や教育があることを立証しようとした、と指摘している。¹⁴⁶

その後一八九三年、アメリカで開催されたシカゴ万国博覧会では、女性館が設けられ、日本女性の作品の展示などが行われたが、同博覧会において刊行した『日本の婦人』¹⁴⁷には、次のように述べられている。¹⁴⁸

通常婦人の芸術と称せらるゝものは、和歌、絵画、点茶、品香、挿花、音楽の六種なり。和歌、絵画を学びて、温故知新の才を養はしめ、点茶を学びて、進退応対の節に習はしめ、花を挿み、香を品して静肅沈深の妙趣を悟らしめんとす。是れ皆て婦人の思想を高尚にし、鄙しき挙動なからしむる所以なり

ここからは日本女性が芸術としての茶の湯を学び、礼儀作法を習い、いけ花をすることにより、品性を磨き人格形成に努めることを

海外に紹介したといえる。

万国博覧会におけるこれらの言説からはいけ花、茶の湯、礼儀作法と遊芸の関わりは見いだせない。

おわりに

本稿は、明治初中期、いけ花、茶の湯が遊芸として捉えられながらも、礼儀作法とともに女子教育として、高等女学校に条件付きといえども取り入れることは差し支えないとなつた過程を考察した。最初に教育法令の変遷と遊芸との関係からは、一八七二年頒布の国民皆学をめざした「学制」に関する「就学告諭」において、いけ花、茶の湯は遊芸と捉えられ、教育にとつて有害なものであり不要とされた。茶の湯研究で言われる一八七五年（今回の考察によれば一八七六年）に跡見学校が学科目として取り入れたということは考え難い。

そのいつばうで一八七八年のパリ万国博覧会において、前田正名により日本のいけ花は真の芸術として紹介された。さらに前田はフランス留学時の経験を踏まえ、日本には西洋のものに勝るとも劣らない文化や教育があることを立証しようとし、その一環として、いけ花を女子教育として位置づけた。このパリ万博における前田の、いけ花は女子教育であるという位置付けは、上流階級の日本人、御

雇外国人をはじめ日本、欧米各国の知識人、それらに連なる人々の知る所となつたと考える。その後一八九三年シカゴ万国博覧会においてもいけ花、茶の湯は芸術と捉えられるとともに、これらを嗜む日本人女性の人格形成に寄与していることが紹介されている。

それは一八七九年クララ・ホイットニーの日記に描かれたように、上流階級の女性にとつてはいけ花、茶の湯や礼儀作法、琴は嗜みであり、修得すべきものであつた。勝海舟、福沢諭吉も実娘がこれらを嗜むことを是としていたことが日記から見いだされる。また一八七八年、イザベラ・バードの紀行からもいけ花、礼儀作法、三味線が中流階級の女子教育であつたことが記されている。いつぼうジョサイア・コンドルは一八八九年、いけ花が上流階級の女性の不可欠な嗜みであるとともに、教養ある男性においても嗜まれていることを指摘した。

一八八〇年、改正教育令において「修身」が筆頭の科目となり、そこに「作法」が加えられ、女子にのみ「裁縫」「家事経済」が学科目として設けられ、また女子のみが習う「作法」が考え出され、女子に対する教育に関心が持たれるようになった。それとともに同年、「女大学」に、これまで取り上げられることがなかったいけ花、茶の湯が、余力があれば学ぶべき「遊芸」として取り上げられたがこのパリ万博や日記、紀行にみるような上流、中流階級の女性の嗜みとしてのありようが、「女大学」に変化を起こさせたといえよう。

さらに一八八二年、官立初の女子中等教育機関として東京女子師範学校附属高等女学校が設置され、その上等科の学科目「礼節」のなかにいけ花、茶の湯が取り入れられた。このことは帝国日本の富国強兵政策の女性役割の一端をいけ花、茶の湯、礼儀作法も担うことになったことを意味した。この三者は国策に取り込まれたのである。いけ花、茶の湯は遊芸としてもあるものの、この官立の女子教育に作法の一部としてであつても取り入れられ、国策に取り込まれたことは、ここでいけ花、茶の湯が礼儀作法とともに、女子教育として認められたと考える。しかし認められたとはいえども、その受容は必ずしもあつたわけではなかつた。¹⁴⁹

一八九九年、高等女学校令公布に伴い、女子中等教育（高等女学校）における教授内容が規定された。学科目「修身」の細目として「作法」は取り入れられたが、いけ花、茶の湯は学科目及びその細目にも入れられていない。それはいけ花、茶の湯が元来、別の教育体系を持つものであつたためなどの理由もある。いつぼう同年、福沢諭吉は『新女大学』で、いけ花や茶の湯は遊芸であつても、学問とともに女性が取り入れるものと説いた。実際、福沢諭吉は自分の娘に琴を習わせている。そこには一面において『女重宝記』にみられるような余裕ある生活のなかでいけ花や茶の湯を嗜む女性、また男性が描いた女性の理想像としての姿が思い描かれたと考える。

そして一九〇三年、高等女学校においていけ花、茶の湯は必要な

場合に限り、正科時間外に教授するのは差し支えない、との書面による通知（通牒）が出された。遊芸を学校教育で課外といえども教えてよいのかという是非が問われ、「正科時間外」という条件付きで是ということになったといえる。しかしこれ以後も、必ずしも高等女学校においていけ花、茶の湯が「正科時間外」にしろ取り入れられたというわけではなかった。⁽¹⁰⁾

注

(1) 花材を器に入れて形を整える行為の総称を筆者は「いけ花」と記す。「いけ花」という表記については、小林善帆「一八世紀のいけ花——「たて花」「立花」「抛入」の相関を通して」笠谷和比古編『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版 二〇一一年、三三四頁を参照されたい。

(2) 小林善帆『「花」の成立と展開』和泉書院 二〇〇七年、一七五、一七六頁。綿拔豊昭・陶智子編著『絵で見る 明治・大正礼儀作法事典』柏書房 二〇〇七年。平成二四年度筑波大学付属図書館特別展図録『明治時代に礼法はいかにして伝えられたか——出版メディアを中心に』筑波大学付属図書館 二〇一二年。綿拔豊昭「いけ花」の女性教養化についての一考察——礼法を中心に『いけ花文化研究』第三号 国際いけ花学会 二〇一五年。

(3) 明治二〇〜四〇年頃、楊洲周延（一八三八〜一九一二）ほかによる。小林善帆『いけ花史試論（後編）近代・現代』『いけ花文化研究』第二号 国際いけ花学会 二〇一四年、六頁

(4) 『世事見聞録』（岩波文庫）岩波書店 一九九四年、三五七頁。前掲注2

『花』の成立と展開 一七二、一七三頁

(5) 遊芸とは、遊びごとに関した芸能。謡曲・茶の湯・いけ花・舞踏・琴・三味線・尺八・笛・香・講談・浪花節・落語・俗謡など（『広辞苑』第七版、二九八〇頁）。

西山松之助は遊芸文化とは、「みずからそのわざを修得し、人々とともに一座を催してこれを演じ、その文化創造が進行していくプロセスに並行して、同時に一座の主客がともにそれを鑑賞しつつ楽しむ、つまり創造のプロセスと鑑賞のプロセスが、同時に進行し完結するという独特の構造をもっている」ものとしている（『西山松之助著作集』第四巻 吉川弘文館 一九八三年、三四二頁）。さらに西山は、遊芸は大衆化し、一七世紀末から一八世紀の初頭にかけて、上流社会だけでなく、町のなかの少し裕福な人たちの間に、猛烈な勢いで流行することになった。当時の町人・農民は茶道や花道などに身を投じ、現実の世俗を遮断し、芸の名において別世界の遊芸人に変身した。そういう遊芸世界では、原則的に世俗の上下身分の差別は全く取り払われていた（『西山松之助著作集』第五巻 吉川弘文館 一九八五年、三二二〜三二四頁）、と述べている。

(6) 前掲注2 小林善帆 和泉書院 二〇〇七年

(7) 前掲注2 『花』の成立と展開 一七六〜一八〇、一九三、一九七〜三八六頁

(8) 前掲注2 『花』の成立と展開 三八六頁

(9) 小林善帆『近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養——いけ花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して』笠谷和比古・上村敏文編『日本の近代化とプロテスタンティズム』教文館 二〇一三年

(10) 吉川順子「欧米諸国におけるいけ花受容の史的研究」『いけ花文化研究』第七号 国際いけ花学会 二〇一九年、同「ジャポニスム期における日本のいけ花のイメージ」『いけ花文化研究』第八号 国際いけ花学会 二〇二〇年。マウゴジャータ・ドウトカ「明治前期のIKEBANAを伝

える言説——西洋諸国向けのいけ花紹介を中心に」「いけ花文化研究」第八号 国際いけ花学会 二〇二〇年。

- (11) 『明治以降教育制度発達史』第一巻 教育資料調査会 一九三八年、二五二～二五五頁。その後、同校は官立東京女子高等師範学校附属高等学校（女子中等教育機関）として発展した。同校については、前掲注2『花』の成立と展開」二〇一～二〇三頁に詳しい。

- (12) 以上、『明治以降教育制度発達史』第一巻 教育資料調査会 一九三八年、二七五～二八五頁

- (13) 「解説」『日本教育史資料書』第五輯 国民精神文化研究所 一九三七年、二一〇～二二二頁

- (14) 以下、「就学告諭」に関し、①荒井明夫編『近代日本黎明期における「就学告諭」の研究』東信堂 二〇〇八年、②川村肇・荒井明夫編『就学告諭と近代教育の形成——勸奨の論理と学校創設』東京大学出版会 二〇一六年、を参考にし、両書の資料編資料を使用した。

- (15) 「明治六年六月序の全文」『学制序文解説』『日本教育史資料書』第五輯 国民精神文化研究所 一九三七年、一〇六～一〇八頁を使用。前掲注14①資料（19・3）四九七頁、②資料（新19・1）四七三頁

- (16) 「学問のもととす」『日本教育史資料書』第五輯 国民精神文化研究所 一九三七年、九九～一〇一頁を使用。前掲注14①資料（19・4）五〇一頁、②資料（新19・2）四七七頁

- (17) 「女大学宝箱」石川松太郎編『女大学集』平凡社 一九七七年

- (18) 前掲注17「女大学宝箱」『女大学集』五〇頁には、女とは「舅・姑の為に衣を縫い、食を調え、夫に仕えて、衣を畳み、席を掃き、子を育て、汚れを洗い、常に家の内に居て、猥りに外へ出ずべからず」とある。

- (19) 前掲注17『女大学集』九七頁

- (20) 前掲注14②資料（新27・6）五〇一頁

- (21) また、大阪府「学校設立趣意についての府知事告諭」にも「府下ノ風習

トシテ唯々眼前ノ愛ニ溺レ、男児ハ花ヲ活ケ茶之湯ヲ上手ニシテ、女児ハ琴や三味ヲ上手ニスルヲ」とある（前掲注14②資料（新27・8）五〇六頁）。この場合、煎茶でなく茶之湯と記されている。

- (22) 前掲注14②二一五頁（大間敏行論文）によれば、山梨県と大阪府の「就学告諭」の類似性が非常に高いのは、藤村紫朗が大阪府参事として作成に携わった後、異動して山梨県権令となり、同県からも「学制解釈」を出したためであるという。

- (23) 一六九三年刊。前掲注2『花』の成立と展開」一六八、一六九頁に詳しい。

- (24) 前掲注14資料①（41・3）五三七頁

- (25) 前掲注14資料②一八七二年一〇月福岡県（新40・2）五二九頁ほか

- (26) 前掲注14資料①（35・8）五二九頁、②（新35・3）五二二頁。また①

〔35・4〕五二七頁「女校ノ議」に「コレニ絃管ヲ教ヘ歌舞ヲ習セバ」とある。

- (27) 前掲注14資料①（36・4）五二九頁、②（新36・1）五二二頁

- (28) 前掲注14資料②（新25・3）四九二頁、①（25・5）五〇九頁。また①

〔25・4〕五〇九頁「就中女ノ子ハ専ラ遊芸等而巳ヲ教エ無用ノ事ニ日月ヲ費ヤサセ候」とある。

- (29) 前掲注14資料②（新22・1）四八一頁

- (30) 前掲注14②二二六、二二七頁、「甲第一一〇号」（新資40・4）

- (31) 前掲注14資料②（新8・5）四五七頁、①（8・7）四八四頁

- (32) 『浮世風呂』日本古典文学大系六三 岩波書店 一九五七年。前掲注2

『花』の成立と展開」一七三、一七四頁

- (33) 小林善帆「女性といけ花 第九回 女中湯の小娘の話」『小原流挿花』一般財団法人小原流 二〇一七年九月号、三三三頁

- (34) 近世文学書誌研究会編『女重宝記他』勉誠社 一九八一年。前掲注2

『花』の成立と展開」一六六～一六八頁

- (35) ここにおける上流階級とは宮家、公家、大名家、豪商など。
- (36) 例えば裕福な武家の妻となった女性が、いけ花を嗜んでいたことが、『仮名手本忠臣蔵』「四段目、判官切腹の段」からわかる（小林善帆『女性といけ花 第八回 武家女性の嗜み』『小原流挿花』一般財団法人小原流 二〇一七年八月号、三五頁）。
- (37) 守屋毅『近世芸能文化史』弘文堂 一九九二年は、わずかではあるが「女性と遊芸」に言及している（二二八頁～一三〇頁）。しかし一三〇頁において、一八四七（弘化四）年刊『女重宝記』のみを使用し、初版の「元禄五年刊」と同様の髷の結び方の説明である「高からずひくからず花をいけるてい」を、女性のいけ花の進展のようにとらえ、またそれ以前に、「弘化四年刊」と「元禄五年刊」の『女重宝記』のいけ花に関する記述、絵図に、花形（様式）以外の変化が見られないにもかかわらず、「元禄五年刊」が検討に加えられていないなどの、疑問点が見いだされる。
- (38) 前掲注2『花』の成立と展開 一七〇頁参照
- (39) 『西山松之助著作集』第五巻「近世風俗と社会」吉川弘文館 一九八五年、二〇、二二頁
- (40) 西洋の新知識を授けることに偏り、徳育は疎になり、修身書は多くは西洋人が著わしたものか、翻訳したものをを用いるに過ぎなかった。（『明治以降教育制度発達史』第三巻 教育資料調査会 一九六四年、一六頁）
- (41) 「序」倉澤剛『教育令の研究』講談社 一九七五年
- (42) 『明治以降教育制度発達史』第二巻 教育資料調査会 一九六四年、一六一～一六五頁
- (43) 大久保利兼編『外国人の見た日本』3 筑摩書房 一九六一年、一七四～一八四頁。
- (44) 前掲注2『花』の成立と展開 二〇四頁に詳しい。
- (45) 仲新『明治の教育』至文堂 一九六七年、一五九～一七一頁。明治文化研究会編『明治文化全集』第一二巻教育篇 日本評論社 一九九二年（復刻版）、一二七～一三八頁
- (46) 前掲注45『明治の教育』二〇二～二〇五頁
- (47) 『明治以降教育制度発達史』第二巻 教育資料調査会 一九六四年、二〇一～二〇七頁
- (48) 『明治以降教育制度発達史』第二巻 教育資料調査会 一九六四年、二五一～二五七頁
- (49) 『明治以降教育制度発達史』第三巻 教育資料調査会 一九六四年、四九八～六一四頁
- (50) 石川松太郎編『女大学集』平凡社 一九七七年、一五八頁
- (51) 前掲注2『花』の成立と展開 一七五、一七六頁
- (52) 『創立五十年』東京女子高等師範学校附属高等女学校 一九三二年、三六、三三頁。前掲注2『花』の成立と展開 二〇八、二〇九頁
- (53) 東京女子師範学校、同附属高等学校に関しては、前掲注2『花』の成立と展開 二〇一～二二五頁に詳しい。
- (54) 湯沢雅彦『明治の結婚明治の離婚——家庭内ジェンダーの原点』（角川選書）角川書店 二〇〇五年、三〇、三一頁。前掲注5『西山松之助著作集』第五巻、五〇頁
- (55) これはその後例えば、戦時下の「満洲」において、いけ花が女性の戦意高揚に使われていることなどに繋がっていく。（小林善帆『女性満洲』と戦時下のいけ花』河原典史・日比嘉高編『メディア——移民をつなぐ、移民がつなぐ』クロスカルチャー出版 二〇一六年。初出、『立命館言語文化研究』第二六巻四号 立命館大学国際言語文化研究所 二〇一五年）
- (56) お茶の水女子大学百年史刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』一九八四年、二八～三〇頁。東京女子師範学校のいけ花、茶の湯の取り入れに関しては、前掲注2『花』の成立と展開 二〇一～二〇四頁に詳しい。
- (57) 前掲注2『花』の成立と展開 第九章 二九八、二九九頁に詳しい。
- (58) 『福沢諭吉全集』第六巻 岩波書店 一九五九年、五〇七、五〇八頁

- (59) 稲垣恭子『女学校と女学生——教養・たしなみ・モダン文化』中公新書 二〇〇七年。前掲注2『花』の成立と展開 一八五、三八六頁
- (60) 跡見学校、跡見女学校に関しては、前掲注2『花』の成立と展開 二六三〜二七二頁で考察している。
- (61) 水尾比呂志『いけばな——花の伝統と文化』美術出版社 一九六六年、一三〇頁
- (62) 前掲注2『花』の成立と展開 二一〇〜二二二頁、参照
- (63) 田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版 二〇〇七年、四一頁（初出、「文化研究の潮流と近代茶道史研究」『芸能史研究』一六二号 二〇〇三年、七頁）
- (64) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会 一九八〇年、二九八、二九九頁
- (65) 花蹊日記編集委員会編『跡見花蹊日記』学校法人跡見学園 二〇〇七年
- (66) 茶の湯文化学会編『講座 日本茶の湯全史』第三巻 近代、思文閣出版 二〇一三年、八、二三、一五二頁。熊倉功夫『熊倉功夫著作集』第三巻 思文閣出版 二〇一六年、三三六頁、ほか
- (67) 「開校当日の跡見花蹊」「日記抄」『創立125周年記念 写真で見る跡見学園の歩み』跡見学園 二〇〇〇年、一三頁による。
- (68) 編集兼発行東京都『東京の女子教育』都史紀要九 一九六一年
- (69) 少なくともいけばな、茶の湯といったものではない。
- (70) 「学制」第二章によれば、「小学」には尋常小学、女児小学、村落小学、貧人小学、小学私塾、幼稚小学があった。
- (71) 尋常小学の教科のほかに、女子の手芸を教えるもの（「学制」第二十六章）。教員については「学制」第四〇章に、「小学教員ハ男女ヲ論セス年齢二十歳以上ニシテ師範学校卒業免状或ハ中学免状を得シモノニ非サレハ其任ニ当ルコトヲ許サス」とある。
- (72) 一八七三年、東京府小学教則講習所として開所。後に、東京府師範学校
- (73) 一八七三年、東京府小学教則講習所として開所。後に、東京府師範学校
- (74) これまで一八七五（明治八）年一月八日とされ、また筆者もそれによつてきたが、二〇〇七年発刊の『跡見花蹊日記』『跡見花蹊略歴』には、一八七五（明治八）年七月一〇日から学校建築に取りかかり、同年暮に落成した。また一八七六（明治九）年一月八日が吉辰なので開校式を執行した、とあるためこれに従う。
- (75) 『跡見女学校五十年史』跡見女学校 一九二五年、一三三、三三三頁
- (76) 江戸時代、主に儒学者・国学者・洋学者が開設した私設教育機関としてあったのが私塾で、庶民の教育施設としてあったのが手習塾（寺子屋）であった。一八七二年に「学制」が頒布された後は、寺子屋も私塾に入れられた。
- (77) 家塾とは、「学制」第二十八章によれば、変則小学（教科の順序を踏まず小学の科を教える）を私宅において教えるものをいう。（『明治以降教育制度発達史』第一巻、二八五頁）また「学制」第四三章には「私学私塾及家塾ヲ開カント欲スル者ハ其属籍住所事歴及学校ノ位置教則等ヲ詳記シ学区取締ニ出シ地方官ヲ経テ督学局ニ出スヘシ」とあり、私学とともに私塾、家塾も存在したことがわかる。
- (78) 『日本教育史資料』八巻・九巻 文部省御蔵版 富山房 一九九二年。
この『日本教育史資料』八巻・九巻は、江戸期から明治初期にかけての私塾・寺子屋、家塾を調査したものであるが、跡見重敬・跡見花蹊に関しては、大阪、京都、東京いずれの場合も掲載がない。いっぽう福沢諭吉の慶應義塾、大阪の含翠堂、懷徳堂など、大小さまざまな規模の寺子屋、私塾、家塾が掲載されている。
- (79) いけばなや茶の湯は出稽古というものがあり、師匠が稽古先の邸宅に出向いて教えることが多かった。
- (80) 制度上のことだけでなく、男児の在学は確認される。『跡見女学校五十年史』跡見女学校 一九二五年、二三、三三頁

- (81) このほか花嫁は数多くの揮毫をしたことなどが日記からわかる。
- (82) 前掲注68『東京の女子教育』一、二三～二四頁
- (83) 『跡見学園九十年』跡見学園 一九六五年、二六、二七頁
- (84) 前掲注68『東京の女子教育』二〇四、二〇五頁
- (85) 前掲注2『花』の成立と展開 二五〇、二五一頁
- (86) 前掲注2『花』の成立と展開 二六三～二六六頁
- (87) 前掲注2『花』の成立と展開 二六七～二七〇頁
- (88) 木津宗詮『木津宗詮——武者小路千家とともに』宮帯出版社 二〇一五年、一一九頁
- (89) 前掲注2『花』の成立と展開 二六六頁
- (90) 前掲注2『花』の成立と展開 二七〇頁。同校では「習字」「絵画」が学科目として特有の科目と位置づけられた。
- (91) 前掲注2『花』の成立と展開 二七〇頁
- (92) 前掲注68『東京の女子教育』一〇九～一一三頁
- (93) 前掲注68『東京の女子教育』一一二、一一三頁
- (94) 興文社編『東京留学指針』興文社 一八八九年、九四、九五頁
- (95) 前掲注68『東京の女子教育』二〇〇、二〇一頁
- (96) 教育者。華族女学校、東京女子師範学校でも教えた。
- (97) 前掲注68『東京の女子教育』一〇九～一一二頁
- (98) 黒川俊隆編輯『東京遊学案内』少年園 一八九四年、一五〇頁
- (99) 前掲注2『花』の成立と展開 三〇九、三一〇頁
- (100) 吉田光邦『図説万国博覧会史——一八五一～一九四二』思文閣出版 一九八五年
- (101) 本稿は、クララ・ホイットニー著・一又民子他訳『勝海舟の嫁 クララの明治日記』上・下 中央公論社 一九九六年（日記の期間は、一八七五年八月三日～一八八〇年一月二六日。一八八二年一月二五日～一八八四年一月一二日。一八八七年四月一七日）、Clara A. Whitney, *Clara's diary: an*

- American girl in Meiji Japan*, Kodansha International, 1979) を使用した。
- (102) 父、母、兄、クララ、妹
- (103) アメリカでのホイットニー家は、多くの日本人留學生が集い、訪れる家であった。
- (104) クララ・ホイットニー著・一又正雄編訳「青い目の嫁」が見た勝海舟」『文藝春秋』一九七四年一〇月号、佐野真由子「クララ・ホイットニーが綴った明治の日々」臨川書店 二〇一九年を参考にした。
- (105) 明治初期開校のキリスト教主義女学校については、前掲注9「近代日本のキリスト教主義女学校と精神修養——いけ花・茶の湯・礼儀作法・武道との相関を通して」『日本の近代化とプロテスタンティズム』に詳しい。
- (106) クララは東京女子師範学校を「皇后様の学校」と呼んでいた。皇后美子（昭憲皇太后）は女子教育に造詣が深かったことで知られる。クララは一八七九年四月二六日、「木曜日は、リーランド博士に招かれて、ド・ボワンヴィル夫人といっしょに皇后様の学校に行き、女生徒の柔軟体操を見た」と記している。
- (107) 中村正直（一八三二～一八九一）、一八七三年、同人社（男子教育）を創立、一八七九年同人社女学校を開校、クララの母親は同校で聖書を教えることを頼まれた。しかし翌一八八〇年八月、経営難から廃校となった。後に東京女子師範学校摂理（校長）、東京帝国大学教授、女子高等師範学校校長を歴任した。
- (108) かつて、クララの父が開いていたアメリカ東海岸ニューアークの商業学校で学び、それ以後一家と深く親交を結んでいる。
- (109) 一八七八年六月一四日の記事にはホイットニー一家は、勝家の友人と認識されていたこと、またホイットニー家の人々は、「やさしい外国人」「日本人の味方」「親切な人」といわれていたことが記されている。
- (110) 一八七九年四月二日の記事による。
- (111) 一八八四年一月一二日の日記に、一月三日、井上馨伯爵が天長節の

舞踏会を催し、兄ウィリイとクララは、公使の家族とともに出席したとある。約千五百の招待状が出され、ほとんど全員が出席したという。あまりにも人がいっぱい、暑すぎたと記している。

- (112) 最初の帰国が迫った一八八〇年一月一七日、勝家に泊まった際、勝家の人々と「日本語だけを使ってみんなの話に加わった」と記している。

- (113) 雑誌社への投稿、また親族へも書き送った。

- (114) 日本文化に関してはこのほか雅楽についても興味を持って記している。

曾我芳枝『クララの明治日記』に見る日本文化——『雅楽』を中心として

- (115) 『東京女子大学比較文化研究所紀要』第七二巻 二〇一一年

- (116) クララ・ホイットニー著・一又正雄編訳『青い目の嫁』が見た勝海舟

『文藝春秋』一九七四年一〇月号、三四頁

- (117) この日記のなかで女子はおよそ一七歳〜一九歳で結婚している。

- (118) お逸は月琴が得意であった。また、クララはお逸に音楽の授業をしている（一八七七年八月一日ほか）

- (119) 花の伝書『仙伝抄』以後、多くの花の伝書や独習書『生花早満奈飛』^{いげばなはやまなび}はかに見られる。

- (120) 内田夫人とは勝海舟の長女ゆめ、のこと。内田家に嫁したものの未亡人となり、子がなく、勝家に住んでいた。勝家次女（正田）孝子の次男を養子にした。

- (121) 江戸時代中・後期に生み出された、いけ花の様式の一つ。主に三つの役枝によつて三角形を構成し、それを水際で一つにまとめている。花留めは立花様式が込み藁であったことに對し、又木、観世水（流水模様）や蟹や亀の形のものを使用した。

- (122) 小林善帆「女性といけ花 第一一回（風流挿花会）」『小原流挿花』一般財団法人小原流 二〇一七年一月号、三二頁

- (123) 先に述べたように、この時すでに一家は勝家屋敷内に住んでおり、庭の花は勝家所有のため、お逸に切ってもらったのであろう。両家の交流は頻

繁に行われていた。

- (123) 杉田玄瑞は福沢諭吉と親しい医学者、杉田玄白の曾孫。ホイットニー家が懇意にしている外交官富田（鉄之助）夫人の叔父にあたる。この日は、富田夫人とともに、杉田家を訪れた。またその息子杉田武は英語が堪能で、ホイットニー家の通訳をしている。

- (124) 江戸中期に、稽古上達のために作られた点前。大勢の門人を一度に教えることができ、一般的なものであった。

- (125) この日の日記の冒頭にクララは、私たちの生活はとても華やかになつてきた、と記していることから、日本での生活が精神的に安定してきたと考へる。

- (126) 『百人一首』のことと思われる。江戸時代に女子の読み書き教材でもっとも多用されたのは、『女大学』『女今川』『百人一首』であった。

- (127) 琴については、歌川光一『女子のたしなみと日本近代——音楽文化にみる「趣味」の受容』勁草書房 二〇一九年の研究がある。

- (128) お逸の場合、月琴も得意としていた。クララもお逸から弾き方を教えてもらい、自分の月琴を持っていた。月琴とは、満月のような円形の共鳴胴に琴杵を持つリユート属の撥弦楽器で、日清戦争時に敵性楽器として廃れた。

- (129) 『福沢諭吉全集』第六巻 慶應義塾編 岩波書店 一九五九年、五〇八頁
前掲注2『花』の成立と展開 一七五頁

- (130) イザベラ・バード著・時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行』上・下 講談社 二〇〇八年を使用した。

- (131) イザベラ・バードは紀行（前掲注130）の「まえがき」（六頁）で、「正確を期すことがわたしの第一目標だったが、誤った情報源は多い。慎重であろうとしながらも誤りを記してしまった場合は、細心の注意をもって日本を研究し、正確な情報を得る困難さを重々ご承知の人々もきわめて寛大にお許し下さることを思う」と述べている。

- (132) パット・バー著・小野崎晶裕訳『イザベラ・バード——旅に生きた英国婦人』講談社学術文庫 二〇一三年、一五七～一五九頁
- (133) 紀行（前掲注130）「まえがき」四、五頁
- (134) 歌や踊りの伴奏に欠かせないこともあり小さな頃から習わせた。三味線の師匠は女性がほとんどだった。
- (135) 『図説 江戸・幕末の教育力』洋泉社 二〇一三年、一一〇頁
- (136) 前掲注135『図説 江戸・幕末の教育力』一〇一頁
- (137) いけ花の独習書『生花早満奈飛』は、江戸後期以降、多く刊行されたが、このような類いのものと考えられる。
- (138) コンドルといけ花については、吉川順子「欧米諸国におけるいけ花受容の史的研究」『いけ花文化研究』第七号 国際いけ花学会 二〇一九年、五六～六三頁、菅靖子「両大戦間期イギリスの空間のジャポニズムにみる生け花・盆栽の影響——『ステューデオ』誌の検証を中心に」『デザイン学研究』五七巻四号 二〇一〇年、二、三頁を参考にした。
- (139) Josiah Conder, *Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*. Tokyo: Hakubunsha, 1891. 国立国会図書館蔵
- (140) Josiah Conder, *The Floral Art of Japan: Being a second and revised edition the Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*. Yokohama: Kelly and Walsh, 1899. 国立国会図書館蔵
- (141) 小林善帆「女性といけ花 第一三回 ジョサイア・コンドルといけ花」『小原流挿花』一般財団法人小原流 二〇一八年一月号、三三三頁
- (142) Josiah Conder, *Translations of the Asiatic Society of Japan* Vol. 17, 1889; Kobe: J. L. Thompson, 1935. 国立国会図書館デジタルコレクション
- (143) 前掲注140
- (144) 前掲注138 吉川順子「欧米諸国におけるいけ花受容の史的研究」五〇、五一頁
- (145) 前田正名（一八五〇～一九二二）薩摩藩士漢方医の家に生れる、二〇歳でフランスに留学、官僚、男爵。明治政府の殖産興業政策の中心的人物（祖田修『前田正名』吉川弘文館 一九七三年）。
- (146) マウゴジャータ・ドウトカ「明治前期のIKEBANAを伝える言説——西洋諸国向けのいけ花紹介を中心に」『いけ花文化研究』第八号 国際いけ花学会 二〇二〇年、四一、四二頁。また、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』思文閣出版 二〇一七年、を参考にした。
- (147) 同博覧会については、味岡京子「1893年シカゴ万国博覧会「女性館」への日本の出品——「女性の芸術」をめぐる」『人間文化論叢』第九巻 二〇〇六年に詳しい。
- (148) 米国博覧会日本婦人会編『日本の婦人』大日本図書 一八九五年、一六五頁
- (149) 前掲注2『花』の成立と展開「二〇七～二七頁、参照。また、学校で習得しなくても、家庭において習うことができるものでもあった。
- (150) 前掲注2『花』の成立と展開「三八一～三八六頁、参照

戯画化されるニーチェ

——「滑稽」と「諷刺」の模倣

清松 大

はじめに

一九〇一（明治三四）年八月、高山樗牛が『太陽』に発表した「美的生活を論ず」が広く文壇の耳目を集め、ニーチェ思想をめぐる大きな論争を巻き起こしたことはよく知られている。人生最大の幸福は「人性本然の要求」としての「本能の満足」すなわち「性慾の満足」にあるとした樗牛の主張は、批判的な言説を中心として大きな反響を呼ぶことになる。樗牛はすでに「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」（『太陽』一九〇一年一月）でニーチェを取りあげていたが、文壇を熱狂的なニーチェ論議へ駆り立てたのは、

むしろニーチェへの言及のない美的生活論であつた。

このことは、当時「ニーチェ通の第一人者と目されていた」登張竹風が「樗牛の主張はニーチェ思想に基づくものであると解説したこと」^①に大きな要因がある。竹風は「美的生活論とニーチェ」（『帝國文学』一九〇一年九月）において、美的生活論は「明かにニイチエの説にその根拠を有す」、「高山君の美的生活論を解せむと思はむ者は、またニイチエの個人主義を解せざるべからず」などと述べ、樗牛の「本能主義」をニーチェの個人主義思想と結びつけている。もつとも、重松泰雄が美的生活論の成立をニーチェ思想とは全く異なる視角から跡づけて以降、^②そもそも竹風の解説自体が樗牛の論旨を誤解した我田引水の論理であつたことが繰り返し指摘されてきた。^③

とはいえ、前述のように樗牛自身がニーチェに接近していた時期に重なっていたこともあり、結果として美的生活論は、樗牛本人の真意とは離れたところでニーチェ思想との強固な関連性を付与されながら流布していくことになる。

右のような議論の歪曲は、竹風の例に端的に表れているように、美的生活論やニーチェ思想をめぐる議論が文学者や評論家たち各人の価値観や主張を投影する媒体としても機能していたことを意味してもいよう。ジェニファー・ラトナー＝ローゼンハーゲンは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのアメリカにおけるニーチェ受容史を、「ニーチェの決然とした挑戦を前にして、それに抵抗したり思索をめぐらすことによつて、アメリカの読者が自己についてまた同時代のアメリカについて、自分の価値観を形成してゆく歴史」と意味づけている。本稿もまた（必ずしも直接的なニーチェ著作の読書様態を扱うものではないにせよ）、ニーチェ受容史の再検討を通じ、従来とは異なる角度から明治期日本の文学者や文学青年たちの営為を照射しようとするものである。

特に高山樗牛については、明治のスター論客として青年層から敬慕された対象として語られることが多かった。^⑤しかし、ここではむしろ、『文庫』や『新声』といった青年雑誌と樗牛との間に明確な緊張関係があったことに着目したい。そのことによつて、当時の文学空間における高山樗牛という存在の位置づけや、「青年」たちと

の関係性についても、従来の認識とは異なる側面が見えてくるはずである。まずはその糸口として、坪内逍遙に端を発する戯画的なニーチェ像の形成と流布に注目し、そこに引き起こされた論争の意義について考察していきたい。

一 「美的生活」論争から「馬骨人言」論争へ

まずは、この時期のニーチェ流行および美的生活論をめぐる論争の性質を確認しておく。美的生活論に対する多くの反応が様々な媒体で観測されることは、すでに笹淵友一や修斌らの調査によつて明らかにされており、大町桂月や樋口龍峽ら東京帝国大学出身者からも批判の声が上がったが、その中でも「最も執拗な批判を展開したのが、早稲田派の文学者たちであつた」。^⑦そこには、いち早く「美的生活とは何ぞや」を『読売新聞』（一九〇一年八月一九・二六日）に発表し、その後も再三にわたつて美的生活論を批判した長谷川天溪を筆頭として、後藤宙外、中島孤島といった論者が名を連ねる。^⑧

そして、早稲田派による攻撃の中でもひときわ異彩を放つのは、『馬骨人言』（『読売新聞』一九〇一年一月二日～一月七日、掲載当時は「×××」と署名）と題された坪内逍遙の批評である。同記事は、「何事も流行向の事さ。名からして粘（ねん）ばりとニイチェく」と言はぬと、此のせつの文壇では幅が利かぬげな。自分はニイチ

チェさま信仰でなければ、独逸語も知らぬが、英吉利人の通弁と同国製の蓄音機^{じこみ}で、ほんの一二度、知りあひのやうなものになつたら、ちいとばかり魚まじりの猿真似を申さう」(一〇月一二日)といった論調で、皮肉とユーモアたつぷりに、ニーチェの思想やその「信徒」たちを痛罵していく。さらに連載四回目(一九〇一年一〇月一日)では、「ニーツチェ大師」という見出しで次のように述べられている。

一 ニイツチェの信徒もいろいろだ、本大陸の阿羅漢連をはじめに、英吉利、亜米利加、乃至東西南北の殖民地、ずつと昇つてそんじよそこの声聞縁覚又の名はニーツチェはいから、護謨はいからの執れはあれど、皆一網にひきくめて、南無ありがたい御法門の縁起大略、あらゝく代言したら、かうもあらうか。

一 帰命頂礼、こちらのニーツチェ大師は滔々たる全欧羅巴の悪時代精神に反発し、憤激し、竟に憤然決起して大胆な新見を唱破せられた豪邁卓落の大天才、不世出の大批評家であらつしやりまするぞよ。

このように、仰々しい仏教用語を多用しながら、ニーチェの思想やその「信徒」たちを嘲笑するのが「馬骨人言」の語法¹¹であつた。

また逍遙は、ニーチェが直面した一九世紀ヨーロッパの「悪時代精神」を「科学と歴史」「平等主義、禁欲主義、常識主義」「国家主義と服従主義」の三点に切り分け、それらを攻撃することを「ニーツチェ宗の大綱」、「ニーツチェイズムの破壊的方面即破邪門」(二〇月一六日)と位置づける。しかし逍遙は、「要するに此の大師さま、おのが手前を見るほどの目はあれど、後を見かへる眼はなく、客観的事変の諸^{もろ}の歴史、政治史、宗教史、実業史、社会進化史などが目に見えぬと同時に、主観的思想の変遷、哲学史、倫理史、文芸史なども皆目見えぬ」(二〇月一九日)とニーチェによる文明批評を酷評し、ニーチェをまつりあげる人々に対しても「畢竟は俊才たちの思ひつき、ニーツチェ坊の楯蔭で勝手に大気焔を吐かうがためだ。若い衆が発起の臨時祭と同格で、飲みたさ、踊りたさが主で、知らぬが仏の神さまはほんのダシ」(二月七日)と鋭い舌鋒を向ける。こうした戯作的な文体や、「読者に滑稽感をもたらず」「大袈裟な物言い」は、明治初期以来の『読売新聞』をはじめとする「小新聞に特徴的な書き方」¹²を踏襲するものでもあつただろうか。そして連載の最終回では「シヤギリ」として狂言めいた形式のもとに幕が引かれる。

これに対して樗牛は、同年一月の『太陽』『文芸時評』欄で「ニーチェの批難者」と題し、「何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、転生などの事になると、流石に俗学者の知解に

入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチエを批評し得るものならば、世に批評はど容易なものはあるまいよ」と反駁した。竹風もまた「馬骨人言を難ず」（『帝国文学』一九〇一年十二月）において、「馬骨人言の如き批評を以て識見高邁なりと賞する吾文壇は、未だニイチエを知らず、ニイチエを解せざるなり」と不快感をあらわにしている。一方の逍遙も「帝国文学記者に与へて再びニイチエを論ずるの書」を『読売新聞』に連載（二月一八〜二二日）して竹風に応酬、さらに翌年二月の竹風「馬骨先生に答ふ」（『帝国文学』）へと論戦は続いていくことになる。

このような論争が繰り広げられる一方で、逍遙がつくりだしたニイチエ戯画は、いつしか彼自身の手を離れて独自の展開をみせていく。杉田弘子は、「逍遙の激しいニイチエ批判が、『読売新聞』という大商業新聞に一ヶ月近くも面白おかしくほとんど連日掲載されたことは、ニイチエの名を一躍世間一般に浸透させる効果があつた¹³⁾」と推測するが、実際に同時期の新聞や雑誌をみれば、その反響の大きさがわかる。『太陽』『海内叢報』（一九〇一年一月）中、「文学美術」の項には、ニイチエに「私淑」する樗牛や竹風に対し「ニイチエを冷かに見て、其矛盾其真相を發きて、その蔓延を防がむとするは、読売紙上の馬骨人言なり、其文諧謔と理論とに富み、読んで実に痛快と叫ばざるを得ず」と記されている。また同月の『新声』『文芸小観』欄も、「今日快心の文字、他に少からざらむ、

而かも馬骨人言の痛快淋漓として他の頑冥者流を警醒するに若くものなきなり」と、『太陽』と同じく「馬骨人言」を「痛快」と評している。さらに同月の『中央公論』に掲載された、秋風子「落葉片々」も、「読売」紙上掲載の「馬骨人言」、識見高邁、学殖豊富、真個近時得易からざるの大文字」と絶賛したうえで「ニイチエの祖述者、之れに拠つて幟を文壇に樹つるや、惶惶走せて門に赴くものあり。未だその説の是非を究めずして、忽ち雷同附和す、文壇の輕浮まことに以て慨するに足る」と逍遙の意見に同調している。

また一方で注目したいのは、「馬骨人言」の語り口を模倣するかのような戲作的言説である。同じく『中央公論』所載の「文壇屠蘇機嫌」（無署名、一九〇二年一月）の一節を引く。

をいく君は山伏のなりをして何処へ行く。青琴寺の古羅漢へ参詣しやうと思つて、して君はどちらへ。僕か僕は、ニイチエ大師へお詣りをしやうと思ふが、方角が知れないので困つて居る所さ。ニイチエなら直ぐこの先さ、併しあれは大師ではない、癲狂病院の親方だよ。さうか、それちや有難味がなくなつたが、併し君はどふしてそれを知つて居る。何、この麓で文壇地理案内といふのを見たから。

このように、「ニイチエ大師」という言葉を用いて文壇の流行を

戯画化する特徴的な語り口からは、「馬骨人言」の影響がうかがわれる。

ここで『中央公論』というメディアの性質を確認しておこう。周知のように、『中央公論』は当初『反省会雑誌』という名で一八八七（明治二〇）年に創刊された仏教系の禁酒会雑誌であった。浄土真宗西本願寺派の学生有志が起こした同誌は、永嶺重敏⁴¹によれば明治二〇年代中頃から「次第に仏教雑誌・宗教雑誌としての性格を強めてい」き、一八九三（明治二六）年には『反省雑誌』と改題し一八九六（明治二九）年には京都から東京へ進出、一八九九（明治三二）年に『中央公論』と名を改めた。ニーチェ論争の渦中、右のような記事が掲載された一九〇一、二年当時は、「小粒な仏教主義の雑誌」（永嶺）にすぎなかった同誌で、「ニイチチェ宗」「ニイチチェ大師」などといった宗教的表現を用い、仏教用語を多用する「馬骨人言」の文体が模倣されたことは、さほど異様なことではないようにも見える。

とはいえ、この時期の『中央公論』は、「宗教」欄のみならず「公論」、「海外新潮」、「評論」など多彩な誌面作りを展開しており、林田春潮による文学関連の記事や、時折は小説も掲載していた。前出の永嶺によれば、この時期の同誌の主たる読者層は「文学志向の学生青年層」であり、雑誌『文庫』の記事「地方の読書界」（一八九九年八月）によれば、文学好きの高等学校生徒や大学生の多

くは『帝国文学』や『早稲田文学』を読んでいたが、他に『中央公論』を読んでいるものも少なからずいたという。そして、「馬骨人言」の影響を感じさせる戯画的ニーチェ像の模倣は、『中央公論』と同じく文学志向の青年層に支持されていた『文庫』や『新声』といった雑誌において、とりわけ多く観測される現象でもある。以下に、その様相をまとめていくこととする。

二 「馬骨人言」から青年雑誌へ

まずは『文庫』からみていきたい。八面坊「片言」（一九〇二年一月）には、「高山樗牛^{マヤ}が、いつかの『太陽』で女子大に装ふ可し、女学生の髪、何ぞ蓬々たるやつて様なことを公言したが、何のモルモン宗ぢやあるまいし、女一人に男一人の世の中だ、美しいとて、飾るべきは唯一人のため、□衆男児に媚を呈して、夫れで始めて妻に娶らるゝ様ならば、天下の婦女子は、取も直さず、芸妓である娼妓である、ニツエチズムも大概にせぬと、風俗壊乱として引縛るぞ」（□は一字分空白）とある。ここからは、もはや樗牛のあらゆる発言が、ニーチェイズムという先入観を避けて通れなくなっていることがみてとれる。

また、翌月の「諷叢」欄には「当世狂言尽 新宗論」と題する無署名記事がある。少々長くなるが、その一部を以下に引く。

△「こなたは、何処より何方へお通りやるぞ。」

○「これは早稲田辺に住居する坊様でおじやるが、鎌倉へ参る道中のござる。」

△「愚僧も鎌倉へ参るものじや、さらば御一所に参らう。」

○「これはよい道連れじや、してお僧は何処の和尚様でござりまするな。」

△「愚僧は隠れもない本能宗の六和尚でござる。」

○「左様でござるか、さらば赤門の和尚殿でござるか。」

△「なか。」

○「な」と和尚様、かく連れ立つ道々も、互ひに法談の致いたら、仕へ奉る、仏の為にながめるでござらう。（中略）

△「さらばこの方から始めよう、よつくお聞きやれ、そもく本能宗の御本尊は、舶来の秘仏、「ないちえ」尊者の、らいん河の辺りに説かせられた有難い法門じや尊者其時の御誓いには、此世ほど有難い者はない、何なりとも、したい事は此娑婆でなくては埒が明かぬ、世間の人の云ふ事は、みな人々の勝手から出来たことじや、その勝手の世じやによつて、己が勝手にせいであるものか、何んにも思ふ儘の事をするのをば、本能満足といふて宗門勘甚勘文南無妙あーめんとは申す（中略）

○「汚らはしやく、なんのそれが有難いことであらう、こな

たの法談説いてお聞せ申さう（中略）其方の宗門の承はつた以上は、たゞいま之を破つて見せう。（中略）

△「さりとは底の見え透く玻璃の様な法談じや、飲まぬ水の冷めたい味はわからぬ、独逸の言語も分らぬ癖に、「ないちえ」尊者の有難いことが腑に入るものか、片腹痛い事でおりのやる。」

○「これはしたり和尚殿、和僧如きが少々位蟹文字を読んだとて、何んの深い事が了らうぞ。」

△「いやく了らぬ事はない、ずっと深く、井筒の中へ石を落とすよりも直ぐに了る、これを天才と云ふわいやい。」

○「天才といふは氣違ひのことじや、其方ごとき学問のない天才をば、疵入天才と云て、世間のもてあつかい者じや。」

△「そなたの様な馬の骨が何にを知るものぞ。」

○「馬の骨じやとて、人の如くものを言ふぞよ。」

「本能宗」の「赤門の和尚」とは樗牛をさすもの（あるいは『帝国文学』で樗牛の擁護を行っていた竹風をも含むか）とみてよいだろう。和尚は、ドイツ語も読めないくせに「ないちえ」尊者の有難みなどわかるものかと反駁し、「そなたの様な馬の骨が何に知るものぞ」と吐き捨てるが、それに対する「馬の骨じやとて、人の如くものを言ふぞよ」という言葉によつて「早稲田辺に住居する坊様」

が逍遙をさしていることが明らかとなる。ここでは、「馬骨人言」を源流とする戯作的なニーチェ関連言説の系譜を引きながらも、いわば「馬骨人言」それ自体を対象化して組みこんだ戯画化がなされているといえる。そして、これは明らかに狂言の「宗論」をふまえている。「宗論」は、それぞれ身延山と善光寺への参詣の途上にある法華宗の僧侶と浄土宗の僧侶が道連れとなり、互いの宗派の優劣を競って論争を行うという筋書きである。いわば、ニーチェイズムの流行を通俗的な仏教用語や観念にあてはめながら戯画化するという「馬骨人言」の方法が踏襲されながら、なおかつ狂言という芸能の形式を借りた「滑稽」化がなされているのである。

次に、『文庫』と同じく青年投書雑誌としての側面をもつ『新声』をみていきたい。同誌の「文芸小観」欄が「馬骨人言」を賞賛したことは前述のとおりだが、ここでは「甘言苦語」と題された、文壇・論壇時評を中心とする雑報欄をみてみたい。一九〇一年一月の同欄で「阿羅漢」と名乗る記者は、「近頃滑稽なるはニーチェイズムの流行」としたうえで、「一体我国の人士は猿の口真似をやるの外、何ものをも有して居ない無能力の学者が多いのだ、ニツチエズムを吹聴して廻る連中は、恐らく此手合ではあるまいか、かれ等は一体十九世紀の個人主義が如何に極端迄拡充せられて多くの弊害を生じたことを知らないのでもなからう（中略）過去十九世紀の惨劇を瞥見しながら、頻りとニーチェイズムを鼓吹するものは、畢竟す

るに自家の創見なきがために、他の禪を昇いて、得々と自己の学力を吹聴するの亜流であると云つても、恐らくは異論があるまい」と述べている。

ところが同一二月の同欄において「阿羅漢」の口調は一変する。「近頃ニツチエーズムの大流行によつて、ニツチエー先生大に恐縮の体だらうと思ふよ。ニツチエーを曲解して天才の紹介者は拙でござい！と怒鳴る先生もあればニツチエー一手販売は此処だよと澄ましこんでエヘンと髯を撫でる先生がある、も一つ親切にもこれを材料^たに使つて、文学者となりすます先生がある、かう何処にも振りまはされては、流石の天才も恐縮してしまうだらう」。同一の記者による記事であつても、「馬骨人言」が世に出る前と後とは、その論調が大きく変容していることが如実に見てとれる。さらに、この月の同欄では「罵倒観音」と名乗る記者も、「何でも近頃は評判々々で売り出すので、『寝みだれ髪』でも『ニーツエ』でも『美的生活』でも穢多芝居よろしくで、楽屋から声ばかり掛けたので、明年も亦此通りかと思ふと情けない訳さ、ハテ、ツガもねえ」と、やはり「馬骨人言」の影響を感じさせる戯文調を用いている。

さらなる類例として、黒田湖山を主筆として美育社から創刊され、巖谷小波の「木曜会」に集まっていた生田葵山や永井荷風、押川春浪らを中心として刊行されていた雑誌『饒舌』を挙げておきたい。同誌創刊号（一九〇二年二月）には、「くろすけ」（黒田湖山か）の署

名のもとに「運動甚句 ニーチェ主義」という記事が掲載されている。そこでは、「今宵忍ぶなら／ニーチェ全集持つて忍ばんぜ／モシモ、人がとがめたら、／本能主義ぢやと言つて／ぬけしやんせ／尤も、独逸語をチョトかじり／出てくりや、真から可愛い。／学士登張さんと博士高山さんは／ニーチェで名をうる」とうたわれる。甚句という江戸的な俗謡によつてニーチェの喧伝を戯画的に描き出したヴァリエーションといえる。

また、同誌第二号（同三月）の「木曜会日記（二月）」をみると、「会にて朗読、批評を望みたるもの」の中に押川春浪の「色界ニイチエ」という作品が挙げられている。これは、のちの第五号（同六月）に掲載された「滑稽的死亡」という短編小説の原型と推定される。主人公の丸山は謹直かつ敬虔なクリスチャンであり、性的な遊蕩や酒、煙草などを卑しむ人物として造形されているが、物語の結末で、このような人物像は反転されることになる。「倒家三千軒、死人三万人」という大地震の起きた翌日、丸山は「誤解されたるニイチエ宗の本陣——とばかりでは分るまい、即ち大日本東京浅草区新吉原揚屋町辺のとんねる横町、倒れたるちよんく格子の下」から発見され、語り手は「パラダイスに行く事疑ひ無し、盖し先生宗教道德を説いて金を儲け、其金で女郎を買ひ、本能を満足せしめつゝ現世を去つた、満足して死ねば幽霊になる氣遣も無し」と物語を締めくくる。地震によつて崩れた吉原の町内から丸山の遺体が発

見されることで、謹厳と目されていた彼の本性が明らかになるというブラックユーモア的な筋書きだが、「誤解されたるニイチエ宗の本陣」や「本能を満足せしめつゝ現世を去つた」といった言葉からして、この結末部分が美的生活論をふまえて書かれていることは明らかである。

このように、「馬骨人言」の出現以降、『新声』や『文庫』、『饒舌』といった青年雑誌では、ニーチェイズムの流行をモティーフとしながら、さらなる「滑稽」のヴァリエーションが創出されていた。このことは、樗牛というアイコンと同時代の「青年」との関係性をめぐる一般的な理解の図式を反転する契機をはらんでいるよう。従来、樗牛という存在が青年たちにとつての敬慕の対象として位置づけられてきたことは本稿冒頭でもふれた通りである。しかし、ニーチェ論争の渦中において青年雑誌の論者たちは、樗牛という存在や「本能主義」という思想を容赦なく「滑稽」化し、時には、「滑稽」的なニーチェ像をつくりだした張本人たる逍遙をも組み込みながら、ニーチェ思想や美的生活論をめぐる論争そのものを戯画化していくのである。

こうした現象をとらえるには、当時の青年雑誌の位置どりを確認しておく必要がある。関肇は「青年による青年のための投書雑誌」として『文庫』を位置づけ、同誌と重なる読者層を抱えながら競合していた雑誌として『新声』を挙げているが、関によれば、この時

期の文学青年たちは「既成文壇への徹底した批判者たることにみずからの役割を見出していった」¹⁵。小島烏水「文壇に於ける『文庫』の位置」(『文庫』一九〇一年一月)では、「既成文壇において創作は硯友社が独占し、評論は赤門派が支配し、その両方面を兼備するものに早稲田派があるというように、いわゆる『文閥』が横行しているが、この風潮を打破し、「停滞沈澱の患ひ」をなくしていかなければならない」とする主張が示されている¹⁶。

また、前述のように黒田湖山や生田葵山など、巖谷小波門下の木曜会会員を中心として創刊された『饒舌』については松田良一の考証¹⁷があるが、松田によれば、一九〇〇(明治三三)年九月に会的主催者である小波が渡欧したことで「青年会員達は、いわば庇護者を失い木曜会そのものも崩壊の危機に瀕していた」。湖山や葵山は、かねてより紅葉門下生たちにライバル意識を持つており、文芸評論等で硯友社系作家への攻撃を行っていたため、「紅葉門の勢力圏の『新小説』へ作品を送つても掲載されず全く疎外されてしまった」。そこで会員たちは大学館の雑誌『活文壇』を復刊させ、葵山を主任とし「他の青年雑誌の戦略と同様に文閥打破を、西欧文学摂取を鮮明にし」ながら、そこに活路を見出そうとした。しかし『活文壇』は「同じ投書雑誌という性格を持つ『新声』や『文庫』の挾撃にあい」、一九〇一年一〇月をもつて廃刊に追いこまれる。そこで再起をはかるべく創刊されたのが『饒舌』であった¹⁸。

こうした青年雑誌の動向には樗牛も目を向けていた。『太陽』「文芸時評」欄(一九〇一年一〇月)において樗牛は、「少年文学雑誌の数、今日殆ど十を以て数ふ。新声と文庫とは其の尤なる者也。概ね是の種の雑誌、文の読むべきもの少く、事の記すべきもの稀なり。(中略)少年諸子の為に計る、是の如きは百の害ありて一の利無し」と、『新声』や『文庫』を名指しにしながら、青年雑誌に対する敵意を露わにしている。

それに対して『文庫』側も、翌月の「編輯局内観」において、「樗牛と申さるゝ人、『太陽』にて少年雑誌の悪弊を挙げ、(中略)本誌の名をこの中に算へたるは、寢惚加減の度が知れぬと申すものにて候」とし、「それよりもお手近の『太陽』や『帝国文学』でも読んで、いかにその『文の読むべきもの少く事の記すべきもの稀なる』にお気を注げられた方、危なげなかるべくや」と、樗牛の言葉をそっくりそのまま返しながら反撃を加えている。さらに同月の『新声』「文芸小観」欄も「無礼の言」として樗牛の発言を取りあげ、「漫りに自ら高うして他を蔑視せんよりは、まづ足下の座右に目を止めざるべからず」としている。このように、青年雑誌と樗牛との間には明確な敵対関係があった。

諧謔性を有しつつ諷刺的な調子で描き出されるカリカチュアは、右のような青年雑誌の性質を少なからず反映するものでもあっただろう。そこから浮かび上がってくるのは、樗牛というアイコンを敬

慕してやまない心酔者としての青年たちではなく、文壇の周縁に置かれながら、「文閥打破」というスローガンのもとに中央文壇・論壇への対抗意識を燃やす青年たちの姿である。

それにしても、既成文壇の中心的存在である樗牛を攻撃するために、ことさらに「滑稽」という武器が選ばれたのはなぜだろうか。その源流を探るべく、同時代の文学空間において「滑稽」という概念がどのように位置づけられていたかを追ってみた。

三 「滑稽」と「諷刺」の効用

その糸口として、やはり『新声』誌上において「滑稽」的なニイチエ像の再生産を担っていた阪井久良伎の動向を追っていききたい。

『新声』一九〇一年一月の「弦月会の記」（署名・萍緑庵）には、「新声誌友懇話会」とされる「弦月会」が催されたことが記されているが、同号に掲載された久良伎の「弦月会大会に寄す」は「新聞の一口話」の形式をとりながら、「只来会者諸君が、アハハ、と大口をあいて、腹を捧^かへればソレで会の能事足りりで、コレでこそニイチエ大明神の本能主義にもかなうのである、ソレはソレ、コレはコレとしておいて何か、我が本能の「滑稽主義の鼓吹」とでも題してシヤベロウかと思ツたが、例のお談義に陥りそうであるから見合せて」などと語っている。「本能主義」という美的生活論の用

語を使い、ユーモラスな語り口で滑稽談に仕立てあげる久良伎の筆法は、「ニイチエ大明神」といった語彙からして、やはり「馬骨人言」との相似性を有している。

これと関連して興味深いのは、翌一九〇二（明治三五）年五月の『新声』に掲載された「珍派園遊会」（署名・珍派子）である。この園遊会では、主催者の久良伎自身による狂言がいくつか披露されたらしく、「ニツチエ大師の狂言などは時節柄面白かつた」と記者はいう。「ニツチエ大師の狂言」とは、久良伎が同月に文星社から刊行した『文壇笑魔経』所収の「ニイチエ坊大明神」と同一のものである。この狂言脚本は「ニイチエ主義信者」（以下、信者）をシテとして「ニイチエ坊大明神」（以下、大明神）、「信者の花嫁」（以下、花嫁）が登場する。「世の中に主義は様々有る中にも、此のニイチエ坊大明神が開かせられた、美的生活、本能満足の大主義に及ぶ者はござるまい、世の中にヤレ道德ジャの宗教ジャの、倫理ジャの申^まいて、堅苦しい偽善の徒が多いのを憤られて、ニイチエ坊が反抗せられた気焰の宗旨は、洵に世に難有いお宗旨でござる」と語る信者は、「ニイチエ坊大明神のお社」に参り「美しい花嫁を授けて戴かう」と祈願する。すると信者は突然の眠気に襲われ、その夢に大明神が現れる。大明神は、「此頃東洋日本の御国に、身共の信徒がいかう殖えた」ために、「高山の樗牛、登張の竹風など申す信徒からの招き」を受けたと語る。信者が「どうぞ本能満足の御宗旨を

味はひます程な美人を妻にお授け下さい」というと、大明神はそれを聞き入れるが、その後、実際に信者の前に現れたのは「醜い女」であった。信者は「苦々しいことでおりやる」と吐き捨てるが、女は「これはいかな事、ニイチエ坊様よりのお指図、妾はわがりの妻と定められたもの、ニイチエもサンチエも離るゝことではおりない」といい、「ニイチエくニイチヤく」と唱えながら信者にまとわりつく、というところで幕が引かれる。

樗牛や竹風を「ニイチエ坊」の「信徒」と称し、ニイチエイズムを「本能満足の御宗旨」などと言い換えるこの狂言は、その語彙や戯画化の構造において「馬骨人言」ときわめて類似した枠組みを有している。逍遙がつくりだした「滑稽」なニーチェ像は、久良伎の「滑稽主義」にとつて至上の好材料であったといえるだろう。同時期の『読売新聞』紙上でも、読者投稿による「川柳、狂歌「へなぶり」、一口話など」¹⁹⁾が盛んに掲載されており、その後、『読売新聞』記者であった田能村朴念仁の編による『へなぶり』と題された狂歌集の第一輯（一九〇五年六月）および第二輯（一九〇六年七月）が読売新聞社から刊行されている。「馬骨人言」と久良伎の活動の親和性は、『読売新聞』文化圏の一側面と、川柳作家として知られていた久良伎の「滑稽」的特質が呼応したことによりもたらされたものであっただろう。そして、久良伎が用いた「狂言」仕立ての表現形式は、「シヤギリ」として締めくくられる「馬骨人言」に通じる

とともに、前出の『中央公論』所載「文壇屠蘇機嫌」や、『文庫』所載の「当世狂言尽 新宗論」にも採用されていた形式であった。

前述のように「当世狂言尽 新宗論」は、狂言の「宗論」をパロディ化したものであった。幸田露伴は「我邦文学の滑稽の一面」『明星』一九〇三年十二月、『帝国文学』一九〇四年一月「附録 帝国文学会第一回講演集」に収録、のち「滑稽談」と改題され一九二六年に至誠堂書店より刊行の『洗心広録』収録）において、「我国滑稽の文学を云はんとせば、眼を狂言に注がざるを得ざるなり」と述べ、「宗論」を「真に滑稽の価値を有するもの」「無邪気にして趣味の存する」²⁰⁾ものとしている。すなわち狂言とは同時代において、「滑稽」的な「趣味」の神髄に通ずる一形式として認識されていた側面を持つのである。

このような「滑稽」の価値を問う議論として想起されるのは、美的生活論争以前に、やはり樗牛と逍遙の間にたたかわされた「滑稽文学（の不在）」をめぐる論争である。この論争の経緯については浦和男が詳細に跡づけているが、一八九五（明治二八）年から一八九七（明治三〇）年にかけての『帝国文学』『雑報』欄には、無署名ながら樗牛と思われる記者が「滑稽」に関する記事を断続的に寄せ、「滑稽文学」やその作者の出現を待望する論を展開している。これに対し逍遙は、『早稲田文学』誌上で「今の滑稽作物を需欲する者、往々にして滑稽と諷刺とを混同し、（中略）妄に嘲諷の筆を

弄し、社会を諷する名の底に個人を譏笑する作の如きは、予は殆ど読むことを好まず」（「何故に滑稽作者は出でざるか」、一八九七年一月）などと述べ、「滑稽」の濫用を戒めた。浦によれば、この論争では「樗牛が「滑稽文学の不在」を真摯に歎いてたわけではなく、「文学における滑稽の不在」という問題にまで十分に煮詰めなかったために、十分な結論も作品も出てこなかった」が、「この「滑稽文学の不在」は、明治期を通じて論じられ、のちのちまで後を引くことになる」⁽²²⁾。

「馬骨人言」成立の背景においても「滑稽」への意識は見逃せない要素である。逍遙の『通俗倫理談』（富山房、一九〇三年二月）では、「馬骨人言」に序す」から「馬骨人言」本文との間に「匿名の動機を論ず」、「諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず」、「嘲諷の是認せらるべき場合を論ず」という三種の短文が挿入されている。「滑稽と諷刺とを混同し」、「妄に嘲諷の筆を弄し、社会を諷する名の底に個人を譏笑する」（「何故に滑稽作者は出でざるか」）ことを戒めていた逍遙であつたから、「諷刺反語」や「嘲諷」の用い方に慎重になるのは当然のことであろう。

右に挙げた短文の末尾には、「以上三是認説のうち、諷刺、反語に関する分はニイチエが言論及び其れに類似の無責任の放論を嘲世、諷俗の正論なるが如く曲解するものありて、世間往々之れに惑はされ、名を諷刺に借りて僻説妄談を縦にするものに多からんとする

傾向ありしが為に草したり」とある。そして「諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず」では、「第一、言論の自由と思想の自由なき場合（専制時代など）」、「第二、礼儀上若しくは方便上、正面より説破する能はざる、若しくは説破することの妙ならざる時」、「第三、他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめんため——これに多少悪意若しくは敵意の加はれるものと無邪気なる嘲弄との二種あり」という三通りの場合分けが行われている。「馬骨人言」をどの場合に分類するかは判断に迷うところだが、さしずめ第二と第三の場合にまたがるものといえようか。付け加えれば、青年雑誌に流布した「滑稽」なニイチエ思想の戯画は、第三の場合の「多少悪意若しくは敵意の加はれるものと無邪気なる嘲弄」という性質を含んでいよう。

このように逍遙は、分別を弁えない「嘲諷」に対しては一貫して慎重な姿勢を保つ一方で、こと「馬骨人言」の意義をめぐっては、「滑稽」、特に「諷刺」の効用について肯定的な見解を示している。ここには、いささか後付け的な自己弁護の感もないではないが、逍遙の定義するような、「他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめん」という「諷刺」の効果は、前述のように同時代において「馬骨人言」を「痛快」とする声があがつたことに鑑みれば、確かに一定の効果を發揮したといえるだろう。かたや、かつて積極的に「滑稽」を鼓吹していた樗牛自身とその思想が、ほかならぬ逍遙に

よって「滑稽」化されてしまったことはいかにも皮肉である。

そして、同時期の「滑稽」をめぐる言説にも、「諷刺」に積極的な意義を見出しているものがある。緒方流水『文学管見』（民友社、一八九九年二月）には「滑稽と諷刺」と題された一条があるが、そこで緒方は「滑稽は忽ち諷刺の材料と成らん」とし、「諷刺は滑稽的にして諷刺的なを上乘とす」と述べている。さらに緒方は別の「諷刺の時代」という条でも、「滑稽小説の呼声は、一時其絶頂に達して、今や全く下火と成」り、それに代わって悲惨小説が「優等なる地位を占め居ること」に對して、「諷刺小説」出現への大きな期待を寄せている。²³

また、博文館の『通俗百科全書』シリーズの第一八編として刊行された『通俗文章学』（宮川鉄次郎編、一九〇〇年八月）では、「文勢編」の内の一項目として「滑稽」の項が立てられている。そこでは「諷刺文」が「滑稽諧謔の間に辛然たる意味を含ましめ、人を刺撃するもの」と定義され、この「諷刺文」こそが「滑稽文の最も高尚なるもの」であるとされている。そして、曾呂利新左衛門や太田南畝が例に挙げられながら、「大に時事を諷刺する」文章が、「よく人を警醒」するものであるとされる。「滑稽文」における「諷刺」の効用をきわめて高く評価した例といえるだろう。

「馬骨人言」の「諷刺」性は、右に示したような時代の要求にも、ある程度応えるものであつたといえるのではないだろうか。逍遙か

ら久良伎へ、そして青年雑誌の誌面へと波及していったニーチェ像（あるいは美的生活論争）の戯画は、逍遙と樗牛の「滑稽文学」論争以降、明治三〇年代の文学空間に伏流していた「滑稽」への要求とも通底する部分があつたはずである。

永井太郎によれば、「明治三〇・三一年以降は、滑稽小説は軽い読み物の名称となり、問題として取り上げられなくなる²⁴」といい、羽鳥徹哉は、そのようなエア・ポケットを「笑いの喪失²⁵」と呼んだ。しかし、「滑稽小説」の失墜は、文学空間から「滑稽」への関心が跡形もなく消え去ってしまったことをただちに意味するものではなく、必ずしもない。明治三〇年代の小説空間から姿を消したかのように見えた「滑稽」への問いと実践は、ニーチェや美的生活論をめぐって文壇を風靡した論争の中に、確かに息づいていたのである。

おわりに

『新声』一九〇二年二月の「甘言苦語」欄において「黒眼児」を名乗る記者は、「趣味ある滑稽は確執衝突等とを調和して、彼我渾然として一体ならしむべき大能力を備へて居るものだ、故に社会が光荣ある進歩をなさうとするには滑稽がなくてはならぬ」と主張し、曾呂利新左衛門やサミュエル・ジョンソンを引き合いに出しながら、「滑稽の福音、滑稽の魔力は此の如く一世の大衝突を未然に防ぎ、

天下民心の擾乱を未萌に刈取る処の大々能力を有して居る」と述べる。そして、「滑稽博士の出現を渴望する」と同記事は結ばれる。

青年雑誌におけるニーチェ論争の戯画化を、ただちにこの記者がいう「確執衝突等とを調和して、彼我渾然として一体ならしむる」、「趣味ある滑稽」として評価できるかどうかは大いに疑問だろう。しかし、「馬骨人言」という戯文の裏で、「滑稽」的「諷刺」的な手法によつて読者たちに「感銘」を与えることが企図されていたように、青年雑誌におけるニーチェ戯画や論争のカリカチュアに「滑稽」「諷刺」への意識を読みとることは十分に可能である。そして、そのような意識は、樗牛（中央文壇）と対立する青年雑誌の対抗意識と共鳴し、樗牛や逍遙らによつてたかわされる論争それ自体を戯画化する契機にもなつていたのである。

これらの問題は、高山樗牛という偶像的存在と青年層との関係性をとらえなおす契機であると同時に、従来の文学史や論壇（争）史の枠組みにおいて見落とされてきた言説空間の側面を照らしたすものでもある。さらには、狂言などの芸能にも通ずる「滑稽」の概念、そして、その中でも「高尚」とされた「諷刺」への意識が、明治期の文学空間においていかなる位置を占めていたかという問題を究明していくための一視座としても、見過ごすことのできない現象であるはずだ。

注

(1) 杉田弘子『漱石の猫とニーチェ』、白水社、二〇一〇年二月、二四頁。

(2) 重松泰雄「樗牛の個人主義——『美的生活』論をめぐる——」、「国語国文」第二二巻第五号、一九五三年五月、「樗牛とニーチェ——『美的生活』論を中心として」、「文芸研究」第一三集、一九五三年六月。

(3) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』、明治書院、一九五八年一月、二〇二頁、谷沢永一『文豪たちの大喧嘩——鷗外・逍遙・樗牛』、新潮社、二〇〇三年五月、二一五—二一九頁。なお笹淵は、後述の坪内逍遙「馬骨人言」への反論において樗牛自身が「美的生活論とニーチェとの関係を一応承認、少くとも黙認した」とし、のちに「自説とニーチェと無関係なことを強調した（明治引用者注）三十五年当時とは態度が異なっている」ことを指摘している（前掲書、二〇八頁）。

(4) ジェニファ・ラトナー・ローゼンハーゲン『アメリカのニーチェ——ある偶像をめぐる物語』、岸正樹訳、法政大学出版局、二〇一九年一〇月、四二頁。

(5) たとえば林原純生「美的生活論、自然主義、私小説——ひとつの史的見取図の試み」（『日本文学』第二七巻第六号、一九七八年六月、八九頁）は、「『美的生活』を論ずる」を契機とする「ニーチェ熱美的生活熱」は、高山樗牛の死後も論壇を超え、青年層を動かし、たとし、林正子『太陽』に読む明治日本のドイツ文明批評と自己探究——ドイツ関連記事と樗牛・嘲風の評論を視座として」（鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』所収、思文閣出版、二〇〇一年七月、四七〇頁、のち林正子『博文館「太陽」と近代日本文明論——ドイツ思想・文化の受容と展開』に収録、勉誠出版、二〇一七年五月）も「当時の青年の樗牛心酔」を指摘し、「自我の覚醒を体験し謳歌しつつあった青年知識人たちに圧倒的な影響を及ぼしたことは紛れもない事実」としている。また木村洋『文学熱の時代』（名古屋大学出版会、二〇一五年一月、一六〇—一六一頁）は、「『美的生活』論」をはじ

めとする樗牛の評論群が契機となり、「かつて青年たちの渴仰の対象」であつた徳富蘇峰から樗牛へと「青年の代表者の交代劇」が行なわれていくさまを跡づけている。

- (6) 笹淵、前掲書、二〇二二〇四頁、修斌「明治日本におけるニーチェ受容に関する考察」、『新潟史学』第四七号、二〇〇一年一〇月。

- (7) 長尾宗典『憧憬』の明治精神史——高山樗牛・姉崎嘲風の時代、ペリカン社、二〇一六年一〇月、二六一頁。

- (8) 「ニーチェ主義と美的生活」『読売新聞』一九〇一年一〇月二二・二八日、「無用の弁」『太平洋』一九〇一年九月三日、「歳末文壇」(同一二月一六日)、「矛盾録」(同一一九〇二年二月一七日)、「新思潮とは何ぞや」『太陽』一九〇二年三月。

- (9) 「無断案と煩瑣」『大阪毎日新聞』一九〇一年九月二六日、「文壇雑俎」(同三〇日)、「最近の反動」『新小説』一九〇一年一〇月。

- (10) 「文壇近時の風潮に就て」、『読売新聞』一九〇一年九月三〇日。

- (11) 「馬骨人言」は戯文調の文体が独特の存在感を放つ一方で、その論旨に関しては同時期の他の論者の批判的言説とも一定の類似性を有していた。たとえば樋口龍峽「八面鋒」(『新文芸』一九〇一年九月)はニーチェ流行を含めた同時代文壇の風潮を「神興主義」と評し、学理や主義を奉ずるわけでもなく、単にその尻馬に乗り騒いでいることを批難する。また、同月の『早稲田学報』「人物月旦」(無署名)は、バイロンズム等を引き合いに出しながらニーチェの思想を時代思潮への「反動」と位置づけ、ニーチェ思想の特殊性・新規性を否定する。「馬骨人言」でも、「放埒主義のバイロン主義」等に言及しながらニーチェ思想を「諸種の偏思潮の反動」「十九世紀の起頭に於けるあらゆるイズムスの反動」とする箇所(二〇月二〇日)があり、両者の内容は酷似している。

- (12) 山田俊治『大衆新聞がつくる明治の(日本)』、日本放送出版協会、二〇〇二年一〇月、二二六頁。

- (13) 杉田、前掲書、五〇一五二頁。

- (14) 永嶺重敏「雑誌と読者の近代」、日本エディタースクール出版部、一九九七年七月、一三五—一四四頁。

- (15) 関肇『新聞小説の時代——メディア・読者・メロドラマ』、新曜社、二〇〇七年二月、二七一・二七八頁。

- (16) 関、前掲書、二七九頁。

- (17) 松田良一『永井荷風——ミューズの使徒』、勉誠社、一九九五年二月、二〇六—二〇九頁。なお松田の記述はその多くを生田葵山の回想「永井荷風といふ男」(『文芸春秋』一九三五年一〇月)に負っている。

- (18) 黒田湖山と押川春浪は両者とも東京専門学校を卒業しており、その意味では早稲田派に属する存在とみることが出来るが、関や松田の指摘する「文壇打破」という意識からすれば、彼らの言説は他の早稲田派文学者たちとは区別して考えるべきだろう。

- (19) 浦和男「明治期『讀賣新聞』と笑い」、『笑い学研究』第一八号、二〇一一年七月、三九頁。

- (20) 露伴が校訂した『狂言全集 上巻 狂言記』(博文館、一九〇三年六月)には「宗論」も収録されている。

- (21) 浦和男「滑稽の不在——明治文豪の論争」、『笑い学研究』第二〇号、二〇一三年八月。

- (22) 浦和男「滑稽の不在——明治文豪の論争」、前掲論文、九頁。

- (23) 永井太郎「明治三〇年の滑稽小説」(『福岡大学日本語日本文学』第二九号、二〇二〇年一月)は、「滑稽(小説)」が「一八九七年一〇月に「突然文壇の主要トピックスとなる」(同論文一八頁)ことを指摘し、そのような傾向を、日清戦後文壇で隆盛していた「悲慘小説・観念小説の深刻な悲劇性への対抗」(同二三頁)として位置づけている。

- (24) 永井、前掲論文、二六頁。

- (25) 羽鳥徹哉「近代日本文学と笑い」試論、ハワード・S・ヒベット、長

谷川強編『江戸の笑い』所収、明治書院、一九八九年一月。

(26) なお、「諷刺」やユーモアはニーチェ自身の思想や著作においても重要な概念（タルモ・クンナス『笑うニーチェ』、杉田弘子訳、白水社、一九九八年一月）といえるが、それが本稿で取りあげた「戯画化」とどのように関わっているかという問題についてはさらなる考究の余地があろう。

【付記】原則として引用は初出により、旧字は適宜新字に改め、特に必要と思われるものを除いてルビや傍点等は省いた。また、引用文中の「／」は改行を意味する。なお本稿は、日本近代文学会二〇一八年度秋季大会（於岩手県立大学）での口頭発表に基づく。貴重なご意見を下さった方々に感謝申し上げます。

高島北海『写山要訣』の中国受容

——傳抱石の翻訳・紹介を中心に

陳
藝
婕

はじめに

『写山要訣』^{〔しゃさんようけつ〕}は、地質学者・画家である高島北海（Takashima Hokkai, 一八五〇年—一九三一年）が書いた画論であり、一九〇三年（明治三十六年）に、東京の東陽堂によって出版された。一九五七年、中国画家傳抱石（Fu Baoshi, 一九〇四年—一九六五年）は本書を中国語に訳して、『写山要法』という新しいタイトルを付けて、上海人民美術出版社を通じて出版した。傳抱石は中国画壇では高名な画家であり、美術史において重要な研究対象であるものの、彼の翻訳書『写山要法』やその原本である『写山要訣』^{〔〕}に関しては、これまで

検討されてこなかった。特に、日本では注目されることのなかった翻訳書『写山要法』は、中国では傳抱石のオリジナルの著書であるという誤解もしばしば散見される。本論文は、傳抱石の翻訳・紹介活動を通じて、『写山要訣』の内容がどのように中国の読者に認識され、受容されたのかを検討する。

一、高島北海と『写山要訣』——地質学に由来する新画論

まずは、高島北海の生涯と『写山要訣』の概要を紹介する。高島北海は、一八五〇年（嘉永三年）の九月二十六日、日本長門国阿武郡萩江向村（現・山口県萩市）に、萩藩の藩医の二男として生まれた。

本名は得三、幼名は和三郎、雅号は北海である。彼は地質・山林関係の官員として、約二十五年間農商務省に勤めた。一九〇二年（明治三十五年）、五十二歳の高島北海は正式に画家となり、中央画壇で活躍し始めた。一九〇七年、幹事として文部省美術展覧会（文展）の創立に携わり、一九〇八年から一九一七年まで審査員を担当した。日本国内外の博覧会・展覧会では金銀銅賞を頻繁に受賞し、旧派画家の代表者として画壇では高い地位を確立した。一九一八年（大正七年）文展審査員の辞職を契機に、高島北海は徐々に中央画壇から距離を取るようになった。それ以降、高島北海の芸術的な影響力は弱まり、長い間、日本美術史にその名が記述されることはなかった。現在の日本美術史学界において高島北海の研究は、アー・ヌーヴォー（Art Nouveau）やフランスとのかかわりといった視点から展開されている。一方で、中国画壇への影響は全く論じられてこなかった。

一九九〇年代以降、地質学に関する先行研究において、高島北海は近代アカデミズム成立以前の先駆的な地形学者、地質学者、地理学者と評価された^②。高島北海は日本、ヨーロッパ、北米、中国など、広範囲で調査・見学を行い、各国で豊富な素材を採取した。一九〇三年以降は、自身の地質学の基礎となった山水写生法や海外写生の経験を文章にし、『美術新報』や『日本美術』などの誌面に発表した^③。『写山要訣』では、写生する際の工具の準備方法や、皴^{しづ}

法や地質学の基礎知識などが記された。高島は同書的主旨について「：地質学の原理に依りて、真山水を解剖し、作画の基礎を立つるにあり」^④と述べ、美学概念など理論的な問題には触れず、地質科学の観点から実用的な絵画技術や写生方法を具体的に指南した。

一般的なお東洋画壇の認識によると、西洋風景画の写実技法と云えば、遠近法の活用に限られていた。高島北海が地質学を山水画の写生に転用することは、一九〇〇年代の日本の画家や一九六〇年代の中国の画家にとって、新鮮かつ有効な方法であった。本稿では、この理論を「地質学画論」という言葉で総括する。

高島北海の海外経験やその独特の理論は一時的に日本画壇においても重要視され、高島北海は一九〇四年二月二十日に新旧両派の集会以て講演をおこなった経験がある。しかし傳抱石が書いた「訳者序」^⑤（一九五五年九月）によると、一九三三年の時点で、『写山要訣』は絶版になり、高島北海の画論の伝承と発展はすでに日本では途絶えていた。当時日本に留学していた傳抱石は、『写山要訣』の一部分を読み、感銘を受けた。市川書店の主人に依頼し、一カ月かけてようやく本書を入手し、「全壁在握、歎喜無量^⑦」との感慨を漏らした。ここで傳抱石は「和氏の壁」の典故を引用し、『写山要訣』に対する大切さ、及び全書を手に入れた時の歎喜を強く表した。訳本『写山要法』の「訳者序」や注解の中で、傳抱石は高島北海の理論を高く評価した。

此书著论明切，附图精妙，无一语不从甘苦得来，无一笔不自实境模写。……吾知嗜山水者，必奉为圭臬。

この本の論述は明瞭で適切で、挿絵も精妙である。一言でさえも甘苦に由来しないものはない。一筆でさえも実景を模写しないものはない。……山水画を嗜好する人は、必ずこの本をまもるべき唯一の基準とする、私はそう信じている。^⑧

また、以下のようにも述べている。

我认为他的观点是非常正确的，对于从事山水写生的同志们是具有密接的参考价值的。

彼の観点〔筆者注…高島北海の地質学画論を指す〕は非常に正確だと思う。山水写生をする同志たちにとって、参考にする価値がある。^⑨

さらに、「是役也，中国山水之皴法，在科学上有其根据，在应用上扩其途径……（この本によって、中国山水画の皴法は、科学的な根拠が見つかり、その応用も広げられる……）」とあるように、傅抱石が特に関心を寄せていたのは、皴法に「科学」的な根拠を与え、その応用を広げた点である。

「訳者序」によると、傅抱石は一九三三年から『写山要訣』に注

目し、この地質学に由来する新しい画論に傾倒した。「訳者序」や他の記述を合わせて解すると、一九三三年当初は、他のことに時間を割く必要があったため、傅抱石の翻訳作業は数頁で止めていたようである。文語体の全訳文は、一九三六年の春に完成した。^⑩しかし一九五五年の時点で、文語体はもう使われていなかったため、改めて白話体に書き直すことになった。そして一九三三年からおよそ二十年経った一九五七年に、『写山要法』を出版することができた。その出版にあたっては、どのような契機があったのだろうか。

二、出版の契機——写実山水の風潮

『写山要法』出版の契機について、筆者は一九五〇年代の中国画壇の雰囲気が激変して、『写山要法』の予想読者数が急激に増えたことが背景になっていると推察する。

傅抱石の自説によると、訳文を公開したのは「山水写生や山水技法研究の同志たちの参考に貢献する」ことにあったという。^⑪

一九五〇年代の中国画壇において、社会主義リアリズム（Socialist realism）は圧倒的に優位を占めていた。この発端は、毛沢東が一九四二年五月に、延安の文芸座談会で行った講話、即ち文芸講話（在延安文艺座談会上的讲话）にある。この講話で、芸術作品は「現実」を表現し、「広大の人民群眾」を対象にするべきという主張が

確立された。中華人民共和国の成立に伴い、この講話は中国文化芸術発展の基本指導方針となり、画壇にも大きな影響を与えた。

一九四九年以降、徐悲鴻 (Xu Beihong, 一八九五年—一九五三年)、李可染 (Li Keren, 一九〇七年—一九八九年)、艾青 (Ai Qing, 一九一〇年—一九九六年) などの画家・評論家たちは、「中国画改造」を主張して、積極的に「新中国画」の成立を推進した。科学や写実、唯物論やマルクス・レーニン主義と繋がり、美術作品を改造する上での基準と見なされた。傅抱石の援助者であった徐悲鴻は、アカデミズム式の「写実主義」を推奨する立場を一貫してとり、「漫談山水画」(一九五〇年) という文章の中で、今日の芸術は「現実主義」¹³⁾ を求めていると主張した。傅抱石の友人である李可染も、一九五〇年に「談中国画的改造」¹⁴⁾ を雑誌『人民美術』の創刊号で発表し、類似した主張を行っている。

山水画の改造について最も重要な文献は、艾青の文章「談中国画」(一九五三年) である。艾青は詩人として有名であるが、杭州国立芸術院絵画系の出身であり、一九二九年から一九三二年にかけてフランスに留学し、ゴッホなどのモダニズム様式を学んだことがある。戦時期、彼は左翼芸術家として延安で活躍した。一九五三年の時点で、彼は中国美術家協会の理事に任命され、画壇に対する影響力をもっていた。艾青は一九五三年初頭、「上海美術工作者政治講習班」で講話を行った後、そのテキストは「談中国画」と題して

『文芸報』(一九五三年第一五期) に発表された。この文章によると、形式や内容の両面から中国絵画の改造を行い、「新中国画」を成立させる必要があるという。そして山水画について、「画山水必須画真山水(必ず真山水を描く)、及び「画風景の必須到野外写生(必ず野外に行つて写生をするべし)」という二つの要求が提出された¹⁵⁾。一九五三年以降、中国画研究会、中国美術家協会創作委員会などの多くの機構は写生旅行を画家たちのために企画し、傅抱石は何度もこのような写生旅行に参加した。『写山要法』の出版時期は、ちょうど彼の東欧写生旅行と重なっている。

研究者林木氏が『傅抱石評伝』の中で述べた意見によると、『写山要法』の出版は、傅抱石が科学的な写実主義に「屈服」した表徴であるという¹⁶⁾。「屈服」という否定的な言葉から考えれば、それは自由意志による判断ではなく、外的な条件により強制された、との意味合いが強いように思われる。

これに対し筆者は、傅抱石『写山要法』の「訳者序」で述べた内容を根拠にすれば、傅抱石は一九五七年よりも遥かに早く科学や写実に対して関心を抱き、それは日本留学時期からより強くなつたと考える。そして一九四二年の「壬午重慶画展自序」で、彼は「百パーセント実在の山水を描くこと」¹⁷⁾ を目標にすると述べた。また、翻訳を出版する契機として重要なのは、傅抱石自身の問題よりも、読者側の状況の変化にある。中国画改造運動に伴い、『写山要法』

のような写実・写生を解説する絵画指導書は、中国画壇にとって急を要する存在であった。更に、この時期の傅抱石は一介の画家ではなく、南京師範学院（現・南京師範大学）で美術系の教師を勤めていた。そのため『写山要法』を利用して学生たちに写実・写生の技法を指導することが可能であり、この時期に出版する必要性があったのだ。

三、内容の調整——「中国」要素の強化

原本『写山要訣』と訳本『写山要法』を比較すると、『写山要法』の大部分は『写山要訣』の本来の姿が残っていたことが分かる。中国の文献では傅抱石のオリジナルの著書であるという誤解もしばしば散見されてきたが、「訳者序」を見れば、傅抱石にその意図はなかったことがわかる。一九五七年に出版された『写山要法』の表紙には、「日本 高島北海 著」の下に「傅抱石 編訳」と記されており、二〇一八年（浙江人民美術出版社）、二〇一九年（上海人民美術出版社）に新たに重版された『写山要法』も、一九五七年版の表現が採用されている。しかし、一九八〇年香港宏図出版社『國畫寫山要法』には、高島北海には全く言及されておらず「傅抱石編」と表記されている。

では、『写山要法』はどれほど原本に忠実なのだろうか。傅抱石

は「編訳」として、どのような理由で、何を削除し、加筆修正したのだろうか。またそれらは高島北海の理論が中国で受容されるなかで、どのような影響を与えたのであろうか。

原本『写山要訣』で想定された読者が日本の絵画初心者であるのに対し、訳本『写山要法』の想定読者は中国人である。したがって、『写山要法』は、『写山要訣』をそのまま訳すのではなく、内容に応じて削除・加筆修正や注解が加えられた。傅抱石は以下のような方針を示している。

但地方性甚重，不施编改，不免遺憾。……去其不必存（如关于火山诸景及附图与日本地质之研究及附图）而留其精粹。

地方性が甚だしく重くて、加筆修正しないと、遺憾を免れない。

……必要ない部分を削除し（例えば火山諸景や付図、及び日本地質の研究とその付図）、精粹を残す。⁽²⁰⁾

つまり、傅抱石は、中国の読者には不要であると思われる日本の特徴を示す部分を削除したのである。筆者の調査によると、日本の地質状況について、少なくとも十一カ所の文字が消去されていた。⁽²¹⁾しかし、傅抱石が自ら述べるように、削除されたのは日本の地質に関する部分に限られているのだろうか。原本と訳書を対照すると、地質研究情報に加えて日本画家、日本美術に関する内容も削除され

ている。さらに、このような傳抱石による本文の改変は、中国絵画のポジティブな面を強調しているように思われる。以下、それらを検討したい。

第一に、「日本」的な要素を後景化させる工夫がなされている。

例えば図版では、高島北海は『写山要訣』の巻首に、自分が最も崇敬する画家谷文晁（一七六三年—一八四一年）筆『東北遊写景』の写真石版印刷図を置いて、詳しく紹介した。高島北海の記述から分かるように、彼の画論思想の形成や技法の発展には、谷文晁の真景図の影響が見て取れる。しかし傳抱石は、この図版を削除した。それは高島北海の画論の源流を全面的に押し出すよりも、むしろ中国伝統美術の役割を強調する意図があつたからだと思われる。⁽²²⁾

また、文章に関して言えば、訳文の中で「日本」という言葉はすべて「東洋」に変換されている。一つの例を挙げると、『写山要法』第一章の緒論にみる「日本画」（原文）は「東洋画」（訳文）と記されている。⁽²³⁾ 注解①の中で、傳抱石は「東洋画」を次のように説明した。

这是日本人指印度、中国、朝鲜和日本绘画的通称。在一般的情况下，只是指中国画和日本画。

これは日本人がインド、中国、朝鮮や日本絵画への通称である。一般に、単に中国画や日本画を指す。⁽²⁴⁾

これはつまり、高島北海の理論が、中国に適用されることを示したかったのではないだろうか。

高島北海は、日本風景の美しさを海外へ紹介することは「国家に対する義務」⁽²⁵⁾であると主張し、海岸風景に長けた若い青年画家の登場を待ち望んでいた。このような国家に対する姿勢を表す内容も、傳抱石の訳文では削除の対象となつている。

傳抱石のいわゆる「地方性」には、日本の美術、地質、人物など多くの内容が含まれている。削除・加筆修正の結果として、高島北海の「日本人画家」といった身分、また『写山要訣』が示した日本的な特徴は著しく弱まったと言えよう。

第二に、傳抱石は『写山要法』の中で、高島北海の理論と中国画家・画論の共通性を強調することで、中国絵画をその源流だと証明しようと試みていたことがわかる。

傳抱石が試みたのは、高島北海が賞賛した日本人画家たちを全て削除するというようなわかりやすい方法ではなかった。中国の読者に馴染みのない日本人画家の名前には、どのように中国と関わっているか、その点を強調するように注解を付けている。例えば、円山応挙、谷文晁は「专学中国画（専ら中国画を学ぶ）」⁽²⁷⁾、雪舟等楊は「专学宋画（専ら宋代絵画を学ぶ）」⁽²⁸⁾と、指摘している。

そして、高島北海は中国の古人が作り出した皴法を具体的に紹介するとともに、日本人も新しい皴法を発明したと主張した。⁽²⁹⁾ しかし

傳抱石の訳文を見ると「皴法の種類很多、都是中国画家们的创造（皴法の種類は多いが、全て中国の画家たちによって創造された）」と中国側の重要性を強調し、高島北海の本意を僅かに曲解していることがわかる。また、高島北海は小字で「本節以下支那画家皴法を引用するものは他に之れを形容すべき、適例がながめなり」と説明しているが、この箇所は傳抱石の訳文からは削除されている。

さらに、山水写生の方法について、傳抱石は訳文の注で、早くとも五世紀の中国の画家宗炳の『画山水序』に、類似する理論が述べられているという。⁽³²⁾そして傳抱石は高島北海の言葉遣いに注目し、中国春秋時代の哲学者である老子（生卒不詳）と宋代画家米友仁（一〇七四年—一一五三年）がその出典だと指摘した。⁽³³⁾しかし、高島北海の文章⁽³⁴⁾だけでは、彼が米友仁の説に自覚的であつたかどうかを確認することはできないと、筆者は考える。傳抱石は、原本である高島北海の本意を超えて、中国と接続可能な要素を見出そうとした。傳抱石の加筆修正により、『写山要訣』は原文の『写山要訣』よりも中国画論との関連性が強調されたことで、中国の読者にとってより親しみやすい文章となった。

第三に、傳抱石が訳文の加筆修正やその注解を通じて、中国絵画を擁護しながら、中国の写実伝統や先進性の強調を試みた点を確認しておく。

筆者の見解では、高島北海は宋元画を好んでおり、明清以降の中

国人画家や南北宗論にはあまり造詣が深くない。彼が活躍した一九〇〇年代頃、「中国絵画衰退論」⁽³⁵⁾はまだ登場していなかった。宋元画は日本画壇で高く評価されており、横山大観をはじめとする新派の画家に模写され、明清以降の文人画も日本人画家やコレクターに好まれていた。それは一九三〇年代とは明らかに異なっている。したがって、高島北海は中国絵画をポジティブに捉え、『写山要訣』で中国絵画の問題点を提起する場合でも批判的な色合いはあまり見られない。

また、原文『写山要訣』で中国伝統絵画の「空想」的性質を否定的に評価しているのは、一カ所しかない。つまり一九〇二年の時点でまだ中国に行っていなかった高島北海は、中国の名勝真景図に不満を抱いていた。

彼れの常習として、其文字誇大失し、何れの地も、天下の絶勝にあらざるはなき様に見ゆると共に、其図上にも多くの空想を加え自箇の流派筆法を用ひて、之れを作るが故に、殆ど其真相を知ること能はず。我邦にても、此種の図記亦寡しとせず。是予が毎に遺憾とせる所なり⁽³⁷⁾

中国の名勝真景図には実在の景色を元に描く絵が多いが、時に画家が想像して描いたものも含まれる。そのため高島北海は、景色の

本来の姿を知るのは難しいことだと述べているのである。

とはいえ、これは名勝真景図という特定の画題に対する感想である。名勝真景図は、ほかの山水画作品と異なり、実際の風景を最大限に表現されるべきものと考えられている。高島北海は自分自身も理想化した山水画を描いていたため、想像を元にした絵画に対する抵抗はなかった。中国の画家が「常習」的に誇張の手法を好んだという言い方は、中国の読者にとっては不快な印象を与える可能性があった。このような評価に中国絵画全般を批判する意図はなかったものの、「中国絵画衰退論」の流行に敏感だった傅抱石には、上記の高島北海の表現は容認できなかった。そのため彼は、まず訳文に微妙な書き直しを行い、以下の通り、修正した。

中国名勝真景の描写是非常丰富的，不过常凭空想而以自己的笔法出之，因此不能知道它们明确的真面目。这种描写日本也不少，使我常常引为遗憾。

中国名勝真景の描写は非常に豊富であつた。しかし常に空想に頼り、画家自分の筆法で描きだす。したがって、明確に風景の正体を知ることができない。この種の描写は日本にも少なくないので、私〔筆者注：高島北海を指す〕は常に遺憾と感⁽³⁸⁾じる。

おおよそは原文に則っているが、批判的な印象を受ける箇所は大

幅に削っていることがわかる。さらに、高島北海の見解に注を付けることで、傅抱石は反論を加えた。

这几句话必须指出两点…一、中国山水画的优秀传统不是“空想”的结果，而是富于现实主义的精神和手法的。二、至迟自第八世纪开始，中国把山水画看成是无声诗⁽³⁹⁾的。所谓“明确的真面目”，从来就不曾是中国山水画创作的目的。

これらセンテンスについて二点を指摘しなければいけない…一、中国山水画の優秀な伝統は「空想」の結果ではなく、現実主義の精神と技法に富んでいた。二、遅くとも八世紀から、中国は山水画を無声詩と見なした。所謂「明確の正体」は、従来中国山水画制作の目的ではなかった。⁽³⁹⁾

傅抱石は、中国絵画とは風景をそのまま描くことができないのではなく、そのことを重視していないのだと解釈する。この発言は、高島北海の発言内容に対するものではなく、中国絵画衰退論への反論を意味する。

その一方で、「支那派」の画家に対する説明も興味深い。高島北海の説によつて、「支那派」の画家はしばしば誤つて「石に適す皴法」と「山に適す皴法」を混同する。⁽⁴⁰⁾これは否定的な評価である。傅抱石の注解によると、ここの「支那派」とは、中国人画家ではな

く、中国画をよく学んだ日本人画家を指すものと説明している。⁽⁴⁾ 高島北海はさらに「支那流の詩人画家」について言及し、その前後では日本山水名勝の品評を取り上げているので、これは「日本人」を指していることがわかる。したがって筆者は、「支那派」は詩文に長けた日本の南画家を指し、傳抱石の注解が正しいものと考ええる。しかし同時に、傳抱石が中国の画家の名誉を守ろうとした意欲も感じられる。

すなわち、傳抱石の翻訳は、日本的な要素を弱めて、中国的な要素をより強化するような加筆修正がなされていた。高島北海の地質学画論は、日本から伝来する美術理論というよりも、中国伝統絵画に失われた写実技法を継承する成果として公表された。そうすることで、日中戦争に苦しんだ中華人民共和国の読者は、傳抱石の訳稿をより受け入れやすいものとして認識したであろう。加えて、中国絵画が元来優れた写実表現の伝統を持ち、高島北海をはじめとする外国の画家たちに影響を与えていたとすれば、中国絵画の先進性を証明し、中国絵画衰退論に反論を加えることも可能となる。

中国語訳『写山要法』を出版したにもかかわらず、高島北海は日中両国において周知の存在とは言い難い。その理由の一つとして、傳抱石による翻訳にもあったのではないであろうか。その結果、高島北海の地質学画論は、中国の写実的な山水画論の流れを継承するものとして見なされるようになった。

他方で、傳抱石が中国読者・学生に、地質学画論を紹介する際に手を加えた事実は改めて注目に値するものだと主張したい。中国伝統の画論に見られない地質学的内容は、高島北海という日本人の独自の新理論というよりは、むしろ「科学」の一種である地質学の知見として紹介されたことを、次で補足する。

四、原作者の誤認——「科学」としての受容

一九二〇年代の新文化運動において、「民主」と「科学」は、中国を救済する方法だと認識されていた。傳抱石が『写山要訣』から影響を受けて中国で宣伝したものは「画論」ではなく、「科学」の一種としての地質学である。傳抱石の周辺の人物の回想記を糸口に、この現象を分析したい。

傳抱石の二男である傳二石 (Erishi, 一九三六年—二〇一七年) は二〇一七年のインタビューで次のように述べた。

父亲爱写书……还翻译了日本人写的关于地质学的书。那本书的作者是个地质学家，到过世界很多地方，每一个地方的地质特征都用中国的毛笔描绘出来。虽然艺术价值不高，但它提供了一个可以让人了解中国、美国、欧洲、非洲等地区地貌特征性的参考。

我父亲就编译了这本书，很厚，他不仅要翻译过来，还要结合中

国画的特点把书的内容重新理解、归拢。他觉得，把这本书介绍到中国来肯定会对画家有帮助。

父は本を書くことが好きだ。……日本人が書いた地質学に関する本を翻訳した。この本の作者は地質学家であり、世界中いろいろな地域へ行つて、中国の毛筆でこれらの場所の地質的特徴を一つずつ描き出した。芸術価値は高くないが、中国・アメリカ・ヨーロッパ・アフリカなど地域の地形的特徴を理解する参考にはなる。したがって父親はこの本を編集・翻訳した。とても厚い本である。彼は翻訳をしながら、中国画の特徴と結びつけ、本の内容を改めて理解・要約した。この本を中国に紹介すると、画家たちの役に立つと、彼はそう思っていた。⁽⁴⁵⁾

このような傳二石の言葉には、複数の問題点が含まれている。第一に、高島北海は画家ではなく、地質学者であり、『写山要訣』も画論書ではなく、地質学の本だと見なされた。第二に、『写山要訣』挿絵の芸術価値は認められていなかった。第三に、傳抱石は訳者でありながら、編集も行い、本の内容を大幅に書き直した。

既に論じたように、訳本の細部には削除、加筆修正、また注解も加えられていた。傳二石の「編訳」説はある程度まで理解できるが、『写山要訣』は全篇七八頁に過ぎず、図版や表紙を加えても一三頁しかないため、「とても厚い」本と呼ぶのは不適切であり、「要

約」したわけでもない。また、高島北海はアフリカに行つたことがなく、書中もアフリカの図版がない。傳二石の来歴を見ると、彼は『写山要法』の翻訳が完成した一九三六年に生まれ、一九五六年から南京の家を離れて、山東省済南市の山東師範芸術専修科に在学していた。⁽⁴⁶⁾そのため、傳二石は『写山要法』の成立に詳しくなかったのだろう。傳二石が行つた紹介の仕方には、議論の余地がある。

『写山要訣』挿絵の芸術価値に関する議論は、傳二石による論考しか見当たらない。しかし第一と第三の点については、他に参照可能な資料がある。例えば、傳抱石の学生沈左堯 (Shen Zuoyao, 一九二一年—二〇〇七年) は二〇〇四年の文章で以下のように書いている。

他曾同我谈起，在日本进修时曾买了一本地质学的书。

彼〔筆者注：傳抱石〕は私と話したことがある。彼が日本に修学する時、一冊の地質学の本を買った。⁽⁴⁷⁾

また、沈左堯の一九九二年の文章はより詳しく論じている。

先生在日本留学时买了一本《地质勘探学》，并参考此书编译成一册《写山要法》。他外出经常携带一本地质学，在观察自然时以之对照，不仅寻求形态规律还寻求科学规律，两相印证以获得

正的分析と深入的理解。把中国的山水画技法同现代的地质科学联系起来，他是第一人，从这个意义上讲，先生又是一位科学家。

先生〔筆者注・傳抱石〕は日本留学の時、『地質勘探学』という本を買った。この本を参照して、編集・翻訳を通じて『写山要法』が出来た。彼は外に出る時、常に地質学の本を持ち歩いて、自然を観察する際に対照させている。様態の規則を求めると同時に科学の規則も求め、両方の裏付けによつて正確な分析や深化する理解を獲得する。中国の山水画技法と現代の地質科学を繋げることに於いて、彼は初めての人である。この点から言う⁽⁴⁶⁾と、先生は科学家でもある。

沈左堯は一九四〇年代初頭から傳抱石の門下に入り、長い間交友のあつた学生である。当時まだ幼かつた傳二石よりも、『写山要法』に対する理解は深かつたはずだが、実際に彼も、『写山要訣』や訳本『写山要法』については完全に誤つた理解を持つてゐる。高島北海の地質学画論は、ここでは傳抱石によるオリジナルの新説に置き換えられている。加えて、傳抱石に「科学家」の肩書きを与え、傳二石の説と比較しても、沈左堯の説はさらに事実と乖離したものとなっている。

一九五七年版『写山要法』の「訳者序」や、二〇一八年重版の

「出版説明」、二〇一九年重版の著者紹介でも、高島北海は「地質学者兼画家」、「著名の地質学者、山岳風景画家」として紹介された。

しかし傳二石や沈左堯の言論を分析すると、高島北海の画家としての側面を、彼らはほとんど意識していなかった。また、彼らは傳抱石がどこまで原本を書き直したのかについても詳しくはなかった。

傳抱石が『写山要法』を中国へ紹介・宣伝する時、高島北海という人物はあまり重要視されてこなかつたのであろう。傳抱石の「訳者序」によると、彼が日本に留学した一九三〇年代でさえ、高島北海の名はすでに画壇や美術批評から姿を消していた。傳抱石本人ですら、高島北海の絵画の原物を実際に見たことがなく、旧派画家の代表者としての姿をあまり知り得ていなかった可能性がある。黄名芊(Huang Mingqian, 一九三五年⁽⁴⁹⁾)などの学生の記録によると、傳抱石は高島北海については言及せずに、地理・地質知識の重要性を繰り返し強調していた。数多くの中国読者にとつて、傳抱石の『写山要法』は画論書でありながら、『写山要訣』は地質専門家・高島北海による地質学著作という認識だったのだろう。

一方、沈左堯は、傳抱石が「地質学の本」を持参して外出することについて言及しているが、筆者の見解では、これは『写山要訣』あるいは『写山要法』ではなく、他の記録と照合すると『地貌学』という専門書の可能性がある。この本の存在が、多くの誤解を生んだのではないだろうか。この仮説について、検討したい。

傅抱石の中央大学時代の学生である曹汶（Cao Wen, 一九二六年—）が他の人物から聞き取った情報によると、この本のタイトルは『地貌学』であつた。⁽⁵⁰⁾ 傅抱石と共に写生旅行をした学生である黄名芊は、二〇〇五年に出版された回想録『筆墨江山』の中で、一九六一年の東北写生旅行の時に傅抱石がわざわざ『地貌学』を持っていたことを、吉林省委宣传部長である宋振庭が目撃したのだと回想する。⁽⁵¹⁾ この点から推察するに、この逸話を広げたのは宋振庭（一九二一年—一九八五年）であろう。彼は東北写生旅行を契機に傅抱石と知り合い、傅抱石を長く支えた官員の一人であり、次の文章を残している。

抱石先生隨身携帶着一本書，不是画論，是《地貌学》！这是科学！

傅抱石先生は一つの本を持参していた。画論ではなく、『地貌学』だ！これは科学だ！⁽⁵²⁾

宋振庭は沈左堯と同様に、興奮を帯びた様子で「科学」のことを強調しており、当時の中国人たちがいかに「科学」に熱中していたかがわかる。

一九五〇・六〇年代の中国において、地質学専門書は極めて少なかった。傅抱石の個人蔵書を確認することはできないため、出版時期やタイトルから推論を述べたい。この『地貌学』と記された本は、

『地貌学原理』（地質出版社、一九五四年）を指す可能性が高い。この本はソ連の地質学者ボンダルク（本書による中国語訳名は「邦達楚克」、Владимир Еврилович Бондарук、一九〇五年—一九九三年）著作の中国語訳本である。版權頁に掲載された説明文によれば、ロシア語の原本は一九四九年に、ソ連の総合大学や師範学校の指定教科書としてモスクワで出版された。表紙や版權頁に印刷された文字によると、この中国語訳本も「中央人民政府地質部推薦 高等学校教材試用本」として、当時の高等学校で使用されたものである。「地貌学」は日本語では一般的に「地形学」（英語：geomorphology）と呼ばれ、主に地球の表面上を構成するあらゆる地形の記載・分類・成因などの研究を指す。十九世紀に地質学（英語：geology）の一分野として発展し始めたが、現在では独立した学科である。このような『地貌学原理』の特徴を踏まえると、傅抱石は『写山要法』を出版した一九五七年前後の時点で、専門的な地質学の文献を求めている可能性がある。さらに言えば、ドイツの地質学専門家である「舒勒教授（Prof. Schuler）⁽⁵³⁾」と交流した記録もある。一九五〇年代末期の傅抱石は、写生旅行による実地調査や理論的な勉強によって、『写山要訣』の内容を超えて、独自の地質学画論や表現方法を構築しはじめていたのだ。

傅抱石の学生や後継者の中で、多くの人は地質学画論を受け入れ、自分の作品に地質的特徴を表現することを重要視した。例えば、黄

名々は独自の「沙漠皴」で沙漠を描き、名を馳せることになった。

傅抱石を代表として一九六〇年代の江蘇省で形成された「新金陵画派」（金陵とは、南京の古称である）は、実景写生や地質学の活用を特徴とし、二十世紀の中国画壇で極めて大きな影響力を持っていた。

おわりに

傅抱石は日本留学時代の一九三三年から、高島北海の『写山要訣』に触れて、これを高く評価していた。彼による訳書『写山要法』は、一九五〇・六〇年代において、中国の山水画改造活動を契機に出版された。社会主義リアリズムの新様式を作りだすために、傅抱石は自分の絵画制作に『写山要訣』の地質学画論を活用し、さらに地質的画論の宣伝や紹介を積極的に行った。

以上の通り、本論では『写山要法』が中国人読者にとってより受け入れやすいものとして編纂されたその経緯について詳述した。傅抱石の翻訳作業は、結果的に高島北海原著『写山要訣』の日本の画論書という特性を弱めた。加筆修正と注釈を通して、地質学画論と中国古代の山水画理論の関係性を強く押し出し、中国美術には写実の伝統がありながら美術の先進国であるという主張も織り込んでいく。そのため、高島北海の地質学画論は、中国本来の写実的な伝統を継承し、また科学的な地質学を体得する方法として理解されるよ

うになった。

傅抱石自身は『写山要法』の原著者の存在を不透明にさせる意図はなかったが、結果として多数の読者が誤認し、高島北海は地質学者として認識され、本書は傅抱石が地質学理論を参照して編纂したものだと理解されてきた。これは傅抱石が高島北海の人物像について具体的に言及せず、地質学的重要性を繰り返し強調したことが主たる要因である。加えて、日中両国において高島北海の関連研究が欠けていた点も留意すべきであろう。

以上、二つの要因が絡まり合って、中国の美術史において高島北海の存在は重要視されてこなかった。しかし、高島北海の地質学画論は、傅抱石を通じて新金陵画派をはじめ、多くの中国画家に深い影響を与えていたのである。山水画に地質学を導入する試みは、日本では途絶えてしまったが、中国では高く評価され、そして広く受容され、一九六〇年代以降の中国画壇で開花した。

注

- (1) ここで代表的な出版物数点を羅列する。日本では『傅抱石の絵画 特別陳列―武蔵野美術大学美術史料図書館所蔵―』（一九九五年、渋谷区立松濤美術館の展覧会図録）、『20世紀中国画壇の巨匠 傅抱石 日中美術交流のかけ橋』（一九九九年、渋谷区立松濤美術館の展覧会図録）などがある。アメリカでは *Chinese Art in an Age of Revolution: Fu Baoshi (1904-1965)* (二〇一

年、クリブブランド美術館やメトロポリタン美術館の展覧会図録）などがある。中国では『其命唯新・傅抱石百年诞辰纪念文集』（傅抱石記念館編、河南美術出版社、二〇〇五年）、『傅抱石研究文集』（傅抱石研究会編、上海書画出版社、二〇〇九年）などがある。

- (2) 金折裕司「高島北海と日本最初の広域地質図」『応用地質』第五三卷第二号、二〇二二年、八九―九七頁。

- (3) 高島北海「東洋画に就て」『美術新報』第二卷一四号、一九〇三年。高島北海「地質と皴法」『日本美術』第六三号、一九〇四年。

- (4) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、一一―二頁。

- (5) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一頁。

- (6) 傅抱石の渡日は、二回に分けられる。第一回目は、一九三二年九月から一九三三年六月まで、二回目は、一九三三年九月から一九三五年六月までである。

- (7) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一頁。

- (8) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一頁。

- (9) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、二頁。

- (10) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一頁。

- (11) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一一―二頁。

- (12) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、二頁。

- (13) 徐悲鴻「漫談山水畫」『新建設』第一卷第一二期、一九五〇年。

- (14) 李可染「談中國畫的改造」『人民美術』創刊号、一九五〇年。

- (15) 叶錦「艾青年譜長編」、人民文學出版社、二〇一〇年。

- (16) 艾青「談中國畫」『文藝報』一五期、一九五三年。関連する議論が多く存在する。参考として、ここで一部を羅列する。

于非闇「从艾青同志的《談中國畫》说起」『文藝報』一一期、一九五六年。

俞劍華「读艾青同志《談中國畫》」『文藝報』一一期、一九五六年。

秦仲文「读艾青《談中國畫》和看中国画画展览后」『文藝報』一二期、一九五六年。

宋仪「发扬国画的传统不能因噎废食（俞剑华同志《读艾青同志〈談中國畫〉——文读后》『文汇报』二四期、一九五六年）

- (17) 江蘇省内部や周辺地の写生活動を除き、長時間かつ長距離の旅行經歷を挙げると、以下のようになる。

一九五七年の東欧写生、一九五九年の湖南省韶山写生、一九六〇年の「二万三千里」（江蘇省・河南省・陝西省・四川省・湖南省・広東省など）写生、一九六一年の東北写生、一九六二年の浙江省写生、一九六三年の江西省写生。

- (18) 林木『傅抱石評传』、上海書画出版社、二〇〇九年。

- (19) 傅抱石「壬午重庆画展自序」傅抱石著、葉宗鎬編『傅抱石美术文集』、上海古籍出版社、二〇〇三年、三二―六頁。

- (20) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、二頁。

- (21) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、二〇、二三、二四、二七、三六、四三、四六、六三、六九、七一、七四頁。

- (22) また、『東北遊写景』図巻の所蔵者は、高島北海を東京画壇に誘った杉孫七郎であるが、傅抱石は松孫七郎と誤訳した。校正ミスであろうか。日本絵画に關係する内容への傅抱石の無関心が、ここからも窺える。高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、四頁。

- (23) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、三頁。

- (24) 高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、八頁。

- (25) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、二七頁。

- (26) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、七一頁。

- (27) 傅抱石による注解④・⑤。高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、六頁。

- (28) 傅抱石による注解⑦。高島北海『写山要法』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、六頁。

- 版社、一九五七年、三四頁。
- (29) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、九一—一〇頁。
- (30) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、五頁。
- (31) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、二二頁。
- (32) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一三三頁。
- (33) 傳抱石による注解⑥。高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、三四頁。
- (34) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、五一頁。高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、三三頁。
- (35) 中国絵画衰退論とは、南北宗論（文人画論）の誤りゆえに、中国絵画の衰退が引き起こされた、とする説である。清末の維新派のリーダー康有為（一八五八年—一九二七年）の『万木草堂藏画目』（一九一七年）や革命派の代表である陳独秀（一八七九年—一九四二年）の『答呂澂・美術革命』（一九一八年）をはじめ、二十世紀前中期の中国の輿論の中で盛んに唱えられ、日本や西洋にまで波及した。傳抱石はこの説に激しく反対していた。
- (36) 二十世紀初期の日本人による中国絵画に対する評価の変化について、久世夏奈子氏の研究が参考になる。久世夏奈子『『國華』にみる古渡の中国絵画——近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立』『日本研究』第四七集、二〇一三年三月、五三—一〇八頁。久世夏奈子『『國華』にみる新来の中国絵画——近代日本における中国美術観の一事例として』『『國華』第一一七編第六冊、二〇一二年一月、五一—一七頁。
- (37) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、五〇頁。
- (38) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、三三頁。
- (39) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、三四頁。
- (40) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、一一頁。高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、六頁。
- (41) 傳抱石による注解⑩。高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、六頁。
- (42) 高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年、三四頁。
- (43) 傳二石『傳二石談傳抱石』、山東画報出版社、二〇一八年、一五頁。
- (44) 「傳二石年表」による。傳二石『傳二石談傳抱石』、山東画報出版社、二〇一八年、八七頁。
- (45) 沈左堯「傳抱石开创中国画的新境界」傳抱石研究会編『傳抱石研究文集』、上海書画出版社、二〇〇九年、九五—九六頁。
- (46) 沈左堯「傳抱石的艺术成就」江西政協文史研究委員會・新余市政協文史資料研究委員會編『江西文史資料選輯・第四四期 傳抱石』、江西人民出版社、一九九二年、九七頁。
- (47) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年、一頁。
- (48) 高島北海『写山要訣』傳抱石訳、浙江人民美術出版社、二〇一八年。高島北海『写山要訣』傳抱石訳、上海人民美術出版社、二〇一九年。
- (49) 黄名芊『筆墨江山——傳抱石率团写生实录』、人民美術出版社、二〇〇五年、一六五頁。
- (50) 曹汶「继往开来的画坛一代宗师——深切怀念恩师抱石先生」江西政協文史研究委員會・新余市政協文史資料研究委員會編『江西文史資料選輯・第四四期 傳抱石』、江西人民出版社、一九九二年、一三九頁。
- (51) 黄名芊『筆墨江山——傳抱石率团写生实录』、人民美術出版社、二〇〇五年、一六五頁。
- (52) 宋振庭「关于傳抱石先生」江西政協文史研究委員會・新余市政協文史資料研究委員會編『江西文史資料選輯・第四四期 傳抱石』、江西人民出版社、一九九二年、三六頁。
- (53) 沈左堯「傳抱石开创中国画的新境界」傳抱石研究会編『傳抱石研究文集』、

上海書畫出版社、二〇〇九年、九三頁。

參考書目

高島北海『写山要訣』、東洋堂、一九〇三年。

高島北海「東洋画に就て」『美術新報』第二卷一四号、一九〇三年。

高島北海「地質と皴法」『日本美術』第六三号、一九〇四年。

徐悲鴻「漫談山水畫」『新建』第一卷第一二期、一九五〇年。

李可染「談中國畫的改造」『人民美術』創刊号、一九五〇年。

艾青「談中國畫」『文藝報』一五期、一九五三年。

邦達楚克『地貌學原理』北京地質學院編識、地質出版社、一九五四年。

高島北海『写山要法』傅抱石訳、上海人民美術出版社、一九五七年。

傅抱石編『國畫寫山要法』、香港宏圖出版社、一九八〇年。

江西政協文史研究委員會 新余市政協文史資料研究委員會編『江西文史資料選

輯・第四四期 傅抱石』、江西人民出版社、一九九二年。

傅抱石著、葉宗鎬編『傅抱石美術文集』、上海古籍出版社、二〇〇三年。

傅抱石記念館編『其命唯新・傅抱石百年誕辰紀念文集』、河南美術出版社、

二〇〇五年。

黃名芊『筆墨江山・傅抱石率團写生实录』、人民美術出版社、二〇〇五年。

关山月美術館『建設新中國・二〇世紀五〇至六〇年代中期中國畫專題展』、廣西

美術出版社、二〇〇五年。

傅抱石研究会編『傅抱石研究文集』、上海書畫出版社、二〇〇九年。

林木『傅抱石評傳』、上海書畫出版社、二〇〇九年。

叶錦『艾青年譜長編』、人民文學出版社、二〇一〇年。

金折裕司「高島北海と日本最初の広域地質図」『応用地質』第五三卷第二号、

二〇一二年。

万新華『傅抱石絵画研究 1949-1965』、人民美術出版社、二〇一四年。

傅二石『傅二石談傅抱石』、山東畫報出版社、二〇一八年。

高島北海『写山要法』傅抱石訳、浙江人民美術出版社、二〇一八年。
高島北海『写山要法』傅抱石訳、上海人民美術出版社、二〇一九年。

石濱シュールに集う人々 ——四半世紀後に^①

長田俊樹

一、はじめに

一九九五年七月、日文研の辻惟雄教授が主催する「奇人・かざり研究会」で「石濱シュール・露人日本学者・言語学界三大奇人」と題して発表した。辻先生には「発表、なかなか面白かったので、ぜひどこかに書いてください」と言われて、すでに四半世紀以上が経つ。二〇一七年の日文研創設三十周年の会で、辻先生にお目にかかったときにも、「あれなかなか面白かったですよ」と覚えておられた。しかし、残念ながら、このテーマで何か書いたことはこれまでにない。小論は基本的に、その時の発表レジュメに基づいている。

一方、石濱純太郎^②の蔵書などが納められた石濱文庫（大阪大学図書館内）の整理に力を入れておられる堤一昭大阪大学教授に、この発表レジュメをお送りしたところ、ご自身の発表「石濱純太郎をめぐる学術ネットワークと石濱文庫の資料群」で「石濱シュール」という用語を使い「石濱サロンや大阪東洋学会（一九三三年）、静安学社（一九二七年）、大阪言語学会（一九四二年）に集った研究者たちをさす（らしい）」と説明されているのを見て、ますますこのテーマでまとめなくてはという思いを強くした。

筆者は日本言語学史に関心を寄せてきた。とくに、日本語系統論をめぐる学説史を発表してきた（長田俊樹一九九八、二〇〇三、二〇〇五、二〇一七、二〇二〇）。しかし、石濱シュールに集う人々

は正当なる日本言語学史にはたぶん登場しない。なぜなら、吉町義雄や浅井恵倫などの例外を除き、彼らは言語学科の主任教授として、名を連ねることがほとんどなかったからである。彼らは多数の言語を駆使するポリグロットであり、あまり知られていない言語や文字を学ぶことが大好きだった。別稿で取り上げた菊池慧一郎も、ポリグロットであり、プラトン哲学者としての名声を捨てて、新しい言語にどんどん挑戦し続けた人だった（長田俊樹二〇二一a、二〇二一b）。こうした人々を顕彰し知ってもらおうと日本言語学史とは別に、日本言語学史外伝シリーズを書き始めたばかりである。小論の視点もどちらかといえば外伝に近い。

石濱シュレとはなんだったのか。小論では一九九五年の発表レジュメを基に、最近の研究成果も取り入れつつ、石濱純太郎の生涯と石濱の周りに集う人々を紹介しておきたい。

二、石濱純太郎の生涯

石濱純太郎（一八八八—一九六八）は大変有名な東洋学者である。

石濱の生涯を知るには、『石濱先生古稀記念東洋学論叢』（一九五八年刊行。以下、古稀記念と略す）に掲載された「石濱純太郎先生年譜略」（以下、年譜）と吾妻編（二〇一九・九—二〇二〇）による「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」（以下、補訂）がある。また、そ

の著作については、『古稀記念』に掲載された「石濱純太郎先生著作目録」（以下、著作目録）がある³。詳細はそちらを見ていただきたい。ここでは、年譜によつて石濱と彼が出会った学者たちとの関係に注目してみよう。ただし、年譜の年号を西暦のみで記した。

一八八八年八月二十七日 大阪生まれ。

一八九七年四月 泊園書院に入学し、藤澤南岳（一八四二—

一九二〇⁴）より業を受く。

一九〇八年十月 東京帝国大学文科支那文学科入学。

一九一一年七月 同大学卒業。卒業論文「欧陽脩攻究」⁵（漢文）。

一九一五年 西村天囚（一八六五—一九二四）に誘われ、大

阪の文会「景社」に入会。

長尾雨山（一八六四—一九四二）、武内義雄

（一八八六—一九六六）、靱山衣洲（一八五五—

一九一九）を知る。

一九一六年七月 宇治花屋敷において、京都の文会「麗澤社」と

景社の第一回連合会あり。

内藤湖南（一八六六—一九三四）、狩野直喜

（一八六八—一九四七）、青木正児（一八八七—

一九六四）、岡崎文夫（一八八八—一九五〇）、神

田喜一郎（一八九七—一九八四）、小島祐馬

(二九八一―一九六六)、富岡謙蔵(一八七三―一九一八)、佐賀東周(一八八三―一九二〇)、那波利貞(一八九〇―一九七〇)、福井貞一(一九二五)、藤林広超(一八八八―一九八四)、本田成之(二八二―一九四五)らと会う。
このころ石田幹之助(二八九―一九七四)に会う。

一九二一年 羽田亨(一八八一―一九五五)と会う。

一九二三年六月 大阪東洋学会を創設。

一九二四年七月 内藤湖南に随伴し、渡欧。

一九二七年九月 静安学社を發起し、幹事となる。

一九四二年 大阪言語学会を創立発会す。

一九五三年 日本西蔵学会会長に推薦さる。

一九五四年 なにわ賞を授与。

一九六八年二月十一日 死亡。

ここに登場する会や学者たちについて、簡単に時代に沿って紹介しておこう。

まず、泊園書院は藤澤東暎(一七九四―一八六四)が大阪に開いた漢学塾であり、関西大学のルーツの一つとなる私塾である。その膨大である「泊園文庫」は戦後関西大学に寄付され現在に至っている。

る。藤澤南岳(一八四二―一九二〇)は東暎の息子である。石濱は満九歳の年から漢学塾に通った。

西村天囚の本名は時彦で、天囚は号で、他に碩園とも名乗った。種子島生まれで、東大古典講習科で学び、大阪朝日新聞社の記者として活躍し、明治維新とともに閉校となった大阪の学問所、懷徳堂を一九一六年に再建した人物である。

景社とは、「(西村)天囚が設けた漢詩文鍛錬を目的とする結社」(湯浅二〇一九:二九〇)で、その由来は「同人がみなが天満宮(菅廟)の近くに住んでいるため、賢者を仰ぐ(景)思いをことよせた」(堤二〇一九:三〇〇)と「景社同約」にある。年譜であげられた人々について、長尾雨山は「明治期の日本の漢学者・書家・画家・篆刻家である。狩野直喜(君山)・内藤湖南とともに中国学を開花・進展させたひとりに挙げられる」とウイキペディアで紹介されている。^⑥武内義雄は「中国哲学者。三重県の生れ。京都帝国大学を卒業後、東北大学教授、さらに宮内省御用掛として皇太子の教育に当たる。帝国学士院会員、文化功労者」^⑦とコトバンクにあり、『武内義雄全集』(全十巻。角川書店)が出版されている。艸山衣洲は漢学家として名高く、一八九八―一九〇四年には『台湾日日新報』の漢文部主任として活躍した。いずれも、漢学に秀でた学者である。

一方、麗澤社で出会った人々は説明不要な大学者が多い。内藤湖

南は戦前日本を代表する東洋学者であり、狩野直喜、青木正児、小島祐馬、那波利貞はいずれも京都大学で教鞭をとり、名誉教授となったお歴々である。岡崎文夫、神田喜一郎、藤林広超、本田成之、いずれも京都大学出身で、岡崎は東北大学、神田は台北帝大（のちに大阪市立大学、京都国立博物館館長）、藤林は同志社大学、本田は龍谷大学でそれぞれ教鞭をとった。

富岡謙蔵は文人画で著名な富岡鉄斎（一八三七—一九二四）の長子で、幼少より病弱であつたため正規の教育を受けず、ほとんど独学で学問を修め、京大講師となつたが、四十六歳で早世した。佐賀東周は禅宗の僧侶で、福井貞一は書画骨董収集家として知られている。⁹

「年譜」にしたがえば、石濱純太郎が内藤湖南に初めて出会つたのは、宇治花屋敷での麗澤社と景社の第一回連合会だと思われている。しかし、堤が石濱文庫にあつた「景社紀事」を丁寧¹⁰に拾い上げ、「年譜」の訂正を行っている。

石濱が最初に湖南に出会つたのは、一九一六年四月二十五日、枚方の占春楼で開かれた大阪の文会「景社」と京都の文会「麗澤社」の第二回連合会であり、ここで石濱は西村時彦の紹介で景社に加盟している。

従来、両者の最初の出会いとされてきた、「一九一六年七月

十六日 宇治花屋敷において、京都の文会麗澤社と景社の第一回連合会」とは、第一回ではなく、第三回の連合会で、場所は宇治の旅館・網代であり、出席者も若干異なる。（堤二〇一九・三二—三二三）

石濱の年譜が今塗り替えられようとしている。¹⁰とくに、石濱がいづつ湖南と出会つたのか、堤（二〇一九）はそれをテーマに取り上げている。それほど石濱にとつて、湖南は大きな存在だった。それについては後で述べる。

年譜に掲載された人物として、石田幹之助と羽田亨は特に紹介の必要がないであろう。石田は東大卒業後、モリソン文庫（現在の東洋文庫）を買い受けるのに奔走したことで知られ、彼の業績は『石田幹之助著作集』（全四巻）で読むことができる。また、羽田は京大総長となり、文化勲章も受賞した大学者である。¹¹

この羽田と知り合う時期について、「年譜」も「補訂」も一九二三年となつているが、岡崎精郎によると、一九二二年六月十六日の「日記」にはこう記されている。¹²

支那学会。羽田氏に始めて会ふ。今西博士¹³に女真文や蒙古文のものを貰ふ事になった。（岡崎一九七九・一三八七）

つまり、「年譜」よりも一年前に、羽田亨と知り合っていたことになる。残念ながら、「補訂」にはこの岡崎の指摘が反映されていない。

大阪東洋学会、静安学社、大阪言語学会の三つがこの年譜に登場する。しかし、それらがどんな組織で、何をおこなってきたのか、その詳細はあきらかではない。そこで、小論ではそれら学会とそこに集う人々に焦点をあて述べてみたい。また、石濱純太郎が設立にかかわったと思われるウラル・アルタイ学会や浪華芸文会については、これまで論じられたことがほとんどなかった。これらの研究会についても小論で取りあげたい。ただし、石濱が設立にかかわった西蔵学会については、現在も日本チベット学会として活動が続いているし、分野がかなり限られてしまうので、小論の対象に含まない。それでは、大阪東洋学会から順にみていこう。

三、大阪東洋学会

年譜によると、「大正十二（一九二三）年六月、Nicholas Nevsky氏と大阪東洋学会をつくる」とある。

ニコライ・ネフスキー（一八九二—一九三七）はロシア人研究者であり、石濱とともに西夏語を研究したことで知られる。加藤九祚（一九七六、二〇一一）の評伝が詳しいので、それにしたがってネフ

スキーの生涯を振り返っておこう。

ネフスキーはサンクトペテルブルク大学で中国語、日本語を専攻し、一九一五年、官費留学生として日本に留学した。一九一九年、小樽高等商業学校（現・小樽商大）でロシア語教師を務めた後、一九二二年四月から大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）に赴任し、当時、蒙古語部選科生¹⁴だった石濱と出会った。また、一九二三年から一九二九年、ネフスキーは京大でもロシア語を教えていた¹⁵。その時の教え子が、後に静安学社設立に加わる高橋盛孝であり、静安学社に第二回集会から社友として参加した吉町義雄である。日本滞在中に、ネフスキーはアイヌ語、宮古島語、台湾原住民言語のツォウ語などのフィールド調査をおこなう一方、石濱とともに、西夏語研究にも従事した。一九二九年ロシアに帰国し、スターリン時代の粛清によつて、一九三七年、銃殺された。

大阪東洋学会の名称について、石濱の日記には「大阪東洋言語学会設立に関して校長に面会せんとて居残りしも、ダメらしければ、ネフスキーに委任して帰る¹⁶」と記されていたことを生田（二〇一九・一九六）が指摘している¹⁶。この時の校長は中目覚（一八七四—一九五九¹⁷）であり、中目が大阪東洋学会の会長を務めることになる。一方、この同じ箇所を引用している岡崎（一九七九・一三八八）は、「大阪東洋言語学会」と記されている点に「すでにその性格が明示されているように」と述べている。じつさい、石濱のちに大阪言語学

会を設立するように、言語学へのこだわりはこの時からあったことがわかる。生田（二〇一九・一九六）は「校長と話すうちに東洋言語学会より広い射程をもち多くの人が参加できる東洋学会をイメージするようになっていった」と指摘するが、日記には「中目校長に会ふ。種々談ず。校長は学者向きでないから困る」（岡崎一九七九・一三八八）とあることから、生田の指摘のように、校長と話すうちに東洋学会をイメージしたとは到底思えない。

大阪東洋学会がどんな会合を開いていたか。

石濱文庫をくまなく探せば、何か手掛かりが発見されるのかもしれない。石濱文庫の整理をおこなった岡崎によると、「学会としての活動、とくに研究例会についてはごく初期を除き、如何に成行いたかを詳かにしえない」と指摘している（岡崎一九七九・一三九一）。また、その後の石濱純太郎研究の成果も含む、吾妻編（二〇一九）をみるかぎりにおいても、大阪東洋学会の活動や研究会など、その実態はわからない。もともと、設立後の一九二四年七月から翌年二月まで、石濱は内藤湖南に随伴してヨーロッパに行っていたため、大阪東洋学会の会合は開かれなかったのかもしれない。大阪東洋学会の後世への大きな貢献は会誌発行にある。それは『亜細亜研究』と呼ばれ、以下が発刊されている。最後に（国会）と記したものは国会図書館デジタルコレクションでダウンロードして読むことができるものである。

- | | |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|
| 第一号 | 小倉進平「新羅語と慶尚北道方言」（一九二四年六月）（国会） |
| 第二号 | 伊徳均「蒙語動詞の活用と其種類」 ¹⁸⁾
渡部薫太郎「滿洲語女真語と漢字音の關係」（一九二五年二月） ¹⁹⁾ |
| 第三号 | 渡部薫太郎「滿洲語図書目録」（一九二五年三月）（国会） |
| 第四号 | ニコライ・ネフスキー「西夏文字抄覽…西藏文字対照」（一九二六年三月） |
| 第五号 | 中目覚「独訳ニクブン文典 Grammatik der Nikbun-Sprache (des Gilyakschen)」（一九二七年三月） |
| 第六号 | 浅井恵倫「馬來半島に於ける馬來語音の地方的差異に關する若干の考察」（一九二七年十一月） ²¹⁾ |
| 第七号 | 渡部薫太郎「滿日対訳仏説阿弥陀經」（一九二八年十月）（国会） |
| 第八号 | 中目覚「独訳オロツコ文典」（一九二八年十一月）（国会） |
| 第九号 | 渡部薫太郎「滿洲語綴字全書」（一九三〇年三月）（国会） |
| 第十号 | 中目覚「氣候と歴史」（一九三二年六月）（国会） |
| 第三号 | 渡部薫太郎「増訂滿洲語図書目録」（一九三二年十月） |

(国会)

第十一号 渡部薫太郎「女真館来文通解」(一九三三年十月)(国会)

会)

第十二号 渡部薫太郎「女真語ノ新研究」(一九三五年一月)(国会)

会)

亡父長田夏樹は「大阪東洋学会の『亜細亜研究』と『奉天図書館叢刊』について」を『水門——言葉と歴史』第八号に発表している。かつての文献研究は文献にいかアクセスできるかという点も含めた研究なのだが、夏樹はこうした文献資料収集には貪欲だった。

「大阪外大の図書館にもそろつていないという岡崎精郎君の話を思い出し」(長田夏樹一九六六・一八)、『亜細亜研究』の紹介をしたという。この夏樹の紹介でも、岡崎や生田による紹介でも、『亜細亜研究』は第十二号十三冊ということになっている。しかし、注で示したように、第二号の増訂版が一九三三年に出版されているので、第十二号十四冊ということになる。

取り上げられているのは朝鮮(韓国)語、蒙古(モンゴル)語、西夏語、満洲語、女真語、オロツコ(ウイルタ)語、ニクブン(ギリヤーク)語で、すべて東洋の言語である。つまり、このラインアップを見れば、石濱が最初に考えていた名称「大阪東洋言語学会」でもまったく問題がない。つまり、石濱が意図した「大阪東洋

学会」では、東洋の諸言語研究がおこなわれることを念頭においていたことがうかがえる。ただし、十号だけが異質である。中目が当時はやったハンチントンの環境決定論的議論を展開しているのだが、中央アジアの歴史がいかに関係に左右されてきたかを述べたもので、石濱が描く東洋学とも、東洋言語学ともまったく関連がない。石濱が作り上げた大阪東洋学会の機関誌である『亜細亜研究』に、こんなものが入ってしまったことを嘆いていたことは容易に想像がつく。後述するように、『亜細亜研究』の出版に関していえば、石濱がどこまで関与していたのかは疑問が残る。なお、第一号以外は編輯兼発行人は渡部薫太郎である。したがって、国会図書館のデータベースをみると、第四号の「西夏文字抄覧・西藏文字対照」の著者を渡部薫太郎としているケースがある。

渡部薫太郎(一八六一—一九三六)とはどんな人だったのだろうか。石濱純太郎(高田編二〇一八・九七一—二〇〇〇)と上原久(一九六五・二)にしたがつて、簡単に述べておこう。

まず、名前だが「シゲタロウ」と読むのが正しいが、みんなからは「クンタロウ」と呼ばれるため、ローマ字でもKUNTAROと表記するようになったという。最初、英学校で英語を習得し、陸軍通訳などを務めた後、一九〇八年、旧満洲の間島に入り、写真屋をしながら満洲語を学び始めた。一九二四年、大阪外国語学校講師となり、七十六歳で亡くなるまで教鞭をとり続けた。満洲語を始めたの

は四十八歳の時のことだ。晩学ながら、『亜細亜研究』として満洲語や女真語に関する著作をまとめている。満洲文字を組版することままならぬ時代に、自分で鉄筆をふるい、謄写版として出版している。大いなる熱意と奮闘努力が結集したのが渡部薫太郎の満洲語研究なのである。

なお、『亜細亜研究』の執筆者のうち、小倉進平（一八八二—一九四四）は後に東大教授となり、朝鮮語研究者として知らぬ人がないほど有名である。また、浅井恵倫（二八九四—一九六九）はこれから述べる静安学社にも参加することになるのだが、オーストロネシア語研究、とりわけ台湾原住民言語研究で有名な言語学者である。

四、静安学社

静安学社の由来について、石濱は以下のように述べている。

今春大阪地方へこられた高橋盛孝君が一日何か一会を設けて同臭会合に便し研究討論に資する様にしては如何と提議せられた。僕も賛成しネフスキ君も賛成とあつて、六月の初め寄合つて相談した。で愈々実行しやうではないかと申合わせた。会名は一つ我々の景仰する誰か先儒の名を冠したものにしては如何

と云ふことになり、東西の碩学を銓考した。するとネフスキ先生が一兩日前王国維先生が亡くなられたと聞いたがほんとだらうか、ほんととしたら王先生の名を記念しては如何と言つた。

僕はそんな話をちつとも知らなかったもので、驚いて他の人の誤だらうと否定した。兎に角三人共に王先生には亡くなって貰ひたくなかつたもんだから、何かの誤としておいて、一方神田翯倉君に聞かせる事とした。噂は真実であつた。已に故人とあれば丁度我々の会に採つて冠し得るは好記念である。殊に静安先生の学行は我等の儀表と仰いで然るべきものだ。静安学社—Societas in Memoriam Wang Kuo-wei, これこそ我等の会名でないか。

かくして我々の静安学社は生れ出た。静安先生の名を冠するを誇とする我々はその名に背かざる実をあげねばならない。

（高田編二〇一八…八一）

こうして静安学社は、「浅井（恵倫）、石濱、財津（愛象）、高橋、ネフスキは社員に、神田（喜一郎）、吉田（鋭雄）は社友として学社は成立し」（静安学社通報²³、第一号、六頁）、幹事には石濱と高橋が就任した。また、第二回集会では、「プレトネル（石濱紹介）、小林太市郎（石濱紹介）、吉町義雄（ネフスキ紹介）は社友に加はつた」（通報一号、九頁）。さらに、第三回集会では、「石田幹之助、熊澤猪之

助（共に石濱紹介）は社友となった」（通報一号、一〇頁）。たった五名の社員と二名の社友が始まった静安学社も、岡崎（一九七九・一四〇〇）によると、一九四一年段階で社友は実に五十七名を数えるようになった。⁽²⁴⁾戦前の自由に学問が許される雰囲気ではなかった時代に、こんなに社友が増えていったのは驚くべきことである。

なお、「年譜」でも「補訂」でも「浅井恵倫、笹谷良造、高橋盛孝、Nicholas Zvezkyの諸氏と静安学社を発起し幹事となる」とある。しかし、「通報」をみるかぎりにおいて、笹谷良造（一九〇一―一九六九）は設立時に参加していないし、第三回の集会まで参加していない。⁽²⁵⁾「年譜」の修正が必要である。

上で挙げられた社友のうち、吉町義雄（一九〇一―一九九四）は九州方言を研究したことで知られる言語学者である。また、高橋盛孝（一九九一―一九八〇）は東大中国哲学を出たのち、京大大学院に学び、一九二六年から関西大学で民俗学や文化人類学を教えた人である。⁽²⁶⁾財津愛象（二八八五―一九三二）は熊本県で生まれ、広島高等師範国語漢文部を卒業し、のち京大で支那文学支那語学を専攻し、静安学社設立時は大阪高校教授だった。しかし、静安学社成立の四年後に四十七歳（数え）で亡くなっている。敦煌文書に関心を寄せていた。⁽²⁷⁾吉田鋭雄（一八七九―一九四八）は重建懷徳堂（江戸時代の懷徳堂とは区別してこう呼ぶが、「懷徳堂」と略す）の助教を務めていた。この二人は漢学出身者であり、懷徳堂に関わっていた人

たちである。というのも、静安学社の会合はつねに懷徳堂で行われていたから、懷徳堂の関係者にも参加してもらう必要があったのであろう。

プレートネルについては生田（二〇一九）に紹介されている。それによると、一八九二年ペテルブルグで生まれ、一九一一年ペテルブルグ大学東洋語学部中国語・日本語科に進学し、日本語を専攻し、静安学社に加盟したころは天理外国語学校でロシア語を教えていた。ロシア革命後は一度もロシアに戻らず、一九四一年からベトナムのハノイ大学でフランス語と一般言語学を教え、一九五〇年から再び日本に戻って、一九七〇年、日本で亡くなっている。

小林太市郎（一九〇一―一九六三）については京都西陣生まれで生家も西陣織の織り元で、京都帝国大学哲学科卒業後、ソルボンヌ大学に留学した美術史家である。ウィキペディアには以下のように掲載されている。

博覧強記と広い視野に支えられつつ大胆な推論を展開するため、通常の実証的な学者にはない魅力を持つが、批判されることも多い。（中略）神戸大学における講義でも博学ぶりが評判であり、学生だけでなく教員たちも聴講に来るほどであった。だが、教授会に一度も出ずに研究に専念し孤高の姿勢を貫いたことなどで、業績に見合うほどの学界的地位は得られなかったといわれ

なかなかユニークな学者で、東洋学とは一見かわかりがなさそうだが、石濱に吸い寄せられた「奇人」の一人なのだろうか。⁽²⁹⁾ 教授会に一度も出ないと今なら即刻首である。

最後の熊澤猪之助は大阪府立高津中学（旧制）の教諭である。泊園社編輯同人に名前を連ねている（吾妻二〇一七）。それ以上のことはわからない。

静安学社の規約の中に、社員（のちには社友）は「一年一回以上研究成果を本学社により発表するの義務あるものとす」とある。岡崎（一九七九・一三九五）も、生田（二〇一九・二〇一）もそこに注目しているが、実際にはすべての社友が発表することはなく、社友が増えていくと共に、名ばかりの規約になっていった。手元にある静安学社一覧によると、昭和十一年度（一九三六年九月～一九三七年七月）から昭和十五年（一九四〇年九月～一九四一年七月）までは研究発表者とその題目が掲載されている。その間の発表者はかなり偏っている。年七～八回の開催で、石濱の発表数が圧倒的で三十一回に及ぶ。続いて、西田長左衛門⁽³⁰⁾が十五回、高橋盛孝が十一回である。「大阪東洋学会より静安学社へ」を執筆した岡崎精郎も、一九四一年六月に「党頂勃興過程の一考察」と題する発表をおこなっている。

ところで、「年譜」や「補訂」では「昭和十一（一九三六）年六月 静安学社幹事を解かる」とある。これだけを取り上げると、静安学社での石濱の活動が沈静化したようにみえる。しかし、実際はまったく逆である。今みたように、幹事を下りてからの発表がじつに三十一回にも及んでおり、研究発表という点ではますます活発になっていく。一方、石濱のあと幹事を務めたのは岩代吉親⁽³¹⁾と金戸守⁽³²⁾である。彼らが静安学社で果たした役割はとても大きいとは思えない。石濱が幹事を辞めた後は、幹事は名ばかりで、ほとんど事務的になっていった。それが実態であろう。

なぜ大阪東洋学会を設立して四年後に、今度は静安学社を設立したのであろうか。⁽³³⁾

ここからは筆者の推測に過ぎないが、その理由を以下の日記の記述に探ることができるのではなからうか。岡崎によると、一九三三年十一月十五日に石濱の日記にこう記されている。

校長が「大阪東洋」学会の事を彼れ此れ云ふさうなので面会する。雑誌を早くなんて云っていた。学問なんか分らん男はいやだ。（岡崎精郎一九七九・一三八九）

これ以後、日記には大阪東洋学会に触れることはなかったという。また、『亜細亜研究』発刊についても、中目にせかされていたこと

を思うと、『亜細亜研究』の執筆者選考に、石濱の思う通りには行かなかった部分があったのだろう。じじつ、『亜細亜研究』について、岡崎（一九七九・一三九一）は『亜細亜研究』の執筆者は、当時、朝鮮、朝鮮総督府編修官であった小倉進平氏を除いては、すべて大阪外語の教官で占められており、事実上、大阪外語に直結したものであつた」と指摘している。

これまで大阪東洋学会を設立した石濱とその学会誌ともいふべき『亜細亜研究』は一体と考えられてきた。しかし、それを改める必要がある。つまり『亜細亜研究』で出す論文は大阪外語学校長であった中目覚主導で決められていたのではなからうか。しかも「大阪東洋学会」会長の中目覚と「静安学社」を設立した石濱純太郎の間には、深い溝ができていたのではなからうか。

それを示す根拠をいくつかあげることができる。箇条書きにして、以下にあげておく。

- (1) 静安学社が設立されて以後も、『亜細亜研究』が発刊され続けたこと。しかも、東洋学とはまったく関係のない中目覚自身が書いた「気候と歴史」まで含まれている。
- (2) 静安学社の社友に、中目覚がなっていないこと。また、『亜細亜研究』の執筆者として、一番多く出版した渡部薫太郎も当初社友としては加わっていなかったこと。ただし、一九三二年に

は社友として掲載されている。また、渡部が亡くなったときに、石濱が追悼文（高田編二〇一八・九七一・一〇〇）を書いていることから、石濱と渡部の仲が悪かったわけではなさそうだ。

- (3) 『亜細亜研究』第三号の増訂版（一九三二年）には、冒頭に中目が満洲国執政溥儀に奉呈した漢文が掲載されて、「本篇ハ大阪外国校語学長³⁴満洲視察之際執政溥儀閣下ニ閲シ大阪東洋学会ヲ代表シテ奉呈セラレシモノ」と但し書きがつけられている。大阪東洋学会の代表者としての中目覚がクローズアップされている。このことは石濱の手から完全に離れていることを示している。

- (4) 静安学社の名で『東洋学叢編』が一九三四年に出版されている。この本の裏表紙にラテン語で静安学社の名前が記されている。そこには *Societas Orientalis Osaka'ensis in Memoriam Wang Kuo-wei* とある。日本語にすれば、これこそ「王国維記念大阪東洋学会」にはかならない。初期の段階での静安学社の横文字表記は *Societas in Memoriam Wang Kuo-wei* で「王国維記念会」であった。つまりその当時はまだ大阪東洋学会と一線を画す気はなかったのだが、後に静安学社こそが大阪東洋学会にふさわしいことを自らが宣言して、こう名付けたのではなからうか。³⁵

- (5) 中目覚がつかかりさせられる事件があったこと。それは国語学者亀田次郎（二八七六一一九四四）が一九二四年に大阪外語

当局から休職を命じられたことである。石濱はこれにかかわった学校当局を難じ、「亀田氏は種々短所はあつても、学者としては沢山ある人でないのに、大阪又外語としても学者が極めて少いのに残念だ」と日記に記している（岡崎 一九七九・一三八九）。石濱が立派な学者と認める亀田次郎に対し、外語からの休職を命じた校長こそ中目覚であつた。

以上、石濱純太郎が中目覚主導の大阪東洋学会と袂を分かつたとみられる間接的証拠をあげた。これから、大阪東洋学会から四年後には新しい静安学社を結成した理由を次のように推察したのであるが、いかがであろうか。

石濱は大阪東洋学会が「学問なんかわからない」中目大阪外語学校長の主導でおこなわれることに不満があつた。それならば真に東洋学をこころざす友人諸氏と別の学会を作ろうと静安学社を設立したのではないか。あくまでも私見であるが、その可能性は高いとみている。

五、大阪言語学会

「年譜」によると、「昭和十七（一九四二年）二月 大阪言語学会を創立発会す」とある。

しかし、それ以上のことはこれまでの石濱純太郎研究のなかで論じられることはなかった。父・長田夏樹が残した資料の中に、一九四九年の大阪言語学会例会の通知はがきがある。⁽³⁶⁾それによると、大阪言語学会は事務局として川崎直一の家の住所が記載されている。それを手掛かりに推測すると、『大東亜語学叢刊』の刊行と関係があると思われる。じつは、このシリーズが監修羽田亨、編輯石濱純太郎と川崎直一になっているからである。

川崎直一（一九〇二—一九九一）とはどんな人だったのか。⁽³⁷⁾

川崎はエスペランチストとして有名で、『基礎エスペラント語』を出版している。大阪に生まれ、石濱の出身校である市岡中学卒業後、東京に出て早稲田大学のフランス語学科に入学。しかし病気で中退し大阪に戻ってきた。そして、大阪外国語学校選科や別科でドイツ語、ロシア語、中国語を学び、第二次世界大戦中はアラビア語辞書編纂を手伝っていた。戦後、大阪外国語大学の教授として、エスペラント語をはじめ、ビルマ語やギリシア語・ラテン語を教えたという典型的なポリグロット（多言語使用者）である。

つぎに、石濱とともに編集に携わった『大東亜語学叢刊』についてみておこう。

このシリーズはわずか『マレー語』（宮武正道著）と『樺太ギリヤーク語』（高橋盛孝著）の二冊だけが刊行されている。その刊行された『マレー語』に掲載された監修者羽田亨の「序」からみていこ

う。

東亜共栄圏具現の叫びが高まるにつれ、これと並行して我が国民に最も緊要なる事項の一つとして要求せられたのが、亜細亜諸国に行はれる言語の知識を得ることであつた。実にこの知識の欠如を顧ることなしに、一途に指導力を標榜して共栄の面に乗り出すのは、その勇氣は嘆賞に値するとしても、實際上における困難は、例へば船なくして大海を渡らうとする有様にも比せられるべきであらう。朝日新聞社が昨春逸早く本叢刊の編纂を企て、この困難を救ふと共に、広く亜細亜諸民族に対する認識を深める一助としたことは、誠に適宜の計画であつたといはなければならぬ。爾来既に一年、実用的にして言語学的、平明にして高い水準、入門書にして新しい研究といふ編纂方針の下に、それぞれ述作に当られた専門家各位の苦心がこのほど漸く功を成し、逐次刊行を見ることになつたのは幸慶の至りである。(羽田亨一九四二・Ⅲ)

このシリーズは朝日新聞社が一九四一年に編纂を企画し、第一冊目がこのマレー語である。羽田の序文をみると、「船なくして大海を渡らうとする有様にも比せられるべき」と言語の知識なしに、共栄圏は成り立たないとなかなか説得力がある。さすがに、京都帝国

大学総長である。また「実用的にして言語学的、平明にして高い水準、入門書にして新しい研究」とあるが、ずいぶん欲張った企画だ。ただ、刊行された『マレー語』をみると、学問的というよりも、入門書の色合いが強い。

羽田のあと、石濱の序がつづく。その序の中に、執筆者の宮武正道を紹介した一節をみておこう。

宮武君は我らの非常に若い友であるが、天理外国語学校にマレー語を修め、その後広くマレー語を含む南洋語族を研究し、また出でてジャバ島に巡遊視察したのである。インドネシヤ人との交際も広くマレー語新聞にも関係してゐる。著書はマレー語以外に、我が内南洋パラオ語の研究に関するものもあり、またマレー人のために日本文典をも書いてゐる。篤学といふばかりでなく熱意と実践力のある青年学者である。エスペランチストたる君がここに我らのために大東亜海の国際補助語マレー文典を書いてくれたことを感謝する。(石濱一九四二・Ⅷ)

宮武正道(一九二一—一九四四)はまさしく石濱シュレーに属する研究者である。しかし、三十二歳の若さで病死してしまつた。³⁸⁾

この『大東亜語学叢刊』のラインアップを宮武(一九四二)の最終頁に掲載された広告を基にみておこう。

三田村泰助「満洲語」

川崎直一「キルギス語」

関西大学教授

高橋盛孝「樺太ギリヤーク語」(近刊)

立命館大学教授

高倉克己「北京語」(近刊)

東北大助教授

小川環樹「蘇州語」

呉守礼「厦門語」

天理外語教授

鄭兆麟「広東語」

蒙疆中央学院

江 実「蒙疆蒙古語」

東大講師

服部四郎「新バルガ蒙古語」

外務省嘱託

青木文教「チベット語」

笠井信夫「安南語」

江尻英太郎「タイ語」(近刊)

台北大教授

浅井恵倫「タガログ語」(フライリッピン)

京大助教授

泉井久之助「チャモロ語」

宮武正道「マレー語」(既刊)

台北大教授

浅井恵倫「ジャワ語」

矢崎源九郎「ビルマ語」

大阪外語教授

澤 英三「インド語」

大阪外語教授

澤 英三「ペルシア語」

大阪外語教授

中野英次郎「アラビア語」

回教圏研究所長

大久保幸次「トルコ語」

関西大学教授

石濱純太郎「ウズベック語」

合計二十二冊、中国語が四方言もあり、アジアの諸言語をほぼ網

羅したようなラインアップである。ただし、朝鮮語やカンボジア語など、書き手がいなかったのか、当然含まれてしかるべき言語がかけている。執筆予定者のうち、浅井、石濱、泉井、笠井、川崎、澤、高橋、宮武の八名は静安学社の社友である。彼らは大阪言語学会のメンバーでもあったのではなかろうか^⑩。また、一九四九年の大阪言語学会で発表している高倉克己は大阪言語学会のメンバーだったことはまちがいないだろう^⑪。

執筆予定者の所属をみると、静安学社の社友以外でも、関西の大学を卒業した、あるいは関西の大学に在籍した方が圧倒的に多い。

三田村泰助(一九〇九―一九八九)は京大東洋史出身でのち立命館大学教授、小川環樹(一九一〇―一九九三)は京大支那文学出身でのち京大教授、江実(一九〇四―一九八九)は京大言語学科出身、のち岡山大学教授、青木文教(二八八六―一九五六)は龍谷大学出身、矢崎源九郎(一九二一―一九六七)は東大言語の出身だが、一九四五年には大阪外事専門学校教授、中野英次郎は大阪外語教授と大阪や京都に関係する人がほとんどである。関係がないのは服部四郎(一九〇八―一九九五)と大久保幸次(二八八七―一九五〇)ぐらいだろうか。

変わった経歴の江尻について述べておこう。⁽¹²⁾ 一九一四年バンコクで生まれ、バンコクの日本人小学校最初の卒業生だった。一九四二年慶応大学に設置された外国語学校でタイ語を教えていた。そのときに、石濱の目に留まったのかもしれない。なお、ここで出版予定の「タイ語」は「大東亜語学叢刊」としては日の目を見なかったが、一九四四年大八洲出版から『タイ語文典』として出版されている。

これら予定の本は実際には二冊（『樺太ギリヤーク語』と『マレー語』）を除いて出版されなかった。しかし、この出版計画に合わせ、準備したと思われる文法書が存在する。たとえば、今述べた江尻の『タイ語文典』は別の出版社から出ている。また、戦後朝日新聞社から、澤英三が『印度語入門』を出版している。さらに、矢崎は「ビルマ語」を『世界言語概説』の中で記述している。しかし、ほとんど大多数は計画だけに終わってしまった。石濱純太郎の「ウズベック語」がどんな本になっていたのか。その原稿は残っているのか。興味は尽きない。

この『大東亜語学叢刊』は日本語でアジア諸言語の文法記述をおこなうことを目指していたが、ほぼ同時期に翻訳の計画があった。それは同じく朝日新聞社より戦後の一九五四年になってようやく出版された『世界の言語』（メイエ、コーアン監修）の翻訳出版である。その編者である泉井久之助はその出版経緯をこう述べている。少し長いが引用する。

本書は、はじめ、その訳書の実行的な立案を見、訳者たちの会合においてその打合せを了したのが、昭和十六年の初冬であった。爾来われわれの訳業は順調に進捗して、翌十七年の五月にはすでに集稿を見て、その夏には全般の校訂と編輯の指示を終り、印刷を開始することができた。立案から印刷の開始までに、いまだ一年を観てゐなかつたのである。ひとへにわれわれの深い協力の結果である。

戦争は十六年の暮よりはじまる。しかしその下においても、出版社当局と印刷社の熱意およびあへて進行と校正の任にあたられた各位の努力によつて、組版は順次に進められた。しかし戦局の展開に伴ふ諸種の事情の転変はつひに本書の上にも及んで印刷資材の窘窮と微発、努力の減退と不足とは漸くその進行を阻んで来た。印刷の面より見ても、本書のごとき量と複雑さとをもつものの処理は、いづれの出版者いづれの印刷者にとつても、それ自体が一つの事業である。しかし急迫した空気のなかに、二十年に入つて本書の前半は印刷を全く完了して、三月には製本を開始し、後半の組版も別途に京都において大いに進行せしめることができた。まことに当事者各位の努力と犠牲による。そして三月十四日未明は大阪の大規模な空襲である。本書の前半は、工場において、その紙型とともにやけた。

終戦後の別様な社会的困難は、また戦時のそれを摩するもの

がある。朝日新聞社の出版当局が本書の組版を再びはじめから起すについて払はれたところのあらゆるものに対して、われわれには全く感謝のことばがない。わが国の文化に対する犠牲的な熱意がなくなるとして、どうしてこの種のものの刊行を敢て再び企画することができよう。いはゆる採算は、はじめから顧られてゐなかつたのである。——印刷所の誠意にも、またわれわれは深く謝するところがある。(泉井一九五四・V-VI)

この泉井の序によると、この翻訳計画は一九四一年に打ち合わせが終わり、一九四二年にはすべての原稿がそろつていたことになる。しかし、それが本の形で出版されたのは一九五四年である。いかに戦中・戦後の出版が困難であつたか。泉井の序からはその難しさが伝わってくる。この『世界の言語』はフランス語の原著があり、たぶん原著者や出版社との契約もあつたと思われることから、戦後、採算を度外視して、なんとか出版にこぎつけることができた。しかし、『大東亜語学叢刊』は戦後に再刊されることがなかつた。この泉井の序からは、その辺の事情も容易に推測できるのではなかろうか。

『世界の言語』の翻訳には、静安学社の社友が多くかわつてゐる。石濱純太郎が支那西藏諸語、川崎直一がフィノ・ウグル諸語およびサマイエード諸語、高橋盛孝が極北諸語とアメリカ諸語、笠

井信夫が南アジア諸語、吉町義雄が古代前アジア固有諸語とバスク語、北コーカサス諸語、南コーカサス諸語、泉井久之助が編者となり序説やマライ・ポリネシア諸語などを、それぞれ担当している。この翻訳も静安学社、あるいは大阪言語学会の成果と言つてもいいのではなからうか。

これまで見てきたように、『世界の言語』の翻訳と『大東亜語学叢刊』の編纂はいずれも一九四一年に朝日新聞社によつて計画されている。一方、大阪言語学会は一九四二年二月に設立されている。これは単なる偶然ではない。これらの出版計画が大阪言語学会設立の大きな契機だつた。そう推察してまちがいないだろう。

戦中戦後の混乱期を経て、『大東亜語学叢刊』は途中でとん挫してしまつた。しかし、大阪言語学会(事務局川崎直一自宅)は戦後も存続していく。静安学社も活動休止したわけではない。さらに、後述するウラル・アルタイ学会(事務局大阪外語蒙古語研究室気付)という学会も加わつて、共同の会も催されている。

父・長田夏樹が残した資料によると、一九五一年四月二十二日に「ラムステット博士追悼会」が開催されている。以下に、その案内を紹介する。

大阪言語学会総会例会御通知

一九五一年四月二十二日午後一時

大阪市天王寺区上本町八丁目

大阪外国語大学にて

I. 総会（前年度事業報告および会計報告。幹事改選）

II. 例会（故ラムステット博士追悼会）

講演⁽⁶⁾

川崎直一「ラムステット博士をしのぶ」

石濱純太郎「ラムステット博士の著書について」

西田龍雄「古代アルタイ語学私見」

石本健「フィノ・ウグリヤ諸語における尸替の痕跡」

長田長樹「題未定」

ラムステット博士の著書を展覧いたします。

今回わ ウラル・アルタイ学会 静安学社との共同で催します。

ラムステッド（上の案内での表記はラムステット）とはどんな人
だったのか。⁽¹⁶⁾ ウィキペディアに以下のように掲載されている。

グスタフ・ヨーン・ラムステッド (Gustaf John Ramstedt)

一八七三年十月二十二日、フィンランドのウーシマー県エケネース
―一九五〇年十一月二十五日、ヘルシンキ）は、フィンランドの
東洋語学者で、アルタイ比較言語学の権威。また、フィンラン
ドの初代駐日公使を務めた。エスペ란ティストでもある。

（中略）

一九二〇年二月十二日、ラムステッドはフィンランド初代公
使として東京に着任した。なお中国とシヤム（現タイ）の公使
も兼任した。当時彼はヘルシンキ大学教授であった。日本滞
中は外交としての活動のかたわら、言語学者としても研究を
行い、白鳥庫吉の紹介により東京帝国大学で招待講師として教
壇に立っている。このときの受講者の一人に柳田國男がいた。
ラムステッドは自らの研究を元に、日本語のアルタイ諸語起源
説を唱えた。⁽¹⁷⁾

ラムステッドは大阪外語との交流も深く、一九二二年の大阪外語
開校式に出席して、日本語であいさつしたという。⁽¹⁸⁾ また、同じエス
ペランチストとして、川崎直一と親密な関係で、ラムステッドは川
崎の家に泊まったこともあるという。そうした関係もあつて、大阪
言語学会会報第一号（一九五〇）はエスペラント語で出版された
「アルタイ諸語にかんするラムステッド博士の書簡」である。⁽¹⁹⁾ 大阪
言語学会会報の第二号以降が出ているのかどうかは確認できていな
い。

石濱純太郎自身の言語学への関心について、一言述べておこう。
石濱の著作目録を眺めると、回鶻（ウイグル）文や蒙文、西夏文
などのタイトルが並び、これらは言語学的な側面がある。しかし、

研究の主体としては文献研究であり、歴史研究である。言語そのものを扱ったということでいえば、カールグレンの“Le proto-chinois, langue flexionnelle” (1920) を紹介した「書評—カールグレン氏原支那語考」(一九二一)や「書評—A Mongolian Grammar, outlining the Khalkha Mongolian with notes on the Buriat, Kalmuck, and Ordoss Mongolian」(一九二七)が比較的古いものである。しかし、これらは書評であつて、論文ではない。

純粹に言語についてだけ述べたものといへば、「滿蒙言語の系統」(一九三四)と「メラネシア語派の研究」(一九四二)である。前者は言語の系統に関するものであり、後者は「メラネシア語研究の書誌を目的として」書かれたもので、言語の記述はまったくない。そこで、前者をとりあげてみたい。

石濱がウラル・アルタイ学会の設立に関与したことは後でみるが、この「滿蒙言語の系統」では、ウラル・アルタイ語族は「これを二分してウラル系アルタイ系とするに至つた」(石濱一九三四・五)として、ウラル・アルタイ語族が成立するという立場をとつていない。また、「アルタイ語族中滿蒙言語の研究に充分に這入らうと思ふ人々はロシア語を先づ習得して置く必要がある」(六頁)と述べ、ロシア語で書かれた文献を推奨し、また石濱の記述はメイエ・コーアン『世界の言語』のなかのドニイに依拠していることをあきらかにしている。また、蒙古語語族の分類はウラヂミルツォフにしたが

い、ツングース語族はシロコゴロフにしたがつている。つまり、これまでの研究で石濱が最善と考える文献を使つて記述している。また、文献で確認できる文語についての記載も豊富である。しかし、自分の独自の解釈を示したり、フィールドワークで集めたデータを使つたりはしていない。文献的研究に終始していることは指摘しておく必要がある。

「アルタイ語学の参考書として何を挙げたらいいのか僕はよく知らない」(七頁)とか、「僕の知つていることはこれ丈である」(三九頁)とか、各国の研究者が競う契丹文字解読研究をオリンピックに例え、「この国際オリムピック競技にも我が日の丸の国旗を早く掲げたいものだ」(五二頁)とか、自分の知識をひけらかしたり、自分の解釈を押しつけたところがある。また、おおよそ論文の形式とはかけ離れ、自由闊達に書かれている。また、「吾友」というのがあちこちに登場し、とくに若い研究者への研究成果に期待を寄せている。

以上、簡単に石濱の言語に関する論文をみたが、権威とは無縁の研究成果の出所や引用元をはつきりと示した論文である。人文学の研究者というと、自分の研究が盗まれてしまうのではないかとオープンな態度をとらない人も多いなか、石濱の論文は非常にオープンである。この態度こそが石濱シュレーを生み出したのではないか。そう実感させるのに十分である。

大阪言語学会がいつまで活動を続け、いつ活動休止にいたったのか等々、その活動実態について、まだまだ分からないことが多い。^② 今後も探求を続けていきたい。

六、ポリワールノフと言語学会三大奇人

一九九五年の発表では、「露人日本学者」として、エリセーエフ（一八八九―一九七五）、ポリワールノフ（一八九一―一九三八）、コンラド（一八九一―一九七〇）、ネフスキー、プレトネルを取り上げたが、ここではポリワールノフについてだけ、みておこう。というのも、冒頭であげた辻先生が感心していたからである。

ポリワールノフについて、ポツペの衝撃的な紹介文がある。少し長くなるが、これをぜひみておきたい。

ペトログラード・レニングラード大学の私の最も早いころの思い出のひとつは、ポリワールノフに関係のあるものである。

一九一八年一月のある日のことであるが、新学期のはじめに私は大学に出かけた。ポリワールノフの講義を聞くためであった。これが彼との最初の出会いであった。私は新入生で、以前にポリワールノフを見たことがなかった。噂によると卓越した学者で、その講義は素晴らしいということであった。ロシアにとって第

一次世界大戦は終わったばかりであったが、内乱がはじまっていた。そこで大学に来る学生も少なかった。

その日に集まった学生は多くなかったが、長く待つ間もなく、教授が姿をあらわした。しかし、何という姿だったろう！ ひげもそらず、乱れ髪で、顔を洗ったのは何日も前のようであった。教室は寒かったので、ポリワールノフはオーバーを着たままだしたが、そのオーバーたるや古びた軍隊の大外套で、汚れていて、いくつものボタンが無くなつてあり、数か所が破れていた。ポリワールノフの顔は腫れぼったく、目は血ばしっていた。見るからに恐ろしい姿で、とても大学教授とは見えなかった。スラム街から来た浮浪者とか見えなかった。それに、片手であることに私は気付いた。酒に酔つて市電のプラットフォームから倒れたとき、片手を失くしたことをずっと後に知った。ポリワールノフから受けた第一印象は破滅的であった。すぐに教室から抜け出して、二度と来まいというのが私の最初の衝動であった。

しかしラテン語の諺にあるように、*Species fallit*（外観はあざむく。人は見かけによらぬもの）。すぐに、私は教室を脱け出してはならないどころか、再び来なければならないことをさとした。（ポツペ一九七六「E. D. ポリワールノフの思い出」i頁）

アルタイ言語学者ポツペのいくぶん誇張されたポリワールノフとの

最初の出会いは衝撃的である。ポリワノフはピアニストを目指していたが、片手が無くなったために、ピアニストをあきらめたのだ⁽⁵³⁾という。ポツペの思い出はポリワノフの偉大なる業績について触れた後、こう結んでいる。

ポリワノフはいろいろな欠点に加えて、麻薬常習者であった。一九二〇年ころ大学の家に住んでいたが、泥酔して又は麻薬で興奮して、しばしば口論をはじめたり、女子学生の室に闖入しようとしたりした。有名なソ連作家のカヴェリンの『乱暴者』という小説の主人公はポリワノフである。ポリワノフの乱れた行動を止めさせるために警察はあれこれと処置をとったが、無駄絵であった。相変わらずアルコールと麻薬の常習者であった。投獄されて麻薬をとめられたのが余りに急であった。そして一九三八年一月二十五日に獄死した。(中略)

以上、ポリワノフがどんな人間であったかを見てきた。一方では偉大な学者であり、他方では大酒のみで、まったくの墮落者であった。ジギル博士とハイド氏が実在したとするなら、それはポリワノフであった。この短い回想を結ぶにあたって、私は自分に問うてみる…「ところで、お前自身のポリワノフに対する判断はどのようなか」と。その答えとして、私は「宝石は汚物ために落ちて宝石に変わらない」というサンスクリッ

トの古い諺を挙げる。(ポツペ一九七六「E. D. ポリワノフの思い出」iv-v頁)

ポリワノフはとにかく逸話の多い人であった。ネフスキーの伝記をまとめた加藤九祚によると、「ポリワノフは逸話に富む奇人のひとりで、八〇の言語に通じ、すべての論文をカフェーで酒を飲みながら書いたという」(加藤二〇一一・八三)とある。

筆者の手元にある資料をみるかぎりにおいて、ポリワノフは静安学社の社友になったことはない。『静安学社通報』第一号にコンラド(通報ではコンラト博士とある)が発表した「サウエトロシアに於ける東洋学研究」が掲載されている。そこに、以下のように言及されている。

ポリバ^マノフは従来の拉丁文法に則るやり方をよして純東洋風の文法を新作し三十六の東洋語八十余の諸方言を使つた言語学入門書を書いた。これは言語学に一時期を画する書だ。(通報、七頁)

したがって、石濱がポリワノフのことをよく知っていたことはまちがいない。しかし、石濱とロシア東洋学者たちの日口文化交流を述べた生田(二〇一九)もポリワノフには触れていない。これ

までのところ、ポリワノフと石濱の交流は確認されていないようだ。⁽⁵⁴⁾ なお、小論の元となる発表は「奇人研究会」でおこなわれたので、ポリワノフの言語学的成果については述べなかった。⁽⁵⁵⁾

また、日本の言語学界三大奇人というのにも、発表では触れた。発表では静安学社の創設メンバーである浅井恵倫、静安学社の第二回集会から参加の吉町義雄、『大東亜語学叢刊』で「蒙疆蒙古語」を執筆予定だった江実の三名を挙げた。この時まだ存命だった父夏樹から教わった三名である。しかし、この三名が誰もがコンセンサスをもって、広まっていたわけではないという。父は川崎直一をあげる人もいると付け加えた。また、時代とともに、三大奇人の名前が変わっていくものらしい。日本言語学会の会長を務めた故庄垣内正弘京大名誉教授によると、長田夏樹と岸本通夫⁽⁵⁶⁾が入るのだそうだ。これら「奇人」たちについて、今回は触れるだけにとどめておく。

七、浪華芸文会とウルル・アルタイ学会

戦後、石濱が設立にかかわった研究会が少なくとも二つある。一つが浪華芸文会であり、もう一つがウルル・アルタイ学会である。石濱の年譜に記載されていないために、これまでほとんど触れられることがなかった。

さいわい、京都大学をバックボーンとした史学研究会が出版して

いる『史林』に二つの研究会の紹介がある。ここに引用する。

大阪に於ける東洋学研究者の会として、昭和二十四年十一月に浪華芸文会が成立し、爾来毎月研究会を開いて今日に至った。会員は最初は二十余名であつたが、現在では四十名を越え、神戸京都奈良和歌山方面からも有志者の参加があつて、次第に活気を呈しつゝあるは喜ばしい。

昭和二十四年十一月二十六日

初会合、会の構成及び運営を議決。

同年十二月十七日

江戸初期の詞について

神田 喜一郎

昭和二十五年一月二十九日

武田薬品工業株式会社の工場及び図書館を見学

同年二月二十五日

五穀の起源

篠田 統

同年三月二十五日

曆漫談

能田 忠亮

同年四月十五日

中江丑吉遺著『中国古代政治思想』

木村 英一

同年五月二十七日

西域の南北道

桑田 六郎

同年六月二十五日

辻本史邑氏邸にて拓本・法帖・文房具等を観賞

書談

辻本 史邑

漢法医学の話

森田 幸門

同年九月十六日

最近の中国文学

高倉 克己

同年十月二十八日

敦煌本神農本草經集注を読みつて

渡邊 幸三

同年十一月十二日（ウラル・アルタイ学会と合同）

天理図書館を見学

同年十二月十六日

洛陽伽藍記の研究について

森 鹿三

史学研究会（一九五一・三〇二）

これまでみてきた静安学社とも大阪言語学会とも、浪華芸文会はあきらかにメンバーがことなる。⁽⁵⁷⁾学会とは名乗らず、芸文会としている点もことなる。

うえの発表者を見るかぎりにおいては、東洋言語学よりも中国科学史的色彩が強い。『中国食物史』を執筆した篠田統（二八九九—一九七八）、『東洋天文学史』を執筆した能田忠亮（一九〇一—一九八九）、『南海東西交通史論考』を出版した桑田六郎（二八九四

—一九八七）、『本草書の研究』を出版した渡邊幸三（一九〇五—一九六六）、渡邊幸三の『本草書の研究』出版に奔走した森鹿三（一九〇六—一九八〇）などが発表している。伝統的東洋学研究者としては神田喜一郎と中国哲学者である木村英一（一九〇六—一九八二）ぐらいだろうか。辻本史邑（二八九五—一九五七）は有名な書家であり、自宅にお邪魔しての研究会である。すでにみたように、高倉克己は大阪言語学会でも発表している。大阪言語学会、静安学社、ウラル・アルタイ学会の三者共催の研究会があつたように、ここでも天理図書館見学はウラル・アルタイ学会との合同でおこなわれている。なお、これら発表者のうち、神田喜一郎、木村英一、桑田六郎、森鹿三の四名が『石濱先生古稀記念東洋学論叢』にも執筆している。

この『史林』に掲載された以外にも、浪華芸文会の活動が報告された雑誌がある。それが『懷徳』である。⁽⁵⁸⁾それによると、「昭和二十六（一九五二）年六月十日静安学会及浪華芸文会共同主催」が開催され、「王静安先生を追想する」座談会が掲載されている。座談会は神田喜一郎が司会を務め、石濱純太郎、考古学の梅原末治（二八九三—一九八三）、中国文学の鈴木虎雄（二八七八—一九六三）、内藤湖南の長男で東洋史の内藤乾吉（二八九九—一九七八）、中国に長く滞在した中国文学の橋川時雄（二八九四—一九八二）らが参加している。ここでは「静安学社」ではなく、「静安学会」となつて

いるが、その名前がいつ変わったか、まだ調べがっていない。⁽⁵⁹⁾

また、詩人として有名だが、東洋史研究者でもあった田中克己（一九一〇—一九九二）の日記がインターネット上で公開されている⁽⁶⁰⁾が、そこにも浪華芸文会が登場する。それによると、一九五四年五月は中国哲学史を専門とする森三樹三郎（一九〇九—一九八六）が、また一九五四年十二月には満洲語研究の今西春秋（一九〇七—一九七九）が浪華芸文会の例会で発表している。

つぎに、一九五〇年五月に設立されたウラル・アルタイ学会の紹介文をみておこう。こちらは石濱の名前が全面に出されている。

戦後、ややもすれば「東洋」にたいする関心が薄れ勝ちとなり、わけでも北アジアにたいする興味の減退は著しいが、専門学界にあつても近來「北アジア学」の低調が憂えられる矢先、昨二十五五年五月、石濱純太郎教授を中心に結成された「ウラル・アルタイ学会」は、大阪、天理、神戸各外大の東洋語ことに北アジア語学のメンバーに加えるに、阪大、神戸大、関西大など阪神方面の東洋史専攻者を以てし、北アジア語学と東洋史学、さらに民族学にたづさわる人々によるコーオペレーションをなしとげんとしつつあり、この意味において新しい成果が斯界の今後に期せられるのである。なお、すでに大阪にあつては、懷徳堂を根拠として発足した静安学社があり加えて昭和十六年、

大阪言語学会が成り、⁽⁶¹⁾ いづれも東洋学関係者を抱合しつつ、逐次成果をあげ来つたのであり、これらの基盤の上にこそ、斯会の誕生もまた可能であつたといえよう。

五月に発足、七月以後諸事情のためしばらく休止状態ののち、越えて十一月より再び活動を開始して年末に及んでいる。左に例会の講師と演題とを記しておく。（敬称略）

五月 挨拶 石濱 純太郎

蒙古語文法書に及ぼせる西蔵語文法書の影響

稲葉 正就

六月 外蒙におけるロシア文字使用について

松 源一（精松源一か）

町と村 高橋 盛孝

七月 女真文字金石資料とその解説 長田 夏樹

十一月 浪華芸文会との共催

満洲語の研究 石濱 純太郎

朝鮮に関する研究 高橋 亨

遊牧社会と農耕社会との接触について 岩村 忍

十二月 二三近著の紹介—エーベルハルト教授の近業—

内田 吟風

西蔵語尾辞 Pa, ba, ma などの問題について

稲葉 正就

父の手元に残っていたハガキから、このウラル・アルタイ学会の事務局は大阪外大蒙古語教室にあったことがわかつている。その蒙古語教授が精松源一であり、上の紹介文では松源一と誤植されている。発表内容からいっても、まちがいに精松源一である。

発表者について、簡単に触れておこう。稲葉正就（一九一五—一九九〇）は大谷大学教授として、チベット語文法学やチベット仏教史を教えていた。高橋亨（二八七八—一九六七）は戦前は京城帝國大学で、戦後は天理大学で教鞭をとり、朝鮮学会の創立・運営に関わった。京大人文研の教授だった岩村忍（一九〇五—一九八八）と神戸大学教授だった内田吟風（一九〇七—二〇〇三）は東洋史畑である。なお、これらの発表者のうち、『石濱先生古稀記念東洋学論叢』に執筆しているのは精松源一、稲葉正就、内田吟風、長田夏樹、高橋盛孝の五名である。

年譜によると、石濱純太郎は一九四九年からは関西大学文学部教授となり、大阪外大、天理大学にも出向していた。一九四九（昭和二十四）年十一月に浪華芸文会が、翌年五月にウラル・アルタイ学会がそれぞれ設立されているが、石濱にとっては忙しい時期である。しかし、こうした研究会や学会によって、若い人を鼓舞したいという情熱があつたのではないだろうか。

八、内藤湖南・中国学京都学派・石濱シュール

石濱純太郎を考えると、一番重要なのは内藤湖南の存在である。

石濱が内藤湖南を尊敬していたことはよく知られている。そのことは、高田時雄編（二〇一八）所収の「僕の憂鬱」や「噫内藤湖南先生」を読んでもいただければよくわかるので、ここでは引用しない。小論では藤枝晃（一九一一—一九九八）に登場してもらおう。藤枝について、ウィキペディアには「日本の東洋学者。敦煌学および西域出土の古写本研究の第一人者である」と記されているが、京都大学人文研で長く研究生活を送った人である。石濱が亡くなったときに、「町人学者・石濱純太郎」を執筆している。⁶³その中に、こんなことが記されている。

尊敬というよりも崇拜といった方がよいくらいに、湖南先生に傾倒していた。湖南先生のヨーロッパ旅行（一九二四—二五）には自費で随行し、いつであつたか、『蒙古の秘史』の原形の問題について、ある人が石濱先生の見解を質したところ、「それについては内藤先生がこう仰言つてます。だから僕はその通り信じてます」という調子であり、石濱さんの著書の一つ

『富永仲基』は、湖南先生の発見した大阪の一学者の詳伝であり、『浪速儒林伝』は『関西文運史論』の拾遺か延長といった趣のものである。(中略)

そのように、新奇な資料に真先にとびつくのは、石濱学の何よりの特色である。たいていは「草分けの一人」となるに止まって、その部門での押しも押されぬ第一人者といった域まで達したものは、あまりない。多くの人は、石濱さんと言えば、その博学には敬服しながらも、同時にそういう面を批判する。先生がなくなつた後で、あらためて著作目録に目を通すうちに、妙なことにきがついた。そこには三十代から四十代、そういう部門に次々と手を抜けて行つた形跡がありありと現れているが、そういうのは、内藤先生がちよつと紹介しただけのものとか、あるいは全く手を出さなかつた畑のものとかばかりである。これによると、内藤先生におだてられて妙な勉強にとりついたのかも知れないが、石濱さんの側にも、口先でこそ湖南先生を神様のようにほめちぎっているものの、内心では、ひとつ湖南先生にはできないことを仕出かしてやろうと言つたヤマ氣があつたに違いない。(藤枝 一九六九・三〇―三一)

石濱は湖南に心酔していて、彼の学問を語るとき、いかに湖南の影が投影されているか。藤枝の指摘には思わず納得させられる。

「新奇な資料に真先にとびつくのは、石濱学の何よりの特色である。たいていは「草分けの一人」となるに止まって、その部門での押しも押されぬ第一人者といった域まで達したものは、あまりない」という批判は長田夏樹からも聞いたことがある。こんなにいるんなものに手を出せたのは財政力とアカデミズムを遠くからみていたからであらう。

藤枝の石濱評以外に、弟子筋にあたる人の石濱評をあげておこう。まず、関西大学における石濱の弟子であつた大庭脩は次のように指摘している。

石濱は、めんどろがりやで、長い原稿を書くことを嫌い、「僕は人の業績の上に小石を載せるのが趣味なんだ」と言うように、書いた論文はきわめて短いものが多い。その論文を集めた『支那学論攷』(昭和十八年、全国書房刊)を開いてみると、いかに小石か、ただそれは珠玉の作ではあるが、短いものを書いたかよくわかる。しばしばそれが寸鉄人を刺す体の厳しい批判であることも少なくない。(大庭脩 一九九四)

次に、石濱の弟子村田忠兵衛もこの大庭の指摘と表裏一体をなす、こんなことを記している。

先生御自身常に「大著に名著なし」といつておられたし、長々しい論文を見て「誰でも知っていることを、何もわざわざこんなにダラダラと書かんでもよいのになあ」と、呟いておられたのを、今更の如く想起する。又「つまらんことを、持つて廻つて、うまく書き上げたもんだねえ、たしかに彼は文才があるね」といった辛辣な批評を下されているのを、承ったこともあつた。(村田一九七二・一四)

筆者自身は「人の業績の上に小石を載せる」ことも出来ないし、「大著に名著なし」とも思わない。むしろ、長々とした大著の方が好きだ。しかし、こういう表現は裏を返せば、藤枝の「たいていは「草分けの一人」となるに止まつて、その部門での押しも押されぬ第一人者といった域まで達したものは、あまりない」という指摘と一脈通じるところがある。第一人者というのは研究の総決算ともいうべき大著をまとめるのが一般的なのである。

内藤湖南は中国学(Sinology)京都学派の創始者であり、京都学派を背負つて立つと言われるだけあつて、通史や概説書をたくさん書いた。しかも大阪朝日新聞にいたこともあつて、大阪の文化にも理解があつた。一方、石濱は内藤のように最初から京都学派を背負う気もないので、「人の業績の上に小石を載せる」ことに終始し、「大著」を書くこともなかった。また、内職を禁じていた国立大学の教

授になることは、家業である丸石製菓からの収入を絶つことになる。そういったことを考えると、アカデミズム的な出世をはじめから拒否していたのではなからうか。大学での職を得ていたら、きつと体系立てた研究が必要であり、悪く言えばつまみ食い、よく言えば広い視野の下、研究を続けることはできなかったであろう。ひとつの研究を深く長く続けることよりも、広く浅くやることを最初から意図していたように思うのだが、いかがだろうか。また、それを目指したのは石濱自身、湖南みたいには到底なれないという思いも根底にはあつたのではなからうか。

一方で、石濱純太郎は大阪を常に意識してきた⁶¹。江戸時代の学問所である「懷徳堂」や漢学塾であつた「泊園書院」の伝統を絶やすまいとする意志があつた。設立する学会の名前は「大阪東洋学会」であつたし、「大阪言語学会」であつた。また、誰も注目していないが、「静安学社一覽」の奥付には大阪静安学社と書かれているのだが、大阪への思いがそうさせていたのであろう。

石濱自身が大阪の学問について、こんな風に述べている。

(大阪には) 堅苦しい学者はいらないのである。それよりは開けた頭の持主がいゝわけである。実用向きの学者、趣味向きの学者である。だから大阪での学問界は自由で開放されたものである。江戸のように堅苦しい官学があるでもなく京のように伝

統のうるさい学問がはゞをしているでもない。好きで学問をするなら思う方に行くことが出来るのだから町人にはもつてこいと云う風である。それならば荒唐無稽な奇僻なものになりはしないかと云うにそれでは実用向きではない。修養趣味からはそう行過ぎたものは嫌われる。兎に角他に比較すると自由であった。(石濱一九四七・九)

ここにはあきらかに東京の官学でもない、京都の伝統でもない、自由なる大阪の学問というものがはつきりと提示されている。内藤湖南の京都学派のようなものは望まぬも、自分は大阪町人学派とも呼ばれるものを創設したいという気概があつた。それが「石濱シュレー」と呼びたくなる一つの要因である。

石濱純太郎の周辺に集まった人々が集う場を、藤枝は「石濱サロン」と呼んでいる。それは昭和十年代までのことなのだろう。あるいは、藤枝のように静安学社に参加せず、自宅に遊びに行った人々にとっては、サロン以外の何物でもなかった。それは容易に想像がつく。しかし、長田夏樹から聞く、大阪言語学会での石濱は少し違っていた。もうすでに六十歳を超え、自分がやれることの限界を悟っていたのだろう。石濱は若い研究者を鼓舞するだけではなく、研究を割り振っていた。それが父夏樹の証言である。

愛知県立大学インターネットサイトに掲載された「長田夏樹年

譜」⁽⁶⁵⁾によると、大阪言語学会と石濱純太郎のことが以下のように出てくる。

一九四九年

九月 大阪言語学会（於大阪外大）で、「トルコ・モンゴル比較言語学方法論について」と題して研究発表する。大阪言語学会の創立者である石濱純太郎先生の恩顧を得て、女真語や契丹語の研究に本格的に取り組み始める。

十月 大阪言語学会（於大阪外大）で、「原始日本語の音韻とアクセントに就いて」と題して研究発表する。

大阪言語学会の月例会で二ヶ月続けて発表し、「石濱純太郎先生の恩顧を得て、女真語や契丹語の研究に本格的に取り組み始める」とある。ここに女真語と契丹語があげられている。その裏には、夏樹自身は西夏語もやりたかったようだが、石濱に「西夏語には西田龍雄君がいるのだから、君は契丹語、女真語に集中しなさい」と言われたのだという。その代わり、女真語や契丹語関連の文献はすべて貸していただいたそうだ。

石濱は好きなことをやり、これまで誰もやらない分野を開拓してきた。しかも、製薬会社の財力で、西洋、東洋を問わず、いろんな分野の文献を多く集めてきた。石濱本人の自由人的性格からいって、

石濱が設立した静安学社や大阪言語学会もサロンのような雰囲気、特段教育的配慮がなされないのではないかと勝手に思いこんできたのだが、この父の話によれば、大学の指導教官がおこなうことを石濱もやっていたことになる。そこでピンとひらめいた。これこそまさに「石濱シュレー」と呼ぶのがふさわしいのではないか。そんな思いから、一九九五年の発表の際に、「石濱シュレー」を使用した。これが石濱シュレーと名付けた理由である。父自身、この命名を喜んでくれた。

戦後、日本国中が飢えていたころ、石濱の様子を藤枝はこう指摘している。

昭和二十四年から先生は関西大学の専任教授となった。よんだ側にも行つた側にも、のつびきならぬ事情があつてのことは判るが、その外の諸大学の講師は従前通りつづけたから、休む日もない日常となつた。そうなるてからの先生も、やはり町人学者として通つていたようであるが、それは当たらない。その頃は、もはや町人学者ではなく、一介の大学教授に成り下がつていたのである。(藤枝一九六九・三三)

藤枝の皮肉がこもった、しかし愛情あふれる表現である。石濱の著作目録を見ればあきらかだが、あれだけ海外の東洋学事情を紹介

してきたのに、戦後はばつたりと消えてしまった。文献購入の財政的余力もなく、非常勤などに取られる時間もあつてか、執筆時間もなかったのかもしれない。高田時雄編(二〇一八)をみて、『西北文化研究』の「はしがき」以外、関西大学教授就任以降のものは極端に少ない。

九、おわりに

小論は石濱純太郎の生涯と彼が関係した学会や研究会に集う人々について述べてきた。冒頭で述べたように、基本的には日文研での発表レジュメに沿つてまとめているが、最近の研究成果も取り入れている。

じつは、石濱はここで述べた以外にも、学会や研究会に関わっている。一九二〇(大正九)年に設立した泊園書院学会では幹事を務めていた。⁽⁶⁶⁾一九二七(昭和二)年には音声学協会第一回大阪例会に、後に静安学社に参加する浅井恵倫、川崎直一、吉町義雄らとともに参加している。⁽⁶⁷⁾同じ年の第二回大阪例会では、ネフスキーも参加し、石濱が藤井玄伸『世話類聚』という大阪方言の珍本を紹介している。⁽⁶⁸⁾戦後においても、一九四八(昭和二十三)年十一月二十三日の神戸言語学会の発会記念講演会として、石濱は「言語学と文字学」と題して発表をしている。⁽⁶⁹⁾神戸言語学会は大阪言語学会に触発されて設

立されたことはまちがいない。

小論では石濱が設立にかかわった学会や研究会をみてきたが、石濱純太郎が何よりも素晴らしかったのは、学者たちのネットワークを形成したことであつた。⁽⁷⁾ 石濱よりも二世代上の内藤湖南をはじめとする中国学京都学派の人々にはじまり、ほぼ同世代の武内義雄や石田幹之助、そして次の世代の神田喜一郎、高橋盛孝などと、広い専門分野を誇る人々と交流を続け、その交流の場として、こうした学会や研究会を作り続けた功績は計り知れない。また、石濱よりは世代が少し若い、浅井恵倫、吉町義雄、川崎直一、あるいは息子のような年代の岸本通夫や長田夏樹といった「奇人」と呼ばれるような言語学関係者を鼓舞し続けたのも石濱でしか成し得なかつた。出世や人事といった学術外要因が生じやすい大学という枠組みでは、きつとうまく行かなかつたであらう。

しかも、石濱の構築したネットワークは単に国内にとどまらない。王国維や静安学社の社友である羅福成といった中国人研究者、そしてネフスキーや静安学社の名誉社友であるコンラッドや社友であるシューツキーといったロシア人研究者たちと交流を重ねている。王国維の字をもつて、静安学社が名付けられ、ネフスキーとは一緒に静安学社を結成し、ともに西夏語研究をおこなっている。昭和の初めにこうしたネットワークを構築した人は他に類をみない。しかも、中央政府や帝国大学の力を借りずに、大阪の町人学者として、それ

を成し遂げたことは空前絶後と言つていいだろう。

石濱純太郎について、また彼の設立した学会や研究会に集う人々について、小論ですべてが語りつくされたわけではない。しかし、小論は一九九五年に発表した「石濱シュレー・露人日本学者・言語学界三大奇人」の大枠を織り込んでまとめることが出来たのではないかと思つている。辻惟雄先生に読んでいただければこの上ない喜びである。

注

(1) 小論の草稿段階で、堤一昭阪大教授、および査読者が丁寧に読んでくださり、コメントをいただいた。また、文献収集には地球研事務の紀平朋さん、松田賀永子さん、田中美生さんに大変お世話になつた。名をあげて感謝の意を表したい。

(2) 石濱純太郎の表記については、堤教授のご指摘にしたがい「石濱」に統一している。混同を防ぐために、引用についても、「石濱」として「石濱」は使用しなかつたことを注記しておく。

(3) なお、吾妻編(二〇一〇)『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』には、「石濱純太郎主要著作目録」(三一七—三二二頁)があり、簡単な内容紹介も付されている。

(4) ここにあげた生没年については筆者が追加した。

(5) 『古稀記念』の「年譜」では「歐陽脩研究」となっていたが、石濱文庫の中から、堤一昭によつて「自筆稿本類」が発見され、「歐陽脩攻究」だとあきらかにされ(堤二〇一八)、「補訂」では修正されている。吾妻(二〇一九

b・三七)にはその卒論の表紙写真が掲載されている。なお、堤一昭大阪大学教授の石濱文庫関連の論文を堤教授からご恵送賜った。

- (6) ウィキペディアを論文に使用することに査読者から疑問が寄せられたが、小論の中心的人物ではない方々については積極的に利用している。その理由はコロナ禍もあり、図書館に行つて辞典類など参考図書を見ることが難しい状況がある。なお、以下を参照した。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A6%E5%86%85%E7%B9%A9%E9%84%84> (二〇二一年十月二十九日閲覧)

- (7) 以下を参照した。<https://kotobank.jp/word/%E6%AD%A6%E5%86%85%E7%B9%A9%E9%84%84-1088422> (二〇二一年十月二十九日閲覧)

- (8) 青木正児 (一九二〇)「佐賀東周君を悼む」『支那学』一巻 一七五—七七頁を参照。

- (9) 支那学社同人 (一九二五)「福井貞一君を悼む」『支那学』三巻 一〇号 八六—八八頁を参照。

- (10) この提論文が掲載されている同じ論集に、吾妻 (二〇一九・七三) が「堤一昭氏のご教示によれば、大正五 (一九一六) 年四月二十五日、景社の例会に石濱と内藤がともに参加した記録があるため、二人の出会いはこの時に遡る可能性があるとのことである。ただしすぐあとに引用するように、石濱自身、麗澤社と景社の連合会で内藤と初めて会ったと述べているので、四月の景社例会では二人は参加していたとしても話は交わさなかったのではあるまいか」と指摘しているが、堤の論文を読まずして書いたものであろうか。また、「二人は参加していたとしても話は交わさなかったのではあるまいか」ということは、石濱の性格からいって、ありえないように思うのだが、いかがだろうか。

- (11) 堤 (二〇一二) の報告によると、一九二七年六月二十二日の『東京日日新聞』に「京大の羽田亨博士と大阪の石濱純太郎氏と、そしてこの石田氏の三人を結んで、西域研究における三鼎と斯界では呼んでゐる。各自それ

ぞれに確乎たる基礎学問をもつて、東洋文明の源流といふべき西域の研究に入りつつあるのであるから、この上は欧米学者の根気よさを体得さへすれば、この方面における三人男たる期待には背かないだらう」との記事が出ている。

- (12) なお、この日記の記述は大原良通 (二〇一九・三九五) にも引用されている。大原は河崎 (一九六九) を引いて、「石濱先生のお若い頃、羽田亨博士とは学問上いろいろあつたようで、石濱先生独特の調子で反論などをされ、それが学問以外の御交誼にも現れていた様子です」と指摘している。

- (13) 今西龍 (一八七五—一九三二) を指す。朝鮮史を専門とし、一九一三年に京大講師となり、一九二二年、博士号を取得し、一九二六年からは京都帝国大学と京城帝国大学の兼任教授となった。なお、息子の今西春秋 (一九〇七—一九七九) は満洲史の研究者で、一九六一年に博士号を取得している。

- (14) 年譜によると、「大阪外国語学校蒙古語部へ選科委託生として入学す」とある。これについて、堤阪大教授から「選科生と委託生は別個の制度で、石濱は前者なので『蒙古語部選科生』と記された方が良い」とのご指摘を受け、その出典として、大阪外国語大学七十年史編集委員会編『大阪外国語大学七十年史』一四頁をご教示賜った。

- (15) 『京都帝国大学文学部三十周年史』(一九三五年) による。

- (16) なお、この日記の記載については岡崎精郎 (一九七九・一三八) にも言及されている。堤阪大教授はお忙しい中、岡崎の論文をコピーして送ってください。

- (17) 中目寛の生涯については、石田寛 (二〇〇〇)「エリート教授中目寛」が詳しい。石田は中目を絶賛している。

- (18) 生田 (二〇一九・一九七) では「蒙古語動詞の活用と其種類」と間違っている。

- (19) 生田 (二〇一九・一九七) では「渡辺薫太郎」と誤記されている。以下

すべて「渡辺薫太郎」となっている。

- (20) 国会図書館サーチによると、一九三三年一月にも「増訂」として第二号が出版されている。実際、上原（一九六六・二二）によると、「渡部薫太郎は昭和八年一月十六日に『亜細亜研究』第二号の増訂版を発行した。伊徳均の「蒙語動詞の活用と其種類」は前著と全く同一であつて、増訂されているものは、渡部の書いた「満洲語女真語と漢字音の關係」だけである」とある。つまり、第三号が初版と増訂版の二度出版されているのと同様、第二号も初版と増訂版の二度出版されている。なお、上原（一九六六・六）は大阪東洋学会については「この学会の組織・成立等一切は不明である」と述べている。
- (21) 国会図書館サーチによると、一九三七年にも出版されている。こちらには増訂とは書かれていないし、頁数も同じなので、二刷と思われる。
- (22) エルズワース・ハンチントン（一八七六—一九四七）はアメリカのエル大学教授で、アメリカ地理学会の会長も務めた人である。環境決定論的な著作『氣候と文明』は一九二八年に日本でも翻訳され、一九三八年には間崎万里訳で岩波文庫にも収録された。
- (23) 一九二八年出版。以下、通報と略す。第二号以下が出版されたかどうかについては確認できていない。この通報は石濱文庫以外にも、九州大学図書館に収められていることを確認している。静安学社の社員だった吉町義雄は九州大学に勤務していたので、彼が寄贈したものと推測される。また生田美智子編（二〇〇三）『資料が語るネフスキー』（三六一—四六頁）に全文が掲載されている。
- (24) なお、一九三二年段階ですでに社員と社友の区別はなく、初期の社員だった石濱はじめ、物故者（財津）を除く全員が社友となつている。
- (25) 校正中に、北村信昭（一九八三）『奈良いまは昔』（奈良新聞社刊）を読む機会を得た。北村によると、笹谷良造は「大阪の布施でネフスキーの隣家に住み、静安学社へはネフスキーの紹介で入会されている」と指摘して

いる。

- (26) 浅井、吉町、高橋の三人については、いずれ別稿で取り上げる予定である
- (27) 一九三二年六月、静安学社の名前で、「故財津愛象」と題して、「年譜略」及び「遺著遺墨陳列目録」を出版している。
- (28) 以下を参照。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%82%E9%83%8E> (二〇二二年十月二十九日閲覧)
- (29) 小林太市郎著作集が出版されているが、『王維の生涯と芸術』や『中国陶磁見聞録』など、東洋学に関連した著作も見られる。
- (30) 西田長左衛門はこの当時、浪速高校教授とある。『関西大学学報』(二五八号)に掲載された、昭和十三年度の関西大学授業一覧によると、国語漢文専攻科で石濱が「書経・日本漢学史」を担当し、西田長左衛門が「荀子、韓非子、支那哲学史」を担当している。『静安学社一覧【昭和十六年】』によると、一九四一年二月一日に享年六十八歳で亡くなっている。
- (31) 岩代はその当時大阪府立今宮中学教諭であるが、教育者として、作曲家の父親として、ウィキペディアに掲載されている。
- (32) 金戸もその当時大阪府立今宮中学教諭である。国会図書館サーチによると、一九七〇年代に四天王寺女子大学紀要に「史記論語考」などを掲載していることから、晩年は四天王寺女子大に勤務していたと思われる。
- (33) ネフスキーの評伝をまとめた加藤(二〇一・一八九)は「これ(＝静安学社)は四年前大阪外国語学校の中で結成した大阪東洋学会延長発展であった」と指摘している。しかし、この加藤の指摘に対して、生田編(二〇〇三・三五)において「しかしながら、メンバーは似通っているが、この二つは同時期に存在した別の組織である」と指摘するように、まったくの別組織である。
- (34) あきらかに大阪外国語学校長の誤植だが、学長とするための作意すら感じられるという言い過ぎか。
- (35) 『静安学社通報』第一期(一九二七)では、Societas Orientalis, Osaka, in

Memoriam Wang Kuo-wei」とテン語表記されているが、『静安学社一覽【昭和七年】』で『Societas Orientalis Osakaensis in Memoriam Wang Kuo-wei』と表記されている。

- (36) その時の発表者と題目は、高橋盛孝「ギリヤク語の新しい資料」、長田夏樹「原始日本語の音韻とアクセントに就いて」、高倉克己「支那語法のこと」である。

- (37) 川崎直一の略歴などについては、父・長田夏樹の手元にあつた資料に基づいている。川崎とエスペラント語については『日本エスペラント運動人名事典』(ひつじ書房、二〇一三年)一五二頁に詳しい。この事典については、藤原敬介京都特定准教授(現・平成科学大学准教授)がコピーして送ってくれた。

- (38) 宮武正道については、妻による追想(宮武タツエ一九九三)、最近では黒岩康博(二〇一一)がある。また、高田時雄編(二〇一八・二〇一一・二二三)に掲載されている、石濱「にぶき良心で」は一九四五年一月の『芸春秋』に掲載された宮武追悼文である。

- (39) 堤阪大教授によると、「石濱が関西大学教授になったのは一九四九年で、この叢刊の企画がスタートした一九四二年はこの職にありません」とのご指摘を受けたが、この『大東亜語学叢刊』の一冊、宮武正道『マレー語』の巻末に掲げた一覧表をそのまま掲載している。

- (40) 本稿執筆後に、『大阪言語学会要覧』がみつかったが、それによると、大阪を離れて台北に赴任した浅井恵倫を除けば、全員が大阪言語学会の会員である。

- (41) 『大阪言語学会要覧』によると、高倉克己の名前は大阪言語学会の名簿には掲載されていない。

- (42) 江尻英太郎については、村嶋英治(二〇二〇)「タイ国における第二次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史——未利用資料を中心に」『アジア太平洋討究』三九・一一五九を参考にした。その論文の注34に江尻の履歴などが

詳細に述べられている。

- (43) 大阪言語学会の一九四九年四月に発行された名簿をみると、上にあげたうち、吉町義雄を除いて、すべてが大阪言語学会の会員である。戦後の大阪言語学会の規約では、大阪周辺に住んでいる人のみが会員となつていたので、九州大学の吉町義雄は会員から外れたのであろう。また、静安学社の社友ではないが、大阪言語学会の会員である五島忠久がバントウ諸語を担当している。

- (44) 大阪外語大学の蒙古語教室、つまり楠松源一(一九〇三—一九九三)が学会運営にかかわっていたと思われる。滋賀県立大学の楠松文庫があるが、そこに何か手掛かりが残されているのかもしれない。

- (45) 父の手元には大阪言語学会以外のウラル・アルタイ学会(UA)と静安学社(SA)から別々の案内があり、それぞれ講演題名がことなる。石濱の講演題名は「ラムステッドの著書の解説と展観」(UA)、「ラムステッドの著書展観と解説」(SA)、西田は「古代アルタイ語学」(UA、SA)、石本は「題未定」(UA)、SAでは上と同様の題、長田夏樹(大阪言語学会の案内では長樹と誤植されている)は「アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ」(UA)「蒙古語とトルコ語」(SA)となつている。父によると、UAでの題名が実際の講演タイトルだという。

- (46) 二〇一九年に上映されたフィンランド映画『東方の記憶』は、ラムステッドの回顧録を基にして制作されたドキュメンタリーである。ただし、筆者未見。

- (47) 以下を参照した。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%95%E3%83%BB%E3%83%AD%E3%83%A0%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%83%E3%83%89> (二〇二一年十月二十九日閲覧)

- (48) 『大阪エスペラント運動史』(一九七七年)四頁より引用。

- (49) エスペラントからの翻訳については藤原敬介京都大学特定准教授(現・

- 平成科学大学准教授」と千田俊太郎京都大学准教授から教わった。名をあげて感謝したい。いずれ、何らかの形で出版したい。
- (50) 『著作目録』によると、「メラネシア語の研究」「東洋研究」七(二・三)とあるが、正しくは「メラネシア語派の研究」「東洋史研究」七(二・三)・一二七―一三五である。
- (51) 石濱(一九四二a・一二七)からの引用。この論文には言語の記述に関しては一切言及がない。
- (52) 雑誌『英語青年』には大阪言語学会の開催通知が掲載されている。確認されたもので、『英語青年』八八巻四号(一九四二)「第五回例会を十月二十五日午後一時より大阪懷徳堂で静安学社と合同して開催した」(一二五頁)とあり、九三巻八号(一九四七)「五月十一日午後一時より天王寺高女に於いて例会を開き」(二八六頁)とあり、九四巻二号(一九四八)「昨年九・十・十一月の夫々第二日曜日に天王寺高女にて例会を開き十・十一月は大阪印度学会と合同した」とある。懷徳堂は大阪大空襲で焼失したため、会場を天王寺高女としている。大阪印度学会がどのような組織だったのかはわからない。一九四八年の大阪言語学会では、石濱純太郎が「甲骨文字展観」(九月)と「無量寿宗要経展観」(十月)と題して二回発表している。なお、この論文を執筆したのち、大阪言語学会の例会を紹介した『大阪言語学会要覧』が父の遺品から見つかった。それに基づいた大阪言語学会に関する論文を別稿として発表する予定である。
- (53) 村山七郎「訳者あとがき」ポリワールフ、村山七郎編訳(一九七六・二二九頁)による。
- (54) 松山真一(二〇二〇)「ネフスキイの借家を訪れた人々たち(一) 佐々木喜善とエヴゲーニイ・ポリワールフ」『なろうと…ロシア・フォークロアの会報』八〇・一〇―一七によると、ネフスキイとポリワールフは一九一六年八月下旬に、東京にあったネフスキイの借家で会ったという。
- (55) 村山七郎編訳(一九七六)出版以後、杉藤(一九八三)、早田(一九九九a・b)など、ポリワールフの業績を振り返る論文が出ている。
- (56) 岸本通夫(一九一八―一九九二)は東大仏文科を卒業後、東大大学院・京大大学院で梵文科へすすみ、日本では、やり手がいなかったヒッタイト語研究に取り組んだ。五十か国語に通じたと言われた、典型的なポリグロットである。
- (57) 父の手元にあった「浪華芸文会名簿」(一九五一年三月)と「大阪言語学会要覧」(一九四九年四月)を比べると、両方とも会員となっているのは石濱純太郎を除くと、岡崎精郎と長田夏樹の二人だけである。
- (58) 「王静安先生を追想する」『懷徳』二二・六七―七七頁。一九五一年。
- (59) 次の注で紹介している田中克己日記によると、一九四六年十一月三日には静安学社とあり、一九五二年六月一日には静安学会とある。
- (60) <https://shiki-cogio.net/ranaky/yakoun/rankadary.html> (二〇二一年五月一日確認)。長田夏樹によると、田中克己も石濱シュレーの一員だったそうだ。
- (61) この紹介文をだれが書いたのかわからないが、「すでに大阪にあつては、懷徳堂を根拠として発足した静安学社があり加えて昭和十六年、大阪言語学会が成り」のなかに、大阪東洋学会が並列的にあげられていない。大阪東洋学会が静安学社や大阪言語学会とは異質であることの傍証になるだろう。
- (62) 以下を参照。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E6%9E%9D%E6%99%83> (二〇二一年十月二十九日閲覧)
- (63) 藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」のコピーを堤阪大教授からご恵送賜った。なお、この藤枝の追悼文は関西大学泊園記念会編(二〇一八)『石濱純太郎記事集』の四九―五〇頁に再録されている。
- (64) 戦後すぐの一九四七年に、石濱は「大阪は学問の土地でないかも知れない。然し熱心な学徒はいつの時代でもあるのである。我等の小さい学会も存在する」(高田時雄編二〇一八・三八)と述べている。この「小さい学会」について、編者の高田は「大阪東洋学会」と「静安学社」をあげてい

るが、時期的には「大阪言語学会」をさしているのではなからうか。

- (65) <http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf/nenpu.pdf> (二〇一二年四月二十八日確認)

- (66) 吾妻重二編(二〇一〇)「第六章 石濱純太郎 二、泊園書院学会の設立」参照。

- (67) 浅井恵倫(一九二七a)「第一回大阪例会記事」『音声学協会会報』第五号五頁参照。

- (68) 浅井恵倫(一九二七b)「第二回大阪例会記事」『音声学協会会報』第六号一頁参照。なお、この音声学協会とネフスキーの関係については、生田編(二〇〇三・三四)にも記載されている。

- (69) 『神戸言語学会会報』第一号八頁参照。

- (70) 堤一昭阪大教授が研究代表者になって、共同研究がおこなわれたが、そのタイトルが「東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワーク」である。当を得たタイトルであり、まともに使わせていただいた。なお、その報告書を堤教授からご恵送賜った。

参考文献

- 青木正児(一九二〇)「佐賀東周君を悼む」『支那学』一(一一)・七五―七七頁。
浅井恵倫(一九二七a)「第一回大阪例会記事」『音声学協会会報』五・五頁。
浅井恵倫(一九二七b)「第二回大阪例会記事」『音声学協会会報』六・一一頁。
吾妻重二(二〇一七)「新聞「泊園」について——昭和初期における泊園書院の記録」『東アジア文化交渉研究』一〇・三八九―四〇九頁。
吾妻重二(二〇一九a)「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」吾妻編 九―一三頁。
吾妻重二(二〇一九b)「石濱純太郎の修業時代——新資料を中心に」吾妻編 二七―七六頁。
吾妻重二編(二〇一〇)『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』関西大学出版部。

吾妻重二編著(二〇一九)『東西学術研究と文化交渉——石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部。

生田美智子(二〇〇〇)「ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーをめぐる新事実」『大阪外国語大学論集』二三・六七―八五頁。

生田美智子(二〇一九)「石濱純太郎とロシアの東洋学者との日露文化交渉——ネフスキーを中心に」吾妻編 一八九―一二二頁。

生田美智子編(二〇〇三)『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学。

石田寛(二〇〇〇)「エリート教授中目覚——二番目に早い高等教育地理(広島高師)プログラム創始者」『広島大学史紀要』二・四三―七六頁。

石濱純太郎(一九三四)『東洋思潮 満蒙言語の系統』岩波書店。

石濱純太郎(一九四二a)「メラネシア語派の研究」『東洋史研究』七(一・三)・一二七―一三五頁。

石濱純太郎(一九四二b)「序」宮武正道『大東亜語学叢刊マレー語』朝日新聞社。V―VIII頁。

石濱純太郎(一九四七)「町人学者」『日本美術工芸』五三・八一―一二頁。

上原久(一九六五)「渡部薫太郎の満洲語学(一)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』一・一一―一七頁。

上原久(一九六六)「渡部薫太郎の満洲語学(二)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』一五・一一六―〇頁。

大阪静安学社(一九二七)『静安学社通報』第一期

大阪静安学社(一九三二)『静安学社一覽』昭和七年

大阪静安学社(一九三三)『静安学社一覽』昭和八年

大阪静安学社(一九三四)『静安学社一覽』昭和九年

大阪静安学社(一九三五)『静安学社一覽』昭和十年

大阪静安学社(一九三六)『静安学社一覽』昭和十一年

大阪静安学社(一九三七)『静安学社一覽』昭和十二年

大阪静安学社(一九三八)『静安学社一覽』昭和十三年

- 大阪静安学社（一九三九）『静安学社一覽【昭和十四年】』
 大阪静安学社（一九四〇）『静安学社一覽【昭和十五年】』
 大阪静安学社（一九四二）『静安学社一覽【昭和十六年】』
 大庭脩（一九九四）『石濱純太郎』江上波夫編『東洋学の系譜第二集』大修館書店。
 大原良通（二〇一九）『石濱純太郎の日記と学問——大正二年から昭和二年にかけて』吾妻編。三八一—四一九頁。
 岡崎精郎（一九七九）『大阪東洋学会より静安学社へ——大阪学術史の一こまとして』森三樹三郎博士公寿記念事業会編『森三樹三郎博士公寿記念東洋学論集』朋友書店。一三八三—一四〇二頁。
 長田俊樹（一九九八）『比較言語学・遠隔系統論・多角比較——大野教授の反論を読んで』『日本研究』一七・四〇四—三七三頁。
 長田俊樹（二〇〇三）『日本語系統論はなぜはやらなくなつたのか』ヴォヴィン・長田編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。三七三—四一八頁。
 長田俊樹（二〇〇五）『日本語の混淆言語説』井波律子・井上章一編『日文研叢書 表現における越境と混淆』国際日本文化研究センター。一六九—一八二頁。
 長田俊樹（二〇一七）『はたして言語学者はふがいないのか——日本語系統論の一断面』井上章一編『学問をしばるもの』思文閣出版。一〇—一九頁。
 長田俊樹（二〇二〇）『日本語の起源はどのように論じられてきたか——日本語学史序説』長田編『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂。三二五—三三四頁。
 長田俊樹（二〇二一^a）『知られざる言語学者・菊池慧一郎——日本語学史外伝』『KOTONOHA』二一九：一—一九頁。
 長田俊樹（二〇二一^b）『知られざる言語学者・菊池慧一郎補遺』『KOTONOHA』二二〇：二九—三七頁。

- 長田俊樹編（二〇二〇）『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂。
 長田俊樹（一九六六）『大阪東洋学会の『亜細亜研究』と『奉天図書館叢刊』について』『水門——言葉と歴史』第八号：一七—二七頁。
 懷徳堂記念会編（一九五一）『王静安先生を追想する』『懷徳』二二：六七—七七頁。
 加藤九祚（一九七六）『天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。
 加藤九祚（二〇一一）『完本天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。
 河崎章夫（一九六九）『石濱先生のこと』『百材』五：八—九頁。
 関西大学泊園記念会編（二〇一八）『石濱純太郎記事集』関西大学泊園記念会。
 黒岩康博（二〇一一）『宮武正道の「語学道楽」——趣味人と帝国日本』『史林』九四（一）：一二五—一五三頁。
 神戸言語学会（一九四九）『神戸言語学会会報』第一号。
 史学研究会（一九五一）『彙報』『史林』三四（三）：二九七—三〇三頁。
 杉藤美代子（一九八三）『長崎県三重村におけるE. D. ポリワノフ』『大坂樟蔭女子大学論集』二〇：一九—二一〇頁。
 支那学社同人（一九二五）『福井貞一君を悼む』『支那学』三（一〇）：八六—八八頁。
 高田時雄編（二〇一八）『石濱純太郎 続・東洋学の話』臨川書店。
 高橋盛孝（一九四二）『大東亜語学叢刊 樺太ギリヤーク語』朝日新聞社。
 高橋盛孝（一九五九）『ネフスキー氏について』『日本民俗学大系』平凡社。
 堤一昭（二〇二二）『石濱純太郎を紹介する新聞記事二件（一九二三年、一九二七年）および解説』堤一昭編『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ』平成二十三年度大阪大学文学研究科共同研究成果報告書。一六—二二頁。
 堤一昭（二〇一三）『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』平成二十四年度大阪大学文学研究科共同研究成果報告書。

堤一昭（二〇一八）「石濱文庫所蔵 石濱純太郎自筆稿本類の発見——明治末年の『支那文学科』の学修、大正初年の『文会』の資料として」『待兼山論叢文化動態論篇』五二・二二—三九頁。

堤一昭（二〇一九）「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか？——新出資料『景社紀事』の紹介も兼ねて」吾妻編。二九七—三二六頁。

羽田亨（一九四二）「序」宮武正道『大東亜語学叢刊マレー語』Ⅲ—Ⅳ頁。

早田輝洋（一九九九^a）「V. M. アルパート『E. D. ポリワノフの遺産より』について（上）」『アジアアフリカ言語文化研究所通信』九〇・一七一—二三頁。

早田輝洋（一九九九^b）「V. M. アルパート『E. D. ポリワノフの遺産より』について（下）」『アジアアフリカ言語文化研究所通信』九一・一一—一〇頁。

松山真一（二〇二〇）「ネフスキイの借家を訪れた人たち（一）佐々木喜善とエヴゲーニイ・ポリワノフ」『なろうど・ロシア・フォークロアの会会報』八〇・一〇—一七頁。

藤枝晃（一九六九）「町人学者・石濱純太郎」『図書』二三・四・三〇—三三頁。

ポツペ（一九七六）「E. D. ポリワノフの思い出」ポリワノフ、村山七郎編訳『日本語研究』弘文堂。

ポリワノフ、村山七郎編訳（一九七六）『日本語研究』弘文堂。
松本茂雄編（一九七六）『大阪エスペラント運動史一』柏原エスペラント資料センター。

宮武タツエ（一九九三）『宮武正道追想』（私家版）

宮武正道（一九四二）『大東亜語学叢刊 マレー語』朝日新聞社。

村嶋英治（二〇二〇）「タイ国における第二次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史——未利用資料を中心に」『アジア太平洋討究』三九・一一—五九頁。

村田忠兵衛（一九七二）「大壺石濱純太郎先生・人と生涯——特に大阪人として」『懷徳』四二・五—二〇頁。

村山七郎（一九七六）「訳者あとがき」ポリワノフ、村山七郎編訳『日本語研究』弘文堂。

アントウアヌ・メイエ、マルセル・コーアン監修、泉井久之助監訳（一九五四）『世界の言語』朝日新聞社。

湯浅邦弘（二〇一九）「石濱純太郎・石濱恒夫と懷徳堂」吾妻編。二八五—二九六頁。

新出の英国史料からみた十八世紀末の西欧における

大黒屋光太夫日本図の評価

滝川 祐子

はじめに

大黒屋光太夫（一七五一～一八二八）は、天明二年十二月（陽暦一七八三年一月）に廻船で遭難し、寛政四年（一七九二）にロシアから根室に帰還した伊勢の漂流民である。光太夫らはアリユーシャン列島のアムチトカ島に漂着の後、さらに多くの苦難に直面するも乗り越え、カムチャツカ、オホーツクを経て、やがてシベリアのイルクーツクに送られた。その地で光太夫はフィンランド出身の博物学者キリル・ラクスマン（Kiril Laxman, 一七三七～一七九六）と出合い交誼を結んだ。ラクスマンは商務長官ヴォロンツォフ（Alexander Vorontsov, 一七四一～一八〇五）を通じ、エカテ

リーナ二世（Catherine II, 一七二九～一七九六）に光太夫らの送還と日本との通商交渉樹立の可能性を進言した。一七九二年、ロシアはイルクーツク総督名でキリルの息子アダム・ラクスマン（Adam Laxman, 一七六六～没年不明）を初の遣日使節として派遣し、通商交渉を図った。ラクスマンの来航は、レザノフ使節の長崎来航（一八〇四）やその後の日露問題の発端になるなど、十八世紀末から十九世紀前半の日本の対外政策に多大な影響を与えた。また光太夫らはロシアの言語・文化・地理をはじめ、見聞に基づく多くの西欧情報をもたらし、桂川甫周編纂の『北槎聞略』（一七九四）にまとめられたことも広く知られている。¹⁾

一方、ロシアや西欧の知識人が光太夫から得た日本に関する知識も少なくなかった。その一つが、光太夫がロシアで作成した日

本図である。最初に確認されたのは、ドイツのゲッティンゲン大学図書館が所蔵する三枚の日本図^②であった。その後、モスクワのロシア軍事歴史古文書館に光太夫自筆の日本地図が二枚存在する^③ことが確認された。続いてエストニア国立公文書館に光太夫自筆の日本図一枚が現存することが報告された^④。さらに二〇一四年、ロシアのエルミタージュ美術館に光太夫自筆の日本図一枚が所蔵されていたことが発表された^⑤。従ってこれまでに光太夫自筆の日本図が七枚現存することが確認された。

この度、イギリスのロンドン南東部、グリニッジの国立海事博物館ケアード図書館から取り寄せた画像（図1）により、同図書館に大黒屋光太夫作日本図の写しが現存することを確認した。本稿では、まず、この日本図写しの発見の経緯となった史料を紹介する。次に画像の分析に基づき、これまでに報告された七枚の光太夫自筆の日本図と比較検討した概略を報告する。最後に本史料の歴史的意味を考察する。

一 発見の経緯——チャールズ・ウィットワース書簡

筆者はこれまで、江戸時代に来日した西欧人によって持ち帰られ、博物学の進展に貢献した日本の博物図譜や魚類標本資料、科学者間の交流について在外調査を行ってきた^⑥。二〇一七年、調査

の一環で英国公文書館が所蔵する外交文書を閲覧した際、イギリス側が大黒屋光太夫日本図の写しを極秘で入手したことを示す書簡を発見した。その書簡を引用者による和訳にて紹介する（傍線および「」内の補足は引用者による、以下同様）。

No. 9 サンクトペテルブルク 一七九三年二月七日「グレンヴィル閣下宛」^⑦

閣下

私は閣下に日本島の非常に興味深い海図を送らせていただくことを光榮に存じます。これをお受け取りにならないはずはないものと自負しております。

一七九一年にラクスマン教授によってサンクトペテルブルクへ連れてこられた日本人は船長であり船主でもあり、その船は一七九一年七月「実際は一七八三年」にロシアの島アムチトカに漂着しました。彼は大変知的な人物であつたようです。彼の所持品の中には蔵書があつたのです。ここで数か月、彼は異なる全ての沿岸部に関する蔵書中の書物に基づいて、日本島全体の海図を大縮尺で作成することに従事しました。

地図は非常に正確に見えますが、そこには測深値も暗礁も記されていません。おそらく、彼はロシア人により多くの情

報を与えないようにしたのでしょう。

そこには縮尺はありませんが、それでも航海者は日本島の両端の緯度と経度を決定すると簡単に縮尺を求めることができるでしょう。

彼にヨーロッパにある日本の地図を見せたところ、彼は、島の形態は全体的に実際とかけ離れてはいないが、それでも細部では非常に欠陥があり、岬間の距離が誤っている、と言いました。

この地図から、「日本には」二つではなく、一つの大きな島があり、国の南端に達する深い湾があり、それが航路として航海者に使われてきたようです。

この複製は原本（ここの文書館に保管されている）から最高の精度をもつて作られ、最も難しい部分であった日本語表記は、可能な限りの注意を払い、油紙「透写紙」に別々に写し取っております。

最高の敬意をもつてその荣誉に浴する

閣下の

最も従順で最も謙虚な僕

チャールズ・ウィットワース

この書簡を発見して以来、問題の日本図写しの所在を探したところ、二〇二〇年三月にグリニッジの国立海事博物館ケアード図書館のオンライン・カタログに、該当すると思われる史料の書誌情報を見つけた。同年五月の渡欧に併せて実物を閲覧する予定であったが、コロナ禍による渡航禁止と図書館の閉館が重なり、やむなく同図書館へ画像の作成を依頼し、同年九月二十二日に画像を受け取った。本来ならば実物を熟覧して報告するべきだが、本稿では画像とこれまでの調査から得られた知見を第一報として報告する。

二 新史料の特徴

本史料は、ケアード図書館の海図・地図コレクションの中で、グレンヴィル・コレクションとして登録されている（以下、本史料の略称をグリニッジが属する行政区 大ロンドン Greater London にちなみ、Lとする）。収集者のウィリアム・グレンヴィル (William Wyndham Grenville, 一七五九〜一八三四) は、従兄弟である小ピット (William Pitt, the Younger, 一七五九〜一八〇六) の政権時に外務大臣（一七九一〜一八〇二）を務め、その後一八〇六〜一八〇七年に首相となった人物である^⑤。前出の書簡は駐露公使チャールズ・ウィットワース (Charles Whitworth, 一七五二〜一八二五) が海図の写しをグレンヴィ

ルへ送ったことを示す。Lは、これまで確認された全ての光太夫自筆の日本図と同様に本州と九州が一体であり、日本列島の形態も全体的に似ている。書簡に示された来歴とLに描かれた日本列島の形態から、Lが光太夫の日本図写しであると判断した。そこで、Lと既報の光太夫自筆七図との相違点を調べ、同時にLの元となった原本が既報図に含まれるか否かを調べるため、画像と出版物の写真を比較検討した。本稿では所蔵機関と史料名に略称を用い、ゲッチンゲン大学図書館所蔵図（G1〔図2〕、G2〔図3〕、G3〔図4〕）、モスクワのロシア軍事歴史古文書館所蔵図（M1、M2）、エストニア国立公文書館所蔵図（E）、エルミタージュ美術館所蔵図（H）とする（表1）。比較検討のためにG1とG3、E、Lの五点はデジタル画像を、M1、M2、Hの三点は出版物の写真を用いた。G1とG3は実物を閲覧し寸法を測った。この三点以外の寸法等は既報の論文を参照した。Lの書誌情報はケアド図書館のホームページのカタログ情報を参照した。⁹⁾Lの主な特徴は、他の七点の地図を比較すると、以下の通りである。

〈寸法〉LはE、H以外の五点とほぼ同等のサイズである。

〈製作者、署名、印判〉Lには光太夫自筆の署名、捺印がなく、全て西欧人の手による複製（英文書簡の表現からウィットワース自身）と考えられる。一方、既報の七点には光太夫の署名と二種類の印

（M1は手書きか）があり、全て光太夫の自筆であると考えられる。〈製作年と作成地〉L自体に製作年月日の情報はないが、ウィットワースの書簡から、一七九三年二月七日以前にサンクトペテルブルクの文書館が所蔵する日本図を元に作成されたと推定される。

アッシュはゲッチンゲン大学の古代言語学の教授で大学図書館の館長を務めたハイネ（Christian Gottlob Heyne、一七二九～一八一二）宛に、自筆で作成した詳細な目録を添えてコレクションを送付した。その目録の日付によると、光太夫の日本図は、一七九三年四月三／十四日「旧暦／新暦」に二点「G2、G3」、一七九四年五月二十二／六月二日「旧暦／新暦」に一点「G1」イルクークから受け取った地図」と、二度に分けてアッシュによりサンクトペテルブルクから送られた（表2）。ウィットワース書簡の日付から、Lはアッシュがゲッチンゲン大学に光太夫日本図三点を送付する前にイギリスへ発送済みであったといえる。したがって、G1とG3がLの原本となる可能性は残る。ただし、アッシュが文書館に保管されていた原本を入手し、ゲッチンゲン大学に贈ることができたか否かについては、今後の検討を要する。

〈文字情報〉Lには枠外に英語で書かれた“A Chart of Japan or Zidon”「ジャパンまたはニホンの海図」以外に文字情報がない。これは書簡の「最も難しい部分であった日本語表記は、[略]別々に写し取って」の記述と一致する。既報の七点には日本語で地名が記

されている。補足情報がG 1、G 2、M 2、Eにはロシア語（背面にドイツ語注記あり）、Hにはドイツ語で書き込まれている。

〈櫓〉 G 1からG 3の三点について、日本図の天守閣や三種の櫓はスタンプで捺印されていることが指摘されており、筆者も原本で確認した。同じスタンプがM 1、M 2、E、Hにも用いられている。一方、Lの天守閣や櫓は全てペン書きであり、櫓の石垣の輪郭を表した四本の直線（一見して高床式倉庫の脚部のように見える）も写している。櫓の地面には、自筆図にない脚部の影が東側に向かつて描かれている。これは複製の作者が石垣の輪郭線を脚部と解釈したからであろう。この影の加筆も、Lが西欧人の手による写しという仮説を裏付けるものである。

〈城郭〉 六つの城郭（江戸、大坂、駿府、尾張、紀伊、水戸）の描写、天守閣と櫓の位置、地図上の位置は史料によつてかなり異なる（表1）。Lは天守閣と櫓の位置とバランスを見るとM 1に最も似ている。G 2、G 3は天守閣と櫓の位置がLと異なる部分もあるが、城郭のスタイルは似ている。

〈富士山の形状、位置〉 富士山の形態とその位置については地図により違いが大きい。今回の検討では、Lの原本となつた図を決定することはできなかった。

〈史料の由来〉 L以外の由来を以下にまとめる。G 1～G 3はゲオルク・トーマス・フォン・アッシュ (Georg Thomas von Asch,

一七二九～一八〇七) が母校ゲッチンゲン大学に寄贈したアッシュ・コレクションの一部である。アッシュはドイツ系ロシア人の医師としてロシア政府に仕えた。そのコレクションはロシアとその周辺域から収集された自然史標本、手稿書、書籍、民俗資料、地図や図、古銭など、多様なジャンルからなる学術資料として有名である。¹² アッシュの名は光太夫の人名録にも記録されていることから、アッシュはキリル・ラクスマンを通じて光太夫と会つたと思われる。M 1、M 2がモスクワのロシア軍事歴史古文書館の所蔵となつた経緯は不明であるが、製作地がサンクトペテルブルクであることから、後にモスクワへ移管されたと考えられる。Eはクルーゼンシュテルン収集の地図集に収められている点から、実用的航海資料としての利用を実証する史料と指摘されている。¹⁴

エストニア出身のクルーゼンシュテルン (Adrian Johann von Krusenstern, 一七七〇～一八四六) はロシア初の世界周航に成功したナジェージダ号の艦長であり、一八〇四年に全権使節のレザノフと長崎に来航した。彼はアダム・ラクスマンが加藤肩吾から得た「松前地図」の写しを反映したロシア地図を所持していたが、航海記の中でそれを光太夫に由来するものと記述した。¹⁵ クルーゼンシュテルンは「松前地図」の作者と光太夫を混同したと思われるが、この点も光太夫由来のEを活用したことを示すのではないか。Eの入手経緯の解明が求められる。Hは、地図に書き込まれたド

イツ語の筆跡により、ロシアに仕えたドイツ人の薬学・植物学者
ジーファース (Johann August Karl Seever, 一七六一〜一七九五) 旧蔵の
地図と報告された。⁽¹⁷⁾

《四国東側の南北線》Lに描かれた四国のすぐ東側に地図を南北に
貫く縦線が引かれている。該当する線はどの地図にもないが、
G2の同じ位置に紙を貼り継ぎ、折った部分があり、明瞭な直線
のように見える。この折目の位置がLの縦線の位置と一致する。

《その他》M1は唯一、福知山城を欠くほか、上野と下野の境界線
が出羽まで北へ伸びる。

画像と写真を比較したが、Lの原本となった史料を既報の七点
から一図に決定することはできなかった。Lが「最高の精度」で
作成された複製であるとする、既報の七点以外が原本となった
可能性もあるだろう。今回の比較検討により、七点の文字情報以
外の特徴から、光太夫自筆の日本図を、①G1、②EとH（類似
点・寸法、海域面積、城郭）、③その他、と大きく三タイプに分類で
き、Lは③に属すると考えられた。G2、G3の余白に針穴が認
められたこと、沿岸域の湾が複雑に入り組んだ形状なども七点に
共通していることから、複製は薄紙等で原本を透写し、作成され
たことが推察された。今後、実物を閲覧して詳細に検討すること
が必要である。

三 ペテルブルクの光太夫——マシュー・ガスリの記事

光太夫がイルクーツクで描いた日本図のことは、一七九〇年版
ペテルブルクのロシア帝国科学アカデミー新会報第八巻（二七九四
出版）、五月十七日の事項に記録された。⁽¹⁸⁾

「科学アカデミーの」秘書は、イルクーツク三月二十日付、宮
廷顧問ラクスマンからの手紙を読み上げた。それは日本の商
人、大黒屋光太夫によつて描かれた一枚の日本島の地図を送
る「という」手紙であつた。この地図はいくつもの点でケン
ベルの地図と異なり、細部はより正確である。この送付物に
は植物園のために、植物の種子が三袋添付されていた。

この新会報から、光太夫がイルクーツクで作成した一枚の日本
図は、一七九〇年三月二十日にキリル・ラクスマンによつてペテ
ルブルクのロシア帝国科学アカデミーに送付され、同アカデミー
の同年五月十七日の会議で報告されたことが分かる。

ラクスマンを通じ、光太夫はイルクーツクから帝都ペテルブル
クへ帰国請願書を三度出したが、いずれもよい返事を得られな
かつた。その後ロシア政府は光太夫らが日本語教師としてこのま

まロシアに仕官するか商人になるよう申し渡し、それまで支給していた給費を止めた。このため、光太夫はラクスマンの提案で共に帝都へ移動し、直訴の機会をうかがった。こうして光太夫はラクスマンらと一七九一年一月十五日にイルクーツクを出発し、同年二月十九日にペテルブルクに到着した⁽²⁰⁾。

光太夫が製作した日本図のうち六枚はペテルブルクで描かれた(表1)⁽²¹⁾。この地で光太夫が地図を作成する様子を目撃した人物がいた。スコットランド人医師で、三十年以上もロシア政府に仕えたマシュー・ガスリ(Matthew Guthrie, 一七四三～一八〇七)である⁽²²⁾。彼はスコットランドの農学者ジェームス・アンダーソン(James Anderson, 一七三九～一八〇八)⁽²³⁾が編集した文芸雑誌*The Bee*に“Arcticus”(北極)の筆名でロシアの文化や博物学情報を寄稿した。この投稿文から、光太夫に関する記事を引用者の和訳により転載する。

コード「光太夫」は、コックスやフランス領事のレセップスがカムチャツカの旅で紹介した日本の商人だが、彼の庇護者であり友人であり、またシベリアの化石の探索者であるイルクーツク在住の「宮廷」顧問ラクスマンによつて去年の冬に連れてこられ、二、三か月我々とともに留まっていた。その有能な鉱物学者の宿舎と、著名な博物学者であるパラス博

士の邸宅の両邸で、私はしばしば彼に会う機会を得た。彼は小さく、がっちりした健康な体で、長い黒髪を後ろで束ね、スペイン人のような顔色で、洞察力の優れた黒い眼である。彼はペテルブルクでは西欧式の服装だった。彼が難破船から持ち出すことができた物は、ずっと前に着古されてしまったに違いないので。彼の人生と国を考えれば、彼が示した知識のレベルに、我々は皆驚いた。例えば、私の友人であるパラスの温室で、彼は彼の島「国」に原産する植物を我々に示した。また私は彼がいつも自宅(ラクスマンの住居)で、彼の国の海図、特に彼が出航した地域の海図作成に従事するのを見た。

それら「海図」はほぼ中国式だった*。彼は難破船から二、三冊の本を救出していた。一冊は一種の歴史と地理に関する著作物で、もう一冊は宗教に関するものだ、と彼は言った。彼はロシア語で自分の意思を伝えることができ、彼の性格と行動の穏やかさは、レセップスが彼について描写する所が全て的那样だった。手短に言えば、自宅での彼の全ての楽しみは、パイプと本と海図であるようだった。女王陛下は、陛下の負担で、オホーツクで装備を整えた船に乗せて彼を祖国へ送り届けるよう、またラクスマンの息子が同行し、彼を日本へ安全に送り届けるよう命じた。彼の不運は他の言語で

も、そして間違いなく英語でも伝えられてきたので、ペテルブルクで日本人に会うという珍しい現象の原因はご存じの通りだろう。彼は所有する船で日本から航行したが、その船には幸いにも彼と乗組員の食糧となる米を積んでいて、彼が難破してフォックス諸島²⁵の一部に漂着するまでの信じられないほどの時間、彼の船が舵もないまま風に翻弄された。カムチャツカへ連れていかれるまで、彼はそこで長い間ロシア人と住んだ。彼が「ロシア」帝国に入国して以来、ほかの残りの乗組員とともに、彼は主にイルクーツクのラクスマンと住んでおり、そのうちの一人「新蔵」だけがここ「ペテルブルク」に彼といる。〔以下略〕

*それらの海図のうち何枚か保管されていますか？ その一枚でも得られるなら、私は特別にお願いして一枚入手したい。

編集者注。

ガスリの描写は、帝都の錚々たる博物学者が集まるサロンの中で、光太夫が教養ある人物として一目置かれ、日本に関する知識を共有する様子を伝える貴重な記録である。『レセツプス旅行日誌²⁶』に描かれた光太夫が当時既に有名であり、それをガスリも読んでいたことが分かる。ガスリの記録はレセツプスより後のもの

であるが、ペテルブルク滞在中の光太夫を直接伝える描写として最初のものである。ガスリが光太夫と会ったのは「去年の冬」、すなわち光太夫らが帝都に到着した一七九一年二月十九日以降のことである。到着後程なくラクスマンが大病を患い、光太夫は懸命に看病したが、回復までに八、九十日かかった。同年五月一日に皇帝エカテリーナ二世が夏の離宮ツァールスコエ・セローへ移動したため、五月八日から光太夫はラクスマンとともに離宮の庭番のブシ (Joseph Charles Buis, 一七五九〜一八三八)²⁷ 宅に滞在し、皇帝拝謁の機会をうかがった。²⁸ 一方、ペテルブルクで作成した地図のうち、判明した中で日付が最も早いのは、Eの三月上旬である (表1)。よって、ガスリが光太夫と会った期間は、ラクスマンが回復中の期間を含め、一七九一年三月〜五月上旬の二か月余りの期間であつたと推定される。

ガスリはスコットランド出身の英国人医師であつたが、ロシア政府に仕官し、博物学者としてラクスマンやパラス (Peter Simon Pallas, 一七四一〜一八一) と交誼を結んだ。パラスはエカテリーナ二世の命を受け、シベリアを探検し、動植物学や民族学に貢献した著名なドイツ人博物学者である。²⁹ 「ラクスマン教授は、ロシアの味方だと彼が判断した友人に対しては非常に話の通じる人物³⁰」とあるように、ガスリはラクスマンからロシア側の人物、かつ博物学仲間として認識されていたので、光太夫が地図作成に取り組

む様子まで身近に見ることができたのである。

一方、光太夫の送還と日露通商交渉を画策していたラクスマンは、光太夫がイギリスとオランダの外交官に会うことを非常に警戒していた。⁽³¹⁾ 彼が最も警戒したのが、前述の駐露英国公使ウィットワースであった。ガスリとウィットワースによる光太夫の洋装の解釈は、興味深い対比をなす。ガスリは、「和装が着古されてしまった」と考えた。パラスから情報を得ていたと考えられるウィットワースは、ラクスマンが警戒し「光太夫は自国の服を持つていたのに、ロシアの服を着せられていた」と報告する。⁽³²⁾ 『北槎聞略』によると、光太夫は最後まで和装一式を手放さず、帰国前にラクスマンの娘マリヤに全てを与えた。⁽³³⁾ またイルクーツクから帰国する直前に、ジーファースは和装の光太夫を描き、「我が友光太夫、日本の船長、再び日本へ旅立つた 一七九二年五月十日」と記した。⁽³⁴⁾ ジーファースはイルクーツクで光太夫に二度会った記録が残る（一度目は一七九〇年五月二十七日）。⁽³⁵⁾ Hにはこのジーファースによるドイツ語の書き込みがあるとの報告から推察すると、彼は日本図を介した知的友好関係を光太夫と築いており、親しみと惜別の念を込めて「我が友」と記したのかもしれない。

ガスリは光太夫が「一種の歴史と地理に関する著作物」を所持していたと記すが、これは「節用集」を指すものと推察される。⁽³⁷⁾ 光太夫がロシアに残した本の表紙には「節用 式冊」を含む七種

の蔵書記録があると報告されている。⁽³⁸⁾ 先行研究により、各種の節用集と同様の日本図が『年代記絵抄』にも収録されていること、および光太夫日本図には、同書に見られる「つかる〔津軽〕八方」（多くの節用集では合浦^{がっほ}）の誤りをそのまま「八つほう」と写すことから、『年代記絵抄』が原本である可能性が高いことが指摘されている。⁽³⁹⁾ このようにガスリの記述によつて、光太夫がペテルブルクのラクスマンの宿舎で地図作成に従事している様子を再現することが可能となったといえる。

四 同時代の西欧人による光太夫日本図の記録

光太夫が描いた日本図は、同時代の西欧人にどのように受け止められたのだろうか？ これまでに確認した範囲で、当時の文献史料に記された光太夫日本図に関する記録を年代順にまとめた（表2）。そこから光太夫日本図は、同時代の西欧の科学者、政治家、外交官、実業家に広く関心を持たれていたことが分かった。

先に述べたガスリによる *The Bee* の一七九二年五月十六日号の寄稿は、出版された光太夫日本図の記録として現在のところ最も古いものである。ガスリの寄稿には続きがあり、一年後の一七九三年五月十五日号の寄稿で、海図の保管場所を見つけ、編集者であるアンダーソンのためにコピーを入手したことを報告した。同年

七月三日号の中でも、光太夫が作成した未発表の海図について再度触れている。

ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 一七五二～一八四〇) はドイツのハノーファー選帝侯国のゲッティンゲン大学の医学、人類学、博物学の教授であり、一七七六年に王立学術博物館の初代館長に就任した人物である。⁽⁴⁰⁾ ジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 一七四三～一八二〇) は、キャプテン・クックの第一回航海 (一七六八～一七七二) に私費を投じて参加し、膨大な博物資料を持ち帰ったイギリスの博物学者である。帰国後は、ロンドン郊外のキューに設立した王立植物園の事実上の初代園長、王立協会の会長 (一七七八～一八二〇) など多くの役職を務めたほか、リンネ協会の設立 (一七八八) にも尽力するなど、イギリスの博物学に大きな業績を残した。⁽⁴¹⁾

ブルーメンバッハとバンクスの交流は博物学者同志の交流であつたが、ハノーファーとイギリスが当時同君連合であつたため、ハノーファー政府とロンドン在住の国王を結ぶ四半期ごとの公式定期便を活用して書簡を交わしていた。⁽⁴²⁾ ブルーメンバッハからバンクス宛、一七九四年九月二十四日の書簡から光太夫日本図に関する部分⁽⁴³⁾を、引用者の和訳により転載する。

最近、私どもの図書館に一枚の興味深く新しい大型の日本

の海図が送られてきており、それには「地」名が日本の文字で印刷され、手書きのロシア文字で説明が書かれています。

もしその海図が、閣下ご自身か、ダルリンプル氏にとりまして何かしらご関心のあるものでしたら、私は最大の喜びとともにその正確な複製を調達致します。〔以下略〕

この海図は、「最近」ゲッティンゲンに送付された「一枚」の海図であり、「日本の文字」と「ロシア文字」による書き込みがある点から、G1を指すと考えられる。ダルリンプル (Alexander Dalrymple, 一七三七～一八〇八) については後述するが、海図の製作者として著名であつた。ブルーメンバッハの申し出に対し、バンクスの返事の手簡には、この件に関する依頼も断りも書かれていない。⁽⁴⁴⁾ しかし、他の件に関してはそれぞれに返答が書かれている。

この無回答の理由については明らかではないが、バンクスが無関心であつたか、あるいはウィットワースが送付した日本図⁽⁴⁵⁾について既に把握していたため触れなかつたか、どちらかと思われる。

一方、バンクスがウプサラのツェンベリーに送つた一七八五年六月十七日付の手簡からは、バンクスの対日貿易に関する高い関心が示されている。同手簡には、イギリス商人がアメリカの北西海岸の原住民と毛皮貿易を行い、それを日本の「北方の」原住民と貿易を行う意向があること、そのため皇帝から自立している日

本の北方地域における「イギリス船の」貿易の可能性について照会していたのである。⁽⁴⁵⁾ シュンペリー (Carl Peter Thunberg, 一七四三～一八二八) はオランダ商館の医師として一七五五～一七七六年に来日した博物学者である。彼は動植物についてはもとより、日本の社会・経済についても当時西欧での第一人者であった。よって、バンクスがブルーメンバッハに日本の海図について無回答だったのは、少なくとも無関心のためではない。

ブルーメンバッハは、バンクスへ送付した書簡と同様の書簡を、ドイツ、ゴータの天文学者ツァッハ (Franz Xaver von Zach, 一七五四～一八三二)⁽⁴⁶⁾ にも送付したと推察される。その返事に相当するツァッハからブルーメンバッハ宛、一七九八年五月二十二、二十七日付の書簡の中で、ツァッハは自身が編集する『天文地理学雑誌』⁽⁴⁸⁾ への光太夫日本図に関する寄稿と日本図「写しか？」の送付を依頼した。光太夫日本図をラペルーズの海図と批判的に比較し、その縮小地図を掲載することも考えていたようである。しかしその後、彼の雑誌に光太夫日本図の縮小版複製は掲載されなかった。

イートン (William Eton) は一七九〇年代にサンクトペテルブルクの英国大使館に通商顧問として所属した人物である。⁽⁴⁹⁾ 彼は著書『トルコ帝国概説』(一七九九)の中で、光太夫の日本図について記録した。⁽⁵⁰⁾ 彼はサンクトペテルブルクの英国大使館で、大使

ウィットワースを通し、直接複製の日本図を見たと思われる。

クルーゼンシュテルンと光太夫日本図については第二章〈史料の由来〉で述べた。

このように、西欧に残る光太夫の日本図に関する記録から、光太夫の日本図の受け止め方を、受け手の属性、つまり(一)博物学者、(二)政治、外交、通商関係者、と大きく二つに分類することができる。実物の光太夫日本図は、十八世紀末の西欧人の博物学者間のネットワークを介し、サンクトペテルブルクからハノーファー選帝侯国のゲッティンゲン大学に寄贈された。またその情報は、同じく博物学者間の知的交流を媒介に、ロシアからスコットランド経由でイギリス、同君連合のハノーファーからイギリス、ドイツ内のゲッティンゲンからゴータのような経路で共有され、注目されていたことが分かった。特にアンダーソン、ツァッハのような学者は、自身の編集する科学雑誌に図を掲載し、出版予定であったことが判明したが、それは何らかの理由で実現しなかった。ラペルーズの探検航海の後、最新の海図が出版された後には、やがて科学的価値を失ったとも考えられる。

一方、イギリスの政治家、外交官、通商関係者にとっても、光太夫日本図は最新の日本の海図情報と映った。特にロシアとの極東における貿易競争を制するために、ロシアから入手しなければならぬ情報であった。ウィットワースが複製を製作してイギリ

スへ送付した時期は、ガスを除く全ての博物学者らの情報共有よりも早い。結果的に、光太夫日本図が学術雑誌に出版される計画はいずれも実現しなかったのに対し、政治、外交、通商分野における必要性からは迅速に写しが作成された。結局、これらの政治的ニーズに応じて作成された複製が直ちにイギリスへ送られ、後世に残ることになったといえよう。

五 イギリスが入手した光太夫日本図の歴史的意味

なぜイギリスは光太夫日本図の写しを入手したのか？ 十八世紀末におけるLの歴史的意思を（1）十八世紀後半の北太平洋へのイギリスの進出状況、（2）グレンヴィル・コレクションの特色、（3）西欧人による日本沿岸測量図、（4）日本で製作された地図情報の西欧への流出時期、（5）光太夫の人物像から考察する。

（1）北太平洋の覇権争い

十八世紀後半、北米の太平洋岸では毛皮貿易とその交易拠点をめぐり、西欧諸国が熾烈な競争を展開した。特にクックの第三回航海（一七七六～一七八〇）により北米の北太平洋沿岸が探索され、北西海岸のラッコの毛皮が中国で莫大な富をもたらすことが知られると、商業権と領土権をめぐり獲得競争が繰り広げられた。⁽⁴⁾

北西海岸にはトルデシリヤス条約によってアメリカ大陸の領有権を持つと見なしていたスペインと、アラスカで植民地活動を行い、南下を開始していたロシアが進出していた。⁽⁵²⁾ 北太平洋の交易圏を押さえることは、海洋帝国として極東進出を目指すイギリスにとって長年の重要課題であった。実際、クックの第三回航海の秘密訓令にも、北西・北東航路の探索が含まれていた。⁽⁵³⁾ イギリスのクック隊による北米の太平洋岸の探検は、ロシアやスペインを警戒させた。クック隊に刺激され、フランスもラペルーズの探検隊を太平洋へ派遣した。⁽⁵⁴⁾ イギリスから独立したばかりのアメリカ合衆国も、商機を狙って太平洋へ進出した。⁽⁵⁵⁾

一七八九年、ヌートカ湾に駐屯地を建設したスペインが、この地に停泊したイギリスの交易船を拿捕したことを発端としたヌートカ湾事件が発生した。イギリスは一七九〇年のヌートカ湾協定により、事実上この地で「貿易と航海の自由」を得ることに成功した。⁽⁵⁶⁾ イギリスの私貿易商人のみならず、政府も北米毛皮貿易に関心を示し、日本を含む東アジアでの通商展開を論じた。⁽⁵⁷⁾ イギリスの対日通商への動きに対し、対日貿易を独占していたオランダは危機感を抱いた。⁽⁵⁸⁾ ロシアとイギリスは、それぞれに光太夫の送還を名目に日本との交易を画策しており、互いの動向を注視していた。⁽⁵⁹⁾ イギリスは光太夫をマカートニー使節の通訳として用い、中国訪問の後に対日通商交渉を進めようと画策していたが、光太

夫との接触はロシア側の警戒により実現しなかった。マカートニーは一七九三年に清の乾隆帝に謁見し、通商交渉を行ったが失敗に終わった⁽⁶¹⁾。光太夫とマカートニー使節との関係は改めて論じたい。つまりこの時期のイギリスは、北太平洋の覇権争いの中で優位に立ちつつあったが、極東ではマカートニー使節が中国と交渉に失敗し、日本との交渉も実現しなかったように、まだ他の西欧諸国と競争の渦中であつたといえる。

(2) グレンヴィル・コレクションの特色

ケアード図書館のオンライン・カタログを見ると、グレンヴィル・コレクションには一三〇〇点の地図・海図が登録されている。画像が掲載されているものはその一部ではあるが、河川や沿岸域の港湾、要塞、海峡、水路、有名な陸海の戦場の陣営など、軍事的な地理情報であることが分かる。地図・海図の大部分は出版物であるが、手稿も含まれている。また大半はイギリスを含めたヨーロッパの地図・海図であるが、世界全域を網羅している。日本全域を単独で網羅した地図・海図は1のみであり、他は東アジア全体図など広域図に含まれるものであった。同図書館の資料紹介によると、このコレクションはグレンヴィルが外務大臣に就任中（一七九一～一八〇一）の比較的短期間に、特に当時のヨーロッパの軍事情勢を知るための実用的な資料として収集されたものと

いう⁽⁶²⁾。

コレクションの性格を把握するため、カタログ情報から出版年あるいは作成年情報を年代別にまとめた（図5）。図5から地図・海図の出版・作成年の大半が十八世紀後半であり、特に一七八一年から一八〇〇年の収集数は全体の約六割を占めることから、グレンヴィルが収集しうる最新の地理情報であつたことが確認された。よつてこの特徴からも、Lは最新の日本海図情報としてコレクションに加えられたものと考えられる。

(3) イギリスが入手し得た日本沿岸測量図と光太夫日本図の写し
イギリスが十八世紀後半までに掌握した日本の海図と、光太夫日本図写しを入手した時期（一七九三年）について考察する。広義の「日本地図」であれば、西欧にはイエズス会が持ち帰った情報に基づく地図や、ケンペルが日本から持ち帰り『日本誌』（英訳出版一七二七年）の中で出版された日本図を始め、後の追加情報によつて徐々に進化したものが多数存在していた⁽⁶³⁾。しかしこの頃、イギリスは実測値を重視し、海図を求めていた。なかでもイギリス東インド会社水路部長で、一七九五年にイギリス初代海軍水路局長に就任したダルリンプルは、水路測量に基づく海図の作成と蓄積に取り組んでいた⁽⁶⁴⁾。日本に関する海図の一例を挙げると、彼が編纂した海図集の中には、古いオランダの地図であるが、水深

の計測値が書き込まれ、水路図として有効な長崎の港湾図が含まれている。⁽⁶⁵⁾

表3は十七世紀から十九世紀初頭まで、フリースの探検以降、西欧諸国が日本近海を航行し、測量した値を反映した日本の海図を時系列にまとめたものである。日本の北方では、一六四三年にオランダのフリース探検隊が北海道の東部太平洋側とエトロフ島、ウルップ島の一部、サハリン南部を測量した。その実測図は一六五〇年のヤンソニウス以降の西欧地図に長く用いられた。⁽⁶⁷⁾一七三九年にはロシアのシュパンベルグ探検隊が千島列島を南下し仙台湾に至った。その実測地図は、一七四五年のロシア科学アカデミーが出版した『ロシア帝国地図帳』の「ロシア帝国全図」に採用された。⁽⁶⁸⁾

イギリスによる日本の海図作成は、クックの第三回航海を嚆矢とする。クックの死後、後任のキング艦長は、三陸沖から房総沖までの本州太平洋沿岸と硫黄島を海上から測量し、沿岸図を作成した。⁽⁶⁹⁾クックの第三回航海誌（図版含む）は一七八四年六月に出版された。⁽⁷⁰⁾

次に日本近海を探検したのはフランスのラペルーズ隊の世界周航（一七八五～一七八八年）である。ラペルーズ隊は一七八七年に与那国島から日本海を北上し、能登半島で緯度・経度を測定、間宮海峡に接近した後、宗谷海峡を発見、千島列島を北上し、カム

チャツカのペテロパブロフスクに到着した。⁽⁷¹⁾そこで下船し、そこまでの航海誌を預かりロシア経由で帰国したが、光太夫の記録を残した前述のレセップスであった。⁽⁷²⁾ラペルーズ隊はペテロパブロフスクから南下し、一七八八年一月二十六日にオーストラリア東海岸のボタニー湾に達したが、その地を同年三月十日に出航して以降、消息を絶った。カムチャツカからオーストラリアまでの航海日誌とデータは、イギリス人に託送されてフランスへ届けられた。これらの航海誌、地図、写生図は、フランス革命後の一七九一年、国民議会によって出版を議決され、一七九七年に航海記とアトラスが出版された。⁽⁷³⁾

クックの第三回航海以降、イギリスが独自に日本近海の測量値を得たのは、ヌートカ湾事件後に解放されたコルネットの私貿易船アルゴノート号の航海（一七九一年、北九州から中国地方西部の日本海沿岸を測量）⁽⁷⁴⁾と、ブロートンのプロビデンス号とスクーナー船による探検航海であった。⁽⁷⁵⁾ブロートンは一七九六年から一七九七年の間、二度の日本近海探検を行った結果、室蘭、北海道南岸、千島列島、琉球列島から本州の太平洋沿岸、津軽海峡、北海道の日本海側、サハリン、湾と見なしたタタール海峡（間宮海峡）、沿海地方から中国大陸沿いを航行した。ブロートンは一七九八年五月二十八日にスリランカ北東海岸のトリンコマリーで解任され、⁽⁷⁶⁾一七九九年二月にイギリスへ帰国、⁽⁷⁷⁾一八〇四年に航海誌を出版し

た。プロートンは蝦夷地で加藤肩吾と出会い、日本人が作成した二種類の地図を入手したが、それらについては後述する。

つまり、一七八四年のクック第三回航海誌の出版以降、一七九〇年代末まで、イギリスが独占的に有した日本の測量値は九州北部の玄界灘から島根までの日本海沿岸のみであった。一七九七年にラベルズの航海誌が出版されるまで、またプロートンの海図が届くまで、イギリスは測量に基づいた日本広域の海図を所持していなかったといえる。

(4) 「松前地図」と『改正日本輿地路程全図』が西欧に流出した時期

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ロシアが日本で二種類の日本地図情報を入手したことが先行研究により報告されている。一つは松前藩の侍医である加藤肩吾が編集した「松前地図」と題する地図⁽⁸⁷⁾の写しで、北海道、カラフト島、南千島諸島を含む。アダム・ラクスマンが根室に來航した際、松前から派遣された加藤と上級役人の鈴木熊蔵がこの地図を持参しており、相互に地図を貸借して写し合い、地理情報を交換した⁽⁸⁸⁾。この時の模様は、ラクスマンの「日本來航日誌」の一七九二年十二月十三〜十四日の事項に記述された。ロシア側が持ち帰った「松前地図」写しと思われる地図がポストニコフの論文に掲載されている。この「松前地

図」写しに描かれたマツマエ島とカラフト島は、一八〇二年にペテルブルクのロシア帝国部で出版された「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」にそのまま写された⁽⁸⁹⁾。クルーゼンシュテルンが航海記に引用した地名——北海道南西の島の O-sima (大島)、Ko-sima (小島)、渡島半島の Sinoko (洲根子)——から、彼がこの印刷された地図を携帯していたことが分かる。彼が「松前地図」の作者と光太夫を混同した点については第二章で述べた通りである。

もう一方の地図が長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』である。近年、複数の在外資料に基づく調査研究から、この地図のヨーロッパへの流出時期、地図に掲載された地名など地理情報の翻訳、地図と翻訳情報の伝播、近代日本地図製作時の活用について、詳細な研究成果が報告されている⁽⁹⁰⁾。『改正日本輿地路程全図』が日本から渡欧したルートは、日蘭関係と日露関係を媒介とする大きく二つのルートがあった。ここで『改正日本輿地路程全図』の最も古い流出時期とその経緯、情報の流布について二つのルートの分けて整理する。

まず日蘭関係ルートでは、オランダ商館館長ティッティング(日本滞在…一七七九年八月〜一七八〇年十一月、一七八一年八月〜一七八三年十一月、一七八四年八月〜十一月)⁽⁹¹⁾、オランダ商館医師シーボルト(第一回目来日…一八二三年八月〜一八三〇年一月)⁽⁹²⁾が『改正

日本輿地路程全図』を持ち帰っている。

ライデン大学図書館が所蔵するシーボルト将来の『改正日本輿地路程全図』三点のうち、No. 220aは一七七九年（安永八）刊行の初版である。⁸⁷これが松井・レクインによる史料検討の結果、ティツィング自筆の番号と地名の書き込みがあり、ティツィングの死後、クラブプロートの手に渡り、彼の死後シーボルトが入手した地図であることが明らかになった。同論文に引用されている一七九二年一月二日付、ティツィングからアムステルダム在住の兄宛の書簡⁸⁸の内容はこの地図を指すと思われることから、一七九二年か翌年にはこの地図がオランダに渡ったと考えられる。さらに同論文はライデン大学図書館の地図No. 220aとオランダ王立図書館の地名一覧が元々はティツィングに属したセットの史料であったことを明らかにした。またオランダ王立科学アカデミー所蔵史料から、ティツィングが『日本に関する記述』の最終版草稿に地図の地名番号に対応するリストを作成して出版準備をし、一八一一年にこの草稿をアカデミーに寄託したが、ティツィングの草稿は出版されなかったことを示した。シーボルトによると、クラブプロートはティツィングの死後、これらの地図と草稿を用いてフランス語訳を作成し、自身の業績として一八二〇年にサンクトペテルブルクのロシア帝国陸軍参謀本部の地図保管所へ送り、同様の日本地図を大英博物館にも寄贈したという。⁸⁹なおティツィ

ングは三十二年に及ぶ東洋での任務を終え、一七九六年十二月にロンドンに戻った。⁹¹一八〇〇年四月の月刊誌にティツィングの日本コレクションに関する記事が掲載された。そこにいくつかの逸品の一つとして日本人が作成した大きな日本図について紹介された。ティツィングが西欧にもたらした『改正日本輿地路程全図』の存在は、彼が西欧に戻りロンドンを拠点として間もなく知られるようになり、一八〇〇年には記事に取り上げられるほど注目されていたといえる。

次に日露関係ルートから流出した『改正日本輿地路程全図』について検討する。

ロシア側が日本から直接この地図を入手した時期について、先行研究では十九世紀初頭のレザノフ使節来日時とするポストニコフの説と、十八世紀末のラクスマン使節の根室来航時とする小林・鳴海の説がある。⁹⁴ポストニコフはその具体的根拠を示していないが、日本で刊行された地図を元にして作成された一八〇九年製と一八一〇年製の日本図を紹介していることから、その年代に近いレザノフ使節の長崎滞在年（一八〇四―一八〇五年）の入手を想定したと思われる。掲載されたロシア軍事歴史古文書館が所蔵する一八一〇年製の地図を見ると、長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』に由来する地図の写しであることが分かる。特にその形状、色合いはエストニア国立公文書館が所蔵するクルーゼン

シュテルンの地図集に含まれる新蔵・善六訳「日本国的一般図」⁽⁹⁵⁾とよく似ている。ロシア軍事歴史古文書館の地図については今後の研究報告を待ちたい。

十八世紀末にラクスマン使節が長久保赤水図をロシアに持ち帰ったとする小林・鳴海の説は、二点を根拠とする。一点目はクルーゼンシュテルンによる『太平洋水路測量記録集』(一八二七年)の記述に基づく。その記述を以下にまとめる。クルーゼンシュテルンは世界周航後にアトラス(ロシア語版・一八二三年出版)を作成する際、サンクトペテルブルクの帝国科学アカデミー所蔵のラクスマンが持ち帰った日本地図を精査したが、その時は翻訳がないため地図を活用できなかった。その後、ワイマール大公が所有する日本地図の写しを提供され、別途入手したクラプロートによるフランス語訳とともにその日本地図を活用することができた。またワイマール大公所有の日本地図は、サンクトペテルブルクの科学アカデミー所有のラクスマンが持ち帰った日本地図と完全に一致したという。しかし科学アカデミーの地図はクルーゼンシュテルンが一度目に見た後、失われてしまった。

二点目の根拠は、イギリスのブロートンが蝦夷地の内浦湾へ二度来航した際の地図情報の交換に基づくものである。『改正日本輿地路程全図』を明示する記録はないとはいえ、加藤とブロートンとの交流をみると、加藤からラクスマンにも同様に地図が提供さ

れた可能性は十分にあるとする。⁽⁹⁷⁾

筆者は加藤肩吾が提供した日本の地図情報が、ラクスマン来航時とブロートン来航時では異なり、ラクスマンには「松前地図」のみを、ブロートンには「松前地図」と『改正日本輿地路程全図』の両方であつたと考える。

まずブロートンについては、一度目の来航時の一七九六年九月二十五日の記述に、大きな日本の北方諸島の地図を写すのを許可したと記されたことから「松前地図」を写したと考えられる。二度目の来航時の一七九七年八月には、日本列島の非常に完全な地図を得たこと、誰から地図を得たか決して言わぬよう強く命じられたことを記している。この「非常に完全な地図」は『改正日本輿地路程全図』を指す可能性が高いとされる。今後のブロートン関連の史料調査を期待したい。

次にアダム・ラクスマン(蝦夷滞在…一七九二～一七九三)来航時に日本から持ち帰った地図について、彼の日誌、科学アカデミーの記録を、他のラクスマン将来品の記録情報と後のレザノフ使節の地図情報と合わせて検討する。ラクスマンが根室滞在中に加藤肩吾と地図情報を交換し「松前地図」の写しを得たことは前述の通りである。ラクスマンの日誌は出来事、訪問者、得た情報や蝦夷地で見聞した風俗、産物、博物学的知見などが詳細に書かれている。ラクスマンの「日本来航日誌」には「松前地図」に関

する情報交換の様相が明記されている一方、『改正日本輿地路程全図』に相当するような正確な日本図を得たという内容の記述はない。

アダム・ラクスマンが蝦夷地滞在中に収集した自然史標本と、かんじき「スノーシュー」、植物「ハゼノキ」から作られた蠟燭などの民俗資料などの珍品は、一七九四年にキリル・ラクスマンが科学アカデミーに送り、同年六月十六日の学術会合でラクスマンの手紙が読み上げられた後、エカテリーナ二世がクンストカメラに移すよう命じた⁽¹⁰⁾。自然史標本リストは一八〇一年に発行された一七九四年版ペテルブルク帝国科学アカデミー新会報に報告された⁽¹⁰⁾。また自然史標本の和名を含むカタログのコピーは、古文書室に保管された⁽¹⁰⁾。その他、同新会報には日本遠征の概要も報告されているが、正確な日本島の地図を得たという内容はない。第三章で引用したように、キリルは光太夫が描いた日本図を科学アカデミーに送付していた。もし日本遠征でより正確な日本地図を得たならば、必ず科学アカデミーに報告したと推察される。

レザノフ使節の長崎滞在中、ロシア側関係者の航海記に日本の地図情報を示す記述はない。長崎でロシア使節一行は日本側の厳しい管理下に置かれた。さらに日本を去った後、クルーゼンシュテルンがカムチャツカから商務大臣ルミャンツェフに宛てた一八〇五年六月十一日付の書簡から、長崎滞在中に努力したが日

本地図を入手できなかったことが判明した。そのため、日本の北東部の地名を確認することができず、自ら命名する必要性から、クルーゼンシュテルンの航海に貢献した人物の名前を命名したという。西欧人が「発見」した場所に西欧人の名前を用いて命名することはよくあることではあったが、地図がなく対比すべき地元の名称が不明という事情もあつたのである。クルーゼンシュテルンの一例を挙げると「すばらしい海図コレクシヨン」ほか、航海のために最新機材を準備したゴードアのツァッハを顕彰し、島根の「一山を「ツァッハ山」と命名した⁽¹⁰⁾。長崎から日本近海の航海に關し、幕府はレザノフ使節に航行中に沿岸に近づくことを禁止した⁽¹⁰⁾。とはいえ、クルーゼンシュテルンが航海記で他に日本人が作成した正確な日本地図を参照した様子はない。航海中に参照した地図は西欧で出版されたアロースミス、ラペルーズ、「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」等の西欧で作製された海図であつたことが読み取れる。

クルーゼンシュテルンの航海は彼の建議で実現したロシア初の世界周航であり、ロシア皇帝アレクサンドル一世、帝国科学アカデミー、ロシア海軍、露米会社の全面的支援を得たものであつた。さらに日本への使節派遣は彼の案に後から附加された計画であつた。海図も周到に用意された⁽¹⁰⁾。また特命全權使節レザノフは、航海に先立ち科学アカデミーから名誉会員に任命された⁽¹⁰⁾。なぜ、帝

国科学アカデミー所蔵のラクスマン将来の日本地図、あるいはその写しが長崎来航時に携行されなかったのだろうか？ 筆者はこの点も、ラクスマン来航時に『改正日本輿地路程全図』を入手していなかったことに帰すると考える。そしてクルーゼンシュテルンがロシアに戻り、世界周航記のアトラスを出版する際に参照したのは、その時までに科学アカデミーに届いていた『改正日本輿地路程全図』ではなかったかと考える。この紛失したとされる地図の同定と来歴については、今後の史料研究の課題としたい。

これまでに史料を検討した結果、ラクスマン使節、レザノフ使節はどちらも日本来航の際、長久保赤水『改正日本輿地路程全図』に相当する日本図を入手していなかった、という結論に至った。

先行研究により、略奪によつてロシアへ渡った日本地図情報が報告されている。長崎での対日通商交渉の失敗と日本側の態度への報復として、一八〇六年八月八日、レザノフはオホーツク港に向かうユノナ号の甲板で、フヴォストフとダヴィドフに北方襲撃の秘密の指令を与えた。⁽¹⁰⁾これが一八〇六〜一八〇七年のユノナ号とアヴォシ号による樺太・択捉島・利尻島襲撃事件（文化露寇）の発端となった。ロシア側は日本人を拿捕し、蔵や倉庫から食糧や商品を略奪した後、蔵や御堂を燃やした。略奪品のリストには、ユノナ号が略奪した「本の入った小さな筆筒と海図」の記録があ

る。⁽¹¹⁾さらに、択捉島で捕虜となった五郎治による「五郎治申上荒増」に、この時に流出した日本図について興味深い記録がある。

五郎治はオホーツク滞在時に、日本からの略奪品に日本国の絵図や書物があつたことを思い出し、ロシア側に見せるべきではないと、保管された蔵に入つて日本図を持ち帰り、焼き払った。しかし別の日本絵図一枚がイルクーツクに渡っており、石巻若宮丸漂流民でロシアに帰化した善六によつて全て翻訳されたことを知り、悔しい思いをした。⁽¹²⁾五郎治はカムチャツカから将来した節用集一冊についても触れているので、日本国の絵図は節用集の日本図とは別の絵図と考えられる。そして善六がイルクーツクで翻訳したという地図が、前出のエストニア国立公文書館のクルーゼンシュテルン地図集に含まれる新蔵・善六訳「日本国の一般図」を指すと思われる。この地図の説明には翻訳者である新蔵と善六のロシア名と一八〇九年に刊行されたことが書かれている。⁽¹³⁾筆者はこのロシアに略奪され、翻訳された一連の史料が、日本からロシアに直接流出した『改正日本輿地路程全図』とその活用を確実に示す最も古い史料と考える。

以上、日本から西欧に流出した『改正日本輿地路程全図』の最も早い流出時期をまとめる。日蘭関係ルートでは、ティツィングが一七九二年にアムステルダムの子に地図を送付しており、それは同年以降にオランダに届いた。その情報が世に広まり始めたの

は一七九六年十二月にテイツィングがロンドンに戻って以降と推察され、一八〇〇年四月にロンドンの月刊誌に記事として取り上げられた。日露関係ルートでは、一八〇六―一八〇七年のロシアによる略奪により択捉島にあった地図が流出し、それをイルクーシクで翻訳した地図が一八〇九年に刊行された。またイギリスのブロートンは一七九七年に加藤肩吾から『改正日本輿地路程全図』と思われる地図を得た。この図がイギリスに届いたのは同年以降と思われる。これまでに判明した範囲では、いずれも『改正日本輿地路程全図』の西欧到着は一七九二年以降で、地図の存在情報は一七九〇年代末から知られるようになった。地理学上の知識、地名の活用は一八〇九年の新蔵・善六によるロシア語翻訳の刊行以降、地名に関しては実質的にはテイツィング翻訳を用いたクラブローットのフランス語訳、と後になると考えられる。さらにクルーゼンシュテルンやアロースミスによる地図製作への活用、地理学上の貢献については、先行研究¹⁵⁾を参照いただきたい。

(5) イギリスの光太夫日本図と光太夫の人物像

光太夫の日本図写しLは、サンクトペテルブルクから一七九三年二月に発送され、同年にイギリスへ到着したと推測される。従って、Lはラペルーズやブロートンによる測量図情報が一七九七年以降に到達する前の三〃四年間、イギリスが入手し得

た最新の「日本の海図」であったと考えられる。これは先に論じたように、西欧の科学者が光太夫日本図に高い関心を示し、雑誌等に公表しようとした時期と一致する。それはテイツィングが日本から送った『改正日本輿地路程全図』がオランダに到着すると同時期であった。同地図をブロートンが蝦夷地で得たのは一七九七年、テイツィングのコレクションがロンドンで知られるようになるのは一七九六年十二月以降であった。これらの期間もLがイギリスに到着した三〃四年後に相当すると考えられる。その翻訳情報の共有はさらに後になり、ロシア海軍が略奪した地図が翻訳・刊行されたのが一八〇九年、テイツィングの翻訳をクラブローットがフランス語に訳し、自身の業績としてロシアに送ったのが一八二〇年であった。光太夫の日本図がイギリスに届いた時期は、西欧における日本地図が前近代のものから測量値が反映した近代の地図に移行する転換期の直前であり、いわば隙間のような短い期間であった。しかし確かに、西欧の知識人に最新の「日本の海図」とみなされ、注目されていた期間があったのである。

ここでウィットワース書簡の内容とLについて検討する。前述の通り、光太夫の日本図は「節用集」の系統の日本図の写しであり、実測図ではなかった。しかも、ケンペル『日本誌』添付図のような既存の日本地図と比べ、本州と九州が連なる点で異なっていた。それにもかかわらず、イギリス側は光太夫の日本図を「大

変的な人物」かつ、日本の船頭である光太夫の航海の経験値が実測値に代わり反映した「海図」と捉え、忠実な複製を作成したといえる。十八世紀前半に西欧で出版された「レランド型」や「ケンペル・シヨイヒツアー型」の日本地図の海岸線は画一的であつたのに対し、光太夫日本図の海岸線が「非常に正確に」見えたとも解釈できる。日本の地名を記した文字情報は「最も難しい部分」として別々に写されたが、日本図は「航海者は日本島の緯度と経度を決定すると簡単に縮尺を求めることができる」海図として、実用的沿岸地理情報と見なされた。しかしそれを実際に地理情報として活用したか否かについては、今後の研究課題としてい。

光太夫の日本図に描かれた本州と九州の癒着については、伊勢出身の彼の知識にこの地方の地理的知識が欠けていたため、との指摘がある。¹⁷ ウィットワース書簡から、光太夫は西欧で作成された日本地図を見せられていたことが判明した。これは光太夫の帰国後の証言「ロシアの日本」地図は国分迄致し、殊の外精細成る事に御座候¹⁸とも一致する。おそらく彼はラクスマンやパラスから本州と九州の癒着について、ケンペルの日本図などと比較し、質問を受けていたと推察される。しかし既存の日本図を見せられても、光太夫は本州と九州のつながりを訂正しなかった。そして前掲のウィットワース書簡によると、光太夫は西欧の日本地図に

ついて「実際とかけ離れてはいないが、それでも細部では非常に欠陥があり、岬間の距離が誤っている」と回答した。一方、判明しただけで七枚もの日本図を描いていたにもかかわらず、光太夫は帰国後に自分がロシアで日本図を描いたことについて、管見の限り一切語っていない。この沈黙は、ロシア滞在時の豊富な体験談が数多く残されていることと対照的である。光太夫は、ロシア側が地図を含め、様々な日本情報を自分から収集していることを自覚していたと思われる。光太夫は強靱な意思を貫き、帰国を諦めず、ロシアに仕官しなかった。そして帰国の手段を自ら模索し続けていた。これらのことから総合して、光太夫が本州と九州を意図的に繋げて描いた可能性もあるのではないだろうか。光太夫は帰国後に咎められないよう、また日本という一国にとつて重要な地図情報をロシアに正しく伝えないよう、原本の紛らわしさを活かし、必ずしも全て正しい情報を提供しなかったのではないか。彼は西欧の日本地図を見せられた時、機転を利かせて「細部に欠陥がある」と述べることで、情報を攪乱させようとしたのではないか。この点は今後の検討が必要であるが、一つの仮説として指摘しておく。

このように光太夫は日本の地図情報の重要性を自覚し、情報を守るべく自ら考え、対処していた。この点に関して択捉で拿捕された五郎治も、光太夫と共通するものを持っていたように思われ

る。両者とも鎖国時代の日本の一庶民ではあったが、船頭、あるいは番人小頭というリーダー的立場であり、自ら判断する力を養っていたのかも知れない。それにしても想像を超える困難に直面した日本人一個人が、図らずも異国ロシアでの生活を余儀なくされた時に、ロシアから日本を俯瞰できたのであった。ロシアにいながら日本人としてのアイデンティティを失わず、ロシア語を身に付け、ロシアの狙いを把握して日本の国家的危機感を自分のこととして抱くことができた国際人といえよう。これは個人の資質が大きいと思われるが、当時の両者の国際感覚と現状把握、思考力、可能な限りの抵抗を試みた実行力は、時代を越えて現代の我々を強く惹き付ける。

そして光太夫の場合、この危機意識が図らずもイギリスへの正確な地図情報の流出を阻んだともいえる。イギリスは確かに光太夫の海図情報に関心を抱いていたが、それはロシアの対日動向を探る諜報活動の一環でもあったと思われる。イギリスに残る光太夫関係の史料から、当時のイギリスとロシア、日本の関係について改めて論じたい。

おわりに

イギリスで発見された光太夫日本図の写しと、その由来を示す

ウィットワース書簡は、イギリスが当時光太夫の日本図に非常に高い関心を持ち、実際に入手したことを示す史料である。十八世紀末、極東への進出を画策する西欧諸国間の競争を背景に、イギリスが光太夫の日本図を他では入手し得ない「海図」情報として捉え、対日外交、経済、軍事目的のために写しを送ったと考えられる。ウィットワース書簡と光太夫の日本図の写しという二点の史料は、イギリスが日本へ接近しようと画策していたが、この時期にその実現はまだ困難であったことを示している。これはイギリスが大英帝国として世界に圧倒的な勢力を持つ直前のことでもあった。光太夫日本図の写しは、西欧諸国による測量図、あるいは長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』のように精細な日本地図がイギリスに渡るまで、三〇四年の短期間であったが、他に代替物のない貴重な海図と見なされたと考えられる。これは当時の西欧の知識人が光太夫日本図に高い関心を示し、情報を共有し、出版を望んだことから裏付けられる。光太夫日本図の写しが実際にイギリスで活用されたかどうかについては、今後の課題である。

これまで光太夫は、日露関係史の中で、ロシアが日本との通商交渉を実現させるために送還した漂流民と捉えられてきた。本稿で検討してきた史料によって、光太夫は水面下で同時代のイギリスの対日政策にも少なからぬ影響を与えていたといえよう。光太

夫について、十八世紀末の鎖国政策下の日露関係のみならず、対
日外交政策をめぐるロシアとイギリスの政治的競合とそれぞれの
極東政策という文脈の中で再検討していきたい。

〔付記〕

本稿の作成にあたり、文献の翻刻、翻訳等、次の方々にご教示いただいた。
また記して感謝申し上げます。

松田清博士¹ Vera Dorofeeva-Lichtmann 博士² Tatiana Feklova 博士³

Ian Gladall 博士⁴ Sven Oserkamp 博士⁵ Timon Sreech 博士⁶

Marie-Christine Skuncke 博士

本稿に掲載した画像の閲覧、掲載を許可下さった以下の機関に感謝申し上げ
ます。

Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen

National Maritime Museum, Caird Library and Archive

本稿作成にあたり、多くの方々からのご支援と、多くの先行研究の恩恵を
受けたことを記して感謝申し上げます。

本稿は J S P S 科研費（課題番号 19K00940）による研究成果の一部である。

注

- (1) 大黒屋光太夫については多くの書籍、論文がある。ここでは以下の書
籍を参照した。桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』岩波文庫、
一九九〇、亀井高孝『大黒屋光太夫』吉川弘文館、一九九二（初版
一九六四）、山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集 第一〜四巻』日本評論社、
二〇〇三、山下恒夫『大黒屋光太夫——帝政ロシア漂流の物語』岩波新書、

二〇〇四。

- (2) 奥平武彦「ギョッチンゲン大学図書館の日露支関係文書」満鉄各図書
館報『書香』四五、一九三二、伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背
景（上）——光太夫の記録を残した人々」『窓』八五、一九九三、岩井憲
幸「ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について——書誌学的・
文献学的研究」『明治大学教養論集』二六九、一九九四。

- (3) 川上淳「ロシア軍事歴史古文書館から発見された大黒屋光太夫筆日本
図二枚」『窓』一一〇、一九九九、岩井憲幸「光太夫の署名——ロシア軍
事歴史古文書館所蔵光太夫筆日本地図発見によせて」『地域史研究はこた
て』三〇、一九九九、岩井憲幸「光太夫の日本図」大黒屋光太夫顕彰会、
二〇〇一、根室市博物館開設準備室編『ラクスマンの根室来航』根室歴
史研究会、二〇〇三、口絵、川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』
北海道出版企画センター、二〇一〇、口絵。

- (4) 長谷川孝治・喜多祐子「漂流民の国土描写——新発見の大黒屋光太夫
日本図を巡って」『日本地理学会発表要旨集』六三、二〇〇三、一七二頁。
Боголюбов, A. M., "Карта Японии Дайкоку Комао," in *Труды Государственного*

- (5) Эрмишак, т. 72: Эрмишакские чтения памяти В.Г. Луконина (21.01.1932–
10.09.1984). К 80-летию со дня рождения. 2007–2012 // СПб: Изд-во Гос.
Эрмишак. 2014, pp. 161–165. Боголюбов, A. M., "Map of Japan by Daikoku
Kodayu," in *Proceedings of the State Hermitage*, vol. 72: Hermitage readings in
memory of V. G. Lukonin (01.21.1932–10.09.1984). By the 80th birthday. 2007–
2012 / State Hermitage. Petersburg: State Hermitage Press, 2014, pp. 161–165.
А. Боголюбов (荒川好子翻訳)「露日関係研究資料としてのエルミター
ージュ国立美術館の日本芸術コレクション」『専修大学人文科学研究月
報』二八二、二〇一六。

ロシア語の論文は Vera Dorofeeva-Lichtmann 博士からいただいたことを
記して感謝申し上げます。なおこの論文の細部については、今後の研究報

告が待たれる。

- (9) Takigawa, Y., "Japanese ichthyological objects and knowledge gained in contact zones by the Krusenstern Expedition," in Klemun, M. and U. Spring, (eds.) *Expeditions as experiments - practicing observation and documentation*, Palgrave Macmillan, London, 2016, pp. 73–96; Skuncke, M.-C. and Y. Takigawa, "Scientific relations between Sweden, Russia and Japan in the 1790s: two letters from Eric Laxman," in *Svenska Linnésällskapets Årsskrift 2018*, Svenska Linnésällskapet, Uppsala, 2018, pp. 99–138.
- (7) The National Archives, Kew: F. O. 65/24, Whitworth to Grenville, 7 February 1793.
- (8) F・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典2 小項目事典』改訂版一九八八、六一六頁。
- (9) ケアート図書館「オンライン・カタログ」"A chart of Japan or Nippon [MS] (GREN/15)" (<https://collections.rmg.co.uk/collections/objects/555237.html>) (accessed 5 May 2021).
- (10) 前掲注(2) 伊藤論文' 二二頁。Hauser-Schäublin, B. and G. Krüger, (eds.) *Siberia and Russian America: culture and arts from the 1700s, the Ash Collection, Göttingen*, Prestel Verlag, München, Berlin, London, New York, 2007, p. 10.
- (11) 前掲注(2) 岩井論文' 一六六頁。
- (12) 前掲注(2) 伊藤論文' 二二三頁。
- (13) 山下恒夫「光太夫が作成したロシア人名簿——『魯西亜文字集』より」山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集 第三巻』日本評論社' 二〇〇三、六〇七頁、中村喜和・山下恒夫編『ロシア人名簿・各人物略歴』(同上) 六五〇頁。
- (14) 前掲注(4) 長谷川・喜多学会発表要旨。
- (15) 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、一九九九、一六〇～一六二頁。
- (16) クルウゼンシュテルン著・羽仁五郎訳註『クルウゼンシュテルン日本紀行 上巻(異国叢書、復刻版)』雄松堂書店、一九六六、三三二～三三三頁。
- (17) Borovobov, op. cit., p. 165; 前掲注(5) ボゴリユボフ論文' 八頁。ジーンズについての前掲注(2) 伊藤論文' 二四〇二九頁。
- (18) Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, *Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae*, t. 8, Typis Academiae Scientiarum, Petropolis, 1794 [1790 年版], p. 21.
- (19) *Ibid.*, p. 21. 最初の引用は Lagus, W., *Erik Laxman, hans lefnad, rezer, forskningar och brevtyckning*, Finska Litteratur-sällskapets tryckeri, Helsinki, 1880, p. 199. など。同書 p. 223 は誤って「四月二十日」と引用したため、後の文献ものの日付を引用したようである。
- (20) 前掲注(1) 桂川著・亀井校訂、四七～五〇頁。
- (21) M 2 の製作年月については、画像を入手し検討された Dorofeeva-Lichmann 博士の学会報告を参照した。Dorofeeva-Lichmann, V., "Cartographic journey of a drift away sailor: maps of Japan by Daikokuya Kodayū 大黒屋光太夫 (1751–1828)," Paper presented at the International Workshop, "Cartographic materials from pre-modern East Asia and approaches to their analysis," National Tsing-Hua University, Taiwan, 24 December 2020.
- (22) Papiemh, K. A., "Matthew Guthrie—The forgotten student of 18th century Russia," *Canadian Slavonic Papers*, 11, Montreal, 1969, pp. 167–181.
- (23) Mitchison, R., "Anderson, James (1739–1808)," in *Oxford Dictionary of National Biography* (online ed.), Oxford University Press, Oxford, 2004, doi: 10.1093/refodnb/475. アンダーソンは知的好奇心を持つ様々な読者層を対象に『ティンバラで週刊誌 *The Bee* (1790–1794) を発行した。
- (24) Arcticus, "Literary News from Russia," May 16, 1792, in Anderson, J., (ed.) *The Bee or Literary Weekly Intelligencer*, v. 9, Edinburgh, 1792, pp. 58–63. など。島田孝

- 右編『日英交流史近世書誌年表』ユーリカ・プレス、二〇〇五、二五七頁から、*The Bee* の光太夫の記事について知った。
- (25) 光太夫らが漂着したアムチトカ島はアリユーション列島のラット諸島に属する。現在の地理区分では、フォックス諸島は同じアリユーション列島であるが、ラット諸島とは別の諸島群である。木内信藏ほか日本語版監修『ブリタニカ国際地図』TBSブリタニカ、一九九三、一七〇～一七一頁。
- (26) Lesseps, J.-B. *Journal historique du voyage de M. de Lesseps, consul de France, employé dans l'expédition de M. le comte de la Prouse, en qualité d'interprète du Roi; depuis l'instant où il a quitté les frégates Françaises au Port Saint-Pierre & Saint-Paul du Kamtschatka, jusqu'à son arrivée en France, le 17 octobre 1788*. 1790. 1^{re} partie, pp. 205-211. 山下恒夫「資料紹介バルテレンシー・レセップスの光太夫印象記」前掲注(13) 山下編、七五九～七六五頁。
- (27) 伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背景(下)——光太夫が記録を残した人々」『窓』八六、一九九三、一九～二二頁。
- (28) 前掲注(1) 桂川著・亀井校訂、五〇～五一頁。
- (29) 西村三郎『未知の生物を求めて——探検博物館に輝く三つの星』平凡社、一九八七、一七七～二六一頁。
- (30) 山下恒夫「資料紹介 駐露英国公使ウィットワースの報告書二通」(第二の報告書) (岩崎清訳) 前掲注(13) 山下編、七六九頁。
- (31) 同右「第一の報告書」七六六頁。
- (32) 前掲注(30) 山下編「第二の報告書」七六八頁。
- (33) 前掲注(1) 桂川著・亀井校訂、六二頁。
- (34) 前掲注(2) 伊藤論文、二六～二七頁。
- (35) 同右、二五～二六頁。
- (36) Borovodon, loc. cit., 前掲注(5) ボゴリユボフ論文、八頁。
- (37) Arcticus, op. cit., p. 60.
- (38) 亀井高孝『光太夫の悲恋』吉川弘文館、一九六七、二一～三三頁。
- (39) 海野一隆『地図に見る日本——倭国・ジパング・大日本』大修館書店、一九九九、一二八～一二九、一四四～一四五頁。
- (40) Hauser-Schäublin, B. and G. Krüger, op. cit., pp. 13, 28.
- (41) 西村三郎『文明のなかの博物学——西欧と日本(上)』紀伊國屋書店、一九九九、六三～六五頁。Gascoigne, J. *Joseph Banks and the English Enlightenment: useful knowledge and polite culture*. Cambridge University Press, Cambridge, 2003.
- (42) Dougherty, F. W. P. *The Correspondence of Johann Friedrich Blumenbach, v. IV: 1791-1795. Letters 645-965. Revised, Augmented and Edited by Norbert Klatt*. Norbert Klatt Verlag, Göttingen, 2012, pp. 346-350, Letter 869, n. 6. Elektronische Resource, ISBN 978-3-928312-33-2.
- (43) *Ibid.*, p. 347, Letter 869.
- (44) *Ibid.*, pp. 358-359, Letter 878.
- (45) Chambers, N. (ed.) *Scientific Correspondence of Sir Joseph Banks, 1765-1820*. Pickering & Chatto, London, 2007, v. 3, Letter No. 585, pp. 66-67; King, R. J. "The long wish'd for object — Opening the Trade to Japan, 1785-1795." *The Northern Mariner / Le marin du nord*, XX No. 1, January 2010, p. 9.
- (46) 石原あえか『近代測量史への旅——ゲート時代の自然景觀図から明治日本の三角測量まで』法政大学出版局、二〇一五、五三～九三頁。
- (47) Dougherty, F. W. P. *The Correspondence of Johann Friedrich Blumenbach, v. V: 1796-1800. Letters 966-1359. Revised, Augmented and Edited by Norbert Klatt*. Norbert Klatt Verlag, Göttingen, 2013, pp. 260-265, Letter 1154. Elektronische Resource, ISBN: 978-3-928312-35-6.
- (48) Zach (ed.) *Allgemeine Geographische Ephemeriden*. Verlage des Industrie-Comptoirs, Weimar, 1. Bd. (1798)-51. Bd. (1816).
- (49) Anderson, M. S. *Britain's discovery of Russia 1553-1815*. Macmillan, London, St

Martin's Press, New York, 1958, p. 201, n. 4.

- (50) Eton, W. Respecting some projects of the Russians on China and Japan. 2nd Paper, in *A survey of the Turkish empire*. T. Cadell, jun. and W. Davies, London, 1799, p. 512.
- (51) 木村和男『毛皮交易が創る世界——ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、二〇〇四、序章、第三章。
- (52) 同右、第三章。
- (53) クック著・増田義郎訳『クック太平洋探検5、第三回航海(上)』岩波文庫、二〇〇五、一一頁。
- (54) 木村和男『北太平洋の「発見」——毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版社、二〇〇七、第三章、五五〜六七頁。
- (55) 同右、第三章、七四〜八二頁。
- (56) 同右、第六章。
- (57) 横山伊徳『開国前夜の世界』吉川弘文館、二〇一三、二四頁。
- (58) 横山伊徳編『オランダ商館長のみた日本——ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、二〇〇五、二七七頁。
- (59) 平川新監修『ロシア史料にみる18〜19世紀の日露関係』第2集、東北大学東北アジア研究センター、二〇〇七、一六五〜一六六頁。
- (60) 前掲注(57) 横山著書、二四〜二五頁。
- (61) マカートニー著・坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫、一九七五。
- (62) Bevan, M. and B. Thymne, "A Prime Collection of Charts and Maps: The Grenville Collection (GREEN)," Royal Museums Greenwich blog, 26 March 2014. <<https://www.rmg.co.uk/discover/behind-the-scenes/blog/prime-collection-charts-and-maps-grenville-collection-gren>> (accessed 5 May 2021).
- (63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編『西洋人の描いた日本地図——ジパングからシーボルトまで』OAG・ドイツ東洋文化研究協会、一九九三。
- (64) 前掲注(57) 横山著書、八八頁。
- (65) Dalrymple, A., "Plan of the harbour of Nangasaky in Japan from an ancient MS. communicated in 1762. by Capt. Alexander Hume to whom this place is inscribed by his most obliged ADalrymple." 31 August 1788. <<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bv1b53069774n>> (accessed 5 May 2021); Cook, A. S., *Alexander Dalrymple (1737-1808), hydrographer to the East India Company and to the Admiralty as publisher: A catalogue of books and charts*. Vol. 3, *Catalogue B: Catalogue of Dalrymple's charts, views, plans and diagrams, Part 2: 1784-1794*, PhD Thesis, University of St. Andrews, St Andrews, 1993, p. 1337, B572. <<http://hdl.handle.net/10023/2634>> (accessed 5 May 2021); 前掲注(63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編図録、一三三〜一三七頁の地図中の長崎図。
- (66) Leupe, P. A., *Reize van Maarten Gerritz. Vries in 1643 naar het Noorden en Oosten van Japan*. Frederik Muller, Amsterdam, 1858. C・スハープ著・永積洋子訳『南部漂着記——南部山田浦漂着のオランダ船長コルネリス・スハープの日記』キリシタン文化研究会、一九七四。
- (67) 前掲注(15) 秋月著書、五〇〜六三頁。
- (68) 同右、一〇五〜一一一、一一六〜一一七、一二〇〜一二三頁。
- (69) David, A. (chief editor), *The charts & coastal views of Captain Cook's voyages*, v. 3, Hakluyt Society, 1997, pp. 232-237.
- (70) 前掲注(54) 木村著書、五三頁。
- (71) 小林忠雄編訳『ラペルーズ世界周航記 日本近海編』白水社、一九八八、四九〜一五五頁。
- (72) 同右、一八〇〜一八二頁。
- (73) 同右、一〇〜一四、一八五〜一八七頁。
- (74) Howay, F. W., *The journal of Captain James Cookt Aboard the Argonaut from April 26, 1789 to Nov. 3, 1791*. The Champlain Society, Toronto, 1940, pp. 242-249; 前掲注(57) 横山著書、一〜四頁。

- (75) Broughton, W. R., *A voyage of discovery to the North Pacific Ocean, in which the coast of Asia, from the lat. of 35° north to the lat. of 52° north, the island of the Izu, (commonly known under the name of the land of Jesso), the north, south, and east coasts of Japan, the Liuchienx and the adjacent isles as well as the coast of Corea, have been examined and surveyed, performed in His Majesty's sloop Providence, and her tender, in the years 1795, 1796, 1797, 1798.* T. Cadell and W. Davies, London, 1804. プロビデンス号は一七九七年五月十七日に珊瑚礁で座礁し、スクーナーでマカオに戻った後、乗組員を削減しスクーナーで再び日本の北方海域に向かった。
- (76) *Ibid.*, p. xii.
- (77) *Ibid.*, p. 380. なお、航海日誌やデータは、プロトーンが帰国するよりも前にイギリスに送られた可能性がある。
- (78) 前掲注(15) 秋月著書、一六〇〜一六二頁、VI・8図。この加藤肩吾自筆の「松前地図」(北海道大学附属図書館蔵)は、同大学附属図書館の北方資料データベースから閲覧可能。(<[https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hopoddb/record.cgi?id=0D0009000000000000](https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hopoddb/record.cgi?id=0D000900000000000)>) (accessed 18 August 2021).
- (79) 秋月俊幸「日本北辺の地図史から見た初期の日露関係」『ロシア研究』二五・一九九七、七〇頁、前掲注(15) 秋月著書、一六〇〜一六二頁。
- (80) アダム・ラクスマン著・中村喜和訳「日本来航日誌」前掲注(13) 山下編、四二九〜四三〇頁。
- (81) Postnikov, A. V., "Outline of the history of Russian cartography," in *Regions: a prism to view the Slavic-Eurasian world towards a discipline of "Regionalogy"* Proceedings of the Slavic Research Center of Hokkaido University summer symposium July 1998, Hokkaido, 2000, pp. 1-49. (<<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/98summer/98summer-contents.html>>) (accessed 18 August 2021); Map of Marnai Island [Hokkaido], p. 43, Fig. 36.
- (82) 前掲注(15) 秋月著書、二〇六〜二〇七頁、VII・9図。アメリカ議会図書館ホームページから画像閲覧可能。(<<https://www.loc.gov/resource/g223.mf000027/>>) (accessed 18 August 2021).
- (83) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註「二三三〜二三四頁。Krusenstern, A. J. von, *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Naushda und Neva unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine A. J. von Krusenstern*, Zweiter Th., Schnooschen Buchdruckerey, St. Petersburg, 1811, p. 31. Sinco (洲根子、今日の読み方はスネコ)は長久保赤水の日本図には含まれていない。
- (84) 馬場章「地図の書誌学——長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合」黒田日出男・メアリ・エリザベス・ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一、三八三〜四三〇頁、松井洋子・フランク・レクイン「テイティング・コレクションの長久保赤水『改正日本輿地路程全図』」『画像史料解析センター通信』四五、二〇〇九、小林茂・鳴海邦匡「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程」『地図』五六、二〇一八、小林茂・永用俊彦・鳴海邦匡・白井公宏・小野寺淳・立石尚之編『鎖国時代 海を渡った日本図』大阪大学出版会、二〇一九、鳴海邦匡・小林茂「近世日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用」『日本地理学会発表要旨集』セッションID: 八三五、二〇二〇、小林茂・鳴海邦匡「近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用——近年の成果をふまえた展望」『大阪観光大学研究論集』二二、二〇二二。
- (85) Boxer, C. R., *Jan Company in Japan 1600-1817*, Oxford University Press, Tokyo, London, New York, 1968, pp. 143-145.
- (86) 石山禎一・宮崎克則「シーボルトの生涯とその業績関係年表(一七九六〜一八三二年)」『西南学院大学国際文化論集』二六、二〇一一、一六九、二二二頁。

- (87) 前掲注(84) 馬場論文、四一七頁、前掲注(84) 松井・レクイン論文、六頁。
- (88) 前掲注(84) 松井・レクイン論文、四〇一頁。
- (89) 前掲注(84) 松井・レクイン論文、四頁。
- (90) シーボルト著・中井晶夫訳『日本』第一巻、雄松堂書店、一九七七、九五～九六頁、前掲注(84) 馬場論文、四〇八～四一〇頁。
- (91) Boxer, *op. cit.*, pp. 164–165.
- (92) Anonymous, “Interesting particulars relative to Japan, by M. Tisingh, late ambassador to the Emperors of China and Japan,” *The monthly magazine, or, British register*, R. Philips, London, 1800, v. 9, p. 217–221; 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、二頁。
- (93) Postnikov, *op. cit.*, pp. 44–45.
- (94) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、前掲注(84) 鳴海・小林学会発表要旨、二〇二〇、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇二一。
- (95) 前掲注(84) 小林ら編著、二二頁、図五・一、新蔵・善六訳「日本国の一般図」一八〇九、エストニア国立公文書館蔵。なおエストニア国立公文書館のホームページで利用者登録後にデジタル画像閲覧が可能。
https://www.rae.ee/dgs/_purl.php?shc=EAA.1414.2.43.51 (accessed 18 August 2021).
- (96) Krusenstern, I. F., *Recueil de mémoires hydrographiques pour servir d'analyse et d'explication a l'Atlas de l'Océan Pacifique*. De l'imprimerie du département de l'instruction publique, Saint-Petersbourg, 1827, pp. 130–131.
- (97) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁。
- (98) Broughton, *op. cit.*, pp. 100–101.
- (99) Broughton, *op. cit.*, p. 272; 氏家彦和・氏家野富美「鎖国下における北方外交の一断面——ブロートンの室蘭来航」『公民論集』三、一九九五、五六頁。
- (100) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁。
- (101) Авт.-сост. М. Ф. Харпанович, М. В. Харпанович, Отв. реда. Н. П. Копанева, Ю. К. Чистов, *Летопись Куштыкмыссы. 1714–1836*, СПб.: МАЭ РАН, 2014, 408–409 c. [Author-comp. M. F. Kharpanovich, M. V. Kharpanovich, Ed. N. P. Kopanec, Yu. K. Chisov, *Chronicle of the Kurshkamen. 1714–1836*, St. Petersburg: MAE RAS, 2014, pp. 408–409.]
- (102) Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, *Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae*, t. 12, Typis Academiae Scientiarum, Petropolis, 1801 [1794 年版], pp. 25–28; 滝川祐子「ラクスメンの日本産魚類コレクション(一七九二～九三)——歴史背景とその意義」二〇二〇年度日本魚類学会年会(ウェブ大会)講演要旨、日本魚類学会、二〇二〇、四七頁、滝川祐子「ラクスメンが日本から持ち帰った生物標本(一七九二～一七九三)——種の同定と生物学史上の意義について」日本動物分類学会第五十六回大会(オンライン大会)プログラム、二〇二一、二六頁。
- (103) Авт.-сост. М. Ф. Харпанович, М. В. Харпанович, Отв. реда. Н. П. Копанева, Ю. К. Чистов, *op. cit.*, 409 c. [Author-comp. M. F. Kharpanovich, M. V. Kharpanovich, Ed. N. P. Kopanec, Yu. K. Chisov, *op. cit.*, p. 409.]
- (104) Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, t. 12, *op. cit.*, pp. 36–38.
- (105) I. F. Крустерн от Сен-Пetersburg от N. P. Ропанева от Сен-Пetersburg. 日本西岸地域とサハリンの記述について。平川新監修『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第1集、東北大学東北アジア研究センター、二〇〇四、一一五～一二六頁。
- (106) 前掲注(46) 石原著書、一七八～一八〇頁。
- (107) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註、二九三頁。
- (108) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註、六四頁。
- (109) 科学アカデミー会議事録より。N. P. Резерновをアカデミー名誉会員に任命することについて。前掲注(105) 平川監修、六二頁。

- (110) A・A・キリチエンコ著・伊賀上菜穂訳「海賊船ユノナ号とアヴォシ号——ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』六、二〇〇二。
- (111) 同右、キリチエンコ著・伊賀上訳論文、九八頁、平川新監修『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第5集、東北大学東北アジア研究センター、二〇一〇、一三八頁。
- (112) 中川五郎治「五郎治申上荒増」秋月俊幸翻刻・解説『北方史料集成』第五卷、北海道出版企画センター、一九九四、四九五～五六三頁。
- (113) 同右、中川五郎治、五三九頁、大島幹雄『魯西亜から来た日本人——漂流民善六物語』廣済堂出版、一九九六、一七〇～一七一頁、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五～六頁、前掲注(84) 小林ら編著、五八～五九頁。
- (114) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁、前掲注(84) 小林ら編著、五八頁。
- (115) 中村拓「赤水図の欧州における評価」『地理』一三、一九六八、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、前掲注(84) 小林ら編著、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇二一。
- (116) 前掲注(63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編、一三二～一四四頁、前掲注(1) 亀井著書、一九四～一九六頁。
- (117) 大場惟景編「亜魯齊亜漂流民記聞」前掲注(13) 山下編、一八八頁。
- (118)

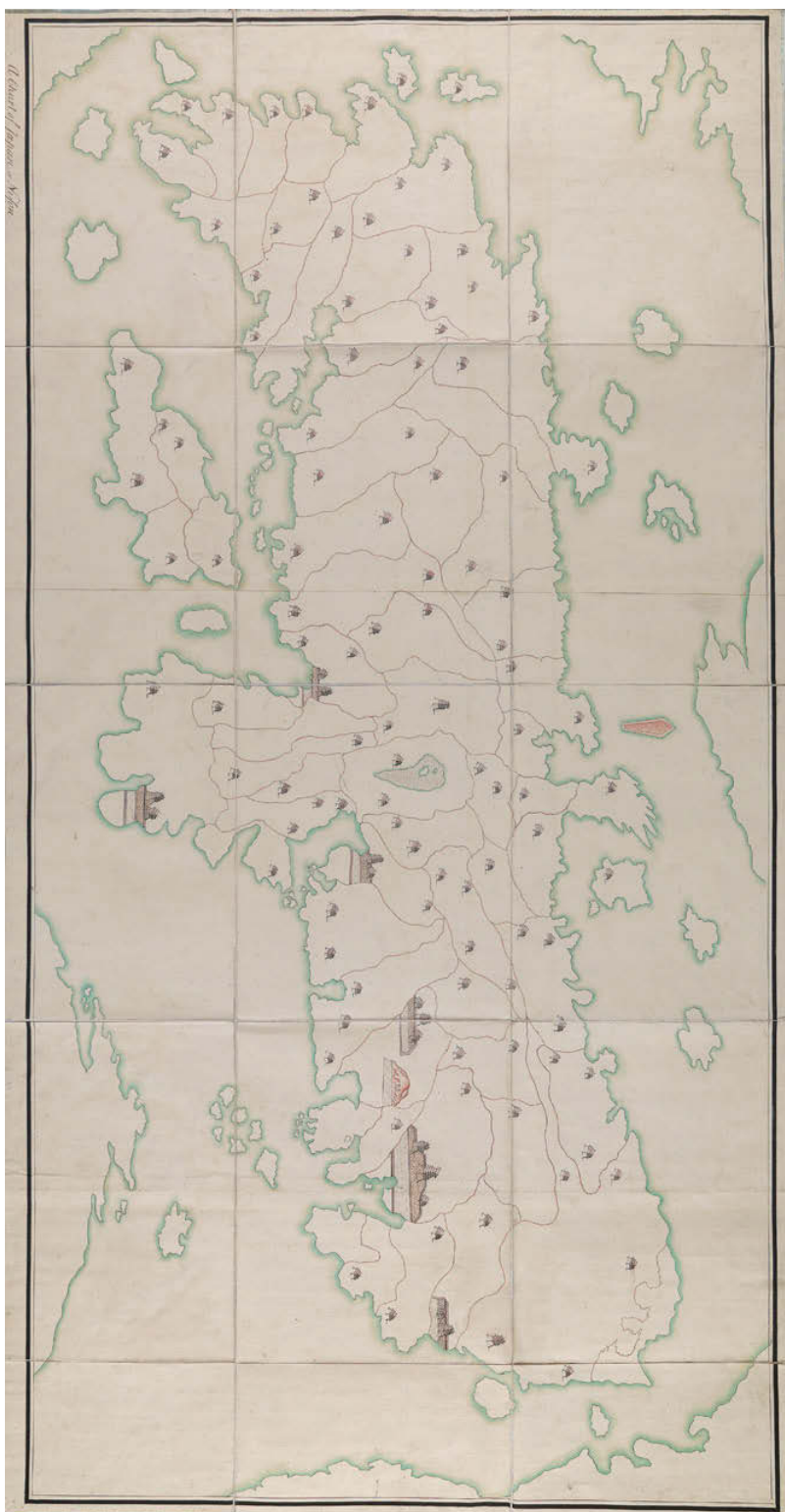


図1 英国海事博物館アーヴ図書館所蔵の大黒屋光太夫日本図の写し (GREN1/5)
©National Maritime Museum, Greenwich, London, Caird Collection.



図2 ゲッティンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 284
©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 284.



図 3 ゲッティンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 285
©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 285.



図4 ゲッテンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 286
©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 286.

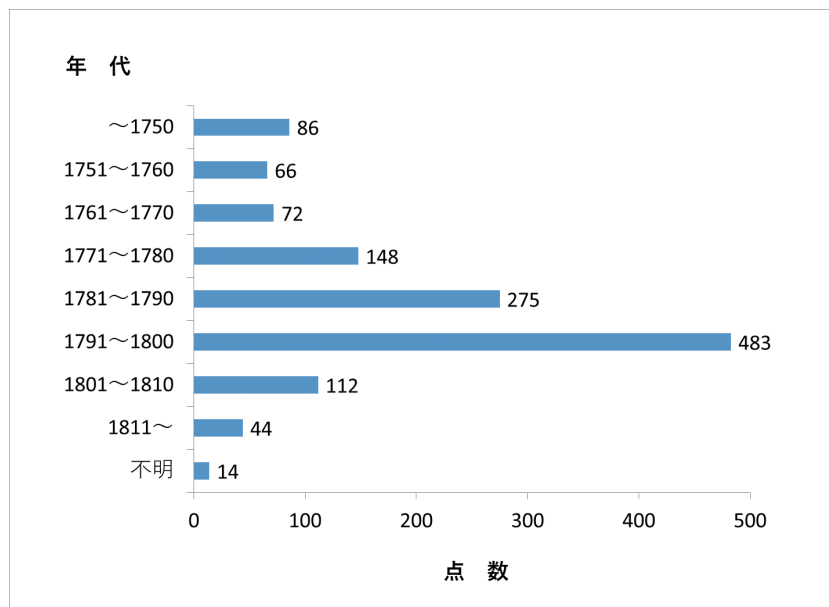


図5 グレンヴィル・コレクションを構成する海図・地図の出版・作成年代
英国海事博物館ケアード図書館のオンライン・カタログより作成。再版、改訂版等の場合はその出版年をデータとして利用した。

表 1 大黒屋光太夫自筆の日本図とその写しの比較

所蔵機関	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	エストニア国立 公文書館 (エストニア)	エルミタージュ 美術館 (ロシア、サンク トペテルズルク)	国立海事博物館 クアード図書館 (イギリス、ロン ドン、グロニッツ)
資料略称	G1 (図2)	G2 (図3)	G3 (図4)	M1	M2	E	H	L (図1)
登録番号	Cod. Ms. Asch 284	Cod. Ms. Asch 285	Cod. Ms. Asch 286	Φ. 45I, N° 18	Φ. 45I, N° 19	FAA.1414.2.43 1cht 64	不明	GRENI/5
寸法 (cm) *料紙 **枠外側	65.6 × 126.5* 64.6 × 125.8**	64.6 × 137.2* 62.2 × 121.2**	65.4 × 124.0* 61.8 × 120.0**	62 × 126	60 × 120	72.6 × 148.4	74.5 × 148	65.0 × 123.5
作者、印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 手書□○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	ライットワースに よる写し
作成年 [作成地]	天明9 (1789) 年 7月28日 [イルクーツク]	天明11 (1791) 年 3月下旬 [サンクトペテル ズルク]	天明11 (1791) 年 3月吉日 [サンクトペテル ズルク]	天明11 (1791) 年 3月下旬 [サンクトペテル ズルク]	天明11 (1791) 年 4月 [サンクトペテル ズルク]	天明11 (1791) 年 3月上旬 [サンクトペテル ズルク]	天明11 (1791) 年 (月不明) [サンクトペテル ズルク]	1793年2月7日以前 (カタログ情報は 1790年) [サンクトペテル ズルク]
文献	奥平 (1932) 亀井 (1992) 伊藤 (1993・上) 岩井 (1994)			川上 (1989, 2011) 岩井 (2001) Dorofeeva-Lichmann (2020)		長谷川・喜多 (2003)	Bogolyubov (2014) ホコリェボフ (2016)	本稿
枠	朱赤	朱赤	朱赤	朱赤	黒	薄赤、外黄	色不明	黒
枠の朱丸	あり	なし	なし	なし	あり	あり	あり、色不明	なし
方位記号 色/枠の色	赤/赤	赤/黄	赤/黄	赤/赤?	黒/赤	なし	あり (色不明)	赤/薄黄
国境線	赤と緑が重なる	黄	黄	赤	黄、橙、赤、青、 緑	黄	色不明	赤 (赤茶)
津軽/方外ノ浜	緑色、 陸地と区別	黄色、 陸地と区別	黄色、 陸地と区別	色なし 陸地と同じ	黄色、 陸地と区別	色なし、 陸地と区別	色不明、 陸地と区別	色なし、 陸地と同じ
富士山西側小峰	あり (極小)	あり	あり	なし	あり	あり	あり (極小)	なし
富士山の位置	駿府城の北	駿府城の南東、湖 南東端が相模に接 する	駿府城の南東、湖 南東端が相模のみ に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模のみに 接する	駿府城の南東、湖 南東端が伊豆に接 する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する

所蔵機関	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	エストニア国立 公文書館 (エストニア)	エルミタージュ 美術館 (ロシア、サンクトペテルブルク)	国立海事博物館 クアード図書館 (イギリス、ロンドン、グリニッジ)
資料略称	G1 (図2)	G2 (図3)	G3 (図4)	M1	M2	E	H	L (図1)
江戸城と石垣	天守1、櫓3 側面図	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓3 側面図	天守1、櫓2 石垣上部山状の側面図	天守1、櫓2 石垣上部山状底辺段差	天守1、櫓2 奥行感あり
江戸城堀と 湾の位置	東のみ接する	中央部接する	中央部湾が入る	中央部湾が入る	接しない	中央部湾が少し入る	中央部接する	中央部湾が入る
水戸城と太平洋	接する	接する	接する	接する	接しない	接する	接する	接する
水戸城	西	西	東	東	櫓と同じ、高さ差なし	西	西	東
天守閣の位置								
大坂城	西	東	東	東	西	東	東	東
天守閣の位置								
紀伊和歌山城	東	東	西	西	西 (差なし)	西	西	西
天守閣の位置								
尾張名古屋城	東	西	西	西	西	西	西	西
天守閣の位置								
仙台西側櫓	なし	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし
琵琶湖の 竹生島の形、 北側の小島	波形 北小島なし	波形 北小島有	円形 北小島有	不明 北小島有	不明 北小島有	波形 北小島有	不明 北小島有	波形 北小島有
丹波福知山城	あり	あり	あり	なし	あり	あり	あり	あり
上野、下野の 境界線、出羽へ 延長	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし	なし
四国の東側 南北線	なし	あり (折目)	なし	なし	なし	なし	なし	あり

Lと同じ特徴を持つ項目をグレーで示した。

表2 西欧人による大黒屋光太夫の日本図についての記録

史料の種類	史料タイトル、項目名、 差出人/受領人	日付（差出/受領、出版日）、 地名、出版地など	内容	所蔵機関/出典 （※本文の脚注no.）
雑誌	<i>The Bee</i> 、ロシアからの文芸ニュース、 “Arcticus” [ガスリ] から <i>The Bee</i> の編 集者 [アンダーソン] 宛	1792年5月16日号 v.9, pp. 59-60. 出版地：エディンバラ	日本の商人コードについての人物像、海図 作成に従事する様子を描写。（本稿に和訳掲 載）	<i>The Bee</i> （※24）
書簡	ウイットワースからグレンザイル宛	1793年2月7日サンクトペテルブルク から送付 [ロンボンへ、受領日不明]	日本島の非常に興味深い海図 [＝図1] を送 付することについて。（本稿に和訳掲載）	英国公文書館 E.O. 65/24
手稿目録	ゲッチンゲン王立学術博物館へ [寄贈する] 地図と手稿図の目録、 アッシュからハイネ宛	1793年4月3/14日 [旧暦/新暦] アッ シュ、サンクトペテルブルクから送 付 1793年6月22日受領 [ハイネ、ゲッ チンゲンでの受領日]	35. 日本語の文字で記入された日本地図。[＝ Asch 286、図4] 36. ロシア語と日本語の文字で記入された日 本地図。[＝Asch 285、図3] [35. と 36. を括り注記] 1791年にサンクトペ テルブルクで日本人ドイコクヤ [マツ] に よって描かれ着色された。	ゲッチンゲン大学図書 館 Cod. Ms. Asch 1 : 2 (1793/99), 12r
雑誌	ロシアからの文芸ニュース、 “Arcticus” [ガスリ] から <i>The Bee</i> の編 集者 [アンダーソン] 宛	1793年5月15日号 v.15, p. 70 出版地：エディンバラ	日本の海図：「日本の海図がどこにあるか発 見、編集者のためにコピーを入手した。」編 集者は海図が到着したら印刷し出版する、 と記す。	<i>The Bee</i>
雑誌	ロシアからの文芸ニュース、 “Arcticus” [ガスリ] から <i>The Bee</i> の編 集者 [アンダーソン] 宛のまとめ	1793年7月3日号 v.15, p. 331 出版地：エディンバラ	編集者は、光太夫が所持していた海図から 描いた日本地図がまだ出版されていないこ とに言及。	<i>The Bee</i>
手稿目録	ゲッチンゲン王立学術博物館へ [寄贈する] 地図と海図の目録 アッシュからハイネ宛	1794年5月22日 / 6月2日 [旧暦/新 暦] アッシュ、サンクトペテルブル クから送付 1794年7月14日受領 [ハイネ、ゲッ チンゲンでの受領日]	8. 日本の地図。手書き、イルクーツクから 受け取った。[＝Asch 284、図2]	ゲッチンゲン大学図書 館 Cod. Ms. Asch 1 : 2 (1793/99), 42r, 43r

史料の種類	史料タイトル、項目名、 差出人 / 受領人	日付（差出 / 受領、出版日）、 地名、出版地など	内容	所蔵機関 / 出典 （※本文の脚注no.）
書簡	ズルーマンバッハからバンクス宛	1794年9月24日ゲッツチンゲンからロ ンドン [到着 1794年11月14日以前]	最近図書館に送付された大型の日本の海図 について。日本の文字で印刷「マヤ」され、 手書きのロシア語による説明書き有。[＝ Asch 284]（本稿に和訳掲載）	Letter 869（※42）
雑誌	ペテルズルク・ロシア帝国科学アカ デミー新会報第8巻1790年版	1790年5月17日の事項、p. 21 1794年発行 出版地：サンクトペテルズルク	1790年3月20日付、イルクーツクのラクス マソンの手紙と、大黒屋光太夫が描いた 日本の地図を受領したことを報告。（本稿に 和訳掲載）	<i>Nova Acta</i> , t. 8, 1794 （※18）
雑誌	ツァッハ編 『天文地理学雑誌』 書評欄	1798年5月号 p. 561 出版地：ワイマール	<i>Nova Acta</i> , t. 8, 1794の1790年5月17日 の 事 項、光太夫日本図に関する部分をドイツ語 に訳し転載。	<i>AGE</i> ,（※48） vol. 1, no. 5, May 1798
書簡	ツァッハからズルーマンバッハ宛	1798年5月22、27日、ゴータからゲッ チンゲンへ	日本 [図に関する寄稿] と地図 [複製?] を送って下さったら、非常に嬉しい。ラペ ルーズの海図と批判的に比較し、『天文地理 学雑誌』に縮小版複製を掲載可能と述べる。	Letter II:54（※47）
書籍	イートン著 『トルコ帝国概説』	1799年出版、p. 512 出版地：ロンドン	種々の添付書類の欄、ロシア人による中国 と日本に関する計画について。難破した日 本の船長が日本沿岸の海図を所持しており、 それがヨーロッパで作成されたものと幾分 異なっていたと記述。	Eton (1799)（※50）
書籍	Krusensiem, <i>Reise um die Welt</i> クルウゼンシュテルン著 『クルウゼンシュテルン日本紀行』	ドイツ語版第2巻 pp. 30-31 (1811 年) 出版地：サンクトペテルズルク (邦訳 上巻 pp. 332-333、1966 年)	光太夫が所持し、ロシアに残した日本の海 図について。	Krusensiem (1811) （※83） クルウゼンシュテルン (1966)（※16）

表 3 日本沿岸の測量を伴う航海

期間 (西暦) (日本近海通過時)	指揮官 (国名) 艦名	出版年 出版地	出版物	日本近海の実測地
1643 (1643.5.19 八丈島付近、同年6月～9月)に日本北辺地域)	フリース (蘭) カストリウム号 (アレスケンス号)	手稿海図 1858 アムステルダム	ヤンソニウス (1650) 以降の西欧地図に影響 航海記 (Lampe, 1858)	北海道東部太平洋側、エトロフ島、ウルツツ島、サハリン島南部
1738～1739 (1739.6～7)	シュパンベルグ (露) (第2次ペーリントン探検隊の別動隊・元文の黒船) ボリシェレンツク号他3隻	ロシア科学アカデミー『ロシア帝国地図帳』(サンクトペテルブルク、1745)の「ロシア帝国全図」に反映		千島列島から仙台湾へ至る海域、南千島諸島、北海道東部
1776～1780 (1779.10.26～11.15)	クック (第3回航海) (英) レソリュション号 デイスカバリー号	1784.6 ロンドン	航海記	東北地方から房総半島までの太平洋沿岸；硫黄島周辺。
1785～1788 ボタニー湾出航以降遭難 (1787.5.5 与那国島～日本海～タタール海峡付近～宗谷海峡～同年8.19 エトロフ沖)	ラペルーズ (仏) ゾノール号 アストロラーベ号	1797 パリ	航海記 アトラス	与那国島、魚釣島、能登半島、(沿海地方沿岸～間宮海峡付近～サハリン島西部)、宗谷海峡「ラペルーズ海峡」、(ゾノール水道通過)
1789.4～1791.11 (1789.5 下旬 トカラ列島～八丈島付近) (1791.8 北九州から島根沿岸)	コルネット (船長) (英) アムゴノート号 (私貿易船)	手稿海図 1940 トロント	アロースミス (1811) に航跡反映 航海記 (Howay, 1940) に手稿海図掲載	豊岐、玄界灘～島根までの日本海沿岸
1792.9～1793.9 (1792.10～1793.8 蝦夷滞在)	ラクスラン (露) エカテリーナ号	手稿海図 1880 ヘルシンキ	クルーゼンシュテルンのアトラスに一部反映 伝記 (Lagus, 1880) に地図2点掲載	根室、厚岸、根室から厚岸、函館から松前
1795.2～1798 (1回目1796.9～1796.12.2回目「沖繩で座礁、マカオから再出発」1797.7 琉球～同年9.7 蝦夷北端)	プロートン (英) アロビデンス号 小型スクーナー船	1804 ロンドン	航海記	絵鞆 (室蘭)、千島列島、八丈島、琉球、宮古島；琉球、本州太平洋側、絵鞆、津軽海峡 (～間宮海峡付近)
1803～1806 (1804.9～1805.4 長崎滞在； ～日本海北上～蝦夷北端 1805.5)	クルーゼンシュテルン (露) ナジエージダ号	露語：本文1809-1812、アトラス1813；独語：本文1810-1812、露独語アトラス1814、いすれもサンクトペテルブルク	航海記 アトラス	四国から長崎までの岬・島、長崎の水路、日本海側の本州北部、蝦夷西海岸から宗谷海峡 (～サハリン東岸)

主に秋月 (1999)、OAG・ドイツ東洋文化研究協会編 (1993) を参照し、各航海記、文献を基に作成。

柳田國男の戦時言説としての氏神合同論

由谷裕哉

一 問題の所在

本稿は、柳田國男（一八七五—一九六二）が、著書『日本の祭』（一九四二年）や『神道と民俗学』（一九四三年）で主張し始めた氏神に関する独自の捉え方を氏神合同論と仮称し、彼の戦時言説の一環として考察する。

柳田によれば氏神とは本来は氏の神であつたが、実際には異姓の家が共同して祀っていることが少なくない。この矛盾を説明するために彼は、氏神が合同または合併した、もしくは統一された、という歴史的経緯があつたと主張する。この経緯は帰納的な手順によらずに提起され、上記二書その他、占領期を含む一九四〇年代

のその他の著述や講演録（一九四七年の『氏神と氏子』辺りまで）において、しばしば見受けられるロジックとなつている。

筆者が柳田のこの議論に焦点を当てるのは、一つには戦時体制との関わり、つまり柳田の戦争協力の姿勢との関わりという観点からであり、いま一つは柳田のテキストを具体的な民俗事象との照応をほぼ気にせずに思想として読もうとする立場、いわゆる柳田研究がこのロジックを等閑視していることに対する不信感がある。

前者（柳田の戦争協力）についてこれまでリベラルな柳田研究者は、むしろ戦時下においても彼は時局に抵抗する視点を持つて著作活動が続けた、という趣旨の主張を行ってきた^[1]。それに対して筆者は、柳田の戦争に協力的な言説をいくつか取り上げ、彼の神

祇祭祀論との関わりを考察したことがあった。⁽²⁾ 本稿は、そうした柳田の戦時協力の姿勢が、前稿の祭祀論とは少し視点を替え、彼の祭神論としての氏神合同論（以下、「仮称」を割愛する）とどう関係していたのかを、より具体的に問いたい。

後者（柳田研究における等閑視）については、管見の及ぶ限り、氏神合同に焦点を当てた柳田研究は見られない。そもそも、特定の柳田のテキストにおける氏神論もしくは神社論を専一に考察対象とした柳田研究そのものが、ほぼ存在しなかったと考えられる。⁽³⁾ とはいえ、この氏神合同という問題がこれまで全く注目されてこなかった訳ではない。

というのも、民俗学プロパーの研究者ではないが、南島で宗教文化の調査を行ってきた住谷一彦が、『日本の意識』（岩波書店、一九八二年）でこの問題に触れていたからである。

住谷の議論によれば、柳田は敗戦直後の『先祖の話』（一九四六年）で祖霊信仰論を提起したが（上記書、二〇八頁）、それは「各人の家のレヴェルにとどまり」（二一〇頁）、日本社会でもつ普遍性に至っていなかったとする。柳田はその後の『氏神と氏子』（一九四七年）において、「民族統一の未来」（二二二頁）のため、「殆ど自然に成長したもの」（同頁）である氏神思想に注目し、それを三つ（村氏神・屋鋪氏神・一門氏神）に分類した。このうち、第一、二種の形態においては多くの異姓の家が共同して一つの氏

神を祀っており、そこをどう説明するかが「ここがロードス島だ、ここで跳べ」に相当する、と云う（二一四頁）。これについて柳田は「一門氏神」から「村氏神」および「屋鋪氏神」が成立する契機を七つあげ、それによつて「村氏神」＝祖霊祭祀の学説を「單純なたちで定式化」した（二一六頁）、とされる。

以上の住谷の立論には柳田の引用以外で「氏神合同」という表現は出て来ないが、柳田が全三〇パートからなる『氏神と氏子』の同題の巻頭論文で、住谷の云う「契機を七つあげて」（住谷著書、二二四頁）いるのがパート一六の「氏神の合同」なのである。⁽⁵⁾

本稿は、ここでの仮称である氏神合同論が、住谷が位置づけたように敗戦後の『先祖の話』で提唱された「祖霊信仰論」を踏まえ、柳田が（住谷の云うように）ロードス島で跳ぼうとして『氏神と氏子』において見出した議論ではなく、その数年前から戦時体制における時局との応答の結果として彼が導いたのではないか、という解釈を提起し、その妥当性を問う。

本稿で行う手法は、柳田の個々のテキストをその文脈において読解することを起点とする。これは、柳田の言説を（いわゆる柳田研究のように）現実との対応が問題とされない思想として読解するのではなく、彼の個々のテキストが日本における宗教文化と対応しており、その考察にとつて何らかの意義を持つという期待に基づいている。それを踏まえ、本稿では以下、彼の戦時体制への対

応に伴う氏神観の経年的な変化を追跡してゆきたい。

二 一九三〇年代における柳田國男の氏神イコール祖霊 説とその問い直し

本節では、次節で柳田の戦時言説として本稿で云う氏神合同論を検討する前史として、一九三〇年代における彼の氏神観、とくに氏神の実態を祖霊と見る捉え方（仮称として、氏神イコール祖霊説）が登場してきたことの周辺を扱う。

（1）氏神イコール祖霊説の始まり

上記のように管見の及ぶ限り、柳田のとくに戦前の著述物で論じられた氏神もしくは神社で祀られる神の実態を専一に扱った先行研究が無い^⑥ため、ここで云う氏神イコール祖霊説の始まりについて研究は乏しい^⑦。

しかし、柳田國男の祖霊概念に関して一九七四年（昭和四九）に小川直之が、『定本柳田國男集』の中から祖霊および類似する語（祖神・御霊など）を抽出していた^⑧。そのうち初期に当たる柳田の著書・論文は、発表順に「丹波市記」、「年棚を中心として」、「葬制の沿革について」、「昔話新釈」、「明治大正史世相編」、「厄介及び居候」、「地梨と精霊」、そして「食物と心臓」とされていた。小

川のこの分析を是とすれば、以上の八論のうち、明確に神社ないし氏神と祖霊との関わりが問題とされる柳田の論の始まりは、一九三二年（昭和七）の「食物と心臓」^⑨となる。

同論は、郷土研究のあり方として一国民俗学を提唱し、従前の「飴で子供を釣る嫌ひが無いでも無かつた」郷土教育を批判してゆく。その代案として、同種の民俗資料を各地において比較することが重要であり、とくに民俗資料分類のうち口碑や伝説などは既に多く集められており、将来は道徳や信仰に進みたいとする。

ここまでが全八パートのうち四までで、五でようやく「食物と心臓」なる標題が提示され、その例として餅に関わる俚語歌謡^⑩では不足で、村々の社の由緒と季節の祭に重きを置きたい、などとする。以上の議論を踏まえて、六で次の引用のように氏神（神社）イコール祖霊説が展開される。

日本人の家を大切に思ふ永い間の習性、それと因縁の存するらしい農国本の格言は、一たび産土神氏神の今ある信仰を省察して見れば、少なくとも其片端は之を理解できると思ふ。神社はその上下大小を通じて、曾ては祖霊の信仰と不可分な時代があつた。後々推移を経て他処の大神を迎へ祀るやうになつても、尚その主神と住民との中間に、後者の先祖の神を介在せしめて居る例は至つて多い。祖霊の干与せざる一郷の

禍福といふものは無かつたらしいのである。¹⁰⁾

この引用に続いて、中世に引導という風習が始まったことにより盆と正月の機能が分かれ、神社もこの二つから離れたとされる。以下に続く餅に関わる考察は、この正月および盆（生御玉）との関わりで引き合いに出されている。

以上のように「食物と心臓」においては、餅と正月および盆の習俗との関連付けが傍証のように立論されているとはいえ、本稿が関心を寄せる神社ないし氏神と祖霊との関係は、帰納的な手順を全く踏まずに唐突に同じものだと断言されていることが分かる。

（2）一九三〇年代半ば——通称・山村調査における氏神

このように「食物と心臓」で初めて提唱されたと考えられる氏神イコール祖霊説は、その二年後に当たる一九三四年（昭和九）から三年度行われた通称・山村調査によって検証が試みられた、というのが筆者の見立てである。筆者は、旧稿においてこの山村調査を、そうした理論検証型の調査だったと解釈したことがある。¹¹⁾

この山村調査とは、柳田が主宰する郷土生活研究所が日本学術振興会より三年間の助成を受けて執行した調査のことで、正式名称は「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」であり、調査者は主に柳田の門下生たちであった。以下、筆者の旧稿を踏

まえ、柳田の一九三〇年代半ばにおける氏神観という観点から概要する。

当該調査は、各県一箇村以上を目安に延べ五二村を調査対象村とした。年度によって微妙に変化があつたものの、単年度においては同一の一〇〇項目からなる調査票に基づいた調査であつた。その索引項目および質問文例¹²⁾を見る限り、詳細は割愛するが、氏神関連の項目（氏子や同族神、祭祀組織としての宮座などを含む）が一〇〇項目中一〇項目以上あり、比較的多いと思える。

それでは、以上の質問項目について調査報告書はどうだったのか。初年度と第二年度については調査者が小論考を纏めるスタイルであり、¹³⁾それらについて検討した筆者の旧稿の通り、氏神あるいは神社に関して踏み込んだ考察はなされなかった。

三年度におよぶ調査全体の最終報告書として一九三七年（昭和一二）に出された『山村生活の研究』¹⁴⁾は、一〇〇項目を統合した計六五項目についての一種のデータ集的なもので、個々の報告は短い。その六五項目のうち、氏神関連の質問項目に対応するのは、四三先祖祭、四四同族神、四五屋敷神（以上、杉浦健一）、四七氏神と禁忌、四九祭前の慎み、五〇神社・神田の管理、五一神事の座席、五二氏神参りの帰村（以上、大藤時彦）、五三山の神（倉田一郎）、五四神仏に祀られたもの（櫻田勝徳）、などであつた。

これらのうち、杉浦健一の言説は非本質主義・非進化主義に貫

かれており、神性や村祭について遡及的に何らかの古型を提示するようなものではなかった。¹⁵⁾ 対して大藤時彦は、五二「氏神参りの帰村」の冒頭で、「所謂血族神としての氏神が産土神としての鎮守神に移行した結果」（同書、四一二頁）のような予断から出発するように、帰納的な立論を行おうとしていない。大藤は五一「神事の座席」でも、「地域的と血族的の宮座とはどちらが本源的か或は両者は全然二つのものか」（四二一頁）と先験的な問いを立てるものの、調査結果からその答えを導き出せていない。

つまり、山村調査の質問項目においてそこそこの割合を占めていた氏神（含・同族神、宮座など）に関して、柳田がおそらく期待したように祖霊あるいは家や同族と関連づける成果はあがらなかった、と考えられる。柳田が最終報告書『山村生活の研究』に付した「山立と山臥」の冒頭に「我々の失望の記録を留めて置かう」（同書、五三八頁）と記した理由の一端は、このことに起因しているのではないだろうか。

（3）一九三〇年代半ば以降——原田敏明らの登場

ところが、上記「山村調査」が進行中だった一九三〇年代半ばに、柳田グループの民俗学以外にも日本の村落の調査に着手し始めた。既に筆者は、この時代における肥後和男グループの近江での宮座調査や、シカゴ大学のエンブリー夫妻による熊本県での集中

的な村落調査、井上頼寿による京都周辺の宮座調査、小田内通敏を指導者とした県範囲の総合郷土研究などについて概要していた。¹⁶⁾

それらの研究と並んで、氏神の位置づけという点で柳田國男および門下生たちによる山村調査と対立する見解を提起したのが、宗教学者の原田敏明であった。原田は、一九三六年（昭和一一）から宇野圓空グループ（他に古野清人）の一員として『本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究』なるテーマで有栖川宮記念奨学金を得て、村落の調査を始めていた。¹⁷⁾

この共同研究における原田の成果は、「信濃更級郡武水別八幡の農業神事」（『民族学研究』第三巻四号、一九三七年）、「氏神祭祀の組織について」（『日本諸学振興委員会研究報告』八哲学、一九四〇年）、「当屋に於ける氏神奉齋」（『帝国学士院紀事』第一巻一号、一九四二年）、という三論文であった。

筆者はこれら三者のうち、三番目の「当屋に於ける氏神奉齋」が柳田の『神道と民俗学』（明正堂書店、一九四三年）他の頭屋制論に影響を与えた可能性について、先に詳しく検討していた。¹⁸⁾ たしかに原田の上記論文は、「氏神奉齋」と題しながらも氏神祭祀のあり方だけでなく祭祀組織を緻密に検討する内容であり、柳田はそれを受けて自己の頭屋制論を形作ろうとしていたと考えられる。

それを遡る上記二番目の「氏神祭祀の組織について」は、比較的短い論考であるが、「組織」を題名に含みつつも、とくに前半は

氏神がどういう存在かを問うていた。すなわち、氏神が「地域的な性格」をもつて現れるとし、血族集団ではなく「土地に即した」ものであるとする。

一体我が国では古くから農業を営み、農業に依つて生活をして居つたと云ふことが其の特性を形造つて居ると云ふべきであります。是は上代の氏族とか或は一族とか、さう云ふ集団に於ても血族関係であると云ふ以上に又以外に地域的に集団を結合せしむるものであつたと云ふことが出来るやうに思ひます。随てさう云ふ集団の奉ずる所の氏神も、其の集団が血族的である与否とに拘らず地域的な性格を以て現はれて来るのであります。即ち氏神は土地に即したものでありまして、此の点に其の他の神々、神祇との差異もある訳であります。⁽¹⁹⁾

このことを踏まえ、「今日の氏神の祭祀は一定の地域集団の人々が其の生活様式から来る所の農業に係した祭を行つて居る⁽²⁰⁾」と祭祀論へ進み、そうした祭祀を行う特殊集団を宮座と呼ぶとする。宮座は近畿から西で使われる言葉だとされ、その例として近畿地方などでの一年神主の例が紹介される。そして専門の神職が神事に関わるようになり、村の神社は氏神のな性格を次第に失つてき

た、と結論づけている。

筆者は、本稿で主眼とする柳田の氏神合同論が、原田によるこうした氏神の捉え方の代案として提起された側面もあるのではないかと考えるのである。

三 一九四〇年代前半における柳田の氏神合同論

以上のように、山村調査に関する「失望」と原田敏明による新たな氏神論の登場を受けながらも、一九三〇年代後半から一九四〇年頃までの柳田は、いずれも以前から関心を寄せていた昔話を含むナラティブや方言の研究に傾注していたような印象がある。

とはいえ一九三〇年代後半には、一九三五年（昭和一〇）に始まる民間伝承の会（柳田の還暦を記念して日本青年館を会場に開催された日本民俗学講習会を契機として組織された研究団体⁽²¹⁾）の機関誌『民間伝承』に、戦局に積極的に協力してゆこうとする論調が見られるようになる。その代表的な言説として、先行研究において戸塚ひろみ⁽²⁴⁾、福田アジオ⁽²⁵⁾、川村邦光⁽²⁶⁾の三者が揃って取り上げている、一九三九年（昭和一四）三月刊の同誌第四巻六号の冒頭頁に掲載された倉田一郎「時局下の民俗学」を見ておこう。曰く、「昨日まで民俗学の将来を愉しさに語らつた青年」が「この激動期の時局

下」に民俗を研究しておられない、と言った由を冒頭に、「現在学としての民俗学の現代に於ける使命」を提起しようとする内容である。具体的に、「曾てのナチス独逸の植民政策に偉大なる知識として応用せられた独逸民俗学の光輝ある歴史」を回想することなどをあげている。

先行研究の三者とも「ナチス独逸」の語を含む先の引用符内を否定的な意味合いで引用していたように、この倉田の巻頭言には、ナチスに貢献した「独逸民俗学」に倣って積極的に戦局に貢献しようとする姿勢が表出している。それに比べて、柳田本人が戦争に関わる言説を公にするのは、もう少し後の一九四二年（昭和一九七）になつてからではないかと筆者は考えている。

（1）柳田國男の戦争協力に関わる言説の登場（一九四二年）

「新たな目標」…この点に関して先行研究においても注目されることがあるのは、『民間伝承』誌の体裁が第七巻までのタブロイド判からA5判に変わった第八巻の第一号（一九四二年五月）から始まった「巻頭言」に、柳田が執筆した「新たな目標」である。この巻頭言は、同年六月刊の第二号、七月刊の第三号にも同題同文で繰り返された。冒頭から中ほどまでは、以下のものであった。

今までこの雑誌が力を傾けて居たのは、主として地方文化

の消え去るものゝ保存、及び之を集録せんとする人々の相互援助であつた。ところが我々少数者の協同では、思ふやうに資料が集めに、く、是非とも外部の理解者を得なければならぬのと、一方には又時運が大いに改まらうとして、衣食生産の日常生活から、信仰芸術社交法等、あらゆる問題の未来を考究する必要が起り、それには一般民衆の前代生活に就てもつと盛んに民間伝承の知識を利用しなければならぬといふことを、認める人が多くなつて来た。この二つの刺戟から、今度いよいよこの雑誌の編輯ぶりを更へて、改めて世の中にまみえることになつたのである。⁽²⁸⁾

「時運が大いに改まらう」と柳田が書いたことについて福田アジオは、「一九四二年であるから、その内容を推察するのは容易であろう」としたうえで、「積極的に時の体制に迎合しようとしているのではない」が、「このような表明の積み重ねが結果として戦争協力」⁽²⁹⁾なつたとしている。確かにこれらの文言は、三年余り前の倉田一郎「時局下の民俗学」ほど直接的な表現ではないにせよ、民間伝承の調査研究が時局において求められてきたことを歓迎する姿勢を読み取ることが可能ではないだろうか。

「日本の母性」…一九四二年一二月の『週刊朝日』第四二巻二五号に掲載された。「この空前の大戦役に奉仕することによつて、始

めて国民の自覚し得たる尊といふものが幾つもある」と始まる、戦争協力の姿勢を明らかに示す記事である。内容は、いわゆる軍国の母を称讃することを意図していると考えられる。

先行研究において柘植信一は、一九四三年頃の市川房枝らによる戦争協力の一環として母性の意義を見出すといった、「積極的な戦争協力」を女性に要請する「無内容な言葉」の氾濫と比較して、柳田は「戦争によつて、これまで埋もれていた母の道が体験されるようになった」ことを描いている、と肯定的に解釈している³¹⁾。しかし、柳田は以下の引用のように、「軍国の母」の意義を立派な軍人を育てるところに見出していると考えられるので、柘植によるこの評価は当たらないであろう。

多くの軍国の母の言葉行ひを見て行くと、自ら前線に出て働くことは出来ないで、常に男性を透してその国家に対する志を行はうとした人々の、日ごろの心構へと思ひ遣りの中には、むしろ我々の経験を超えた、悲壮なものゝあつたことがわかるのである。³²⁾

国恩といふやうな言葉は一生涯口にもせず、またその必要もしばしば起こらなかつたけれども、これが人間最高の義理であつて、一朝危急の国に迫るものがあれば、命に換へても

その義理を立て貫くのが男だといふことを、いつの間か彼等は教へられ、また心の底に銘記してゐたのである。³³⁾

後者の引用は、教えたのが母、という文脈における一文である。以上二点、一九四二年における柳田の時局あるいは戦時体制に関わるテキストを参照した。「新たな目標」以前に類似内容の議論が無いと断言はできないが、上記二点はいずれも先行研究が注目していたものであるので、一九四二年を柳田の大戦との関わりにおいて分岐点になった時期と捉えておきたい。そして、本稿で問題とする氏神合同論は、筆者が現在確認できている限りではあるが、この年から主張されるようになった。

そこで以下に、柳田による信仰・神社研究においてこの年から敗戦までを代表する著作である『日本の祭』（一九四二年）と『神道と民俗学』（一九四三年）の二著作、柳田が戦時体制に積極的に貢献しようとする志向が顕著に表出している一九四三年七月の長野県東筑摩郡での講演録、およびそれら以外の論考について、時代順に各々における氏神合同論を概観する。

（２）『日本の祭』（一九四二年二月）

弘文堂書房より一九四二年一月に刊行された。同書が東京帝大の学生に対して前年（一九四一）秋に行つた連続講演の記録で

あつたことは、冒頭の「学生生活と祭」に示されている。全体が七の題目に分かたれるうち、最後の二つである「供物と神主」「参詣と参拝」は予定されていたものの講演されなかったことが、「自序」に出る。したがって、講演から刊行年の一九四二年末までの間に新たに書き足されたと考えられる。

講演されたうち、「祭から祭礼へ」「祭場の標示」「物忌と精進」「神幸と神態」では、柳田自身が「祭礼」と呼ぶような、氏子以外の参列者がある比較的大きな祭りを念頭において議論が進められていると思われる。したがって、氏神（神社で祭られる神、祭神）の実態を問う議論は見られない。

対して、講演されなかった二題目のうち最終「参詣と参拝」に、本稿で云う氏神合同論が提唱されている。この「参詣と参拝」は全一二パートからなり、『日本の祭』でも長めの論となっている。最初にお賽銭、オヒネリについて語られ、第四パート以降、生まれた土地の神と旅して訪れる地の神社という、内外の違いに移る。六では後者の参詣する神に対して、旅人が行うのが祈願だとされる。七では参詣が臨時の祭であるとすれば、その始まりを見ようという立論で、村民の一人が危篤に陥った際の祈願の例があげられる。その中で、次の引用のように「御社の合同」が人口増との関わりで説明される。

氏神が本来群の為の神様であつたことは言ふまでも無い。然るに時あつての個人の祈願、それも公共の支持し居るものだけで無く、単なる私の望みまでも聴き届けたまふものゝ如く、信じられるに至つたのは理由が無くてはならぬ。其一つには村の御社の合同、即ち幾つかの氏族が共々に、一つの神を氏神として齋くことになつたからで、人が多くなり生活が複雑になれば、たとへ利害はさう容易に抵触せぬまでも、個々の信心の深さ正しさの差によつて、神の恩寵もおのづから厚薄が有るやうに、考へ始めることは免れない。³⁴

八では「外の祭」に話が戻り、本地垂迹説なども新しい拝む神を承認しようとする態度の一つだとする。九・一〇では神を認める方法としてヌサが触れられ、一一ではヌサが官知の神社に増進されるのが官祭であつたとされ、村々の小さな氏神社でも公祭と名づける祭があつたことを導き、次の引用のように続く。

ところが世の中の進みにつれて、色々の変遷が此方面には起つた。一ばん大きなものは氏神の統一、幾つもの異なつた氏族が合同して一つの御社を祭らうとする申し合せで、是には有力なる一つの氏に従属してしまふものと、大よそ対等なる協力とがあつて、後者の場合には祭主役の輪番制、いはゆ

るマハリトウ（廻り頭）・一年神主など、いふものゝ規約が設けられた⁽³⁵⁾。

見られるように、引用の後半では祭主の輪番制が、「氏神の統一」と対応する祭祀組織上の段階とされている。議論は、この輪番制が頭人の不馴れにより、今日の神職制の前提となったことに進む。

一二は「民俗学の範囲外」として一種の補足がなされる。神祭の方式が離れた地域で一致しているとされ、「神が祖霊の力の融合であつたといふことは、私はほゞ疑つておらぬ」ことも述べられる。「世界に比類無き神国のマツリゴト」⁽³⁶⁾について、国民の精神文化が統一されている、などともされる。

以上のように、「参詣と参拝」はかなり雑多な内容が含まれている。その中で、七で提起される「御社の合同」は人口増に伴った現象であるとされ、一一での「氏神の統一」は、祭主の輪番と対応する歴史的段階における氏神のあり方を示す概念として提起されている。一二の末尾では戦時体制への協力の姿勢が表明されていると考えられるが、先に見てきた氏神合同論と「国民の精神文化」の「統一」とが密接に関連づけられているかどうかは、かなり微妙であろう。

(3) 『神道と民俗学』（一九四三年四月）

神社精神文化研究所での一九四一年七月の講演を、やや時間を経て一九四三年（昭和一八）四月に刊行した書で、講演の「筆記に手を入れた」、と柳田は書いている。「今度の大戦役は稀有の機会」（新しい『柳田國男全集』第一四巻の五八頁、以下引用には同巻の頁数を示す）のように連合国への開戦後と思われる文言が含まれているため、実際には「手を入れた」部分が少なくないと推察される。

『神道と民俗学』について筆者は、これまで複数回考察を重ねてきた。その初回に、全四二パートを次のように分類していた。一―一三が民俗学と神道史との協力の可能性、以下、その民俗学側からの三例として、一四―一八で御旅所、一九―二五が頭屋制、二六―二九で二所祭場論と神送りが述べられる。三〇―四二でやや話題が変わり、氏神祖霊論および神社合祀との関わりとなる。

この最後の部分をさらに分類すると、三〇は公共の祭と個人による祈願との違い、三一―三四は「今私などの注意している問題」が二つあるとし、その一つを末社・境内社の多いこととする。三五―三六は、前の第一の問題の続きに加え、第二の問題として神の分霊をあげる。三七―四〇が「氏神合同」など、一部で霊神の問題にも触れ、四一―四二が王子権現と若宮、イハヒ神の問題などが触れられる⁽³⁷⁾。

以上のうち頭屋制への言及のはじめ、一九の箇所次のように

ある。

但しこの現在の頭屋輪番制の始まったことだけは、全く新しい社会的事情からといふことが出来ます。第一には氏神様の併合合祀です。是は村といふ公共団体の生活意識、即ち祭にも他の色々の事業と同じやうに、出来るだけ衆力を聚めて効果を大きくしようといふ願ひに基づいて、祭主の任に当り得る者の数を多くしたのであります（四〇頁）。

このように、「氏神様の併合合祀」を「頭屋輪番制」の始まりと対応するものとしており、その背景に祭の効果を大きくしようとする願ひを求めている。

上記で「氏神合同」に関するところと纏めた三七―四〇では、三七では次のような表現で、明治末の神社合祀を通歴史的に行われた神社の合同の一齣と位置づける。

今まで私は氏神様といふたゞ一柱の、名の無いもしくは名を称へることを許されぬ神を想定して来ましたが、この一柱といふことは実は考へ方でありまして、元に遡りますと我々の氏神は、夙くから一つの大きな合同体でありました。日本の神社合祀は、官府の懇懇を待つことなしに、以前にもくり

返し行はれて居たのであります。古記の表に依りますと、氏神は紛れも無く氏の神、たゞ氏人のみの集まつて祭を仕える神でありました。ところが現在は三つ五つの異氏族の者が、共に一社の氏神の、氏子となつて居るのであります（七一頁）。

さらに、一氏一神の場合と集合した氏神とを具体的に比較する。「合併の行はれなければならかつた理由」を、「我神を大きく力強く莊嚴にする」という「氏子たちの最も強い希望」だともしている（以上、七二頁）。

三八では、「氏神合同の最も大いなる結果」を、「異姓の人が神を祭ること」（七二頁）が始まつたこととし、頭屋が輪番になつたことと対応すると位置づける。これは、先の一九と同じである。後半は、靈魂や死生観の話題に移り、死ねば祭られるのは「大東亜圏内の諸民族」に共通の死生観であつたとする（七三頁）。

三九では「村の結合の為に大きな推進となつて居た氏神合同」（七四頁）ではあつたが、靈魂の納まり処が無くなつた場合に、全国的な大神を村に勧請したことが述べられ、後半で靈神の話、盆や正月に来る靈魂のうち、無縁仏・外精霊になるものが論じられる。

四〇では盆と正月などに一門親族が集まる場合に、本家に特別

の神の祭場があつて、一門の者が参列する神祭が古いとし、「氏神の合同といふことが断行せられて後に、更に其氏子の中から、一族だけの小さい結合を保たうとした趣意」(七六頁)であつたと思つづける。合同しながら、なお氏神の名を保留する例をあげ、対して鎮守は新しい語で「我々の氏神の具へて居たもの」を持つていないとする(七七頁)。それを踏まえて、戦時体制との関わりを次のように述べる。

国の共同の大敵を克服するといふに先だつて、何よりも有難いことは一国の秩序に服し、各自の区処に就き、皇家の安泰の為に働かうとした点であります。具体的にいふと神御自身の御分限をお認めなされ、より大いなる神々の御威徳に拠つて、更に万民をもつと高い幸福へ進ませようとせられる点であります。神となつて後もなお朝廷に忠誠であつたことであります(同上)。

要するに、合同した氏神が伊勢神宮の下位にあることが、万民が「皇家」「朝廷」に忠義を尽くすことと照応しているという意味ではないだろうか。この後、近年の神社合祀がこうした氏神の合同の一環であつたという趣旨の議論が繰り返される。

以上のように、『神道と民俗学』の四〇では、戦時体制と氏神の

合同とが密接に結びつけて定位されている。また、氏神合同の背景としては、三七では大きく荘厳な氏神が氏子たちの希望であつたこと、三九では村の結合のためであつた、などが提示されている。

(4) 長野県東筑摩郡での氏神調査に関わる講演

(一九四三年七月)

柳田が戦時体制に貢献せんとする姿勢が『日本の祭』『神道と民俗学』以上に明瞭に表れている言説として、一九四三年(昭和一八)七月九日に長野県東筑摩郡教育部会主催により松本市で行われた、彼の氏神調査に関わる講演をあげることができる。同講演では氏神合同論も触れられた。

柳田と同教育部会との関係であるが、柳田が一九一七年(大正六)に『東筑摩郡誌別篇』の編纂事業を指導・助言したことに始まる。⁽⁴⁰⁾ 柳田は、一九四三年五月に上梓された『東筑摩郡誌』別篇第二「農村信仰誌―庚申念仏篇―」の序文も執筆していた。⁽⁴¹⁾

この講演も、『東筑摩郡誌別篇』の第三「氏神篇」として企画された郡誌のために、地元の教員に調査のあり方を指導する趣意の講演であつた。柳田自身が講演手控えの三分の一ほどを元に、一九四四年一月刊の『民間伝承』第一〇巻一号(氏神特集号)に「氏神様と教育者」と題して発表しており、『定本柳田國男集』第

二九卷（筑摩書房、一九七四年）にも再録された。

しかし、ここで問題にしたいのは、新しい『柳田國男全集』第三一巻に掲載された「氏神篇調査に関する柳田國男先生講演の概要」なる講演録である。これは、信濃教育会の東筑摩郡教育委員会によって謄写版にされたものを底本としているとのことである。謄写版には日付けが記載されていない由だが、上記全集の「解題」では同年九月一八日までに完成したとしている⁽⁴⁾。

この「概要」は五つの項目に分かたれている。そのうち氏神合同論に関わる記述があるのは第二および三パートのみだが、柳田の戦争協力に関わる姿勢は他箇所にも見られるので、順に見てゆく。

第一の「農村氏神信仰の状態はどうなつてゐるか」では、大東亜戦争下で信仰が戦争に不可欠のものであるとし、こうした現状で氏神信仰をどう昂揚すべきか、と問いかける。神社に対する「敬神」と異なる「祈願」がある。兵士の大部分を供給する農村で神様に対する信仰は目覚めており、この信仰が生きている限り、「日本には軍神に続いていくらでも喜んで死んで行く人が出て来る」（同巻、九九頁）、とする。

第二の「氏神氏子の概念はどうなつてゐるか」では、敬神政策のために信仰は衰えているのではないかとし、その対象たる氏神に対する信仰を調べて欲しい、とする。神の概念が多様であるの

に對し（山の神、川の神、など）、氏神様は限定された概念であるが、それが推移しているかどうか。

さらに、「元の氏子の概念は、氏神の子という意味」であり、「氏神としてまつられる神は原則として祖神である」とする。春日神社が藤原氏の祖神であるのに対し、「祖神ならざる他の神を祀る氏」もあり、さらに氏神を「数氏合同して祀る場合がある」とされる。それに比べて南信地方での「一族一まきだけで」祀る祝殿が触れられ、氏神の在来呼び方を調べて欲しいと続けている（以上、一〇一頁）。

元の意味が氏神の子であつた氏子概念も変化しており、また氏神と鎮守とは異なる（鎮守とは土地を守り、外敵を防衛する意味の外語で、氏神は祖神）、氏子以外の祈願は個人的な祈願となること、氏子入り、氏子帳についてなどが触れられる。

続いて「調査についての注意」として、氏子に関連する「頭屋制度は残つてゐるか」が第三となる。「勿論所謂神主はいらなかつたのであるが」、「其の土地の代表者が代々の神主となつた」。その神主には精進潔斎が必要であつたが、頭屋になる家が決まつていた時代にはそれを行つていた。しかし、「併合するやうになつてからは軒まはり又は帳面廻りでやつて行くといふ様になつた」（以上、一〇四頁）と、氏神の「併合」に伴つて頭屋が輪番になつたと位置づけている。この議論は、『日本の祭』『参詣と参拝』の一一や

『神道と民俗学』の一九や三八と共通する。

また、井上頼寿や肥後和男の本が言及され、「常頭屋」が神主の起こりとされる。今日でも「頭屋制度の残つてゐる所はめつくり神信心が強い」（一〇五頁）、「人心を帰一する力をうむものはこの頭屋制度の復活であると思ふ」（一〇六頁）、などとする。両者とも、典型的な戦時言説であろう。

さらに、第四「祭と女性の任務」では、会場に不在だった女性を念頭に、女の氏子の果たした役割を述べる。第五「座談会の概要」では、神社の縁起や来歴は本調査において価値が低いこと、祝殿の資料を付録にしてほしい、また靖国神社について、「どうして汚れた死人から神様にうつるか。その解決の方法は靖国神社の様な特別な社をつくることである。靖国神社は汚れてゐてよい。別格といふのはさうしたことではなからうか」（一一〇頁）と、同社の役割を積極的に評価している。さらに、「調査の内容は戦争とむすびつけて考へてもいいと思ふ」（一一一頁）ともしている。

以上のようにこの講演概要では、おそらく柳田が地元で作成された謄写版を修正していないせいなのか、戦争に積極的に貢献しようとする文言が散見する。第一パートでの軍神云々、第三パートでの頭屋制度にまつわる神信心、人心を帰一、第五パートでの靖国神社への言及や調査と戦争との関連付け、等等。

因みに近年の柳田研究に、第一パート軍神云々の箇所について、

「戦時下の軍神信仰とは異なる新たな生き方を示すこと」を柳田が含意していたと解釈するものがあるが、あまりにも元のテキストの文脈を逸脱した読みであろう。

そうではなく、この講演は聴講者であつた地元の教員に対して、戦争協力のために軍神に続いて死地に赴くべき農民兵の信仰対象としての氏神調査を求めていた、と字義通り理解すべきであろう。氏神のあり方を調査することが、戦時体制に積極的に貢献する行為として意義づけられていたのである。

とはいえ、この講演録において氏神合同がどう扱われていたかに関しては、上記のように第二パート（祖神以外の神を数氏合同で祀る場合）と第三パート（頭屋が輪番制となることと氏神の併合とが対応）の言及に限定され、分量的にさほど多くなかった。

それに比べて、柳田が後に自らの講演手控えの三分の一ほどを元に、一九四四年一月刊の『民間伝承』第一〇巻一号に発表した「氏神様と教育者」では、もう少し明確にこのテーマが言及されている。この稿と先の謄写版記録との対応は良く分らないが、同稿では全五パートの最終五に次のように述べられている。謄写版のものでは、先に触れた第二「氏神氏子の概念はどうなつてゐるか」に対応するのだろうか。引用は、同じく『柳田國男全集』第三一巻の一三三頁より。

氏神の最初は明かに一氏一神であつた。原則としては始祖高祖を神として祭つたやうだが、次々には他の神を祭つた氏神も出来て居る。多分はその家の祖神の在世の日に既に祭つて居た神を祭ることが、祖神を祭るのと同じと解せられた結果であらう。ところが村といふものの、の進化に伴なうて、異なる数氏の氏人がその氏神を合同し、或は最も力強い一つの氏族の神を他の幾つかの異姓が共に祭るといふことになる、先祖を祭つたものよりも此方が認められやすかつた。それが村々の現在の氏神社が、中世以前に氏神と謂つて居たものと、全く別ものゝやうになつて来た原因ではないかと私は思つて居る。

見られるように、ここでは「氏神を合同」する背景として、『日本の祭』『参詣と参拝』の第七パートと同じような人口増（「村といふものの、の進化」）に加えて、氏族の神の中で最も強力な神を祭るようになったことをあげている。この議論は、謄写版を底本とした講演概要には見られない。

逆に、こちらの柳田執筆による概要では戦争協力の姿勢が、「信仰が戦争には欠くべからざる」（二三〇頁）のようなフレーズを除いてさほど表に出ていないのも、先の地元で作られた講演概要と比較して興味深い。柳田が『民間伝承』誌の読者向けに、実際に

東筑摩郡の教員向けに話した戦時体制に奉仕せんとするための調査、という趣旨の文言の多くを割愛したのだと考えられよう。

（5）その他の敗戦までの氏神合同論

以上の他にも、長野県での講演が行われた一九四三年七月以降、柳田は似たような氏神合同論を敗戦までに複数回行っている。管見の及ぶものについて、以下に概要したい。

「おしら神と執り物」…後に『山宮考』（小山書店、一九四七年）に収録されたのが初出で、その時の末尾、初出形態の一八四頁に「昭和十五年一〇月」と記載されていた（『定本』以降も同⁴⁴）。しかし近年、赤坂憲雄が一九四三年七月に脱稿したと推定し、新しい『柳田國男全集』第一六卷（一九九九年）の解題五三四―五三五頁でもそれを踏襲しているので（執筆者は宮田登）、ここでは仮にその年代比定を是として概要を行う。

同論は祭神論というより、オシラサマの祭祀形態からそれがどういった神なのか、またイタコの関与は本質的か、を問うたものと考えられる。前半はやや込み入った議論となつているが、全一七パートのうち一二でオシラサマの祭祀形態を三通り示し、そのどのパターンが古いか考察する。最終一七パートで、そのうち最も古いのはオシラサマを家の神として祀る形態であるとする。

この祭祀形態を巡る議論の中で、パート一四で家の神の変遷を

問う文脈で次のような議論がある。

ひとへにオシラサマに御知らせを願ふやうになつたのも、新たな信仰と言はうよりも、寧ろ大きな信仰の砕け散つて、斯うなつたと見るのが当たつて居るかと思ふ。是には勿論外からの原因も大きかつた。多くの家々が協同して崇め信ずべき大神の出現は、民族結合の必然の要求であり、更に又氏の中心の力が小さくなつて、一つの氏神があまたの家々を均しく護りたまふといふ考えが行渡り、自然に各自の家の神を小さく見るやうになつたのも事実だが、それよりも今まで気が付かずに居たのは、拝むべき神の御名の無いことであつた（同巻、一九八一―一九九頁）。

氏神の合同という表現ではなく、また文章もかなり晦渋であるが、ここでいう氏神合同を、家の神を小さく見るようになることと相對する現象、という観点から捉えていると考えられる。「民族結合の必然」を戦時言説と考えることができると思へば、それと氏神合同論とが結びつけられていると解釈できるであらう。

『ウブスナのこと』…上記の翌月、一九四三年八月刊の『民間伝承』第九巻四号、「月曜通信」という柳田による一種のコラムの第一回である。「ウブスナ神と氏神と、二つは同じものか、はた又

別々の神様か」を問題として提起し、「鎮守さまと氏神及びウブスナとの差」が次第に分かつてきたとする（同号、二四頁）。つまり、氏神合同という語そのものは出ないものの、氏神とそれを包摂する地域的な祭神との違いを柳田がどう把握していたのか、という論となっている。以下の引用は、氏神と鎮守および産土との関係についての箇所である。

仮にもし私などの生れ在所のやうに一つくの村には氏神、その村々が合同して祭をする一郷の社が鎮守であつて、特に或一つの有力な氏神を指定して、総体の鎮守と崇めるのが通例だつたときまると、之に基づいてなほ色々の事が考へられるやうになる。（中略）元は氏神であつたけれども、是からはウブスナと謂つてもよいといふ時代が、或時新たに現はれたのではないかと考へられる。氏神が現在必ずしも氏の神では無いこと、又氏の神ばかりを氏神といふ地方が、今でも意外に弘いを見ると、この想像も全く無分別なものとは言へない（同号、二七頁）。

この文脈ではかなり分かりづらいものの、ウブスナ（産土）を氏神が合同した形態だと位置づけているのではないかと推察される^⑤。なお、戦時体制との対応はとくに見られない。

「敬神と祈願」…初出は一九四七年刊の『氏神と氏子』（小山書店）であるが、同書冒頭の「解説」に一九四四年（昭和一九）一月十五日、神祇院での講演における「談話の手控え」とある。筆者は既に同論に関して小稿を著しているが、⁽⁴⁶⁾そこでも述べたように全一六パートのうち、一二「自然と人為」の冒頭箇所および一五「悲しむべき経験」後半箇所⁽⁴⁷⁾に、占領軍による検閲による改竄が見られることに加え、タイトルの「祈願」以外に「信心」「神信心」「信仰」なる語が併用されており、各語の意味する内容の差異が分かりづらいこともあり、理解が難しい講演である。とはいえ、大半の部分でタイトル通り氏子・氏人に限定されずに神社を信仰する側からの考察が展開される。

そのような論旨の中で、氏神合同なる語そのものは登場しないが、その経緯を解説したのが六の「内外信仰の接合」であろう。

神も仏法の諸天善神と同じく、日ましに分裂して行く個人の利害に依じて、各個のちがった願い事を聴き容れたまふものの如く、我々の祖先が信じ始めたのも其影響であらうが、なほそれ以上に働いていた社会的条件の、幾つか有ることは否むことが出来ぬ。列挙することは不可能であらうが、その一つは縁組其他の協同によつて、各村各氏族の間の親しみが加わり、信仰上の自他の対立が、段々と薄れて来たことが考

へられる。それでも隣接する部落どうし、氏神の仲が御悪いといふような言ひ伝へはなほ残つて居るが、少なくとも村の内部のみは先づ親類になつて、氏神信仰の共通といふことが次第に行はれやすくなつた。⁽⁴⁸⁾

ここでの「氏神信仰の共通」の背景として、『日本の祭』におけるような人口増とは異なり、各氏族の縁組を措定しているのが注目される。これに続いて、「大きな特に有力なる神々の出現」として石清水・北野などと立論が移つてゆく。この立論は、先に概要とした「氏神様と教育者」とやや類似している。

なお、同論では上記引用箇所との関連性は薄いかもしれないが、戦時体制との関わりが複数見られる。一つは一三「神道は衰へたか」で、富士山麓須走の浅間神社の氏子が「戦に出ても死んだ者が⁽⁴⁹⁾ない」として信仰されていること。今一つは、検閲によつて削除された一五「悲しむべき経験」の後半箇所に次のようにある（次の引用は、削除された文章の全てではない）。

是に国家の大事に際して、この自然の事実⁽⁵⁰⁾に拠つて人心を帰一せしめ又奮奮せしむる必要が有るだらうといふことを、予想し得なかつたのも非難せられてよい。神社はたゞ崇敬の対象といふことを口にしなが、日露の大戦役の時などにも、

郡長をして郡民を引率して、郡内の各社に祈願祭を営ましめたのはどうだと、かの南方氏などは非常に憤つて居たが、自分とは之に対して憤るのはまだ早計だらう、それよりも先づ大いに説かなければならぬと謂つて居た。⁽⁵⁰⁾

ここでは、対外戦争での戦勝を神社に祈願することが、無条件に肯定されていると考えられる。しかし、これらの文言は初出の小山書店版はもとより、『定本柳田國男集』第一一卷でも新しい『柳田國男全集』第一六巻でも、『氏神と氏子』というテキストの中では読むことができないのである。

四 氏神合同論の占領期への継承と終焉

——講演「氏神と氏子」と東筑摩郡氏神調査報告書

本稿の主眼は、柳田のここという氏神合同論を戦時言説として考察することであるが、敗戦後しばらくも、氏神の合同・併合・統合などの文言や簡単な説明だけであれば、『村と学童』⁽⁵¹⁾（一九四五年）、『先祖の話』⁽⁵²⁾、『祭日考』⁽⁵³⁾（以上、一九四六年）などに見受けられる。

とはいえ、本稿冒頭で参照した住谷一彦の議論のように、この問題について比較的多くの議論がなされるのは、一九四七年に上

梓された『氏神と氏子』巻頭に掲載された同題の講演録（一九四六年七月靖国神社での講演による）だと考えられるので、以下簡略に見たい。

同講演は基本的には氏神論の形をとっており、タイトルに含まれている氏子についても言及されるが（全三〇パートのうち、一、三〇など）、その組織に関わる頭屋制については表立って議論されない。四「神社の二つの種類」で全国の神社を「氏神の社」と「氏人をもたぬ神社」とに分け、靖国神社での講演を意識してか後者にそこそこ分量を割いて議論している（六、七、八、二七、二八など）。

そうした立論の中で、前者に相当する「氏神の社」について柳田は、一三で「村氏神」、一四と一五で「屋敷氏神」、一七で「一門氏神」とに分けて詳説する。これらの内、前の二者では異姓の家が共同して一つの氏神を祀っているが、なぜそうした共同が起るのかを、一六「氏神の合同」で考察しようとする。先に見た、住谷一彦がロードス島の比喩で注目していた箇所に対応する。

住谷も概要している通り、柳田は次の七通りの経緯によつて「氏神の合同」を説明している。①祭日の類似、②祭場に常設の建物不在、③祭の感動、④専門神職の進出、⑤祭神に対する考え方の変化、⑥祭の費用の増大、⑦村の統一の必要性。⁽⁵⁴⁾個々に対する柳田の説明は省略するが、この七通りの経緯の全てが帰納によつ

て導かれてはならず、先験的にもたらされた説明だと考えられる。ともあれ、柳田は住谷も引用している通り一九「氏神社の祭神」冒頭で、こうして合同された氏神を氏人の祖先と次のように結びつける。

私などに言はせると、日本の神社の成立ほど、単純で自然でわかりやすいものは無い。国内の最も大きな御社から、端々の無名の小社にまでも共通して、又一方には上世の記録にも表はれ、更に目の前の生活にも幾多の例のあることは、同じ血筋に繋がる者が集まつて、其々に同じ祖先の好意に信頼し、又是に感謝しようとするのが、社に於て神を祭り始めた唯一の動機だつたといふことである。⁽⁵⁵⁾

これも帰納から導かれた作業仮説ではないかもしれない（「上世の記録」が明記されないの）が、おそらく問題はそこではないと思われる。この後一九において、村氏神や屋鋪氏神を含む氏神がなぜ祖先と無関係の大社の神を祭るのか、という問いへと進むからである。この議論は、およそ二五まで続く勧請神の考察となる。つまり、上の引用のように氏神合同論は、およそ一九三二年の「食物と心臓」から続く氏神イコール祖霊説を下敷きに展開していたと理解できる一方で、実際には多くの神社の祭神がそうし

た氏子の祖先とは無関係であることを柳田自身が認めてしまったのである。

この背景には、柳田が著したテキストのうえでは確認できないものの、一九四三年七月に彼が講演を行って調査を要請した長野県東筑摩郡の氏子調査の報告書が、一九四五年には完成したことがあるのではないかと筆者は推察している。

というのも、当初は一七一社を対象として、柳田の講演のように頭屋制への関心に力点をおいて調査計画が立てられたらしいが、二〇〇六年に国立歴史民俗博物館により六九社分に関して翻刻された報告書によれば、実際には神社の祭祀組織より神社合祀を含む神社の合同・合併に関心が持たれた模様で、報告書に合祀について記載のある神社が少なくない。⁽⁵⁶⁾

しかし、それらを含み六九社の全てで調査当時において氏子の祖先を祭っていた祭神は無く、ほぼ全てが著名な大社の勧請神であつた。場所柄もあり建御名方命が多く、他に保食神、大己貴命、応神天皇、天照大神、素戔鳴尊、天児屋根命などの他、山の神、地神、岩屋大神といった場所に関わる祭神も若干見られる。⁽⁵⁸⁾ これら以外では、柳田が同族神の例として講演で調査をうながしていた祝殿が元の祭神だつたが、後に勧請神に代わつたとする例、ある家の氏神であつたが今は天神七代と称する、白山様と称する、などの例がわずかに見られる。⁽⁵⁹⁾ しかし、複数の氏神が合併し

た例は皆無であつた。

講演録「氏神と氏子」において、一六から一八までの氏神合同論を一九で氏子の祖先と結びつけた後、すぐに大社がどのように勧請されたかの議論に繋がるのは、一つの地域社会における具体的な氏神調査の結果を踏まえていた、と考えた方が理解しやすいのではないか。

要するに、何らかのデータから帰納された仮説ではなかった氏神合同論は、このように具体的な調査データによって立証しえないことが判明したのである。

五 結論

以上、本稿ではこれまでの柳田研究ではば問題とされなかった柳田の氏神合同論について検討してきた。考察の結果をいくつかに分けて書き上げることにした。

第一に、一九三六年頃から始まった原田敏明の氏神祭祀研究、とくに宮座研究の代案を柳田が求めた、という方向性の一環としてこの枠組があること。原田は、先に第二節(3)で引用した一九四〇年の「氏神祭祀の組織について」のように、原初的な氏神祭祀のあり方を地縁的なものであるとし、氏神は血縁とは無関係であると主張していた。対して柳田は氏神を氏の神、祖先神と

考えていた。

一方で柳田は、原田が輪番の氏神祭祀という観点から現行の宮座を捉えることを受け容れ、それが柳田の云う常頭屋(二軒が自らの氏神を祭る状態)から変化した形態だと捉えようとした。そのため、『神道と民俗学』や後に『氏神と氏子』に収録された講演録「祭と司祭者」で数多くの事例をあげ、そのことを論証しようとしていた。⁽⁴⁾ ここにおいて祭神の捉え方である氏神合同論は、祭祀形態論であつた輪番での頭屋制(古態から変容した形態と柳田は考えた)と対応するものとして、一九四〇年代初頭に登場してきたのではないか。

第二に、そのように頭屋制の進展段階と祭神観とが結びつけられた結果、柳田の氏神合同論において最終の成果だと思われる敗戦後の講演録「氏神と氏子」に至つて、「食物と心臓」以来の氏神イコール祖霊説は中心的な論点ではなくなつてしまつた。これは、長野県東筑摩郡での氏神調査で、氏神を祭神とする神社がほぼ存在せず、もと氏神だつたという伝承の神社も、それが他の同様の氏神と合併したという例が一つも見られなかったことの影響による可能性もある。

第三に、それでは柳田の氏神合同論は、原田敏明の氏神祭祀研究の代案という側面だけなのか。柳田は、先に検討した『神道と民俗学』のような例外があるとはいえ、『民間伝承』誌や一般向け

の著作では戦局に積極的に奉仕せんとする姿勢を表立っては見えなかったが、そうした姿勢を全く表明しなかった訳ではない。本稿ではこれまで触れなかったが、例えば敗戦間近の一九四五年三月刊『新女苑』誌に、「特攻精神をはぐくむ者」という特攻隊員の母を称讃するエッセーを発表していた⁽¹⁾。

先に触れた中でも、長野県での講演や神社精神文化研究所での講演「敬神と祈願」には戦時体制に積極的に貢献しようとする柳田の姿勢が垣間見られ、その中で氏神合同論は、頭屋制における祭主の輪番と対応するという形ではあるものの、人心を帰一する力を生むもの、と位置づけられていた。

合同した氏神を、柳田が人心を帰一する、具体的には軍神に続いて死ぬ人々の信仰を支えると考えたのは、それが家族成員以外誰も知らない小さな家の神ではなく、産土と呼ばれるようなローカルな神だからであり、かつそうした合同氏神である産土が（『神道と民俗学』四〇での議論のように）伊勢神宮に従属するからではないだろうか。

この点において、帰納的な手順に一切基づかない氏神合同論を、柳田國男の戦時言説として位置づけることができるであろう。

注

- (1) 例えば、後藤総一郎「柳田國男と戦争」（初出一九七六年、後藤『柳田國男論』恒文社、一九八七年）。後藤は、柳田に戦争批判の思想が無かったとする益田勝実や橋川文三に反駁し、『日本の祭』や『先祖の話』において柳田が、「当時のフアナティックな神道的臭さからの圧力」に対抗しうる「クールな客観的な眼」を持ち続けた、などと擁護する（掲載書、一四八頁）。
- (2) 由谷裕哉「柳田國男の戦時下における祭祀論と戦争協力」（『宗教研究』九三巻別冊、二〇二〇年）。
- (3) 柳田研究とは異なる観点からであるが、次のように柳田の神道論に関する考察は存在した。内野吾郎『新国学論の提唱』（創林社、一九八三年）。また、個々の著作論文相互の差異や経年変化をほぼ無視して、柳田の氏神を含む神観念周辺の議論を「固有信仰」として位置づけようとする柳田研究として、川田稔『柳田國男——「固有信仰」の世界』（未来社、一九九二年）、があった。本稿は、とくに後者の姿勢に対する違和感から出発している。
- (4) 住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ『南西諸島の神観念』（未来社、一九七七年）。
- (5) 『柳田國男全集』一六巻（筑摩書房、一九九九年）、二六二—二六四頁。
- (6) とはいえ、敗戦後の「新国学談」三部作を主な対象として氏神と祖霊との関わりを考察した研究は早くからあった。例えば、伊藤幹治「柳田國男 学問と視点」（潮出版社、一九七五年）、など。
- (7) 小川直之「柳田國男と祖霊」（一）、『民俗』第八六号、一九七四年。
- (8) 一九三二年（昭和七）一月に『信濃教育』に発表され、一九四〇年（昭和一五）に同題で創元社より刊行された柳田の著書の、冒頭に収録された論である。『柳田國男全集』一〇巻（筑摩書房、一九九八年）、三六七—三八二頁。

- (9) 同上、三六九頁。
- (10) 同上、三七六頁。
- (11) 由谷裕哉「山村調査をとのうに位置づけるか——大間知篤三と杉浦健一の言説に注目して」(『小松短期大学論集』一二二、二〇一五年)。
- (12) 索引項目および質問文例については、福田アジオ『山村海村民俗の研究』(名著出版、一九八四年)で「採集手帖」として再録されている頁を参照(総頁が打たれておらず、本の後半箇所に相当)。
- (13) 前掲『山村海村民俗の研究』では、本の前半に初年度と第二年度の報告書がそのまま再録されている。氏神に関係する報告は、初年度に大藤時彦「頭を中心とした祭祀の問題」、杉浦健一「山の神」神考、関敬吾「共同祈願の問題」、第二年度に関敬吾「宮座に就て」、という四者。これらの評価については、前掲注11由谷論文を参照されたい。
- (14) 柳田國男(編)『山村生活の研究』(民間伝承の会、一九三七年)。本文で引用もしくは頁数の表示を行う場合、翌年に再刊された版を底本として国書刊行会から一九七五年に刊行された同題名のリプリントによる。
- (15) 前掲注11由谷論文。
- (16) 由谷裕哉「戦時下における原田敏明の氏神祭祀論と柳田國男の頭屋制論」(『民俗学論叢』三五号、二〇二〇年、三四—三五頁)。
- (17) 原田敏明『宗教 神 祭』(岩田書院、二〇〇四年)、四〇四頁。
- (18) 前掲注16由谷論文、三七—四三頁。
- (19) 『日本諸学振興委員会研究報告』八哲学(教学局、一九四〇年)、八八頁。
- (20) 同上、九〇頁。
- (21) 昔話研究の著作としての第一作は『桃太郎の誕生』(三省堂、一九三三年)であったが、この時期には『昔話と文学』(創元社、一九三八年)が出された。他に語り物・伝説を含むナラティブ研究として、『民謡覚書』(創元社、一九四〇年)、『妹の力』(創元社、一九四〇年)、『伝説』(岩波書店、一九四〇年)や、後に『物語と語り物』(角川書店、一九四六年)に収録された論考の多く(「語り物と物語」一九三八年、「有王と俊寛僧都」「甲賀三郎の話」一九四〇年、など)が著された。
- (22) 柳田の方言研究は、一九二七年(昭和二)に『人類学雑誌』第四二巻に連載された「蝸牛考」に始まるが、一九三〇年代後半は民俗語彙集の刊行が目立っていた。『葬送習俗語彙』(民間伝承の会、一九三七年)、『歳時習俗語彙』(同会、一九三九年)、など。他に、『方言覚書』(創元社、一九四二年)など。
- (23) 『民間伝承』第一号(一九三五年九月)の七頁に、「日本民俗学講習会記事」が掲載されている。その終わり近くに、「折口氏座長の下に『民間伝承の会』(会名はあとで柳田先生が選ばれた)がつくられる提案が出され、全会一致でこの講習会をして更に意義あらしめたものとなつた」とある。
- (24) 戸塚ひろみ「民間伝承の会」(柳田國男研究会(編)『柳田國男伝』三一書房、一九八八年)、八二七頁。
- (25) 福田アジオ『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』(吉川弘文館、二〇〇九年、一七一—一二二頁)。
- (26) 川村邦光『日本民俗文化講義』(河出書房新社、二〇一八年)、二〇二頁。
- (27) 上記の先行研究三者とも「巻頭言」と形容していたが、この倉田の文章が載る第四巻にはまたこの表現は無く、各号の単なる冒頭頁であった。各号の冒頭頁が「巻頭言」と銘打たれるのは、一九四二年五月刊の第八巻第一号からである。
- (28) 本文のように『民間伝承』第八巻の巻頭言として三回掲載されたが、次にも再録、『柳田國男全集』三〇巻(筑摩書房、二〇〇三年)、五七二頁。
- (29) 前掲注25福田書、一七〇—一七二頁。
- (30) 『柳田國男全集』第三〇巻(前掲注28)、六六一頁。
- (31) 柘植信一「戦時下の学問研究」(前掲注24『柳田國男伝』、九二七—九二八頁)。

- (32) 前掲注28『柳田國男全集』第三〇巻、六六二頁。
- (33) 同上、六六三頁。
- (34) 『柳田國男全集』第三巻（筑摩書房、一九九八年）、四九二頁。
- (35) 同上、五〇〇頁。
- (36) 以上引用の二箇所、同上、五〇四―五〇五頁。
- (37) 由谷裕哉「柳田國男『神道と民俗学』における神社祭祀論の再検討」『民俗学論叢』三三三号、二〇一八年、六二―六三頁、および六七―六八頁。
- (38) 『定本柳田國男全集』第一〇巻（筑摩書房、一九六二年）では「対岸大陸と島々の諸民族」（三八七頁）と改竄されていた。
- (39) 同じく『定本』三九一頁では、「国の共同の問題を解決するに先立つて」と改竄されていた。
- (40) 伊藤純郎『柳田國男と信州地方史』（刀水書房、二〇〇四年）、一四〇頁。
- (41) 『柳田國男全集』三一巻（筑摩書房、二〇〇四年）、八九―九五頁。
- (42) 同上、七一―七二頁。
- (43) 田澤直子『吉野作造と柳田國男』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）、一六〇頁。田澤は柳田が含意していた筈の「氏神信仰の本来的なありよう」を五つあげている。しかし、それら全てはこの講演とは無関係な、一九四〇年代というのだけ同じ、柳田の別の言説から引かれている。
- (44) 赤坂憲雄『漂泊の精神史』（小学館、一九九四年）。
- (45) 『民間伝承』誌で後続の第九巻六・七合併号（一九四三年一〇月刊）の九四頁、「学会消息」欄の「木曜会」第二二五回（九月二五日）の記録として、「ウブスナと氏神との関係について、柳田先生の新たな見解が述べられた」とあることを参考にした。東北地方のようにウチガミがあつてウブスナの無い地方など、「氏神が家の神であつて、ウブスナが土地の神であるとしたなら、此の解釈は容易となる」などとされている。
- (46) 由谷裕哉「敗戦をまたぐ二つの神道論——柳田國男「敬神と祈願」と鈴木大拙「日本的靈性的自覚」第二講」（『比較思想研究』四五号、二〇一九年）。
- (47) 江藤淳『氏神と氏子』の原型——占領軍の検閲と柳田國男（『新潮』第七八巻一号、一九八一年）。検閲された文言は江藤の上記論文にも掲載されているが、『柳田國男全集』第一六巻（前掲注5）では、改竄された『氏神と氏子』の頁に続いて、三七〇―三七三頁に掲載されている。
- (48) 前掲注5『柳田國男全集』第一六巻、二九六頁。
- (49) 同上、三〇七頁。「富士山東麓の須走の浅間神社などは、縁があつて私は毎年行つて見たが、土地ではこの社の氏子に限り、戦に出ても死んだ者が無いと謂つて居た。さうして周囲の村々の信仰はこの社に集注し、大きな招集のあるたびに、群をなして御百度に参つて来て居た」、などである。
- (50) 同上、三七三頁。
- (51) 『柳田國男全集』第一四巻（筑摩書房、一九九八年）、五八八―五八九頁。
- (52) 『柳田國男全集』第一五巻（筑摩書房、一九九八年）、一〇二―一〇四頁。
- (53) 『柳田國男全集』第一六巻（前掲注5）、四四頁。
- (54) 同上、二六二―二六四頁。
- (55) 同上、二六七―二六八頁。
- (56) 一九四三年一〇月刊の『民間伝承』第九巻八号では、一〇月に完成した調査項目の概要を、一氏神、二氏子、三頭屋、四祭、としていた。二から四が祭祀組織と関わっていると考えられる。
- (57) 『基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」』翻刻資料集2 長野県東筑摩郡『神社誌』（国立歴史民俗博物館、二〇〇六年）。一頁の総説に、「昭和一九年（一九四四）から翌二〇年にかけて作成した」神社誌の、翻刻である旨の記載がある（総説の執筆は、伊藤純郎）。
- (58) 山の神は笹賀村の山神社（五二頁）、地神は生坂村の五社（二三二頁）、岩屋天神は中川村の岩屋神社（三三八頁）。
- (59) 元ある家の祝殿だったのは上上手村の伊勢宮（二六八頁）、氏神が天神

七代に代わったとされるのは生坂村の七社大権現（二四四頁）、同じく氏神から代わったとされるのは同村の白山大権現（二五〇頁）。

（60） 由谷裕哉「戦時下における原田敏明の氏神祭祀論と柳田國男の頭屋制論」（前掲注16）。

（61） 『柳田國男全集』第三二卷（前掲注41）、二二二頁。

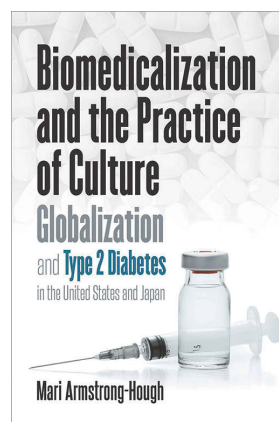
メアリー・アームストロング・ハフ

『生物医療化と文化の実践』

——アメリカと日本におけるグローバル化と2型糖尿病

Mari Armstrong-Hough, *Biomedicalization and the Practice of Culture:**Globalization and Type 2 Diabetes in the United States and Japan*

エイミー・ボロヴォイ

University of North Carolina Press,
2018

イチロウは、日本の病院で治療を受ける2型糖尿病患者である。

慢性的な高血糖状態により時とともに腎機能が低下し、今では病院で週に三回透析治療を受けている。糖尿病患者は、糖の摂取量を注意深くコントロールしなければならず、透析患者にはさらなる制約が課される。だが、その病院の医師や看護師たちは、イチロウが指示された食事療法を守らずにいるという。それどころか、止めるように言われていたコーヒー用ミルクや砂糖を、病院の食堂でコーヒーに入れる姿を目撃されている。担当医であるサイトウ医師が糖尿病再教育のため入院を勧めたところ、本人はそれを聞いてぎこちなく笑うばかりであったという。

以上のようなシナリオは、アメリカの医療環境であれば、異なる展開をみせることだろう。サイトウ医師の対処は、たとえそれ

が丁寧かつ専門家らしい対応の仕方であったとしても、高圧的で過干渉だと捉えられかねない。そのうえ冷静な患者、しかも急患でない場合の受け入れは、基礎的な医療の範囲外に当たることになり、患者の権利の侵害になる可能性もある。アメリカの病院での二週間分の入院費用が必要になることは言うまでもない。

『生物医療化と文化の実践』において著者は、2型糖尿病の生物医学的ケアが、科学に基づく医学的な介入にとどまらず、いかなる点において「文化の実践」なのか、豊かな洞察力を示すとともに示唆に富んだ研究を展開している。

生物医学的介入は、本来普遍的なものといみなされることが多い。医師たちは学会や研究奨励制度を通して国際的な知の交流に参加し、彼らが共有する科学的データや医療学的アプローチの数々は、

「エビデンス（客観的な研究データ）に基づくもの」とされる。しかし、著者の研究は、これらのアプローチもまた、組織による実践や歴史に根差す文化的信念、さらには著者のいうところの「医師たちの意味づけの道具（ツールキット）」により規定されることを明らかにしている。

アームストロング・ハフの研究は、日本とアメリカの医師や療養指導士、看護師、患者との三五九件のインタビューをもとにしたものである。日本研究に詳しくないアメリカの公衆衛生の専門家や医療提供者、医療社会学者などの読者に向けて、生物医学の社会的文脈を明らかにしており、研究に見出される差異を安易にステレオタイプ化、一般化しないよう細心の注意が払われている。

2型糖尿病は、ある部分においては、脱工業化社会に共通する危険因子、すなわち安価な加工食品の入手のし易さに伴うでんぷん食品・砂糖消費量の増加や、一食当たりの分量の増加、デスクワーク中心の生活にアルコールの過剰摂取、そして高血圧治療対象者の増加などが原因になる。これらの危険因子は、「豊かな社会」(affluent societies)に共通する要素ではあるものの、医療従事者により受け入れられるその因果をめぐる語り (causal narrative) は、普遍的なものでない。アメリカの医師や看護師たち、そして糖尿病療養指導士たちが、テレビのチャンネルサーフィンや車の運転の多い生活、でんぷん質を多く含むスナックの間食などを含む、

近代化や現代の「非自然的」な生活様式による弊害のせいにする場合がよく見受けられる。こうした語りはあながち間違っていないものの、「世界的」(global) なリスクモデルを発展させ、特定層の社会経済的地位の影響と遺伝的素因の影響とを目立たないものにしてしまう。各々の自己管理能力の欠如が非難されるような、道徳的な言説にも変貌し得るのだ。

日本では、欧米の食べ物が日本人の体質に合わないことを強調する文化特有の語りが確立されている。確かに脂質やでんぷん質、あるいは塩分の多い食べ物は一要因にはなるものの、日本の医師や療養指導士たちは、しばしば欧米の食べ物を「ジャンクフード」と結び付ける一方で、ラーメンやコンビニ弁当、牛丼などの塩分・脂質が多く含まれる日本食のことを完全に見逃している。これらの文化的に規定された認識により、治療計画に顕著な違いが生じるのは興味深い。アメリカのガイドラインでは、炭水化物の制限が中心となるのに対し、日本のガイドラインでは、白米を含む日本食の美点を大々的に宣伝しているのだ。

日本とアメリカにおける因果をめぐる語りには、どちらにも欠点と偏狭さが見受けられる。だがこの話は、著者が医療現場におけるやりとりや治療計画が様々な形でどう管理されているのかを検討するあたりから、さらに面白いものになる。著者の研究結果は、日本の事例がより広い公衆衛生の議論に寄与し、通常にはな

い形で評価され得る可能性を示唆している。

糖尿病の管理には、相当な自制心が要求される。患者は、自身の血糖値を時には日に複数回測定・記録し、インシュリン注射に加え食生活、特に糖分の摂取量を厳格に管理しなければならない。興味深いのは、日本とアメリカ両方の医療従事者たちが、彼らがいうところの「医療父性主義」(medical paternalism)を避けているという点である。だがその概念の定義は異なる。アメリカの看護師や医師たちは、父性主義にヒエラルキーや一方的なコミュニケーションを結びつける。そして自身は「患者中心の医療」(p.79)、つまり患者の特定のニーズや目標に注意を払い、患者が良き選択をできるようサポートしていると主張する。ここでキーワードとなるのは、権限の付与、個人的責任、そして自制心である(p.83)。患者が指示された食事療法を取り入れない場合、医師たちは脅し作戦に立ち戻らなければならないかもしれない。

日本の医師の場合も、少なくとも原則としては「父性主義」を避けている。だが、彼らにとって父性主義とは、医師側の傲慢さや配慮の欠如を連想させるものだ。医師が敬意を払うとするならば(敬語の使用、患者の信頼の獲得)、患者に何をすべきかを指図するのは(透析患者であるイチロウの場合にみたように)適切とはいえない。実のところ、ほとんどの医師たちが、患者の健康は最終的には自分たちの責任だと捉えている。患者たち自身の責任だけで

はなく、だ。アームストロングハフは、この違いを示唆に富んだ形で捉えている。アメリカの医療従事者たちの場合は、患者の糖尿病を「あなたの糖尿病」として考え、日本の場合は「我々の糖尿病」として捉えているのだ、と。

このあたりが、日本でのアプローチが思考の糧になり得る部分であろう。日本の診療所や病院での2型糖尿病の主流ケアとは、包括的な健康教育やコミュニケーション、そして具体的かつ数値化され、「即取り掛かることのできる」生活様式改善に関する助言のことを指す。それは実践的かつ心理的距離が近いものである。

日本の患者が医師に会う最低頻度(隔週に一回)は、アメリカで医者にかかる平均的な回数よりも多い。さらに日本で医者にかかる場合、医師自身が対応することが一般的である。著者の研究結果には、「父性主義」という概念では、日本における公衆衛生的介入の性質をいかに十分に捉えきれないかについて考えさせられる。

日本における公衆衛生的介入は、トップダウン型の指示のみならず、集中的な教育や交流、記録管理や自己測定を通じた患者の関与、信頼関係の構築などに依存している。一見役に立ちそうではあるものの、医療人類学者たちからすれば、肯定的な言葉で表しづらい行為の数々だといえるかもしれない。

医療社会学の分野では、「生物医療化」に対して相当な批判がなされている。これらの批判では、出産や悲しみ、老衰、その他の

高齢化に伴う自然発生的な影響をも含むより広範囲の人間の経験に、医療が介入するようになったことが引き合いに出される。慢性疾患の医療化は、個々のリスクの意識を限りなく高め、不必要な監視や、「病氣」の段階のみならず「未発症」段階をも対象とする医薬品や治療を用いた予防治療措置につながりかねない。⁽¹⁾

生物医療化 (biomedicalization) という用語は、フーコーの「生政治」(biopolitics) 概念の影響からか、ネガティブな印象を与えやすい。公衆衛生においては、社会や有害な産業ではなく個人への責任転嫁を指すこともある。⁽²⁾ だが、アームストロング⁽³⁾ ハフのみた日本の場合の考察は、高齢化社会において慢性疾患の取り扱い件数の増加に伴い必要となる可能性のある教育や交流について、我々に考えるよう促すものである。

現に診療現場の向こうの日本社会では、小学校での規則的な排便に関する学校教育から、子供たちに衛生やエチケット、栄養について教える給食プログラムにいたるまで、あらゆる社会の場での健康やかからだに関する教育が特徴的だといえよう。⁽³⁾ 今やコロナ教育の最前線にある保健所は、国民に慢性疾患の予防教育を行い、また教育のための入院、いわゆる教育入院は珍しくない。家計簿や産婦人科患者に必要とされる母子手帳を含む主流の記録管理方法は、多くの患者に必要とされる自己測定に示唆を与えてくれる。二〇〇八年には、厚生労働省がメタボリックシンドローム(糖尿病、

心血管疾患、脳卒中のリスク上昇に関連する一連の症状)のスクリーニング・プログラムを施行しており、健康管理のみならず、人々の意識の向上と「生活習慣改善」を推進している。

健康をめぐる交流は、日本の社会生活の至るところで生じている。⁽⁴⁾ こうした現象は、「生物医療化」(biomedicalization) というよりも、むしろ「生物社会化」(bio-sociality) とする方がより適切かもしれない。生物医学が行き過ぎた領域も確かにあるが、この研究では、個人に健康と健やかさの責任転嫁をするアメリカ型に限界があることをも浮き彫りにしている。本書は、国際的にはほとんど知られていないシステムとはいえ、グローバルヘルスにおいて益々重要となりつつある日本の医療を知る手がかりを提供してくれる。

注

- (1) ホワイトマーシュ、二〇一三年
- (2) ベンソン、キルシュ、二〇一〇年
- (3) ボロヴォイ、ロベルト、二〇一五年
- (4) ボロヴォイ、二〇一七年

参考文献

- Benson and Kirsch 2010
- Benson, Peter, and Stuart Kirsch. "Capitalism and the Politics of Resignation." *Current Anthropology* 51:4 (2010), pp. 459-486.

Borovoy 2017

Borovoy, Amy. "Japan's Public Health Paradigm: Governmentality and the Containment of Harmful Behavior." *Medical Anthropology* 36:1 (2017), pp. 32–46.

Borovoy and Robero 2015

Borovoy, Amy, and Christina Robero. "Japanese and American Public Health Approaches to Preventing Population Weight Gain: A Role for Paternalism?" with Christina Robero. *Social Science & Medicine* 143 (2015), pp. 62–70.

Whimmarsh 2013

Whimmarsh, Ian. "The Ascetic Subject of Compliance: The Turn to Chronic Diseases in Global Health." In *When People Come First: Critical Studies in Global Health*, eds. J. Biehl and A. Petryna. Princeton University Press, 2013, pp. 302–324.

(翻訳：片岡真伊 (東京大学東アジア藝文書院特任研究員))

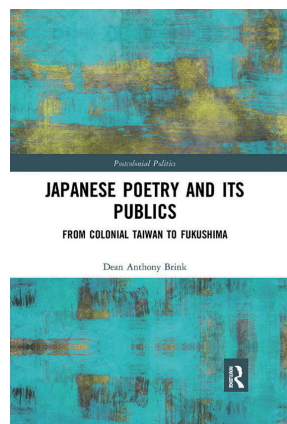
* 本稿は *Japan Review* 35 (2020) に掲載された英文テキストの日本語訳である。

ディーン・アンソニー・ブリנק

『日本の詩と公衆——植民地台湾から3・11まで』

Dean Anthony Brink, *Japanese Poetry and Its Publics: From Colonial Taiwan to Fukushima*

ローレンス・E・M・マン



Routledge, 2018

詩を学ぶことに何の意味があるのだろうか。この問いは、思索的な幾多もの学生たちの頭をある時期一度はよぎったことのある問いであろう。また、文学研究者たちに対して挑発的な同業者たち、おそらく自身の研究分野が社会の実益に役立つものと考え、またはデータに突き動かされ研究を行う研究者たちから、時折浴びせかけられる質問でもある。二〇一五年に日本政府が国立大学に課した難題、すなわち「社会のニーズをさらに見据えた」⁽¹⁾人文系の学部の見直しについてまわる問いの一つかもしれない。

この問いに対して『日本の詩と公衆』が出した答えは、複雑かつ洗練されたものである。しかしその答えを短くまとめ抽出するならば、「詩には一般人の関心の有無にかかわらず、社会に影響を及ぼす力がある」といったサウンド・バイト（繰り返し使われる標

語的なフレーズ）になることだろう。それは、「言葉は、支配形態に従う、または闘うために（…）人々を行動に駆り立て、自身の世界を特定のモダリティで捉えるよう結束させることのできる意味作用の表象である」⁽²⁾という、ハリー・ハルトウーニアンによる言説とイデオロギーの関係性についての説明を彷彿とさせる。

『日本の詩と公衆』の全体としての目的は、台湾で制作された日本語の詩歌を、権力とアイデンティティにかかわる植民地主義およびポストコロニアル言説、さらにその向こうにある環境批評やメディア理論にまで拡張することの可能な、洗練された解釈の枠組みに関連・位置付けることにある。著者のディーン・アンソニー・ブリנקは、詩歌は政治的レトリックやプロパガンダへの転用・使用が可能との主張を展開する。そして、多様かつ動的なポスト

コロニアル・アイデンティティ、過去と現在の不正に対する民主主義的抵抗、そして脱構造主義者たちが「享楽」(jouissance)と呼ぶ過剰な快楽中心主義の一種を表現するのにも利用が可能だと論じる。詩歌はそれゆえ、単純な芸術的抽象として扱われるべきでなく、むしろ社会や政治を具体化し、互いに依存する言語機能で構成されているものである。短歌や俳句、川柳などの日本の伝統的な詩の形式は、間テキスト性の様々な母型に依存しており、特にそれらが本書で紹介されている優れた詩人たちの手にかかる、社会批評のツールとして並外れた可能性を発揮するのだ。

本書は全六章から成り、加えて謝辞や序章、詩歌の参考資料、索引で構成されている。第一章・第二章は、台湾における帝国主義下の事業を支援するため、日本の古典の詩型を通して展開された間テキスト性の母型に関するブリンクの主張の解説に始まる。第一章では、植民地における自然を仮想化し、日本による本島の領有を記号化する手段としての、季語や歌枕などを含む日本の古典的な比喻表現や修辭法の様々な応用、脚色を描き出している。第二章では、植民地時代の台湾において日本語詩人たちが自身を位置付けるのに用いた複雑な力学や間テキスト性の枠組みを、新聞に掲載された正月の詩歌の事例研究を通じて探究している。非伝統的な環境における伝統的な詩型に支えられた間テキスト性の様々な母型の活用が拓き得る可能性を浮き彫りにしており、植民

地時代の文脈における日本の詩歌を学び、研究する意義の確固たる論拠となっている。これが本書の軸となる主張のひとつである。

第三章でも引き続き、日本側のレトリックやプロパガンダにおいて、伝統的な詩の形式が果たした役割について論じている。ここでは、最悪を極めた対中・対アジア侵略期、すなわち太平洋戦争前夜からその戦中期に至るまでを取り上げ、何名かの詩人の作品の分析を通じて、植民地計画に間テキスト性の網が拓き得る可能性について論じている。さらに、新移民排斥主義者の詩人の一部を取り上げ、その作品の神話的ヴィジョンの考察を通じて、その帝国主義にまつわる情動的な語りを生成し、支え得る可能性についても論じている。

第四章・第五章は、戦後期における台湾歌壇の活動を調べ上げた優れた二章となっている。収集されたデータの一部は、著者自身が歌壇の一員であることにより入手されたものである。この考察は、最初は日本人に、そして後には中国国民党により各々の関心が周縁化された日本語教育を受けた創設メンバーから、取り入れられた日本語の声を通して新たなアイデンティティを主張する若い世代の台湾人にいたるまで、戦後期に台湾に根ざした歌人たちの共同体が多様性に富んでいたという理解をもたらし得る。ベネディクト・アンダーソンの提唱した「遠距離ナショナルイズム」(p.138)のような解釈の枠組みを想起させる第五章は、3・

11以降に創作された詩歌を特に重点的に考察している。これらの台湾歌壇に関する章で浮上し、十分な答えを得ることのできない疑問には、より若い世代の、つまり真のポストコロニアル世代による日本語での創作意義に関する問いが挙げられる。

第六章は、日本や台湾、そしてその他の言語の詩歌を専門とするブログを開設した詩人に関する二つの事例研究を通して、ポストコロニアル・アイデンティティの構築、そしてポストコロニアル的な修辭の仕掛けにおける帰属をめぐる問題の再交渉に関する記述で締め括られている。この章では、それまでの章で明らかにされた創作母体（マトリクス）の接触面の範囲をさらに広げ、ポストヒューマンをもその考察対象範囲に入れている。

ポストコロニアル時代における政治シリーズの一冊として刊行された『日本の詩と公衆』は、その政治的メッセージを率直に伝えている。あらゆる覇権者は、真つ向から攻撃されるものだ。例えば、一九三〇年代―一九四〇年代にかけての日本軍の侵略について、著者は次のように述べる。「私は、日本の中国での戦争は、残虐かつ隙あらばつけ入ろうとする帝国主義者が、内戦や多数の帝国主義者たちにより弱体化した国に対して行ったものであるとの本多勝一の見方に同意する」(56)と。台湾の政治家たちも、時折その批判の対象となる。「連勝文は、アメリカ型の新自由主義金権政治と中台間の経済統合の両方に突き進む中、人々のニーズ

に耳を傾けなくなつた中国国民党への反感により選挙に敗れた」(57)と著者は述べる。同じく3・11以後、「原子力の利益を守るため」(58)に動いた日本の政権も、そして「搾取的かつ利権に執着した」(58)東京電力の行いも、その厳しい批判に晒されている。

今日の自由民主主義において、植民地を拡大した時期の日本政府の行いに関する著者の意見に、異議を唱える人はほばいないことだろう。とはいえ、本書の率直な意見の示し方は、時に過剰な一般化に向かう傾向が見受けられ、テクスト、すなわち詩歌の主なテーマの解釈にも影響している。例えば、第一章では、徳川時代の日本は「中国の影に怯えていた」(59)とあり、また国学に刺激を受けた日本の詩の力の優位性に関するレトリックは「やや虚勢を張つたところがあつた」(59)との主張がある。なぜならば、「台湾でははるかに優れた漢詩を中国人が創作していたため」(59)とされているが、こうした還元主義的な見方には問題がある。中国人であれば、日本人より「優れた」漢詩や漢文を書くという考え自体が、民族主義的な言論により形作られたもので、この種のテクストの学識を損なうものである。本書で著者は、当然のことながら一貫して、日本語で詩作する台湾人たちに対する逆差別に異を唱える姿勢を貫いている。

同様に、第二章における新聞に掲載された現地の台湾詩人によ

る南京攻略戦の追悼詩の扱いについても、その説明が答える以上に多くの疑問が生じる。ブリンクにより「Even pine decorations are stood up/ to face the flag of the rising sun onto the Nanjing Wall 門松^やえも立ち上がる／南京城壁に昇る日の丸を見上げるために」¹と英訳されたこの詩では、「あらゆるものが任命された通り想像のファンタジーを演じるものとする持ち前の傲慢なユーモア」を表しているという。さらに説明は以下のように続く。「それゆえ門松は、台湾人にまでも体现させる傲慢さと、口にするのできない暴力の罪との両方を反映し、この詩において不気味な存在感を帯びている」(p. 75)。だが、いつどこでその門松は、こうした不気味な存在感を帯びるようになったのか。それは今日の台湾においてその詩を受容する際に生じたものなのか。あるいは一九三八年時点で生じたものなのか。詩人または読者は、そのたつた数週間前に、それらの罪が犯されたことを果たして知っていたのだろうか。著者はこの最後の疑問を答えずにいるが(p. 75)。² 実のところこれは重要な問いである。南京虐殺での許し難い現実を「傲慢に」歪めたものとしてこの詩を言い表すのは、我々が現在知る残酷な真実の一部をその詩人が内々に知っていたことを意味する。

結論としては、本書から学ぶべきことは多く、中でも詩歌が(時には腐敗した)政治的なレトリックとのもつれにおいても尚、繁栄し得ることを明らかにしたのは、本書の最も重要な貢献といえよ

う。この点において本書は、ジハード主義系テロリスト団のレトリックにおいてアラビア語の詩の伝統が果たす役割を浮き彫りにしたエリザベス・ケンダルに共鳴するような研究でもある。詩歌の言語とレトリックとの密な関係に焦点をあてた『日本の詩と公衆』は、レトリックの力を明らかにし、プラトンのように、その力が用いられた先にもまた、意識を向けている。結局のところ、ヘゲモニーの言論の支持、あるいはそれへの抵抗から芸術を評価する可否かを選択する力は、その批評家にかかっているのだ。

注

(1) グローヴ、二〇一五年

(2) ハルトウーニアン、一九八八年

参考文献

Grove 2015

Jack Grove, "Social sciences and humanities faculties 'to close' in Japan after ministerial intervention," *Times Higher Education* (14 September 2015).

<https://www.timeshighereducation.com/news/social-sciences-and-humanities-faculties-close-japan-after-ministerial-intervention>.

Haroonian 1988

Harry D. Haroonian, *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism*, University of Chicago Press, 1988.

(翻訳: 片岡真伊 (東京大学東アジア藝文書院特任研究員))
* 本稿は *Japan Review* 35 (2020) に掲載された英文テキストの日本語訳である。

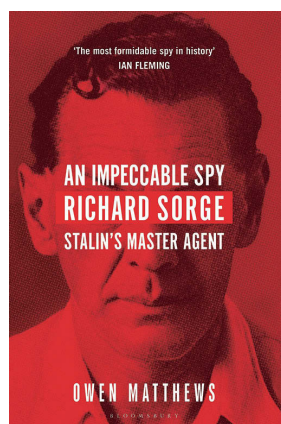
オーエン・マッシュューズ

『非の打ち所のないスパイ』

——リハルト・ゾルゲ、スターリンの熟練工作員』

Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent*

瀧澤 一郎



Bloomsbury Publishing, 2019

ゾルゲ本の分類

ゾルゲは、その知名度、評伝等の関連書籍発行数・部数等で、古今東西のスパイ群像の中で、一頭地を抜いた存在である。この知名度や「人気」を人為的に維持するため、またその「人気」に寄りかかった市場価値があるために、いわゆるゾルゲ本は今でも連綿と刊行されつづけている。こうしておおむね一九六四年以来、無慮数千（万？）点と言われる、宣伝頒布用小冊子のようなものから数巻からなる大部なセット本まで、大小様々なゾルゲ本がロシアをはじめ世界中で刊行された。

これらは大別して、二つのグループに分類されよう。第一が、ゾルゲを、世界最優秀、近世で最も偉大なスパイなどと持ち上げる、ゾルゲ礼賛本だ。全体の九〇パーセント以上を占めるであろう。

う。

第二は、ゾルゲを特に、偉大とも凡庸とも評点を与えず、彼の諜報報告を客観的に分析し、それが果たして、スターリン以下のソ連指導部の外交軍事戦略上の利益になったか、ならなかったかを冷静に判断する、あくセス可能なかぎりの一次資料に依拠した書籍もしくは論文である。礼賛本と違って、売れないし、発行部数も少ない。少数ながら、中間派とも言うべきか、第三グループも存在する。

さて、ここで取り上げたマッシュューズの『非の打ち所のない（欠点のない）スパイ』は、その表題のみならず内容からみても、礼賛本に属するものと言わざるを得ないであろう。この「非の打ち所のない」という言葉は、「彼の仕事は非の打ち所がなかった」と

した、ソ連亡命後に党専従の宣伝要員と化した元英諜報部高官キム・フィルビーの引用であるが、著者自身のゾルゲへの傾倒ぶりも、並大抵なものではなく、本書の結語とも言うべき最後の十三行にいつそう明らかである。

ソ連邦は公式にゾルゲを偉人として列聖の堂宇に祀った。しかし、ソ連にはゾルゲの銅像やゾルゲ本は多々あるが、自身の最も偉大なスパイに対する疑惑、無関心、究極の裏切りが実在したことをよく払拭しうるものではなかった。彼ほど巧みに、長期にわたりモスクワに仕えたソ連工作員はいなかった。ゾルゲの手になるスパイ網は、日独両国の権力中枢へのアクセスという点で近代諜報史に唯一無二であった。だが、彼が選んだ国家が最大の危機に瀕したとき、スターリンが醸成したバラノイア状況の下では、彼がせつせとモスクワへ発電した黄金情報は無視される定めであった。ゾルゲは人間としては短所もあつたが、非の打ち所のないスパイ、また、勇敢で、頭脳明晰、不退転のスパイであつた。彼の上司たちが、彼が身を捧げた国家の命運を左右する利害より自らの出世を優先するワイロ好きの小者であつたことは、彼の悲劇であつた。(傍点筆者)

著者のゾルゲへの痘痕^{あばた}も醫^いの岡惚れ^{さくほ}ぶりが露わな文章だ。「彼ほど巧みに、長期にわたりモスクワに仕えたソ連工作員はいなかった」とか「権力中枢へのアクセス」では「唯一無二」というのは言い過ぎだろう。^②

ゾルゲの「南進」情報がソ連を救った？

著作の冒頭は、著者が読者を引き込むために、腕に縊^よりをかけるところである。マッシュューズは、ここにあまねく知られたゾルゲ神話の一つである「ゾルゲの日本南進情報により、極東師団の西送が可能になり苦戦中のソ連軍が救われた」というストーリーを鼻息荒げて意気込むように張り出す。これが有名な俗説であり、多くの専門家から、否定されていることを知った上での幕開けの一章であつたのだろうか。

ゾルゲが、日本の対ソ進攻はない(南進)とモスクワに報告し、英明なるスターリンが極東から二六個正規師団を引き抜きモスクワ近郊に配した。この援軍が間にあい、首都攻防の帰趨が決まつた、という話がある。この「南進決定」情報も、実際は、それほど明確なものではなく、まだ、日本の北進(対ソ進攻)の意図が完全に消えたわけではない、とゾルゲ本人が留保を付けている。^③

一九四一年に極東から欧州地区へ、戦前編成の九狙撃師団、一機械化狙撃師団、一戦車師団が移送されたことは事実だ。各部隊

の配備先は、それらの部隊の師団史を見れば容易に確認できる。

ところで、ゾルゲ報告であるが、日本が九月六日に御前会議で採択した決定について彼が通報したのは、やつと九月十四日のことである。極東からの部隊移送は、九月初旬から始まった。たとえば、第三二師団は九月十一日、第二六師団はおおむね九月一日に移送を開始した。これも各師団史に書いてある。つまり、ゾルゲ報告とこれらの師団の移転とは何の関係もなかったのだ。

先人の著作に酷似

この労作にかけた著者の努力を否定するわけではないが、本書とその二十一年前に書かれたロバート・ワイマント著 *Sabini's Spy: Richard Sorge and the Tokyo Espionage Ring* (邦訳書タイトル『ゾルゲ――

引裂かれたスパイ』)を比較してみると、すぐ気付くのは、両書の章立ての酷似である。両書の第1章に当たる部分は、ともに「ゾルゲの生い立ち」、第2章は「革命活動からコミンテルン」、第3章は「コミンテルン専従時代」、第4章は「上海」、第5章は「日本へ」、第7章は「東京スパイ網立ち上げ」、8と9章は「モスクワ帰還」、10と10章は「花子との出会い」、11と10章は「オトとの親交」、という具合に両書の各章とそこで扱われるテーマが同じだ。5と6章などは、扱っている内容のみか、書き出しまで酷似している。

実は、両本ともに、F. W. Deakin and G. R. Story, *The Case of Richard Sorge*. London: Chatto & Windus, 1966 (邦訳『ゾルゲ追跡』一九六七)を下敷きになっているからだ。

両本を突き合わせて比較することは本論の目的ではないが、ざっと見てもこれほど類似点が目立つ。本の構成、内容においてこれほどワイマントに負っていないながら、マシューズはプランゲの著作は「グレイト」と評しながら、ワイマントのものは、ゾルゲについての「最新の英語本」という紹介だ。^⑤ ワイマントは日本に没入し、日本語をかなり使いこなした。マシューズの日本語力は、本書に散見される奇妙な日本語からもわかるように、それほど自家薬籠中のものとは思えない。

註

(1) ゾルゲ本の嚆矢である『愛情はふる星のごとく』は、一九四八年に刊行されベストセラーになった。ソ連は、日本など海外におけるゾルゲ人気を勘案し、一九六四年に忘れ去られていた非合法工作員ゾルゲをソ連邦英雄として国家宣伝に利用することに決定した。

(2) 卑近な例として、上記のキム・フィルビーはどうであろうか。彼はリクルートされてから「母国」ソ連に逃亡するまで三十年間ソ連工作員であった。逃亡時はM I 6における対ソ防諜の最高責任者、次期長官の有力候補でさえあった。彼を首魁とするスパイ網「ケンブリッジ五人組(六人組説あり)」は英王室内にまで浸透していた。その活動の全貌は未だ解明されていない。世界に冠たるスパイ王国ロシアである。永久封

印扱いの元工作員が、帰還・未帰還を含めてどれほどいるか、見当も付かない。ゾルゲは、ロシア当局と西側スパイ小説業界が熱心に持ち上げるほどの、「天才スパイ」でも、「近世最大のスパイ」でもなかったことは、今ではロシア内外の多くの専門家の一致するところである。

- (3) Асено Рихарда Зорге, неизвестные документы, Публикации, вступление и комментарии А.Г.Фесюна, Москва, 2000. С. 131, 132. (フエンユン編『ゾルゲ関連未公開資料集』一三二頁、一三三頁)

- (4) В памятни и славе (очерки истории Краснознамённого Сибирского военного округа) / [ком. авторов], изд. 2-е, испр. и доп. — Новосибирск, 1988. — С. 106—110. Крылов Н. И., Алексеев Н. И., Араган И. Г. Навстречу победе. Боевой путь 5-й армии. Октябрь 1941—август 1945. Москва, 1970 等を参照。

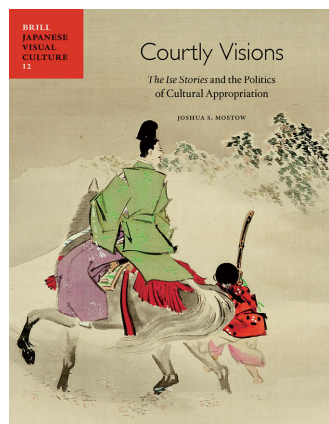
- (5) 本書、四一七頁

ジョシュア・S・モストウ

『みやびの幻想——伊勢物語と文化盗用の政治学』

Joshua S. Mostow, *Courtly Visions: The Ise Stories and the Politics of Cultural Appropriation*

ロベルタ・ストリッポリ



Brill, 2014

『みやびの幻想』は、『伊勢物語』（一〇世紀作・英訳名では *The Ise Stories* または *The Tales of Ise* として知られる）がその成立の後、数世紀のあいだ様々な個人や団体によりどう再解釈・隠喩・利用されてきたのか、換言すれば、どのように視覚的に転用されてきたのかを見事に追究している。

光沢紙に美しく印刷された百七十一点の挿絵は、その大半が大判かつカラー印刷で、図書館や美術館、寺院、個人蔵などの様々な資料から成る。これらを収録した本書は、一個の作品としても拔きん出ている。テキストと挿絵の両方について広範囲かつ詳細な分析がなされており、美術史に精通する読者のみならず、日本の詩歌の専門家、そしてジェンダーや受容論など幅広い問題に関心のあるあらゆる層の読者をも対象としている。

これほどまでに豊かな著作を、（編集部注・英単語で）わずか一千語では到底評価し得ない。『みやびの幻想』は、日本文学史・美術史上最も広く受け入れられてきた作品のテキストと挿絵両方の、視覚的受容の実相を解き明かそうと試みている。その享受において『伊勢物語』と類比できる作品は、『源氏物語』と『平家物語』に限られる。『伊勢物語』は時に、本来想定していた享受者とは全く異なる絵師や読者たちにより視覚的に転用されてきた。それらの絵画化は、一体どこから生じ、我々はそれらをどう理解することができるのだろうか。それらの絵は、どのような鑑賞者に向けて『伊勢物語』から視覚的に転用されたのか。そして、それぞれの制作者が身を置く異なる環境において、それらの物語は、どう機能してきたのだろうか。

本書の中核を成すのは、著者による現存する中でも最古の『伊勢物語』絵巻三本の分析である。これらの原本は、同時代、すなわち十三世紀頃に出来たものとされている。だが、三本の絵巻（最初の二本は断簡、三本目は十八世紀の写本）が、いずれも著しく異なることから、当時すでに多形態の視覚的転用が十分な発達を遂げていたことがみてとれる。モストウは、そのうちの最初の一巻『白描伊勢物語絵巻』断簡を第二章で検討している。この絵巻の白黒の簡潔な図像からは、女性の登場人物たちの心情や、女性の鑑賞者の関心事に特別な注意が払われていることがわかる。男性を見つめる女性の眼差しや女性の性的欲望の視覚的表現、眉目秀麗で貴族的な洗練さを兼ね備える男性主人公の顔貌が見出され、男性の作者による『伊勢物語』が、ここでは女性の読者のために解釈しなおされているのだ。二巻目の和泉市久保惣記念美術館蔵『伊勢物語絵巻』（「久保惣本」とも称される）は、第四章で取り上げられている。きわめて装飾的で、プロの絵師により制作されたこの絵巻は、白描絵とは全く異なる様相を呈している。「極めて豪華な様相、そして下絵の幾つかは明らかに奉納物としての機能を有することから、ある政治的主体により制作され、別のそのような主体に贈呈されるためにデザインされたという解釈が促される」（p.122）とモストウは分析する。久保惣本は、『伊勢物語』が廷臣たちにより幕府に対するのみならず、その他の廷臣たちに対して

も優位性を確立するための「文化資本の宝庫」として用いられていたことを示している。久保惣本の場合、持明院統の伏見天皇（一二六五—一三二七）を引き立てる役割を果たしていたのだ。三本目の絵巻『異本伊勢物語絵巻』は、第六章で検討されている。密教的な読みの可能性に結びつけられてきた異本であるが、モストウはこの解釈に異議を唱え、その理由としてこの絵巻が実のところ十三世紀のものではなく室町時代の絵巻であることを指摘し、従来の考察において見逃されることの多かった機知的でユーモアに富む挿画の特徴を挙げている。

本書で取り上げられている細部まで検討された興味深いテーマの中には、『隆房卿艶詞』（第三章・全訳は参考資料に収録）がある。『隆房卿艶詞』では、延臣・藤原隆房（一一四八—一二〇九）が寵愛し、『平家物語』にも登場する高倉天皇の後宮・小督を亡くした哀しみを表すため、『伊勢物語』の題材を視覚的に転用している。隆房は中でも『伊勢物語』の六五段で語られる在原業平、藤原高子、清和天皇の三角関係を用いて、己の心の内を表現するが、恋歌が詠まれた当時、小督と高倉天皇が存命で恋仲であったことを鑑みると、隆房の後宮に対する恋心の吐露は、奇妙なものに思えるかもしれない（宮廷がこの件を高倉天皇に対する冒瀆と見做さない理由については、同章において興味深い説明がなされている）。

本書では、数多くの学説に異を唱えている。例えば第一章では、

一部の学者たちが主張する『伊勢物語』の和歌が絵画から生じたという説に反論している。第六章では前述の通り、『異本伊勢物語絵巻』は十三世紀に製作されたものでも、密教的な読みの実践に結び付けられたものでもない、との論を展開する。私見によれば、

この本の最も魅力的な一章といえる第七章では、『嵯峨本伊勢物語』（二六〇八）が、すでに確立された標準的図柄（iconography）を反映したものではなく、むしろ新たな標準的図柄を作り出したことを論じている。この嵯峨本の広い流通が、江戸期以降の『伊勢物語』関連の文化生産に影響を与えたのだ。第八章では全く異なる『伊勢物語』の標準的図柄の生成、すなわち俵屋宗達（推定生没年・一六〇〇―一六三〇）とその工房、後に琳派とされたものたちによる制作に焦点を当てている。「これら二つの標準的図柄こそが、近代に至るまでの『伊勢物語』のイメージを占めているのだ」とモストウは述べ、『嵯峨本伊勢物語』が版を重ね続けたことにより「…」近世の日本人一人ひとりの「文化リテラシー」を形作る確固たる要素となった」と結論づける。と同時に、『伊勢物語』は、二〇世紀に入って日本でも国際的にも「典型的な日本」、日本美学の真髄として見做されるようになった琳派にとって、重要なトポス源としてあり続けた」と論じる（p.241）。

『みやびの幻想』では、視覚的な転用や再解釈、そして正典化（canonization）にまつわる魅力的な旅が展開されており、専門分野

にとつても重要かつ大きな影響を及ぼす労作である。著者の『伊勢物語』や日本の伝統詩歌、そしてその視覚表象の一举一動を必然的に取り巻く複雑な事情に関する見事な知見は、賞賛に値する。

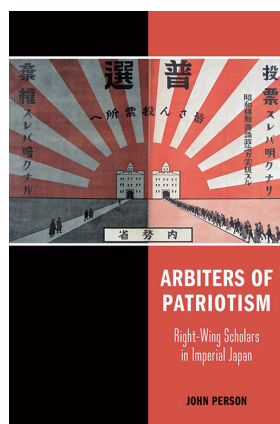
（翻訳：片岡真伊（東京大学東アジア藝文書院特任研究員））
* 本稿は *Japan Review* 35（2020）に掲載された英文テキストの日本語訳である。

ジョン・パーソン

『愛国心の裁定者——帝国日本の右翼学者たち』

John Person, *Arbiters of Patriotism: Right-Wing Scholars in Imperial Japan*

植村和秀



University of Hawai'i Press, 2020

本書は、原理日本社の三井甲之（一八八三～一九五三）と蓑田胸喜（一八九四～一九四六）の思想と行動を、彼らが活動した当時の日本の歴史的文脈のなかに位置付けようとする試みである。日本語と英語の一次資料や研究文献を駆使し、とりわけ、きわめて読解の難しい三井と蓑田の著作を丁寧に読み解いての研究は驚異的である。批判された人びとが狂信的と黙殺した彼らの思想と行動が、本書ではより広い文脈のなかに位置付けられ、それによって、近代日本の知的文脈へのより均衡の取れた理解が目指されるのである。

第一章で取り上げられるのは、三井甲之の主に文学的な活動である。正岡子規に連なる歌人として、三井は明治末期から、生の文学的探究に鋭意取り組んでいた。最先端の文学的・哲学的諸潮

流を日本のみならず世界にも求め、感情や宗教的体験を重視して、自己の内面生活の全体を表現しようと試みたのである。これは決して三井の孤立した試みではなく、仏教思想の再評価やドイツ思想の受容も含めて、大正生命主義とも呼ばれる当時の日本の大きな知的潮流のなかにあったものであることを著者は強調している（p. 26）。

この試みは発展して、日本への信仰に帰着した。人間の内面生活の文学的な探求が、人間存在の前提とされるネイションへの崇拜となったのである。もともと、三井の発展の理路は必ずしも分明ではない。著者は、三井のナショナリズムが根本的に個人的で情動的であり、しかも社会的で教義的であると、これらを言語や表現の力への信仰、帝国ネイションの運命への信仰というロマ

ン主義的な観念がつなげていると指摘する(p.61)。これは原理日本社史の見地からすれば、日本語の力や日本帝国の歴史的使命に対する信仰が、個人と社会、感情と教義を統一し、日本ネイションの一体性を各構成員に示現させるという結社の論理の成立経緯として理解できるであろう。もとよりこの論理は、現実にならなっていないと批判されて当然である。しかし結社の同人は、信仰の欠陥を認めず、誰かがどこかで妨害していると主張する。三井や蓑田たち原理日本社同人は、「真の愛国心の裁定者」を自認して(p.6)、信仰を共有しない他者を弾劾し続けるのである。

ただし著者は、このような原理日本社に特徴的な姿勢よりも、三井や蓑田が他の知識人と共有する部分や、日本主義(Japanism)イデオロギーと国家権力との微妙な関係の方に重点を置いている。三井や蓑田を同時代の知識人から孤立した存在としてではなく、世界の最先端の知的諸潮流に関心を持ち、日本の知的状況に連動する知識人として把握する一方、昭和戦前期の治安当局の調査報告書を追跡して「右翼思想犯罪」という言葉の使用に注目し、当局と日本主義者とが競合し対立する局面に注目するのである(p.7)。

第二章は、敗戦後の三井が民主主義に理解を示した挿話から始まる。著者によれば、三井は第一次世界大戦の顛末を踏まえて、大衆の政治参加が戦争の勝利に不可欠であると判断するなど、大

正期にも決して時代の潮流の外に立っていたわけではなかった(p.44)。それでは三井の思想の独自性とは何なのか。それは、経済的正義や政治的権利よりも道徳的正を重視し、その実現を学問の力に求めることにある(p.45)。維新とは「学術維新」なのであり、その主たる戦場は大学と論壇なのである。大学と論壇の維新は、三井にとつて知識人の責務であり、これは蓑田胸喜も同様である。学問の力を信じて政治的変革を主導しようとするこの意欲は、第五章で蓑田と三木清に共通する部分として把握されることとなる。

第三章からは蓑田が論述の主軸となる。三〇代の蓑田が戦闘的に突出したのは、マルクス主義批判の言論活動であつた。蓑田は三井とともに、ヴィルヘルム・ヴントの心理学をきわめて高く評価し、マルクス主義の人間理解や科学性には重大な欠陥があると批判する(p.76)。蓑田はさらに、ヴントに学んだヘンドリック・ド・マンのマルクス主義批判を翻訳して、ナシヨナリズムが大衆政治の新しい情動的な基礎になるとの主張も紹介する(p.76)。このような蓑田の活動が、マルクス主義の学生運動に悩む文部省との間に便宜的な協力関係を生み出していくのである。

ここで著者が便宜性を強調するのは、日本ナシヨナリズムの諸形態と国家権力との関係を、従来の研究よりも丁寧に解明しようとするからである(p.8)。著者は序論で、右翼と左翼の二項対立

を分析の前提とすることに慎重な姿勢を示し、右翼という日本語の歴史的文脈を踏まえて検討を行なう方針を明らかにしていた(㉙)。そのうえで著者は、この言葉が大正末から昭和戦前期に政治的対立軸として広く使われるようになり、原理日本社の一九二五年の設立は、まさにその時期に該当すると指摘する。その後、左翼運動の衰退とともに右翼急進主義への警戒を強めた治安当局が、取り締まりの対象として右翼という言葉を用いるようになり(㉚)、反革命の旗幟を鮮明にする原理日本社も当局と微妙な関係に立つことになった、とするのである。

第四章の表題は、それゆえ「右翼の監視」となっている。本章の主題は、天皇機関説事件から國體明徴運動へと進む政治情勢と言論空間の変化である。それは進歩的・自由主義的勢力の衰退であると同時に、「右翼思想犯罪」という言葉が当局によつて構成される時期でもある。これに対して、「愛国心の裁定者」を自認する「新世代の思想犯罪者たち」は、政府を幕府と呼び官吏を幕吏と呼んでその國體への忠誠に疑問符を突きつける(㉛)。上田閑照が戦時期の西田幾多郎の努力を日本主義者に抗する「意味の争奪戦」と呼んだことに倣えば、国家権力と日本主義者との間で裁定者の地位争奪戦が行なわれた、と言えるのかもしれない。

第五章で論じられるのは、西田を執拗に批判した蓑田と、西田の愛弟子である三木清が、それぞれ思想の力を信じて戦時期に行

なつた努力の軌跡である。政治を指導しようとする知識人の努力は、軍人や官僚にも支持者を得て、一九三〇年代にはなお持続していた。人間の全体も国家の全体も把握しうる総合的な原理に基づいて、複雑で流動する現実を把握し、日本から東アジアへと広がる未来を指し示すことは、蓑田と三木に共通する意欲であつた。しかし、この意欲は成功を収めず、一九四五年に三木は獄死し、一九四六年に蓑田は自決する。昭和研究会のみならず原理日本社の側でも、知識人の指導力は夢に終わったのである。

さて本書は、「右翼」という日本語の歴史的な検証を行なうと同時に、「右翼学者」として三井と蓑田を把握しようとしている。とはいえ、明治期や大正期の三井の活動は右翼という言葉が政治的に一般化する以前のものであり、合法路線を堅持する原理日本社の活動は、右翼思想犯罪を構成しないよう配慮したものである。本書の視座は、「右翼」という言葉を政治状況の中に限界付けることによつて、実はむしろ、日本主義という思想潮流を時代状況の中で再検証する方向に進みうるものではないか。

この視座は、著者が紹介する小松茂夫の見通し(㉜)を発展させうるものであろう。小松は、「伝統」すなわち「日本」を原理とするその思想構造のなかへ「近代」そのものを積極的に契機化していく」試みとして、陸羯南や三宅雪嶺、志賀重昂の日本主義を分析した。小松によれば、この政論的な日本主義の後に出現

した形態が、高山樗牛の美学的な日本主義であり、そのさらに後の形態が、三井甲之や五百木良三の歌学的日本主義である。それぞれ、「保守的、反動的、反革命的」な政治的機能を果たしつつ、「思想原理」としての「日本」が問われ続けたと小松は総括している。⁽²⁾

本書は、この第三の形態を分析すると同時に、昭和戦前期の戸坂潤による日本主義分析を前進させうるものでもあるように思われる。戸坂は「ニッポン・イデオロギー」を論じて蓑田の名を挙げ、無内容な日本主義にはあらゆるものが「勝手に」押し込まれると揶揄する。⁽³⁾さらに「文化統制の本質」を論じて、日本の「統制」が「積極的な対立的な構成」へ進んでいくと推測する。⁽⁴⁾一九四五年に獄死した戸坂に不可能であった分析を、著者は客観的な立場で進めているのである。

著者の視座はまた、ドイツのフェルキツシュ・イデオロギーについてのジョージ・モッセの分析と連動させられるように思われる。⁽⁵⁾同書の英語表題は、*The Crisis of German Ideology: Intellectual Origins of the Third Reich* である。他方、日本主義の思想と運動において、言論弾劾に熱心な原理日本社は建設的な側面の代表者とはいえないのではないか。大川周明や北一輝、神兵隊事件関係者などへの分析の広がり、官憲には従順な原理日本社との対比のために必要であるように感じられる。

さらに、知識人全体を視野に収める著者の関心からすれば、戸坂潤の再検討も可能なのではないか。高山岩男は昭和の初め頃、スターリン主義はマルクス主義と離れすぎているのではないかと戸坂に指摘して、「スターリンが言ってるから、それは真理なのだ!」と反論されたと回想している。⁽⁶⁾戸坂の立場での「狂信」もまた、現在の学問の取り組みべき課題であろう。

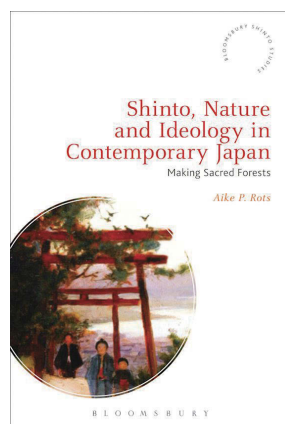
注

- (1) 上田閑照『西田幾多郎とは誰か』岩波現代文庫、二〇〇二年、二三八～二三九頁。
- (2) 小松茂夫『歴史と哲学との対話——同時代批判の視座を求めて』平凡社、一九七四年、七三頁。
- (3) 戸坂潤『日本イデオロギー論』岩波文庫、一九七七年、一四七頁。
- (4) 『同』、一九三頁。
- (5) ジョージ・L・モッセ、植村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳『フェルキツシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房、一九九八年。
- (6) 高山岩男『京都哲学の回想——旧師 旧友の追憶とわが思索の軌跡』一燈園燈影舎、一九九五年、八七頁。

アイク・P・ロッツ

『現代日本における神道、自然とイデオロギー
——鎮守の森をつくる』Aike P. Rots, *Shinto, Nature and Ideology in Contemporary Japan: Making Sacred Forests*

全 成 坤



Bloomsbury Academic, 2017

著者、アイク・P・ロッツは、ノロウエーのオスロ大学 (University of Oslo) に勤め、アジアの宗教・文化に関する研究を行っている。特に、アジアの中でも日本に焦点を当て、研究を行っている。いわば、日本の「宗教及神道」に関する研究者であるが、『現代日本における神道、自然とイデオロギー——鎮守の森をつくる』は、既存の時代区分による時系列的な歴史に従って機械的に羅列された神道論ではない。神道そのものが形成されてきた歴史性について、そこに内在する西欧性とかアジア性、または普遍性及び日本の特殊性がどのように織り交ぜられてきたのか、ということ掘り起こし、議論を展開している。だからと言って、西欧の宗教概念に押さえ込むことなく、または、日本における神道の異質性を打ち出すこともない。言い換えると西欧の宗教理

論とか、宗教の民族主義、または宗教の政治性をも視野に入れたつも、「西欧」言説に覆われた学知的植民地の問題をも克服する理論的な試みであるように感じられる。

この著書は、全九章で組まれている。それぞれの章立ては、第一章…序文、第二章…神道の定義、第三章…自然への愛、第四章…神道環境主義パラダイム、第五章…鎮守の森、第六章…過去の風景、第七章…未来のための森、第八章…東北のドングリ、第九章…親環境化、グローバル化、結論である。具体的に内容を見ていくと、すでに述べたように、著者、アイク・P・ロッツの視点には、宗教とか神道などの分析対象を、本質的に何らかの骨格を持つていることへの疑問から出発し、その歴史性を明らかにすることから始まるのが特徴である。まず、序文を紐解いてみると、

伊勢神宮で行われたG7の象徴的意義を皮切りに、その戦略的な場所性の意義を認めつつ、伊勢神宮に対する「認識の枠組」が持つている伝統及び意識的な馴れ合いへの分析を展開している。

つまり、神道そのものの歴史性を検証し、その神道のなかに含まれている宗教政治、環境学などを明らかにし、そこから生まれた森林パラダイムの論理などをも広げていく。ここで提示しているディスプレインは、真理は自明なものではなく、真理という地位を獲得するものであり、真理として地位が獲得された以後は、理論として意義が見失われることへの自覚を訴えている。この視点に立つて、社会で生産され、疎通され、意味構造の正当化が行われ、絶えまなく再構成されつつ、言説自体が増殖及び縮小されつつ、形式化されていくものだとみなしている。それは、テキスト・脈絡・権力関係性・歴史性へ焦点を当てる根拠にもなる。

著者アイク・P・ロツツは、タラル・アサド及びサイードを学びつつ、新しく神道環境主義のパラダイムの可能性を開くために、神道そのものがどのように変化を遂げ、その内的資源から神道の変化に主体的に向き合うための森づくり及び里山づくりなどへ参与し、学習者及び行為者としての転換を試みている。では、紙面の関係上、この著書の重要な章をかいつまんで、簡単ではあるが紹介しておこう。

第二章からは、近現代まで（一八六八―今日）の神道の多様な概

念を検討している。それは、伝統的なものとして概念化される現代史の脈絡化が行われる瞬間瞬間とその再概念化のプロセスを明らかにしている。つまり、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の歴史的脈絡の経路を系譜的にたどる方法でもあろう。同時に〈神道学〉そのものを構成主義的にアプローチし、いわゆる中立的な定義を取る立場を取ろうとする。言い換えれば、旅行案内書とか百科事典式または大衆言説として紹介される「土着」宗教的な扱い方に対する違和感を提示している。先史時代から存在し続け、多少の変化はあったにしろ、歴史的環境に適応してきた日本文化としての、古代的な伝統としての神道描写への伝統性、それを揺さぶるのである。〈神道と日本〉へ投影している歴史的認識、つまり、その単一的で統一的なまなざしに内在する〈現在の統一性〉を同時に問題化しなければならないことである。それは、もちろん、日本の土着宗教としてみなされ、大衆化された本質主義的な観念は、創られた神道論の出現によって、両方の理論の往来が行われていることを物語っている。つまり、神道そのものの意味と定義の境界は議論の対象になり続け、どちらかの立場を正当化する政治的なことからの脱却である。これは、神道そのものの価値中立的な立場と定義の不可能性を考慮しなければならないと述べて、それを克服することは、神道は何を必要として来たのか、神道は何によって概念化されていたのかを問うことである

う。だからと言って、神道そのものがただ歴史的な条件によつて構成された「構築物」であるとか、シニフィアン (significant) に過ぎないということでもない。かえつて神道そのものを通して、境界化されるその背景、条件、経験、慣行などを浮かび上がらせ、むしろ社会的・文化的・政治的性質を炙り出させてくれるリトマスであらう。

とりわけ、神道の論じ方を確認するために、本居宣長及び平田篤胤など国学、そして吉田兼俱などを分析し、神の伝統性の発見及び崇拜のプロセスを明らかにしている。または、神道そのものの起源を遡ることの論理がもつ視線を（アナクロニズム (anachronism)）と表現し、そこから変化と再創造の過程を明らかにする。それで、アイク・P・ロツツは、五つのパラダイム、すなわち帝国パラダイム・民族パラダイム・地域パラダイム・普遍的パラダイム・霊的パラダイムを設定し、それらの中からどのよう概念化が行われてきたのかを提示している。もちろん、このようなパラダイムも政治的・歴史的な条件によつて発展しつつ変改してきているし、それは時期的にも一つの時代に限られるものでもなく、または、今も共存しているものであることを忘れてはいない。それらは相互補完の関係でもあり、お互い層位、矛盾、重複または結びつきも考慮されるべきであると述べている。このうち、帝国のパラダイムとは何を指すのか、一つ例として取り上げ

てみよう。明治帝国により、神道は、日本で公共のものであり、非宗教的な儀式であるとされたが、宗教の意味、つまり日本で再定義された宗教の規定設定方式と、その時に活用された宗教的範囲を検討する作業である。そのため、近代以前の日本社会を眺めつつ、宗教と世俗の間を縫う、宗教的概念として説明しようとしている。ところがそれには、天皇をめぐる非宗教的な儀式としての伝統、そこから日本の伝統性、原始的純粋性を成り立たせる概念を生み出したのである。これには、西欧宗教概念を成り立たせている信仰・救援・愛・個人利益などを具現する儀式そのものを担ぎ出して作り上げられているために、伝統とは異質のようにみえつつ、同時に、伝統宗教として成立しなおされたのである。それに加えて、著者は、日本の宗教学者である磯前順一の理論を援用し、神道が宗教ではない主張は、天皇と密接に関係している神道を、キリスト教及び仏教との競争から生まれたものとも関連付けて説明している。とりわけ、教理上の弱点を克服するために、神道教理の体系化を試みたが、それも成し遂げられなくなった。そのために、教理志向的宗教概念と神道みずからの実践志向の性格を両立させようとし、西欧宗教概念の範囲外へ神道そのものの位置替えを試みることになった、などと提示し、西欧宗教概念との混合及び分離のプロセスを説明している。その結果として、神道世俗主義が成り立つ論理へ結びつき、儀式イデオロギー体系の

完成を読み取る。神聖な国家の神聖な天皇の役割が結びつき、祖先神・お墓・祭祀などが特別な地位を獲得し、大衆の想像の中に住みついていったことを説明している。これこそが帝国主義的パラダイムであり、これは政治的な機能を失ったとしても、中身が完全になくなったことがないことを指摘している。だから神道は、日本国家の本質と結びつくのだが、これは脱領土的・脱歴史化を伴う神道をもつ日本と相関関係で成立していることを隠ぺいすることを浮かび上がらせている。

第三章では、五つのパラダイムと普遍的パラダイムの脈絡の間にグローバリズムの意味合いが内包されていることを改めて確認する。つまり神道環境主義パラダイムの一つの中心教理に焦点が当てられ、自然と環境の言説をあらためて確認し、その自然と環境がもっている世界的な言説を再確認し、そのパラダイムの要素がどのように結びつくのかを説明している。それこそが、新しい神道言説への挑戦であり、グローバリズムとの結びつきであろう。宗教環境主義の拡散は、仏教・道教・ヒンドゥー教などアジアの宗教に対する新しい解釈を生態的に持続可能にさせたのか、またはアジェンションしてきたのかを見せてくれている。それは、自然というものの解釈からはじまり、自然を人間に従属させたキリスト教的認識が、環境破壊を招いてきたことを述べたあと、自然と人間の相互依存的な観点をもっている東洋的観点をいかし、環

境破壊へ歯止めをかけるよう、自然に対する認識の変容を記述する。それには、禅仏教が人間と自然の関係においてキリスト教的認識の鏡像であるとか、西欧の人間中心主義を乗り越える方法として、禅のような代替及び全体論的な世界観を考慮することになったことを一例として把握している。ところが、このような世界観は、西欧の認識世界では理解しにくい〈文化的枝葉物〉とみなされ、西欧に広まりにくいとされる。それを乗り越えるために提示されるのが、環境の理論であり、そのためにプロト(proto)環境論を再考察し、現代的な意味として新しく置き換えている。この方法は、序章及び前章で展開した〈歴史的な文脈〉を新しく定義しなおすこと、または、その歴史化のプロセスをこまめに再検討する方法が、この章でも一貫しているといえよう。いわば、日本における自然愛という神話系譜を追跡するために、自然という概念の範疇及び理念とどう結びつくのかを検討する。つまり、自然というのは、文化概念に内在するものとして解釈され、それによつて解釈されたものであったことに気づいたことを明らかにする。それはかえつて、西欧の文化概念を超えたところから自然というものを考えるように促してくれたのであり、文化としての自然解釈ではなく、自然を環境の概念へと結びつける方向性を与えてくれたのである。つまり、自然環境と絶え間なく調和しようとする思想である。そして、神道環境主義パラダイムにおいて重

要な思想的背景を和辻哲郎から導き出してくる。いわゆる「風土」である。それをもって自然に対する、既存のパラダイムの限界を批判的にとる。つまり、自然に対する解釈は東洋と西欧とも、本質的な概念世界から抜け出ず、本質的な対立関係に基づいていることが背景に存在することを指摘する。それは、ややもすると現代まで引き続いていともいえる。ここで提示している本質主義とは、東洋というものの眼差しでもあり、自然への理想などである。そのような解釈から抜け出ることなしに、公式化された神道への社会化との関係性を捉えることはできないとみている。

第四章では、神道環境保護論者の深層的な内容、またはこのパラダイムの定義の特徴を検討している。そして、日本におけるこのパラダイムの大衆化がどのように行われていたのかを検討していく。このような日本のトレンドがグローバル化とどう接続していくのかを明らかにしている。これは、神道環境主義とも結びつくものであり、神道の役割をめぐる両極化傾向が統合的に語られるよう、争点の対話可能性を考えようとする試みにつながるとみている。そして、第五章では、神道の核心的な概念の試みとして、鎮守の森について集中的に説明している。特に、鎮守の森の概念とそこに含まれている意味を明らかにする作業から始まる。森を守る神の世界とも翻訳できると表現しつつ、神道と環境をつなげる言説の重要な概念としてとらえている。それは、戦後における

鎮守の森の再発見論理を系譜的に検討している。それが環境保存とどのように結びついていったのかを、日本の学者の言葉から確認し、その後神道学者と宮司との協業の動きを視野に入れつつ、神道関連文献で使用されている鎮守の森の意味変化に逢着する。つまり、鎮守の森は、ある特定のな一つの場所及び森だけを指すのではなく、日本の共同体の生活の中心場所と呼ばれていた神聖なる空間を呼称するようになる。これは、神社本庁が「法的制度の限界を克服」することを打ち出すための公共伝説論でもあるが、それには、理念の大衆化が伴われた。または、森林研究と保存のために努めた森林研究協会の役割も大きかった。それは、神聖性を保っているときみなす古代環境認識の表れである神体など、それがアナクロニズム(anachronism)的であるにもかかわらず、西欧の森林文明論と反対の意味のユニークな森林論を導き出すことを可能にした。この分析こそ、森林崇拜の理念的構図を再構成し、鎮守の森再建活動が持つている神聖空間創造の意味合いを探し出せるのである。第六章では、やはり、神聖空間の生成過程の究明である。場所の神聖化には、禁忌及び崇拜が作動されるが、そこには神の肉体として森林の定義などが付随してくる。そのため、必ずしも神聖なる性格という実体的な経験ではない。これには、やはりエリアーデの理論などが援用された。場所の神聖化の過程は、政治的及び経済的現実と密接に結びつくものであり、所有の

概念と結びつく傾向も濃厚である点に注意を喚起させる。そして、最後に、第九章では、伊勢の森を探検する。それは、今まで展開してきたように、伊勢が歴史の中でどのように伊勢神宮へ収斂されていくのかを検証する。伊勢神宮が日本で重要な、もつとも古い神宮として知られていることを認めつつ、内宮と外宮の歴史性を説明する。中世時代の神崇拜の発展との関係及び土着、仏教以前の崇拜対象として概念化されたそのものの語りをも紹介する。それから巡礼地として大衆化されつつ、仏教またはそのほかの宗教的な礼拝要素を統合していることを検討している。

ここでは、仮ではあるが、古代神道に存在する環境的な要素も同時に入り込むのである。自然の永遠性とか生命論などが強調され、太陽または血統をも重視される天照大神の象徴性を確認し、それらと神道環境主義パラダイムの拡散を同時に考察している。伊勢が自然との調和及び共存が古代神道精神の典型として捉えなおされることへの驚きを素直に表現し、その認識の獲得の背景を探る。つまり、それは、ある種、尊敬と感謝の認識の喪失の結果として、環境の問題が道徳とか文化の世界へ縮小され、自然に対する神道の見解が、環境的变化そのものへの寄与方法を考えるべきだとみている。国際的な神道環境主義は、過去の帝国主義と分離させ、神道の環境への貢献を大衆化しようとする。それには、国際的な神道言説の脱政治化及び民族主義的なアジェンダーの隠

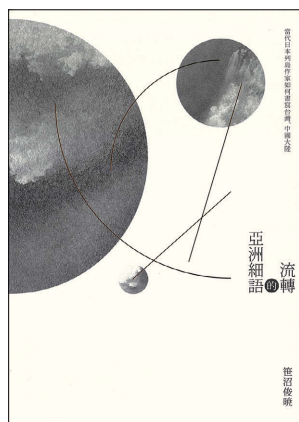
ぺいのための精緻なグリーンウォッシング (greenwashing) に見える恐れを指摘している。ポスターのイメージ使用方法とか、自然の描写方法などに含まれる両面性を意識すべきであろうとし、今日を見る重要なヒントを得ようとする。遠い古代を想像し膨らんでいくイメージが、世界化の再構成が必要とされる現在にアイデンティファイする際に作動する影響それ自体を考慮すべきであるとみている。相反するように見えるが、これは同時に進行されるファクターであることを考え、神道の世界化のパラダイムを考えることの意義の根源を再び考え直すべきであると、アイク・P・ロッツは、この著書で訴えているようである。

笹沼俊暁

『流転するアジアのささやき——現代日本列島作家は
如何に台湾、中国大陸を書いたか』

笹沼俊暁『流轉的亞洲細語…當代日本列島作家如何書寫台灣、中國大陸』

丸川哲史



游擊文化、2020年

著者、笹沼俊暁は一九七四年生まれ、日本文学を専攻し、国内でも成果を上げて来た研究者であるが、近年では台湾の大学で日本文学を教えるポジションを活用しながら、本書（中国語文）を書き上げた。私も似た経歴を持つ人間として——日本文学で修士号取得後、一九九〇年～九三年台湾にて日本語教師、その後台湾文学研究、中国文学研究を志す——興味深く本書を拝読し、このような研究者が出て来たことに大いなる希望を感じた。本書評の進め方としては、まず本書のメリットを紹介し、その上で、私の観点から補充していくこととする。いわば同志的存在とも言える同氏とともに、今のアジアの中で生きること、なかでも東アジアの中で人文研究者として生きることの喜びと苦しみの核心部分を掴みだしてみたい。

さて本書、そして著者の立ち位置を大雑把に紹介してみたい。前提となるのは、日台／台日の間で、一九九〇年代以降に広がった台湾独立運動系統の一部と日本の右翼文化人が合流し、日本の植民地統治の歴史について賛美するような文化的キャンペーンが出て来たこと——まず、これについて危機意識が持たれている。そして、そういった文化的キャンペーンの成立が何を契機にして成立したものであるのかについて、学問及び文学評論の立場からの脱構築を試みること——一応、このようなまとめ方が可能かと思う。このように概括するのは、本書が取り上げる対象として、司馬遼太郎が九〇年代前半、李登輝と対談したことを一つの契機として植民地台湾の経験とその痕跡を紹介した事績に注意を傾けていることが挙げられる。ここで告白すれば、私の問題意識の発

生とまさに軌を一にするところがあるのである。

さて、本書は、上に記した司馬遼太郎も含め、丸谷才一、邱永漢、陳舜臣、船戸与一、津島佑子、リービ英雄、温又柔など、世代的に多岐にわたる作家を扱っているが、笹沼の視野はさらに歴史・地政的な広がりも見せている。例えば、沖縄文学を起点として「日本」の自明性にメスを入れるような試み、また論述の所々に朝鮮・韓国文学にかかわる知見を参照枠として取り入れていることなど、(現代中国文学に関する言及の少なさはあるものの)九〇年代以降に発展したところの、日本文学研究の土台に対するアジヤ的視点からの再検討という課題に真摯に応えようとしている。

その上で、本書が最も問題にしているのは、結果として日本社会は、植民地台湾へのノスタルジーを温存して来てしまったという点、その原因でも結果でもあるところで、民主化が進んだ後の時代において「観光客」として訪れた二度目の台湾との出会いがあり、畢竟、いわゆる冷戦期台湾の捉え方が甘くなっている、という日本側の脈絡である。ここで、日本人一般が台湾認識において軽視して来たモメントを挙げるなら、それは笹沼が言うように「戦後」、「冷戦」、「中国」、「米国」、そして「外省人」(一九四五年以降に大陸中国から移り住んできた人々を指す)ということになる。それらのキーワードは翻って、戦後日本における日本人の自意識が排除して来たものでもある。なかでも、「冷戦」こそ最も重要な

キーワードとなるはずであるが、それは現在との対応関係として過ぎ去ったものとも言えないところが、まさに今日の台湾を捉える難しさであろう。台湾と大陸中国との関係は、元より国民党が統治する台湾と大陸中国を統治する共産党との対立としてあったものの発展形であり、九〇年代後半からは、さらに「台頭する中国」に直面する台湾の人々の政治的選択の困難さとして立ち現れているものでもある。形容すれば、グローバル化の中での大陸中国との経済的関係の接近が為される一方、しかし政治的には主に米国の動きも介在して「新冷戦」という呼び名も使われるなどの厳しい状況が続いている。そういった昨今の状況に分け入る上でも、前期冷戦とも呼べる一九四〇年代後半から一九八〇年代までの四十年ほどの時期の台湾について考える必要がある——このことを著者は何度も訴えかけるのである。すなわち先に述べたように、日本社会一般の植民地台湾へのノスタルジーはまさに、戦後における過酷な、日本のそれとも違う台湾的「冷戦」への無理解から来るもので、翻ってそれは、日本人そのものがいまだ「冷戦」そのものから抜け出していないことの証左でもあるということとだ。

その意味からも、戦後(冷戦期)台湾における家族の記憶を元手にして執筆活動が続けている温又柔や、また幼少期に台湾に住み、米国政府や国民党政権との関係を濃厚な記憶として担保し、

その記憶を手放さないリービ英雄の論述を重視することは、本書が孕む必然性そのものであらうとも思われる。さらにそのリービがむしろ大陸中国（とりわけ現代中国の農村部での展開）へとその関心領域を広げていることは、極めて貴重でありかつ、チャレンジなことであると認め得るし、この部分について笹沼が関心を示しているところにこそ、まさに本書の特質が現れている。

以上のことを踏まえ、私が受けとめたところの、本書の最も卓越した部分として、津島佑子の労作『あまりに野蛮な』への読解がある。ざつくりと内容を紹介すると、それは、日本植民地統治時代に台湾に植民した日本女性が間接的に霧社事件（一九三〇年に起きた台湾の山地先住民の総督府統治への蜂起事件）を経験したことから、「現在」を生きる女性主人公が台湾の山地先住民地区を訪れ、精神の解離状態に陥った事績とが、前者女性の遺した手紙によって結び付けられるというストーリーである。そこで笹沼は、『あまりに野蛮な』に対し、日本植民地統治の不合理と植民者として生きることの不安が、ジェンダーの観点から、批判的・抵抗的に語られている点を評価しつつも、別のアプローチからの批判を企図するのである。それは、この二人の主人公を繋ぐ植民地言説として、結果的に帝国日本の「南進政策」に掉さした柳田国男の「海上の道」に象徴される文脈、つまり日琉同祖とも繋がってしまう南方幻想が活用されていることを指し示したのである。そしてま

た笹沼は、このような南方幻想というものの、植民地期への潜在的ノスタルジーが温存されたのも、そもそも二人の主人公の間に横たわる戦後台湾の「冷戦」への把握の足りなさによるもの、と結論づけるのである。この部分はまさに、研究者でなければ突き止められない読解であり、その展開であると言える。この指摘に関して、書評者は、学問の力というもののまだ有効なことを確認し、希望を感じた次第である。

その上で最後に補充したい観点は、著者も含めて台湾を語る際に、「中国」、あるいは「大陸中国」というカテゴリーを扱うことの困難さである。つまり、ここで書評者が言いたいのは、「中国」の前に「現代」をつける「現代中国」の意義とその歴史性についての検討である。これは本書において必ずしも明示されていないものの、実は展開されている論点でもある。その前提として、一般的に日本社会においてまず「古い中国」への愛着として残存するものがあつたわけであるが、「現代中国」とはまず、「古い中国」を克服するために展開されたものであり、またそれは結果として、「革命」を通じて追及されて来たものである。その反面、日本において中国の「現代性」はどのようなものとして把握されて来たのか。一つのサンプルとしてあるのが、たとえば司馬遼太郎が示したような中国認識である。司馬は近代主義者として、事ある毎に近代化に立ち遅れた「固陋の中国」を批判し続けていたと

言える。しかし、中国内部における「現代中国」とはそのような日本人が抱き得る近代主義的な視野には収まらないものであった。話はやや込み入るが、ここでいう「現代中国」とは、もちろん清末の改革者たちも含むものの、またその後の国民党が目指した「現代中国」、そして共産党が目指した「現代中国」をどう位置付けるか、という問題性において現前して来たったものである。冷戦期台湾において最も大きな問題だったのは、この国民党と共産党が競争した「現代中国」の「現代性」をどう評価するかと言う問題であったが、この問題性を豊かにする契機そのものが「冷戦」の暴力によって抑圧されてしまった。要するに、この中国の「現代性」への考察を抑制し、二項対立へと単純化したものこそ「冷戦」の効果であった、ということになる。ここで書評者が言いたいのは、国民党が破れて共産党が勝ったということなどではない。むしろ、今日目前にしている共産党の「現代中国」は、共産党が目指した革命の失敗の上にあるもの、と私などは考えている。もちろん、もう一方の国民党の「現代中国」が成功したわけではないものの、それが何であったのかは今でも十分に考察に値するものであることは言を俟たない。

このような文脈で、書評者は自身が研究者としたかかわった台湾文学について、戦前の台湾文学は、多くの部分として日本統治の内部に組み込まれてしまったものと考える一方、戦後台湾にお

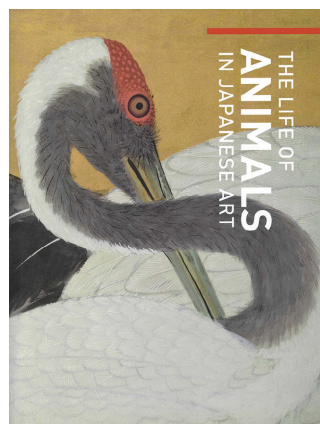
ける台湾文学は、以上で述べた「現代中国」を造ろうとしてそれが失敗、あるいは抑圧されることとなった「冷戦」に内属するものとしてあった、と考察している。その意味で、本書に対する批評として、そういった冷戦期台湾の現実の中で苦しんだ台湾文学の担い手、例えば陳映真などへの言及も必要であったのではないか、と思う次第である。

とは言え、本書が書かれた意義は言い尽くせないほど大きい。日本語に翻訳され、日本で出版されることが望まれる。

ロバート・T・シンガー、河合正朝編
『日本美術に見る動物の姿』

Robert T. Singer and Kawai Masatomo, eds. *The Life of Animals in Japanese Art*

白石恵理



Princeton University Press, 2019

なぜ、私たちはこんなにも動物が好きなのだろう。ちなみに、評者は猫に目がない。いや、なかには特定の生き物は嫌い、苦手という人も多いが、とりあえず日常は動物であふれている。自然界では生態系破壊が深刻化する一方で、マンガやアニメ、ゲームのキャラクター、ぬいぐるみ、マスコット、アクセサリー、食器や衣類や文具・雑貨の模様、イラスト、菓子のにいたるまで、世の中は哺乳類・鳥類・魚類・爬虫類ほか想像上の生き物を含め、さまざまな動物の表象で埋め尽くされている。先端技術を駆使したロボットさえ、多くが既存の動物型である。本書がいうには、特に日本ほど、長きにわたり動物の描写に対して情熱を傾けてきた国はないそうだ。

紹介のタイミングをやや逸してしまった感はあるが、新型コロナ

ナウウイルスが世界を覆う直前の二〇一九年、アメリカで、*The Life of Animals in Japanese Art*（日本美術に見る動物の姿）と題する大規模な日本美術展が開催された。国際交流基金が共催し、東京国立博物館協力のもと、日米の専門家チームが企画構成に参画して、首都ワシントンのナショナルギャラリー（National Gallery of Art）とロサンゼルス・カウンティ美術館（Los Angeles County Museum of Art）の二か所を巡回している。本書はその図録だが、四四四ページ、オールカラー、厚さ三・五センチの大型ハードカバーで、どちらかといえば図鑑の態である。表紙は布張りで箔押しという贅沢な装丁は、おそらく大学や公共図書館での末長い利用を前提に編さんされたものだろう。

動物をテーマにした展示自体は、日本内外でよく見られるが、

五世紀から現代までの千六百年という長いスパンで、日本の芸術作品から動物の表象だけに焦点を絞った展覧会の開催は、米国では初めてという。編者の一人である河合正朝は序文で、「日本美術に見える自然との関係性や動物への畏敬の念は、ヨーロッパや中国のそれとは異なる」と述べる。ヨーロッパの美術では、人体が最高の美とされ、中国美術では、壮大な自然を描く風景画が最も尊ばれるのに対し、日本美術では、「自然と一体となった動物や植物が、一般に人間との関係性のなかで描かれる」。そして、「人間と動植物の有益な共生という理想的な関係性こそが、日本美術を理解するうえで鍵となる要素の一つ」だと説く。日本美術と動物といえば、従来、中国を起源とする「花鳥画」の系譜が語られがちだった路線とは異なるコンセプトが、ここでは提示されている。

本書（すなわち本展）の特徴は何といつても、幅広い作品の選定と、時代やジャンルを越えたユニークな配列にある。取り上げる作家は、室町期以降だと雪村周継、伊藤若冲、円山応挙、長澤蘆雪、葛飾北斎、歌川広重、歌川国芳から、岡本太郎、草間彌生、三宅一生、森山大道、奈良美智、村上隆、束芋^{たばいも}、チームラボまで。ジャンルも、彫刻・絵画・漆芸・陶芸・金工・織物・版画・写真・服飾など多岐にわたる。約三百点の出品作のうち、日本の所蔵品は半数を超える約百八十点で、その多くが国外では初出展となった。

図版のトップページがまず意表を突く。登場するのは、赤・緑・黄色をベースにおなじみの水玉模様を配した、草間彌生作の三体の犬のオブジェである。そしてそのページをめくると、今度は古墳時代の埴輪の犬が出現し、嫌が応にも両者を対比せずにはいられない。参考までに展覧会の紹介動画を見ると、会場一室の中央に、三宅一生デザインの動植物をモチーフとしたプリント作品を着たマネキンが屹立し、その周囲を江戸期の画人・曾我蕭白の「群仙図屏風」に想を得た村上隆の極彩色のアクリル作品が華やかに取り巻いている。このように自由な発想の展示デザインは近年、日本国内の展覧会でも見られるようになってきた。「日本美術史」の扱う範疇も語り方も新たな時代に入ってきており、本展もその一つといえるだろう。他方、「動物と古代の有力者」に始まり、「十二支の動物たち」「日本仏教における動物」「禅の世界」「神道における動物」「吉祥動物」「日本絵画における動物の起源」「武士と動物」「動物と装飾芸術」「動物と四季」と、各展示コーナーのテーマはいったって教科書的で、日本美術の初学者にとつては便利なガイドブックともなっている。一点一点の図版が高精細で美しく、拡大画像が多いのも魅力だ。

展示全体に占める着物と工芸品の数の多さは、アメリカでの鑑賞者の関心がそれだけ高いことの表れだろうか。着物は小袖、振袖、打掛、歌舞伎衣装を含め約三十点がそれぞれの色・文様とも

に詳細に紹介されている。特に、吉祥文である鶴と亀の艶やかな刺繍が強調されているのが印象的だ。それと同時に目を引くのは、印籠や根付など細工物の美しさである。拡大画像によつて、会場で実物を見るごとく、色や質感をじっくり鑑賞できる。たとえば、金銀の蒔絵で「狐の嫁入り」図が精巧に描かれた江戸期の印籠（メトロポリタン美術館蔵）や、象と天狗がお互いの長い鼻を綱で引き合うレリーフを金銀・色絵で施した刀の鐔（明治期、ボストン美術館蔵）などはとりわけ見事である。「象と天狗」とは面白い画題だと思つてみたら、原図の作者は幕末の浮世絵師・河鍋曉斎ということがわかり、これもうれしい発見だった。

本書にはほかに、近年の復刊により再注目されている一九六〇年代の二冊、『日本再発見 芸術風土記』と『神秘日本』所収の岡本太郎撮影によるナマハゲ等の記録写真や、据え置きカメラによつて野生動物のリアルな生態をとらえた宮崎学の作品が収録されていることも付記しておきたい。最後に、一つだけ残念な点としては、巻末の「参考文献」(Further Reading)について。挙げられている四十冊余りのうち、日本で出版された書籍は『クサマトリックス 草間彌生』展図録（森美術館・札幌芸術の森、二〇〇四年）のみで、ほかはすべて英語文献である。英語圏の読者対象とはいえ、日本の美術史家も企画に加わったこの機会に、ぜひ日本国内の豊富な成果から、もう少し取り上げてほしかった。言語に関する

る壁の厚さをここでも痛感する。

繰り返すが、本書の図版は極めて高精細で美しく、拡大画像により作品の隅々まで鑑賞することができる。また、コロナ禍にあつて画像のデジタル化はさらに進み、世界中の芸術作品がいまや手軽に自宅で楽しめるようになつた。なのに、美術鑑賞の醍醐味は、やはり実物と直接対話するに尽きる、という感をいっそう深くするこの頃である。今回のような美術を通じた民間交流が再び盛んになる日が待ち遠しい。

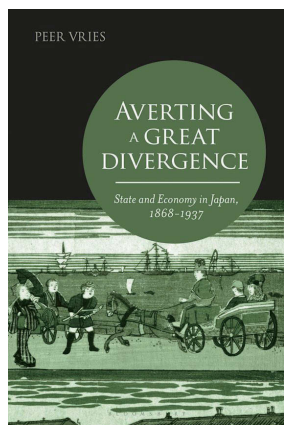
ピア・ヴリーズ

『大分岐の回避』

——日本の国家と経済、一八六八～一九三七年』

Peer Vries, *Averting a Great Divergence: State and Economy in Japan, 1868–1937*

フレデリック・デイキンソン



Bloomsbury Academic, 2019

International Institute of Social History（アムステルダム）所属のピア・ヴリーズ氏は元々ライデン大学出身（オランダ）の歴史社会学者で、本来、日本研究と無関係な存在である。にもかかわらず、精通している誰かが承知のようにヴリーズ氏の研究は学際的で広い範囲に及び、今では、近現代から現在までのイギリス、ヨーロッパ、そして中国の分析にまで手が届いている。

現代の経済成長の起源に特に興味を持っているヴリーズ氏はいわゆる Great Divergence（大分岐）論争に長年従事していて、この本はそれに日本の分析も加える試みと言つてよい。シカゴ大学の Kenneth Pommeranz の *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*（2000）以来、現代ヨーロッパと中国の経済的発展の格差の起源が活発に論議されてきたが、ヴリーズ氏

によると、中国とヨーロッパの違いがあまりにも大きい。西洋と非西洋の経済的分岐をより明確にするには非西洋国家でヨーロッパに最も近い日本に焦点を当てた方がよいという。

この本は総合的な著述でヴリーズ氏独自の研究に基づくものではない。しかし、彼の以前の著作物にも見られるように、ここでも特定の分野における文献の幅広い調査が行われている。ヴリーズ氏が日本の専門家ではないにせよ、この一冊は近代日本の経済史に光を照らす二十世紀初期から現在までの英語の文献を紹介するだけで大きな価値がある。実際、多彩な言語力に基づき、ヴリーズ氏はオランダ語、フランス語やドイツ語の文献までも扱っている。そして、歴史社会学者に相応しく、比較分析に細心の注意を払い、寛大に提示されている比較統計もこの本の大きな強み

の一つである。

グリーンズ氏は「大分岐」論争をめぐり、いわゆるカリフォルニア派 (Andre Gunder Frank, Jack Goldstone, Kenneth Pomranz や R. Bin Wong) が強調する環境に対抗し、国家の力に重点を置いてきた。つまり、西洋と非西洋の経済的分岐をより偶発的な要素に帰してきたカリフォルニア派に対し、グリーンズ氏は一貫して為政者の志向性を回復しようとしてきた。二〇一五年出版の *State, Economy and the Great Divergence* において、グリーンズ氏は西洋の速やかな発展は単なる偶然ではなく、近世から北欧、特にイギリスの為政者が国家の力を利用して経済的發展を意図的に図ったからだと言説している。

カリフォルニア派との論争において、近代日本の歴史が有用である。『大分岐の回避』の題名が言い放っているように、日本は西洋との「大分岐」を避けたアジア唯一の国である。しかし、中国と同じような環境的不利に直面し、例えば、イギリスと違い、石炭への容易なアクセスに恵まれていない。かなりの環境的不利を抱えながらも比較的早く先進国の仲間入りをした日本の例は、要するに、「環境」の説明力に大きな疑問を投げかける。と同時に、グリーンズ氏が好む国力の重要性の論議を裏付ける良い例でもある。

本書全体を通してグリーンズ氏の主な議論は、明治維新から戦争経済になった一九三七年までは、日本の発展がいかに国家の力に

より促進されたかという主張である。徳川の「organic economy」(農業経済) が第一次世界大戦以後の「energy economy」(産業経済) へと変換したのは、基本的には立派な近代国家が築かれたからだという(第一章)。その国家が近代的で一元化され、統合され、そして主権を強く行使したもので(第二章)、政治、軍事、イデオロギーの面ではかなりの指導力をはたし(第三章)、経済においては土地に課税し、産業に投資したことにより速やかな工業化を図った(第四章)。財閥に有利で労働者に不利な政策を追求したことで、資本主義の強固な基盤を構築し(第五章)、経済への総投資のかなりの額を政府が占めていたことにより、速やかな発展を容易にし、その発展の形状をきめ細かく決定した(第六章)。体系的に世界からアドバイザーやアイデアを導入したことにより、日本が最新の技術や流行に追いつくことが保証された(第七章)。

以上は日本の専門家から見ても馴染みの話で、最悪な場合は反動的な主張にまで聞こえなくもない。近代国家の役割を強調するためにグリーンズ氏が最新の研究を却下し、やっとな克服したと思われる近代日本が抱えてきた様々な汚名を復活させようとしているからである。例えば、Ronald Toby の *State and Diplomacy in Early Modern Japan* (1984) 以来疑問視されてきた江戸時代のいわゆる「鎖国」という概念。そして、日本の進歩的学者が長年主張してきた江戸時代のいわゆる「専制主義」。近代日本においては、同じ進

歩的学者が長年強調してきた明治憲法の「権威主義」や、日米貿易摩擦時代にChalmers Johnson 等が重視していた「開発国家」(developmental state) の学説など。要するに、江戸時代において日本が世界経済から切り離され、政治経済が非効率的だったからこそ、二十世紀初期に産業国家になったのは強力で権威主義的な開発国家が出来上がったからだ」とヴリーズ氏は主張する。

優れた比較主義者に期待されるように、ヴリーズ氏は日米貿易摩擦時代において流行していた「例外な日本」説を避けようと努める。実際、今までの多数の出版物のなかで、現代の経済においては国家の重い介入は例外でも逆効果をもたらすものでもないことをヴリーズ氏は強く主張してきた。にもかかわらず、社会科学者の規範的分析によるものが、『大分岐の回避』には既に消え去ったと思われた二分法が堂々と提示されている。グローバルヒストリーの研究者は最近、白黒の分析より多様性に満ちた世界像を描こうとしているが、ヴリーズ氏は東洋対西洋、前近代対近代や発展途上国対先進国といった明確な二分法に依然として執着している。同じオランダ出身でグローバルヒストリー研究者のJan de Vries 氏(元カリフォルニア大学バークレー校「米国」)は、工業化を漸進的、多樣的、地理的に広範囲の「プロセス」として述べてきたが(*The Industrial Revolution*, 2008) 、ヴリーズ氏は、工業化を依然として特定の場所(イギリス)で特定の軌道によって行われた特定

の「出来事」のように取り上げている。

『大分岐の回避』は保守派から見た過度のグローバルヒストリーへの反論のように読み取れなくもない。しかし、近代日本の経済史に光を照らす英語、オランダ語、フランス語やドイツ語の幅広い文献の紹介や日本の豊かな比較史として、日本通にも現代世界の専門家にも広く読まれるに値する。

楊儒賓

『1949 礼賛』

楊儒賓『1949 禮讚』

本書は、二〇一五年九月に公刊されるや、台湾の学界や一般社会において、大きな波紋や様々な反響を呼び起こした点でも、今なお記憶に新しい。なお、本書の構成は、以下の通りである。

まず、国際的にも著名な中国文学者・比較文学者で、ハーバード大学教授、台湾・中央研究院院士（日本の学士院会員にはば相当する）^{ワン・ドゥーウェイ}、次いで、著者の楊儒賓氏の大学時代の同窓で、趨勢教育委員会董事長・執行長の陳怡蓁氏^{チェンイーチェン}による「序二 黄土地與藍海洋（黄色の大地と藍色の海洋）」、著者自身による「自序」を巻頭に置いて、全体は四部構成からなり、「一九四九（年）論」、「一九四九（年）と（中華）民国の学術」、「一九四九（年）と（海峡）兩岸の儒学」、「一九四九（年）と清華大学」に大別される。多くは、比較的短い

伊東貴之



聯經出版、2015年

解説文やレビュー、講演原稿などからなり、そのためあつてか、文字どおり、極めてセンシティブな問題を扱い、複雑で多義的なニュアンスを含むものの、語り口は存外、平易でもある。多少の重複も、かえって読者の理解を助ける一面もある。

著者の楊儒賓氏は、一九五六年、台湾・台中市の出身で、台湾を代表する中国文学者、中国哲学・思想史家として知られる。国立台湾大学で学位を取得した後、国立清華大学中国文学講座教授などを経て、現在は、同・哲学研究所の教授の任にある。専門は、先秦時代の儒学から、宋明理学、東アジアの儒学と幅広く、『儒家身体観』（台北・中央研究院中国文哲研究所、一九九六年）、『異議の意義…近世東亜（東アジア）の反理学思潮』（台北・国立台湾大学出版中心、二〇一二年）などをはじめ、多くの著作や編著、訳書を陸

続と公表されて、極めて精力的に研究を展開している、斯界の權威とも言うべき存在である。ここで、私事に亘つて、甚だ恐縮ではあるが、実は評者自身も、台湾や中国での国際シンポジウムなどの折には、何度か拝眉の榮に浴して、著者の懐の深い、明朗な人となりと学問的な見識には、深い畏敬の念を覚えていた。また、甚だ僭越ながら、本書に接した最初の率直な印象や感想としては、著者のような学究肌の碩学が、動もすれば、時局的とも受け取られかねない、広く一般社会に向けた著作をものされたことに、些かの疑問や戸惑いを覚えたことも、正直に吐露しておきたい。しかるに、一読して、そうした懸念は忽ち払拭されて、むしろ本書は、古来、中華文明が育んだ学術・文化に対する、著者の深い敬愛や愛惜の賜物であり、ある種の情熱やパトスの所産でもあることが、改めて感得された。

さて、今更、喋喋するまでもなからうが、一九四九年という年は、台湾にとって、否、広く戦後の東アジアや世界の歴史においても、極めて重要で、象徴的な含意を有した、ある種の記号のような意味合いを帯びた年でもある。それは、国共内戦に敗れた蒋介石の率いる国民党や国民政府が、台湾に逃れて、中華民国政府を樹立した年であり、すなわち、中華民国の「遷台」ないしは「南遷」として、同時に、新たな台湾の出発点としても、歴史に刻印されている。著者によれば、中国史上で言えば、四世紀の永嘉

年間に西晋が江南に「南遷」して、東晋王朝となり、また、十二世紀の靖康年間、北宋が潰えて、南宋が誕生したことにも比肩する大事件であると考え、台湾や漢民族に即して見るなら、一六六一年、鄭成功がオランダ人を追放して、台湾を領有し、その後、漢民族の台湾への移民が始まったこと、一八九五年、日本に植民地化されたことに次ぐ、大きな歴史的な画期とされる。

そして、戦後台湾の歴史を繙くなら、まずは「光復」の後、まだ間もない時期に血塗られた経験、取り分け、二・二八事件やその後の白色テロなどは、永らく戦後台湾の傷痕として、痛苦を伴って記憶された。帝国日本に代わって、新たな支配者となった国民党政府を評して、「犬が去って、豚が来た」と揶揄する俗諺が生まれたことは、余りにも有名であるし、読者の中には、二・二八事件を題材とした、台湾を代表する世界的な映画監督・侯孝賢^{ホウシャオ}の『非情城市』（一九八九年、ヴェネチア国際映画祭グランプリ受賞）を御覧になられた方も、多いのではないかと思われる。その後の国民党の一党支配体制の時期における、「本省人」と「外省人」との間での様々な軋轢や葛藤、いわゆる「省籍矛盾」や多様な「族群」（エスニック・グループ）の重畳する政治・社会構造の抱える解決困難な諸問題についても、最早、贅言を要すまい。よく言われる台湾の人びと（特に本省人）の「親日」感情も、こうした反国民党、反外省人という、鬱屈した感覚の底流に加えて、大

陸中国との政治的な相剋や対抗といった文脈の中でこそ、理解される必要があることもまた、言を俟たない（呉濁流『夜明け前の台湾——植民地からの告発』社会思想社、一九七二年、また、龍應台〔天野健太郎訳〕『台湾海峡 一九四九』白水社、二〇一二年、何義麟『台湾現代史——二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社、二〇一四年など、参照）。

翻つて、この戦後台湾の傷痕とも言うべき「一九四九年」を「礼賛」するとは、如何なる仕儀なのであろうか……。慥かに著者は、本書において、基本的には、一九四九年という年について、また、この年に「中華民国」が台湾に「遷移」したことを肯定的に、ポジティブに捉えるべきであると提唱する。しかるに、著者が肯定するのは、その後、長年に及んだ国民党による権威主義的な統治や中華民国という国家なり、政治体制そのものではない。著者によれば、（台湾）海峡兩岸の人びとにとって、それぞれ異なる一九四九年の意義というものが存在しており、大陸中国においては、如何なる立場に立つにせよ、それはやはり主として政治的な意義であるのに対して、台湾においては、むしろ文化的な意義が大きく突出しているものと評価される。それは、「中華文明」や「中華文化」にとつての一九四四年という年、あるいは、それ以降の「台湾」が有した意義と言い換えても良い。周知のように、大陸における民国期の学術は、伝統中国の学術・文化の精華を継

承しつつも、五・四運動の精神の発揚などとも相俟つて、そこに西洋由来（日本を媒介や経由したものを含む）の学術やモダニティを接続・折衷して、新たな中国（文化）独自のモダニティを形成した。著者によれば、一九四九年以後の台湾こそは、かかる民国学術の達成やエッセンスの正統な継承者なのである。かくして、こうした中華文化の新たな資源や成果は、一九四九年以降、台湾での越境的な文化経験をも媒介としつつ、中国大陆や香港を含む、いわゆる「兩岸三地」において、一定程度、共有化された。また、その後の台湾にあつては、東西の文明や価値観を融合させた、新しい華人文化を生み出し、様々な紆余曲折を経ながらも、自由で民主的な国家や市民社会の建設を成功裡に進めつつある。

これは、一読して、台湾における国民党史観、ないしは、統一派からも、いわゆる本土派や（台湾）独立派からも、俄には受け入れ難い主張であつて、実際、その双方から、激しい議論が沸き起こった（——因みに、台湾の中等教育課程では、曾ては、中国史と外国史という括りで、自国史としては、主として中国大陆の歴史（十戦後の台湾史）が教授されていたが、現在では、台湾史との三本立てになつてゐることなども、戦後台湾の置かれた状況や推移を象徴的に表している。）が、逆に存外、好意的な意見も散見されるなど、何れにしても、多様な議論の呼び水となり、様々な波紋や反響を招く結果となつた。同時に、飽くまでも、学術・文化の局面に限つて

見れば、また、著者の表現に藉口するなら、自由経済・民主制度・生活様式・文化様式といった生活世界に即して見るなら、かなりの程度、正鵠を得た、存外、穏当な評定かとも見受けられる。

もつとも、評者としても、著者のすぐれて戦略的な卓見の提示の仕方に対して、大きな共感を覚えると同時に、些かの疑問を禁じ得ない部分も残る。まず、「中華文明」や「中華文化」の転変やその台湾への「遷移」をポジティブに捉えている以上、また、それを齎したのが、やはり「中華民国政府」の「遷台」ないしは「南遷」であつた以上、ある種の政治性とは全く無縁に、その成果を強調することには、些か勇み足の感が伴うのではあるまいか？……この点、むしろ独立派からの反撥の所以でもあろう。実際、戦後の台湾において、国家としての中華人民共和国や伝統文化を批判・破壊した文化大革命との対抗上、中華文化復興運動と称されるムーブメントが展開された経緯もある。台湾の固有文化を強調したり、「中華文明」や「中華文化」に対する愛惜を共有しない立場からは、文化的な側面に限定されているとは言え、事大主義的な態度とも映りかねない。翻つて、中華人民共和国という政治体とともに、戦後の中国大陆における思想・文化的な動向や達成に関しても、敢えて無視して、これを黙殺している嫌いも無しとはしない。

その他、評者には、著者の姿勢はまた、やはり台湾出身で、長

年、日本で教鞭を執つた農業経済学者で、曾ての国民党一党支配体制下では、むしろ危険人物視されるという憂き目にも遭つた、故・戴國煒氏（立教大学教授）の「政治中国／政治台湾」といった実体的な対抗軸に回収されない、より広い原基としての「文化中国」への深い愛着などを想起させるものがあつた（『戴國煒著作選』I・II、発行Ⅱみやび出版／発売Ⅱ創英社・三省堂書店、二〇一一年、また、拙稿「境界人としての多層的、重層的主体——歴史や国家への深い洞察、台湾史研究や華僑・華人史研究のバイオニアとして」、『週刊読書人』第二九〇三号、二〇一一年八月二十六日号、参照）。但し、台湾のある種の「辺境」性を強調する戴國煒氏に対して、著者の場合は、如上の経緯からも、むしろ現代の台湾でこそ、「中華文明」や「中華文化」の遺産や精華は、赫奕として燦然と輝いていると見る訳であつて、そこには、善かれ悪しかれ、「東洋文化」の精髓が、日本でこそ保持されているとした、岡倉天心（『東洋の理想』）などとも、一脈通じるような姿勢が見受けられ、その意味では、翻つて著者の「台湾」という「本土」への愛着にもまた、強いものが感じられる。何れにせよ、幾重にも屈折に富んだ、著者の叙述や言説の襞を大いに味読したい。

因みに、本書の公刊の後、既に中文での書評としては、管見の限りでも、呉冠宏「漢華文化的探照燈——読《1949 禮讚》」、江燦騰「対話楊儒賓…1949 漢朝東流与第四類新詮釈学的提出」、

張崑將「《1949 禮讚》中的「中華」禮讚」、顏訥「納中華入台灣的1949創傷癥候、与發明新台灣的可能」讀《1949 禮讚》（以上、『文化研究』第二十二期、台灣・文化研究学会、二〇一六年春季）、林桶法「禮讚背後的省思——評楊儒賓《1949 禮讚》」（『二十一世紀』（双月刊）總・第一五九期、香港中文大學中國文化研究所、二〇一七年二月）などが存するほか、本書の著者の楊儒賓氏自身もまた、その後の思索や本書に対する反響を踏まえて、楊儒賓「導論：該禮讚或詛咒——《1949 禮讚》的反思」（『文化研究』第二十二期、二〇一六年春季）を執筆されている点を附言しておきたい。御関心の向きにおかれては、是非とも、就いて参看されたい。

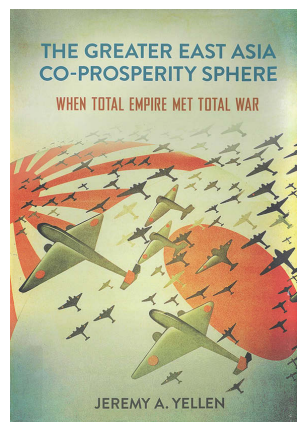
なお、既に本書の邦訳として、中嶋隆蔵訳『1949 礼賛——中華民國の南遷と新生台湾の命運』（東方書店、二〇一八年六月）があり、平明で達意の訳文とともに、懇切な「訳者あとがき」や「本書所見人名生没年一覧」もまた、ともに読者の理解に大いに裨益するものである。中国語を解さない読者におかれては、是非とも、この訳書を一読されることをお勧めしたい。また、既に日本語による書評としても、家永真幸「台湾の1949年を礼賛する論理とは」（『東方』四五三号、東方書店、二〇一八年十一月号）があり、問題の所在や本書の意義について、適確に論評している。

ジェレミー・A・イエレン

『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』

Jeremy A. Yellen, *The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere: When Total Empire Met Total War*

ジェイソン・モーガン



Cornell University Press, 2019

ある都市か国家が権力を地理的に膨らませて、支配下の領域を拡大する時、それは帝国と呼ばれる。一般に言えば帝国は、中心政体が膨張して外国の領土、人々まで覆って、その空間と住民を中心政体に包摂する事だ。

あらゆる帝国は必ずこの特徴を見せる。しかし、それぞれの帝国によって、中心政体の膨らみ方が異なっており、権力の膨張を具体的にどう管理するか（それかどう管理し損なうか）も大きく変わる。ある意味で、帝国は政治的養子縁組のようなプロセスで形成されるから、人間関係に大きく左右される部分もある。

大日本帝国の場合、帝国の本格的膨張がグローバルな自由貿易体制と資本主義体制の崩壊を背景としており、それと同時に大日本帝国の膨張が白人によるアジアでの植民地支配の動揺をもたら

したので、大日本帝国の建築は日本と周辺諸国との間の経済的、政治的安定を求めながら企画された。当時の経済、政治の諸問題を克服する方法として、日本の政治家、軍事指導者などが、大日本帝国をアジアと太平洋にまで拡張する「大東亜共栄圏」というアウトタルキー圏を構想して実現を試みた。大東亜共栄圏は、大日本帝国の膨張のテーマになって、大日本帝国の「他者」との付き合い方の基本にもなった。

おそらく読者にとって「大東亜共栄圏」は、おなじみのフレーズかと思う。大日本帝国、もしくは十五年戦争に関する歴史の本で、「大東亜共栄圏」はよく言及される。昭和十五年（一九四〇年）八月に、外務大臣から拓務大臣になったばかりの松岡洋右がラジオ放送で大東亜共栄圏を発表して、政治のキャッチフレーズ

になっていた「新秩序」をアジアにもたらす意志を強調した瞬間から、「大東亜共栄圏」のスローガンがアジアで頻繁に繰り返されるようになった。大日本帝国の指導者が松岡の希望を裏切つて太平洋戦争の引き金を引いた理由も、大東亜共栄圏の実現にあると歴史の書籍でしばしば言われている。

しかし、その大東亜共栄圏とはいったい、なんだったのか。日本とアジアの近現代史において、極めて重要な概念なのに、大東亜共栄圏が具体的に何を意味するか、説明は意外に困難だ。香港中文大学准教授ジェレミー・イエレン氏が最近出版した『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』は、大東亜共栄圏を主題とする英語で書かれた最初の単行本だ。大東亜共栄圏は大日本帝国の思想的骨組みを知る上で不可欠の概念だが、一九四二年二月、当時の総理大臣・陸軍大臣の東條英機がある会議で、「国防圏」と「共栄圏」との違いが分からないと告白するほど、その本質を掴むのは難しい（す）。歴史の意義が非常に高いのに、理解度が非常に低い大東亜共栄圏の研究を進めるためには、資料館などでの徹底した調査や背景研究に基づいたイエレン氏のこの本が必読の一冊だ。

大日本帝国のみならず、全ての帝国は、「想像」と「現実」との競争だと言えよう。目標とする地政学的結果があつても、それを実現しようとする前途には様々な妨害や挫折が待っているはずだ。

想像された帝国と、厳しい現実との衝突が、歴史を作り出すわけだ。二つのセクションに区切られているこのイエレン氏の本は、事に帝国の二分性を反映する。

パート1は「想像される共栄圏」で、日本が一九三〇年代にどういう政治状態に置かれていたかを詳細に説明する。想像を束縛する政治的リアリティをつくづく感じさせられる。第1章「虎穴に入つて」は、一九四〇年九月に締結された日独伊三国軍事同盟の政治文脈を分析する章だ。日独伊三国軍事同盟は、十九世紀に有力だった勢力圏外交の延長線上に形作られたとイエレンは解釈する。当同盟はソ連の膨張と威嚇に制限を掛けるために締結されたとみなすのが一般的理解だが、イエレンの結論は異なる。アジアにおける白人支配に終止符を打つという大日本帝国のプロジェクトにドイツを干渉させないために、松岡洋右がその同盟を強く望んでいた、というのだ。確かに、大日本帝国が大胆に挑んだ汎アジア主義のプロジェクトを踏まえれば、イエレンの解釈には説得力がある。

第2章では、勢力圏の歴史をもっと深く掘り下げる。一八八四年〜一八八五年にかけて開催された、いわゆるアフリカ分割を定めるベルリン会議が一九三〇年代の勢力圏交渉に概念的影響を与えていたとイエレンは主張する（pp. 49-50）。しかし、より大きなポイントは、松岡の考え方であると彼は指摘する。大日本帝国は、

十九世紀のヨーロッパ列強と異なり、支配される国々と協力して「共栄圏」を築くべきだと松岡は思っていたという(p.60)。

この本のもう一つの主なテーマがここで浮かび上がる。八紘一宇だ(p.5)。このスローガンは、ヨーロッパの帝国主義諸国の単なる圧政帝国主義との差別化を図り、大日本帝国の帝国主義をブランド化するために提唱されたものだ。八紘一宇と言うのは天皇を中心にして、アジア諸国における現地産業の発展と現地住民の独立を大前提に置いた、家族的な帝国主義を意味する合言葉だ(p.62)。つまりアジアの新秩序は、新しいスタイルの帝国主義によって実現される、と大日本帝国は主張したのだ。八紘一宇は、大東亜共栄圏と同じく歴史書に頻出するフレーズだが、八紘一宇の意義と適用の方法はあまり取り上げられていないので、イエレンがこの本で八紘一宇の詳細を探索した事には大きな意義がある。

八紘一宇も大東亜共栄圏も、対米戦争が意識される中で、変質していった。一九四一年の半ばぐらいから、大東亜共栄圏の建設が大日本帝国の最優先目的になったとイエレンは言う(p.77)。アメリカとの戦争がほぼ確実だと認めざるを得なくなったこの時から、日本の「自存自衛」を周りの国々の発展と独立の夢と絡める形で、大東亜共栄圏の理想が語られるようになった。実際には、大日本帝国が間もなく戦わなければならない命懸けの大戦争に必要な資源などを獲得するために、日本がアジア諸国を侵略すると

いう考えだったとイエレンは主張する (pp.71-75)。

第3章は、イエレンによる日本語資料の分析の大きな成果でもある。日本国内の大東亜共栄圏と八紘一宇を巡るディベートと、同時に激しくなった「国体」とは何か」に関する議論などを、イエレンは多角的に検討する。例えば同志社大学教授田村徳治(p.90)や、大東亜問題調査会(p.93)、外務大臣東郷茂徳(p.92)など、大日本帝国が歩むべき道について様々な意見があつて、「想像」にも大きな亀裂が入ったわけだ。「共栄を想像して」と題するこの章は、イエレンのパート1の中締めとして、日本国内での大東亜共栄圏に関する考え方を紹介する。

パート2、「争われる圏」は、想像された大東亜共栄圏がどうやって実現されたかを詳しく説明するパートだ。ここでイエレンは「協力者」の歴史的な位置づけにも考慮する。ここでの「協力者」は、英語で言う「collaborator」、かなり負の印象を帯びている。売国奴に近いニュアンスもあり、自国を裏切つて侵略者である外国軍隊などと協力する人を指す「協力者」だが、大日本帝国の代表者などが外国でどうやって現地の「協力者」と手を結んだか、イエレンがこのパートで予断を排して検証する。焦点を当てるのは、大日本帝国にとって二つの重要な国、フィリピンとビルマだ。第4章でフィリピン、ビルマの歴史的背景、植民地としての状況などを説明して、二つの国の「協力者」の動機と、大日本

帝国との関わり方を分析する。

第5章で一九四三年十一月に帝国議会議事堂で開かれた大東亜会議が登場する。この会議で東條首相は、大日本帝国によつて築かれつつある汎アジア主義に基づくアジアでの新秩序を説明して、大日本帝国が英米などによる植民地主義からの解放をもたらしている」と強調した(p.151)。会議に出席していたビルマの独立運動家バー・モウとインドの独立運動家スバス・チャンドラ・ボースは東條の発表を肯定的に受け入れたが、中国の代表者汪兆銘、フィリピンの大統領ホセ・P・ラウレル、それからタイの外交者ワンワイタヤーコーン親王は懐疑的だった(p.151-152)。この章で扱った時期には、「大東亜共栄圏」の意味の移り変わりがとりわけ顕著だ。大東亜会議で採択された大東亜共同宣言は、一九四一年八月にアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトと大英帝国首相ウインストン・チャーチルが署名した「大西洋憲章」の太平洋バージョンという性格を持ち、一九四三年の終わり頃から大日本帝国はより自由主義的な帝国を標榜するようになったとイエレンは主張する(p.164)。大日本帝国とそれに関連する想像も実現も、決して日本側が一方的に進めただけではない。

第6章は、戦争状態が悪化するに伴つて、大日本帝国の指導者が想像して、建設した大東亜共栄圏の一部であるビルマとフィリピンが独立すると同時に、連合国に宣戦するようビルマ、フィリ

ピンの指導者と交渉した流れを紹介する。結びの章では、日本の敗戦後も、八紘一宇の理想が生き続けたという認識について論じる。元大東亜共栄圏の国々の独立と、日本が指導する経済発展は、戦後世界に適応する形で再生した大東亜共栄圏だというのだ。拓殖大学学長である予備役軍人の宇垣一成が一九四五年八月十一日にこのような希望と、大日本帝国が挑戦した事への誇りを主張した事実をイエレンは指摘して、戦前、戦中、そして戦後における政治方針の変遷と思想の一致性を共に浮かび上がらせる(p.212)。

大日本帝国の思想的フレームワーク、つまり汎アジア主義、大東亜共栄圏、八紘一宇などのアイディアと、それらがどうやってオン・ザ・グラウンドで実現された(またはされなかった)かについて論じた本書は、大日本帝国の本質を明らかにする上で大きな貢献を果たした。

大日本帝国が白人至上主義に対して立ち向かつて勝負した詳細を書いたアメリカ人歴史家ジェラルド・ホーン教授の著書を予め読んでから『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』を読んでいたきたい。アジアでの白人至上主義がどれだけ酷かったかを知った上で大日本帝国を再考する事がこれからの課題と思う。イエレン氏が描写する通り、大東亜共栄圏は、虚しいスローガンではなく、「想像」と「現実」との境目に叫ばれた、必死の戦いの気合だった。

He believed that *ujigami* were originally tutelary deities of one *uji* (family), and claimed that these were later unified and worshiped by multiple clans, a claim he supported with several arguments. However, he did not give any concrete examples of *ujigami* fusion, and it is not clear how these arguments were arrived at.

This paper recognizes that the theory on *ujigami* fusion originated in 1942, when Yanagita's cooperation with the war effort becomes clear. It examines his initial writings on *ujigami*, in 1932's *Shokumotsu to Shinzō [Heart and Sustenance]*, where they were ancestor spirits. Next, it suggests that the purpose of Yanagita's research of mountain villages, which was carried out for three years from 1934, was partially for the purposes of proving this claim. However, verification proved impossible, and from 1936 the scholar of religion Harada Toshiaki began to assert that *ujigami* were linked to the land and possessed local characteristics.

This paper grounds the *ujigami* fusion theory which later emerged in these earlier manifestations of the theory. The paper reflects upon and analyzes the links between the *Ujigami* fusion theory which appeared in 1942's *Japanese Festivals* and Yanagita's response to the war. In particular, it focuses on *Shintoism and Folkloric Studies* (1943) and records of Yanagita's lectures on *ujigami* research undertaken in Higashi-Chikuma-gun, Nagano as providing evidence of the connections between the war and Yanagita's development of the theory. Taking into account his later writings, it concludes that in Yanagita's thought the *ujigami* shifted from being the *kami* of one *uji* to being unified deities (*ubusuna*) representing localities, and that this reflected the *ujigami*'s wartime role in sustaining the beliefs of men following the gods of war to their deaths.

Keywords : Yanagita Kunio, *ujigami*, *ujigami* fusion, ancestor spirits, mountain village research, *ubusuna*, wartime discourse, Harada Toshiaki

柳田國男の戦時言説としての氏神合同論

由谷 裕哉

本稿は、柳田國男（1875-1962）が主に戦時下で主張していた氏神合同論（本稿での仮称）を、彼の戦時言説として考察する。ここでの氏神合同論とは、柳田が『日本の祭』（1942年）や『神道と民俗学』（1943年）をはじめ、敗戦後しばらくまで主張していた氏神に関する議論で、異姓の家が共同して一つの氏神を祀ることを意味づけようとする理論である。柳田は氏神を氏の神と考え、それらが合同した（合併した、統合された）ことを複数の理由から説明したが、合同したとされる氏神の例は参照されず、各々の理由も帰納的に導かれたものではなかった。また、柳田のテキストを具体的な民俗事象との対応を気にせずに思想として読もうとする、いわゆる柳田研究においては、柳田のこの議論はほぼ等閑視されてきた。こうした柳田研究は柳田の戦争への関わりについても、彼が積極的に戦争協力をしなかったと捉えようとしていた。

それに対して本稿は、柳田の氏神合同論が提唱されるのを彼の戦時体制への協力姿勢が明確になる1942年と捉え、それ以前の彼の氏神論の検討から始める。柳田が氏神を祖霊と解釈しようとした始まりを1932年の「食物と心臓」であると捉え、2年後の1934年から3年間にわたり柳田の門下生を主な調査者として全国的に行われた通称・山村調査が、この仮説の検証を課題の一つとしたと考えられるとする。しかし、この検証は成功せず、さらに1936年頃から宗教学者の原田敏明が実証的な調査に基づき、氏神は地域的な性格を持ち、土地に即した存在であると主張した。

本稿は以上の1930年代における動向を踏まえ、1942年の『日本の祭』を端緒としたと考えられる氏神合同論を、個々のテキストの文脈に即して抽出し、柳田の戦時体制への対応とどう関わるかと併せて考察する。とくに氏神合同論と戦時体制への対応とが密接に結びつけられた言説として、『神道と民俗学』および長野県東筑摩郡での氏神調査に関わる1943年7月の講演に注目する。この講演以降の柳田の言説をも考慮し、氏神は戦時に軍神^{うぶすな}に続いて死ぬ人々の信仰を支える存在であるので、それが氏の神ではなく合同して産土のようにローカルな神となったところに意味がある、と柳田が考えていたと導くことを結論とする。

【柳田國男、氏神、氏神合同、祖霊、山村調査、産土、戦時言説、原田敏明】

Yanagita Kunio's *Ujigami* Fusion Theory as Wartime Discourse

YOSHITANI Hiroya

This paper considers the *ujigami* fusion theory proposed by Yanagita Kunio (1875–1962) during the war as a reflection wartime discourse. *Ujigami* fusion theory refers to a theory that Yanagita proposed in *Nihon no Matsuri* [Japan's Festivals] (1942) and *Shinto to Minzokugaku* [Shintoism and Folkloric Studies] (1943), and which he continued to propound until well into the postwar period.

The 18th Century Map of Japan by Daikokuya Kōdayū: On the 1793 Whitworth Copy Recently Discovered in Greenwich, UK

TAKIGAWA Yūko

Daikokuya Kōdayū is famous as a shipwrecked merchant who managed to return to Japan despite its closed-door policy. Under the pretext of returning him, Adam Laxman was commissioned by Catherine II to conduct commercial negotiations as the first Russian envoy to Japan.

During his time in Russia, Kōdayū made several copies of a map of Japan based on a printed map in the *Setsuyōshū*, a popular Japanese dictionary he had saved from the shipwreck. Seven copies in his hand have been reported in libraries and archives in Europe. The diplomatic report stored in the National Archives at Kew shows that the British Ambassador in Saint Petersburg, Charles Whitworth, sent the British Foreign Secretary, Lord William Wyndham Grenville, a precisely reproduced version of Kōdayū's map, although without the names of Japan's provinces. An investigation of catalogues in various British institutions revealed the presence of this map among the Grenville Collection in the Caird Library and Archive at the National Maritime Museum, Greenwich. The scanned image was compared with previously known copies by Kōdayū, revealing that it was the copy mentioned by Whitworth.

Kōdayū's map is here evaluated through its appearance in contemporary European sources, such as reports contributed to the magazine *The Bee* by Matthew Guthrie, who witnessed and described Kōdayū and his map making in Saint Petersburg. The Whitworth copy was evaluated from two perspectives: 1) contemporary Japanese maps brought from Japan and available in Europe; and 2) charts of Japan made by Europeans from coastal surveys during their voyages to the North Pacific and explorations near Japan. The Whitworth copy was sent to London from Saint Petersburg on 7th February 1793, and arrived at least three or four years earlier than the more precise and detailed Japanese map *Kaisei Nihon Yochi Rotei Zenzu* (compiled by Nagakubo Sekisui), and the publication of the first chart from La Pérouse's Expedition in 1797. Whitworth reported that Kōdayū seemed highly intelligent. His map, therefore, was considered the latest and most precise chart of Japan, based on practical nautical knowledge provided by Kōdayū himself, even though the map did not show the Kanmon Straits between Honshu and Kyushu Islands.

In conclusion, the Whitworth copy and report reveal that Britain in the late 18th century had keen political, diplomatic and commercial interests in the Far East. Information on Kōdayū and the Whitworth copy of his map in Greenwich should be viewed as the results of British intelligence activities in Russia, a great rival in the region.

Keywords : Daikokuya Kōdayū, Kirill Laxman, Adam Laxman, Map of Japan, Charles Whitworth, Caird Library and Archive, Japan-Russia relations, Anglo-Japanese relations, Eighteenth-century knowledge networks

Keywords : Ishihama Juntarō, The Osaka Asiatic Society, Societas in Memoriam Wang Kuo-wei, Societas Osaka'ensis studiorum linguarum, Nikolai Nevsky, Ural-Altai Society, Naniwa Art and Literature Society, Yevgeny Polivanov, Three Peculiar Characters in Japanese Linguistics, Naitō Konan

〈研究ノート〉

新出の英国史料からみた十八世紀末の西欧における 大黒屋光太夫日本図の評価

滝川 祐子

大黒屋光太夫は所持していた『節用集』系統の書籍をもとに、ロシアで日本図を製作したことが知られており、これまでに西欧で7点の光太夫自筆日本図が報告された。英国公文書館の外交文書から、駐露公使ウィットワースが光太夫日本図の正確な写しを作成し、サンクトペテルブルクからイギリスの外務大臣グレンヴィルへ送ったことが明らかになった。この複製された日本図に関する書誌情報を探し、グリニッジの国立海事博物館ケアード図書館から史料の画像を入手した結果、光太夫日本図の写しと同図書館に現存することを発見した。本稿では入手した画像と既報の光太夫自筆日本図との比較検討を試みた。その結果、新出の日本図は、文字情報は別に写し取られたが、光太夫日本図を正確に写し取った複製図であることが判明した。

文献から同時代の西欧人が記録した光太夫の日本図情報とその内容をまとめた。文献情報、例えばガスリが雑誌に寄稿した文章には、光太夫がペテルブルクで日本図を作成する様子が含まれていた。またこの頃に西欧へ流出した日本地図とその受容の時期を検討した。さらに西欧諸国による日本近海の探検と日本沿岸の海図作成の歴史をまとめた。その結果、光太夫日本図の写しがイギリスへ送られた1793年は、長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』が西欧で認知され始めるより少なくとも3～4年早く、同様に日本の海図を含むラペルーズの世界周航アトラスの出版年1797年よりも3～4年早いことが分かった。

一方、高い教養を持つ人物として評価され、かつ船頭である光太夫が描いた日本図は、関門海峡がないにも関わらず、当時の西欧知識人に最新の日本の海図情報と見なされたことが明らかになった。特にこの時期のイギリスは、政治、外交、経済の点で極東への進出を画策しており、ロシアと競争関係にあった。新出の日本図は、イギリスが光太夫の日本図を最新の海図情報と見なし、直ちに写しを作成してロシアから本国に送っていたことを示す史料であると考えられる。

【大黒屋光太夫、キリル・ラクスマン、アダム・ラクスマン、日本図、チャールズ・ウィットワース、英国立海事博物館ケアード図書館、日露関係、日英関係、18世紀の知のネットワーク】

集まった。小論では、これを「石濱シュール」と呼び、そこに集った人々がどんな人で、何を研究してきたのかに焦点をあてる。

小論では、これまでの石濱研究で論じられることがなかった、次のような点を指摘している。1) 石濱が大阪東洋学会の創設から4年後には別組織である静安学社へと新たな研究会を立ち上げた理由、2) 大阪言語学会の活動内容、3) 戦後の浪華芸文会やウラル・アルタイ学会の活動内容など、これら3点を中心に、亡父・長田夏樹の残したハガキや雑誌資料などを丁寧に掘り起こして、その実態に迫っている。偶然の産物なのか、言語学会三大奇人と呼ばれる人々は、いずれも石濱シュールに集った人であったが、石濱の周りに集う奇人たちについても触れている。また、奇人として名高い、ロシア人日本語研究者ポリワノフにも触れている。

結論として、石濱が成し遂げた功績はこうした学会、研究会を通して、ネットワークを構築したことであり、そのネットワークはロシア人研究者や中国人研究者を巻き込んだ国際的なものであったことである。昭和の初期にこうした国際研究者ネットワークを構築したのは、製薬会社の資金で文献を集め続けて、それら文献を研究者に供給し続けた石濱でしか成し得なかったであろう。

【石濱純太郎、大阪東洋学会、静安学社、大阪言語学会、ネフスキー、ウラル・アルタイ学会、浪華芸文会、ポリワノフ、言語学会三大奇人、内藤湖南】

Researchers of the Ishihama School

OSADA Toshiki

In July 1995, at a meeting organized by then Professor Nobuo Tsuji of Nichibunken I read a paper entitled “The Ishihama School, Russian Japanologists and Three Peculiar Characters in Japanese Linguistics.” I never had the opportunity to write this up as a formal article, so I would like to pull together my original ideas here.

Ishihama Juntaro (1888–1968) was a famous Orientalist and collector of books on Asian studies. He established the Osaka Asiatic Society, the Societas in Memoriam Wang Kuo-wei and the Societas Osaka'ensis studiorum linguarum. Many researchers joined these societies and read papers under the leadership of Ishihama. I refer to this group of researchers as members of the Ishihama School.

In my paper I discuss the following: 1. why Ishihama set up the Societas in Memoriam Wang Kuo-wei just four years after establishing the Osaka Asiatic Society 2. the activities of Societas Osaka'ensis studiorum linguarum 3. the activities of the Ural-Altai Society and Naniwa Art and Literature Society. My father, Osada Natsuki was a member of those societies and collected the materials which they produced in the course of their activities. I draw on these materials to describe the activities of the societies.

I conclude that Ishihama's largest contribution was to build, a century ago, a vast network of researchers, including Chinese and Russian scholars. His remarkable achievement should be remembered.

introduction.

The author of *Shasan yōketsu*, Takashima Hokkai (1850–1931), was a Japanese geologist and painter who has not received sufficient scholarly attention. In the book, Takashima proposed a new artistic theory by infusing geology into East Asian landscape painting. Through scientific analysis, painters would be able to depict scenery more realistically and accurately. Fu Baoshi, a famous Chinese artist active in the 1930–1960s, praised the theory and introduced it to China. He translated *Shasan yōketsu* in 1936, and published it in 1957 as *Xieshan yaofa* 写山要法 (1957). In addition, he creatively utilized the theory in his own painting to develop a unique style, which exerted a powerful influence on his successors.

Several points are significant regarding the book's reception in China. First, Fu Baoshi chose to publish it twenty-one years after finishing the translation. This was no accident, but a response to the new aesthetic criteria of “social realism,” which encouraged the realistic depiction of actual landscapes. Secondly, Fu's modifications to *Xieshan yaofa* were significant. With comments and annotations, Fu emphasized its connection to traditional Chinese art. At the same time, he deleted many paragraphs and illustrations as “too local,” or in other words, “too Japanese.” Finally, Fu developed Takashima's theory and claimed it to be a kind of “science.”

In the writings of Fu's sons, students and friends, we encounter many misunderstandings of Takashima's intent. While Fu did not intend to mislead his readers, he was later credited as the instigator of the theory, with Takashima was considered to have provided the basic geological knowledge. Many readers confused the book with a Soviet geologist's work, which Fu always took with him on his sketching tours.

In conclusion, Fu Baoshi was a passionate promoter and creative developer of geological painting theory, but not the instigator. The influence of *Shasan yōketsu* in 1960s China needs re-evaluation. Although Takashima Hokkai did not have any prominent successors in Japan, through Fu Baoshi his theory was tremendously influential on Chinese landscape painting.

Keywords : Fu Baoshi, Takashima Hokkai, Geology, Science, Socialist realism, realism, drawing from life, the Forum of Art and Literature in Yan'an, landscape painting, New Chinese painting

〈研究論文〉

石濱シュレーに集う人々

——四半世紀後に

長田 俊樹

1995年7月、辻惟雄教授（当時）の主催する「奇人・かざり研究会」で「石濱シュレー・露人日本学者・言語学界三大奇人」と題して発表したが、論文にまとめる機会がこれまでなかった。そこで、小論はその発表に、最近の研究成果を盛り込んでまとめたものである。

石濱純太郎（1888～1968）は大変有名な東洋学者であるとともに、大阪東洋学会、静安学社、大阪言語学会などを主催し、こうした研究会を通して、石濱の周りには多くの研究者が

〈研究論文〉

高島北海『写山要訣』の中国受容

——傅抱石の翻訳・紹介を中心に

陳 藝 婕

本論文では、画家であり、地質学者でもある高島北海（1850年～1931年）の画論『写山要訣』（1903年）がどのように中国で受容されてきたのかを検討する。とりわけ中国の画家傅抱石（1904年～1965年）の翻訳・紹介活動に焦点を当てる。彼は『写山要法』（1957年）という新タイトルをつけて、中国語訳本を出版した。

まず、中国における『写山要法』の出版は、当時の中国における社会主義リアリズムの風潮が契機となっている。1950年代の中国は、写実的な山水表現が求められていた。『写山要訣』では、地質学の知識を東洋山水画に活用するという新説が提示されており、実用的な著作である。そのため、傅抱石はおよそ二十年前に完成した訳稿をこの時点で出版した。

次に、『写山要法』の内容を検討すると、傅抱石が添削や注解を施して、中国読者に受け入れやすいようにと、意識的に内容の調整を行っていた事実が判明する。この調整においては、中国に関する事項を強化するとともに、日本に特有の要素は削除することを中心としている。それによって、日本語版の原本の基礎をなす「地質学画論」は、中国の伝統的な絵画理論を継承している書物であるという印象を与える書物に変貌した。

最後に、高島北海の『写山要訣』は、画論ではなく、あくまで「科学」的な地質学の書として中国の読者に認識された。それは傅抱石が紹介する際、高島北海という人物より、科学・地質学の概念を強調したことに起因すると推定される。さらに、傅抱石は中国語の地質学専門書を参考にして、画論や制作において独自の解釈を行っていたことも関係していると推測する。換言すると、傅抱石の翻訳・紹介を介することで、中国版の読者には、日本語の原本『写山要訣』は科学的な地質学書として認識されると同時に、『写山要法』は傅抱石が中国伝統画論に基づいて作られたオリジナルの著書であるというような誤解を招いた。その結果、『写山要訣』が中国で及ぼした影響力は、長い間認識されないままとなっていた。本稿は、この著書とその中国語への翻案に潜んでいた美術史的な価値を検討し、それが再評価に値するものであることを立証することを目的とする。

【傅抱石、高島北海、地質学、科学、社会主義リアリズム、写生、写実、文芸講話、山水画、新国画】

The Reception of Takashima Hokkai's *Shasan yōketsu* in China: Focussing on Fu Baoshi's Translation and Introduction

CHEN Yijie

This paper analyses the reception *Shasan yōketsu* 写山要訣, a manual of painting first published in 1903, in 1960s China. It does so through an analysis of Fu Baoshi's (1904–1965) translation and

に緊張関係を見出し、「青年」と樗牛との関係性をとらえ直す契機を提示する。また同時に、明治期の文学空間において「滑稽」や「諷刺」といった問題がどのような意義を有していたかを問い直す視座を開こうとするものである。

【ニーチェ受容、高山樗牛、登張竹風、坪内逍遙、阪井久良伎、美的生活論、戯画化、滑稽、諷刺、青年雑誌】

Nietzsche as Caricature: Imitations of Humor and Satire

KIYOMATSU Hiroshi

The “aesthetic life debate” called for by Takayama Chogyū 高山樗牛 in 1901 saw its “instinctivist” aspect firmly linked to Nietzsche’s individualist ideas through Tobari Chikufū’s 登張竹風 commentary. At the time, the theory resulted in a great deal of criticism and controversy both within and beyond literary circles, and led to a ferocious Nietzschean debate within contemporary literary society.

Indeed, a humorous caricature of Nietzsche by Tsubouchi Shōyō 坪内逍遙 proliferated in various forms in Japanese magazines such as *Chūō kōron*, *Shinsei*, *Bunko*, and *Jōzetsu*, whose readers were mainly literary-minded young men. Additionally, these magazines’ articles satirically caricatured aesthetic life theory and Chogyū himself. Sometimes they even caricatured Shōyō, creator of the humorous Nietzsche image. Moreover, Sakai Kuraki 阪井久良伎, also known as a Senryu writer, imitated Shōyō’s style.

Such action reflected the hostility these youth magazines displayed towards Chogyū and other literary circles, as they sought to “Break down literary cliques.” Satire and humor were the chosen weapons of the youth in their fierce rivalry with established literary and critical circles. The concealment of satire and humor had been demanded within literary circles following an earlier debate between Chogyū and Shōyō over “comic literature and its absence,” which had occurred prior to aesthetic life controversy. Reproduction of the humorous Nietzschean image and the resultant caricature of aesthetic life theory can be considered as reactions to these demands.

Previous studies largely consider Chogyū has being the object of admiration from young people in the Meiji period, but this paper reveals a tense relationship between Chogyū and youth magazines, which had a clear sense of hostility toward the established literary circles. Thus, this paper presents a reconsideration of the relationship between the youth and Chogyū. It also seeks to re-examine the significance of satire and humor in Meiji-era literary spaces.

Keywords : Acceptance of Nietzscheism, Takayama Chogyū, Tobari Chikufū, Tsubouchi Shōyō, Sakai Kuraki, Aesthetic Life Theory, Humor, Satire, Caricature, Literary Magazines for Youths

contribution to the national policy of *fukoku kyōhei*, “enrich the country, strengthen the army,” and thus acceptable within girls’ education.

However, the 1899 promulgation of regulations for girls’ schools contains detailed explanations as to why the *ikebana* and *cha-no-yu* courses were not included. On the other hand, in that very year Fukuzawa Yukichi’s “Shin-Onna Daigaku,” set out why women should acquire *ikebana* and *cha-no-yu* as part of their studies.

From 1903, however, it was permissible to remove *ikebana* and *cha-no-yu* from the formal curriculum. These recreational arts were subsequently to be taught ‘only when necessary,’ outside of the formal school system.

Keywords : *Ikebana*, *Cha-no-yu*, etiquette, education for women, girls’ schools, refined arts, “Onna Daigaku,” education laws, “Atomi Kakei diary,” World Expositions, mid-Meiji

〈研究論文〉

戯画化されるニーチェ

——「滑稽」と「諷刺」の模倣

清松 大

高山樗牛の唱えた「美的生活論」は、登張竹風による解説を一つの契機として、その「本能主義」的側面がニーチェの個人主義思想と強固に結びつきながら理解された。樗牛の美的生活論は文壇内外で多くの批判や論争を呼ぶとともに、同時代の文学空間を熱狂的なニーチェ論議へと駆り立てていった。

なかでも、坪内逍遙が「馬骨人言」において創出した「滑稽」な戯画的ニーチェ像は、『中央公論』や『新声』、『文庫』、『饒舌』といった、文学志向の青年たちを主たる読者層としていた雑誌において、その姿形を変えながら増殖していくことになる。そこでは、美的生活論の思想や樗牛という存在自体が「滑稽」化され、時には「滑稽」的なニーチェ像をつくりだした張本人たる逍遙をも組み込みながら、ニーチェ思想や美的生活論をめぐる論争そのものが戯画化された。

こうした現象は、「文閥打破」を掲げて既成文壇の批判者を自任し樗牛とも敵対関係にあった青年雑誌の特質を反映したものとみなすことができる。そして、中央文壇や論壇への対抗意識を燃やす青年たちの武器として選び取られた「滑稽」や「諷刺」への問いと実践は、美的生活論争以前にはほかならぬ樗牛・逍遙によってたたかわされていた「滑稽文学（の不在）」をめぐる論争以降の文学空間に伏在していた要求であった。「馬骨人言」以後の「滑稽」的なニーチェ像の再生産や美的生活論の戯画化は、そうした時代の要求が表出したものとしても意味づけられる。

従来、高山樗牛という存在は明治期の青年層から敬慕された対象として語られることが多かったが、本稿では、中央文壇に対する明確な敵対意識を有していた青年雑誌と樗牛との間

は遊芸と捉えられ、教育にとって有害なものであり不要とされた。このことから茶の湯研究が、1875 年跡見学校で学科目として取り入れた、としていることは考え難い。いっぽう、1878 年のパリ万国博覧会、1893 年のシカゴ万国博覧会において、いけ花や茶の湯が女子教育として位置づけられた。それは 1879 年のクララ・ホイットニーの日記や 1878 年のイザベラ・バードの紀行からも窺えることであった。

また改正教育令が公布された 1880 年、「女大学」に初めていけ花、茶の湯が、余力があれば学ぶべき「遊芸」として取り上げられた。さらに 1882 年、官立初の女子中等教育機関の学科目「礼節」のなかに取り入れられたことは、いけ花、茶の湯が富国強兵という国策の女性役割の一端を担うことになったといえ、ここで女子の教育として認められたと考える。

そのいっぽうで 1899 年、高等女学校令の公布においていけ花、茶の湯は学科目及びその細目にも入れられなかった。しかし同年、福沢諭吉は『新女大学』で、いけ花や茶の湯は遊芸であっても、学問とともに女性が入り入れるものと説いた。

そして 1903 年、高等女学校においていけ花、茶の湯は必要な場合に限り、正科時間外に教授するのは差し支えない、との通牒が出された。遊芸を学校教育で課外といえども教えてよいかの是非が問われ、「必要な場合に限り」「正科時間外」という条件付きで是となったのであった。

【いけ花、茶の湯、礼儀作法、女子教育、高等女学校、遊芸、女大学、教育法令、『跡見花蹊日記』、万国博覧会、明治初・中期】

Recreational Arts? *Ikebana*, *Cha-no-yu*, and Etiquette in Meiji Education for Girls

KOBAYASHI Yoshiho

This paper explores the process which led to the provisional inclusion of recreational arts like *ikebana* and *cha-no-yu* as etiquette education at girl's schools by the mid-Meiji period. First, it examines changes to the laws on education and their implications for the recreational arts. It then analyzes educational and other historical materials from Atomi School, a small private school for girls. The writings of Westerners of the period and the catalogues of World Expositions have also been examined in order to trace out the changing place of these recreational arts in the curriculum.

One notable example of the place of *ikebana* in the laws on education is an 1872 pamphlet on the 'school system,' where *ikebana* and *cha-no-yu* are noted as 'recreational arts' detrimental to learning, and thus unnecessary. The listing of *cha-no-yu* as a course in materials from the Atomi School dating to 1875 therefore seems improbable. Nevertheless, by the 1878 Paris Exhibition and the 1893 Chicago Exhibition, both *ikebana* and *cha-no-yu* are featured as components of women's education. This can be confirmed in Clara Whitney's diary from 1879 and Isabella Bird's travelogue from 1878.

Following the 1880 amendment to the education laws, the "Onna Daigaku," a manual for women's education, included *ikebana* and *cha-no-yu* as accomplishments to be studied should time suffice. In 1882, the government included *ikebana* and *cha-no-yu* in etiquette courses at education establishments for women. The two recreational arts came to be interpreted as a female

Heian period, characterized by variations in where the writing starts and ends on each line, the length of lines, and the spacing between them.

The space created by the kana is formed by lines and character forms, and the flows created by connecting lines and characters. These are varied through changes in the volume of ink and the irregularity of the individual characters. In addition to these visible elements, it is also formed of the “gaps” between lines or breaks in the brushstroke and the sensuous echoes that result, which structure this space while also suggesting the passage of time. This study on *chirashigaki* is concerned with the contribution of space to the creation of beautiful kana.

Discussion of the two-dimensional spatial structure formed by *chirashigaki* dates back to calligraphy theory produced in the Kamakura period and continues in explanatory manuals produced today. These manuals use techniques which range from patterned representations of natural landscapes to the formal classification of the outlines formed by the start and ends of lines of *chirashigaki* as the means to structure the calligraphic space within which it occurs.

This study initially examines these conventional theories of *chirashigaki*, and extracts their key elements. Next, it proposes a composition method using auxiliary lines, and applies this to actual ancient writings. The materials selected for analysis are the *Sunshōan Shikishi* 寸松庵色紙 and the *Tsugi Shikishi* 継色紙, famous *chirashigaki* works from the Heian period, and the *Gen'ei-bon Kokinshū* 元永本古今集, a complete version of the *Kokin wakashū* 古今和歌集 that displays *chirashigaki* with rich design developed from the bound book form. This auxiliary lines analysis visualizes relations between lines and the reader's gaze which are normally concealed on the page. This enables objective inferences to be drawn regarding the factors which structure the composition of space and influence the author's sensitivity when composing *chirashigaki*. This method of deciphering the structure of *chirashigaki* is distinct from conventional theories, can be used effectively in kana research, and is expected to offer new horizons for kana composition theory.

Keywords : Kana expressions, *chirashigaki*, two-dimensional structure, design, composition method, auxiliary lines, spatial analysis, gaze, sensitivity, calligraphy theory, pattern

〈研究論文〉

明治初中期の女子教育といけ花、茶の湯、礼儀作法

—遊芸との関わりを通して—

小林 善帆

本稿は、明治初中期、いけ花、茶の湯が遊芸として捉えられながらも、礼儀作法とともに女子教育として高等女学校に、条件付きで取り入れることを許容された過程を考察するものである。手順としてまず教育法令の変遷を遊芸との関係から確認し、次に跡見学校、私塾に関する教育・学校史資料の再考、続いて欧米人による記録類や、欧米で開催された万国博覧会における紹介内容をもとにして、検討を加えた。

教育法令の変遷と遊芸との関係を見ると、1872年「学制」頒布においていけ花、茶の湯

〈研究論文〉

散らし書きの構図論

平田 光彦

本研究は、仮名の「散らし書き」の二次元的構成を構図によって把握し、分析する方法を提示するものである。散らし書きは平安時代に生じた表現であり、各行の文字の書き出し（行頭）と書き終わり（行脚）の位置、行の長さ、行と行との間隔（行間）等に変化がつけられた書き振りのことである。

仮名の空間は、線や字形、線や文字の連続による流れ、墨量の変化、散らし書きなどの目に見える造形に加えて、流れの切断や行と行との関係などから生じる「間」や響きといった感覚的な所与などが、時間の推移を伴いながら相互に関連して構成されている。本研究の対象とする散らし書きは、仮名の美を構成するこれら諸要素のうち、空間の意匠性にもっとも関与するものである。

散らし書きによる空間の二次元的構成については鎌倉以降の書論や今日の解説書などに論じられてきた。それらの視点は、自然の景観を型によって教示したものや、散らし書きによって形成される行頭行脚のアウトラインを用いた形式的な分類、あるいは書写空間を図形によって提示する等の方法で実践の工夫へと結びつけようとするものであった。

本研究では、まずこれら従来の散らし書き論について、各論の要点を抽出して捉え直し、理論的な流れを把握した。続けて新しい散らし書きの理論として補助線を用いた構図法を提案し、実際の古筆を用いた分析をおこなった。研究の題材には、平安古筆を代表する散らし書きの名品である「寸松庵色紙」と「継色紙」、そして『古今和歌集』の完本として伝存し、冊子本の展開から意匠性に富んだ散らし書きが観察できる「元永本古今集」を選定した。補助線を用いた分析によって、紙面に潜在する行と行との関係や視線の流れが可視化され、空間の変化と統一を形成する具体的要因や、書き手が散らし書きにあたって感覚的に見定めていたものを客観的に推察することができた。従来の理論とは異なる視点から散らし書きの構成を読み解くこの構図法は、仮名表現の研究や創作、およびその教育や指導場面において有効に活用できるものであり、仮名の構図論に新たな地平をもたらすことが期待される。

【仮名表現、散らし書き、二次元的構成、意匠性、構図法、補助線、空間分析、視線、感受、書論、型】

A Composition Theory for *Chirashigaki*

HIRATA Mitsuhiro

This study presents a method for understanding and analyzing the two-dimensional structure formed through *chirashigaki* 散らし書き. *Chirashigaki* is a form of expression that arose in the

CONTENTS

HIRATA Mitsuhiro

A Composition Theory for *Chirashigaki* 9

KOBAYASHI Yoshiho

Recreational Arts? *Ikebana*, *Cha-no-yu*, and Etiquette in Meiji Education for Girls 51

KIYOMATSU Hiroshi

Nietzsche as Caricature: Imitations of Humor and Satire 91

CHEN Yijie

The Reception of Takashima Hokkai's *Shasan yōketsu* in China: Focussing on Fu Baoshi's
Translation and Introduction 107

OSADA Toshiki

Researchers of the Ishihama School 123

TAKIGAWA Yūko

The 18th Century Map of Japan by Daikokuya Kōdayū: On the 1793 Whitworth Copy Recently
Discovered in Greenwich, UK 159

YOSHITANI Hiroya

Yanagita Kunio's *Ujigami* Fusion Theory as Wartime Discourse 199

BOOK REVIEWS 223

『日本研究』投稿要項

1. 刊行の目的 『日本研究』は、国際日本文化研究センター（以下「センター」という）が刊行する日本文化に関する国際的な学術誌であり、研究の成果を日本語にて掲載発表することにより、日本文化研究の発展に寄与することを目的とする。
2. 募集原稿 原稿の種類は、次のとおりとする。
 - (1) 研究論文
 - (2) 研究ノート：新しい知見や仮説を含んだ研究の中間報告等
 - (3) その他：研究展望、研究資料、調査報告等
3. 投稿資格 上記目的に合致する研究内容であれば、誰でも投稿することができる。
4. 執筆要領 原稿の執筆に当たっては、別に定める『『日本研究』執筆要領』を参照のこと。
5. 原稿の提出 投稿原稿は、MS Word (*.doc, *.docx) 又は Rich Text (*.rtf) 等の形式で作成し、電子メールで提出すること。
 - (1) 原稿送付状
 - (2) 本文原稿
 - (3) 和文要旨（800 字程度及び日本語キーワード 10 語程度）

* 原稿の字数については特に制限はないが、論文内容との関連から編集委員会が適当でないと判断した場合は、字数の面から改稿を求めることがある。

送付先：『日本研究』編集委員会
e-mail : shuppan@nichibun.ac.jp
6. 募集締切 センターのウェブサイトのトップページの「募集」欄を参照のこと。
(<https://www.nichibun.ac.jp/>)
7. 掲載の決定 投稿された原稿は、査読委員の審査を経て、編集委員会が掲載の可否を決定する。編集委員会は、掲載に当たって最終的に原稿の種類を判定するとともに、著者に改稿を求めることがある。また、掲載決定後、著者は英文要旨を必ず提出すること（要旨 400 ワード、キーワード 10 ワード程度）。
8. 著者校正 著者校正は、原則として初校のみとし、誤植等の修正にとどめ、内容上の変更は行わない。
9. 論文の二次使用について 他の出版物への転載又は、翻訳・出版する場合には、その旨を編集委員会に連絡して承認を得るとともに当該論文等に初出は本誌であることを明示すること。
10. 掲載論文等のインターネット公開について センターは、広く内外の研究者の利用に供するため、本誌に掲載された論文等を、「国際日本文化研究センター学術研究成果物等の電子化及び発信等運用指針」（センターのウェブサイト参照のこと）に従い、電子化し、日文研オープンアクセス及びセンターが承認する外部組織運営の学術情報データベースにおいてインターネット公開する。

※「執筆要領」及び「原稿送付状」は、センターのウェブサイトからダウンロードしてください。

2021 年 9 月 8 日改正

平田 光彦	武庫川女子大学 准教授
小林 善帆	立命館大学 客員研究員
清松 大	宮崎産業経営大学 講師
陳 藝婕	総合研究大学院大学 博士後期課程
長田 俊樹	総合地球環境学研究所 名誉教授 神戸市外国語大学 客員教授 国立国語研究所 客員教授
滝川 祐子	香川大学 技術補佐員
由谷 裕哉	金沢大学 客員研究員
エイミー・ボロヴォイ	プリンストン大学 教授
ローレンス・E・M・マン	オックスフォード・ブルックス大学 上級講師
瀧澤 一郎	元防衛大学校教授
ロベルタ・ストリッポリ	ニューヨーク州立大学ビンガムトン校 准教授
植村 和秀	京都産業大学 教授
全 成坤	翰林大学日本学研究所 HK 教授
丸川 哲史	明治大学 教授
白石 恵理	国際日本文化研究センター 助教
フレデリック・ディキンソン	ペンシルベニア大学 教授
伊東 貴之	国際日本文化研究センター 教授
ジェイソン・モーガン	麗澤大学 准教授

編集長 榎本 渉

編集委員 磯前 順一（書評担当）

牛村 圭

光平 有希（表紙・口絵担当）

編集顧問

ウィム・ボート W. J. (Wim) BOOT（ライデン大学）

フレデリック・ディキンソン Frederick R. DICKINSON（ペンシルベニア大学）

プラット・アブラハム・ジョージ Pullattu Abraham GEORGE
（インド、ジャワハルラール・ネルー大学）

マティアス・ハイエク Matthias HAYEK（フランス国立高等研究実習院）

フェイ・阮・クリーマン Faye Yuan KLEEMAN（コロラド大学）

アハマド・M・F・モスタファ・ラハミー Ahmed M. F. MOSTAFA
（久留米大学比較文化研究所）

魯 成煥 NO Sung-Hwan（蔚山大学校）

酒井 直樹 SAKAI Naoki（コーネル大学）

徐 興慶 SHYU Shing-Ching（台湾、中国文化大学）

将基面 貴巳 SHŌGIMEN Takashi（オタゴ大学）

孫 歌 SUN Ge（中国社会科学院文学研究所）

エリザ・アツコ・タシロ・ペレス Eliza Atsuko TASHIRO PEREZ（サンパウロ大学）

王 中忱 WANG Zhongchen（清華大学）

編集後記

このたび『日本研究』第六十四集には、五本の研究論文、二本の研究ノート、十一本の書評、総計二八四頁を収載することができた。これらが扱う時代は中世から近現代に及び、テーマは美術・教育・文学・歴史・民俗学など多岐に亘る。

その内容を見るに、たとえば散らし書きを独自の構図法により分析した平田論文の手法は、散らし書きを資料として扱う文学・歴史学の研究者にも斬新であろうし、長田論文は東洋学者石濱純太郎を中心に設立された学会・研究会に出入りした人々という、従来あまり取り上げられなかった魅力的な研究対象を紹介している。明治の日本に滞在した欧米人の記録を用いていけ花・茶の湯等と女子教育との関係の実際を確認する小林論文、ニーチェ思想やそれと関連付けられて理解（誤解）された高山樗牛をめぐる明治文壇の動向を見る清松論文、日本人の画論が近代中国で翻訳・紹介される際にかかる変更が加えられたのかを分析する陳論文などは、必ずしも日本国内で完結しない「日本」研究を実践した論考となっている。

この多様性と広がりのある誌面を用意できたことは、編集委員として嬉しい限りである。今後も意欲的な投稿を期待する。

『日本研究』第六十四集 編集長 榎本 渉

日本研究(NIHON KENKYŪ)第64集

2022年3月31日 初版発行

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地

電話 075-335-2222 ウェブサイト <https://www.nichibun.ac.jp/>

© 2022 国際日本文化研究センター

Print edition: ISSN 0915-0900

Online edition: ISSN 2434-3110

NIHON KENKYU

No.64 March 2022

International Research Center for Japanese Studies

〈研究論文〉

平田光彦

小林善帆

清松大

陳藝婕

長田俊樹

〈研究ノート〉

滝川祐子

由谷裕哉

〈書評〉

散らし書きの構図論

明治初中期の女子教育といけ花、茶の湯、礼儀作法

―遊芸との関わりを通して―

戯画化されるニーチェ

―「滑稽」と「諷刺」の模倣―

高島北海『写山要訣』の中国受容

―傳抱石の翻訳・紹介を中心に―

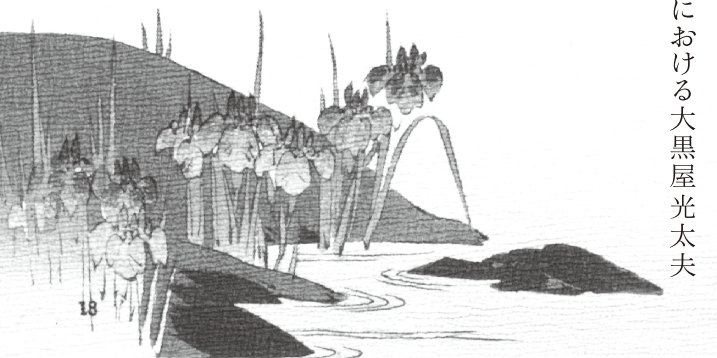
石濱シュレーに集う人々

―四半世紀後に―

新出の英国史料からみた十八世紀末の西欧における大黒屋光太夫

日本図の評価

柳田國男の戦時言説としての氏神合同論



日本研究

64

2022・3

≈ 国際日本文化研究センター